
『リリカル銀魂 Striker S』～攘夷戦争鎮魂歌～ 後編

黒神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『リリカル銀魂 Strikers』〈攘夷戦争鎮魂歌〉 後編

【Nコード】

N7803V

【作者名】

黒神

【あらすじ】

10年前、『ジュエルシールド事件』と『闇の書・ゾーマ事件』をたった1本の刀で解決した『白夜叉』・『白い剣聖』・『エース・オブ・シルバーサムライ』などさまざまな呼び名で大名になった異世界の英雄、坂田銀時。

元ミッドチルダの対犯罪魔導集団殺戮及びロストロギア破壊専門の最強戦闘部隊『第666魔闘機関』の『魔剣七勇士』の一角、侍魂を持つ魔剣士スバル・ナカジマ。

この2人を中心とし、ミッドチルダを部隊に爆笑ボケや大爆笑、そ

してシリアスもありな展開の繰り返して日常を過ごしていた。

銀魂メンバーとリリカルメンバーの共存で、侍と魔導士の力を合わせて数多くの事件を解決する。

だが、その裏では攘夷浪士の中で最も過激で危険な男、高杉晋介率いる『鬼兵隊』が春雨の裏切り者の獅子魔族と言う謎の天人、獅子王剣煉と手を組み、ミッドチルダで『紅桜』を中心としたさまざまな強力な兵器を作り、江戸の国を破壊する準備としてミッドチルダの破壊を企む。

その『鬼兵隊』には、スバルと同じく元『第666魔闘機関』の『魔剣七勇士』の1人であり晋介同様に世界を憎む復讐の魔剣士、アリマ・ヴァーミリオンがいた。

攘夷戦争の過去の因縁を持つ銀時とミッドチルダに寝返ったと裏切り者扱いとしてアリマに憎まれるスバル。

銀時とスバルの過去の因縁を断ち切る為にフェイト達も立ち上がる。過去の因縁との決着、そして世界を守る為の、『リリカル銀魂』もつ1つの大激戦、『攘夷戦争』が今始まるつとする。

とある事情により、前の『攘夷戦争鎮魂歌』の最新が出来なくなっており、ここでは後半の部分を書きます。

前編と中編をまだ見ていない方はまずそこから見てからこつちをどつぞ。

第二百二十二訓：ゲストを呼ぶって言うネタも立派な長編ネタとして使える事が

黒神

「ついにきました!!」

源外

「がはははは、派手な祭になりそうじゃ!!」

黒神

「この時の為のご協力感謝する!!」

スカリエッティ

「何、我々も強い興味を持っただけさ」

黒神

「うむ、じゃあ行くぞオ!!」

源外・スカリエッティ

『『おう!!』』

鉄子

「……………り……」リリカル銀魂 Strikers』 始まります」

第二百二十二訓：ゲストを呼ぶって言うネタも立派な長編ネタとして使える事が

そこは機動六課の銀時の居室。

銀時は啞然として自分の目の前に入る人物に呆れていた。

外見は『ラグナ・ザ・ブラッドエッジ』と一緒に。ただ違う所は、髪が銀色で、眼のオッドアイが黒と銀色である。そして背中には長刀を背負っている。

そして首飾りとして虹色の星のペンダント『レインボースター』に銀色に輝く星のペンダント『シルバー・スター』をかけている。

その人物こそ、この小説の作者こと黒神である。

銀時はもちろん、フェイト、スバル、ティアナは呆れて、ヴィヴィオはスバルの膝を枕代わりとして寝ていた。

「……あのう、何で作者がいるんですか？」

銀時が恐る恐ると黒神に聞き出す。

黒神はそうめんを食べ終えると、食器をテーブルに置いて銀時に話し出す。

「銀さん、この小説ってようやく後半が入った事は知っているね」

「ああ、もう100話以上続いているのにも関わらずにな……狂乱編が終わった後すぐに知っちゃったよ」

「その事で大問題が発生することがあるんだ」

『大問題！？』

黒神は真剣な表情をして銀時達にその大問題を言い出す。

「ほらあ、大抵の物語は長引けば長引くほどつまなくなる様な感じがあるでしょ？特に後半とかは…」

「まあ、確かにあるといつちやあるんだけどなあ」

銀時は黒神の言うことも一理ありだと考える。

「この小説も、元々は赤夜又さんの許可を貰って作っているもう1つの『リリカル銀魂』最終章なんだよね」

「最終章！？『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争鎮魂歌」
「があ！？それにしても長すぎでしょうが！！」

今更、最終章であつた事に驚くティアナ。

「まあね。赤夜又さんの『リリカル銀魂strickers』はリリカル風だったから、なら僕はその『リリカル銀魂strickers』を銀魂風にしたらどうなるんだろうと興味津々で書いたわけなので気がついたらもう100話越えみたいな……」

「つまり……予想以上に続いたと言う訳ね」

「そう言うこと」

苦笑するフェイトの答えに、黒神は頷く。

「そしてその問題は、後半が前半や中半でも引けをとらないように面白く進めるかって事だよ」

「へえー」

「なるほどなあ」

誤字ばかり起こしたり、他の人の小説の感想でDS質問ばかり

書く黒神にしては、珍しく作者らしい事を悩んでいると銀時達は思った。

「それで、私達に言いたいどうしるど？」

スバルが一体如何すればその問題を解決するかを聞き出すと、黒神が不気味な笑顔で笑い出す。

その笑顔を見た銀時達はどうせろくな事じゃないと確信した。

「ふっふっふ、そこで僕はオリジナル展開として……ある超オリジナル長編シリアスネタを思いついた！！」

『超オリジナル長編シリアスネタあ！？』

「いつの間にそんなネタを！？」

そんなネタを思いついた黒神に驚く銀時達。

これは黒神が知っている限りでは、そのネタは『にじファン』の銀魂系でも最新ネタかもしれない。

「それは……」

『それはあ？』

誰もがゴクリと飲み込む中……黒神ははっきりと言い出す。

「ゲストとの共存長編タアアアアアアアアアア！……」

と言う訳でここはスカリエッツィのアジトである。

しかも今、銀時達がいる場所はアジトの地下室であり闘技場らしき雰囲気である。

その広さは東京ドームの役3倍。

そして黒神は、源外、スカリエッツィ、プレシアの3人と一緒に特別席で座っていた。

「……と言う訳で、第一回『リリカル銀魂ゲスト杯』を開始します
!!!」

『ちよつと待つてエエエエ!!!』』』

突然、大会を強制参加させられた銀時達は大いに叫びだす。

「つつか何だよ一体!!!小説の面白さ上げの会議の後にすぐ大会なんて聞いてねエぞ!!!」

「黒神、これは一体どう言うことなの!?!」

これには銀時はもちろん、フェイトも納得できない様子でいる。

黒神はまだ状況が分かっていない銀時達に呆れて言い出す。

「何って、『リリカル銀魂ゲスト杯』だよ?」

「何よ、ゲスト杯って!?!?てかアンタまさか、ゲストの皆さんと大会で競えって言うわけエ!?!」

「さよう!!!今回の長編はゲストを主役としたシリアス!!!銀時、

フエイト、スバル、ティアナの四人……いや、チーム『リリカル銀魂』にはそのゲスト達と一緒に大会に参加してもらおう!!」

「はあ!? いきなり何だよ!!!」

「しかも勝手にチームが決められているし!!!」

銀時とティアナは、黒神の勝手な行動に怒りを込めて怒鳴りツッコム。

血は繋がっていないなくても、義兄妹だけあってツッコミも冴えている。

「……黒神、もう貴方がどうして本編に出てきているのか……そして何でまた私が大会の実況をしなきゃいけないかはツッコまないからフエイト達に納得いくように説明してあげて」

プレシアは、今更ギャーギャー騒いだってキリがないから早めに進める様にと黒神に要求する。

「さすがプレシア…大人だねえ まあはっきりと言うとですね……今まで『銀魂』って何かの存在をネタとして長編を作っているじゃん。だから僕もそれを参考にして自分のオリジナル長編シリアスを考えてみたかったですよ」

黒神は銀時達に、どうしてこんな事をさせるのかを説明する。

今回のシリアスは『銀魂風』でも『リリカル風』でもなく、『黒神風』の爆笑長編である事ははっきりと分かった。

「で、この小説は『にじファン』の1部の小説として連載登録されているのはみんなは知っているよね?」

『うんうん』

「そして、作者が他の小説の作者と話し合っって協力し合うような短編小説や特別話として自分の小説のキャラクターを相手に登場させ

る、またはゲストとして他の小説のキャラクターを自分の小説に登場させる事が多い……そこで僕は眼を付けた!!!」

黒神は決意したような表情で叫びだし、右手を強く握りだす。

「もし、『銀魂風』にとゲストを呼ぶ事自体を長編ネタにすれば、立派な長編シリーズが出来るのではないかと!!!」

「ゲストを長編ネタあ!?!」

ゲストの存在をネタとして考える黒神に、フェイトは驚愕の表情をする。

「その為に、僕は今回の長編の為に数多くの他の作者の皆さんに許可を貰い、一気にみんなの後半スタートの狼煙として盛り上げようと考えた訳なんです!!!」

「げ……ゲストと一緒に長編シリーズを盛り上げるウウ!?!」

まさか今回の長編がそう言う内容である事に驚くティアナ。
だとすれば、今回現れるゲストの数は『リリカル銀魂シリーズ』でも最多である事は間違いないであろう。

「その為、今回の部隊として特別闘技場『リリカル・コロシウム』を源外とスカリエッティに協力してもらおう為に作らせて頂きました!!!」

「がはははははははははは!!! まあ安心しろ、元の世界には戻る転送装置はまだ完成しておらんが、他の小説からこの世界に転送させて呼び出す『外数登^{げすと}呼び出し扉』で呼んでおいたわい!!!」

「すでに必要以上にと、数多くのゲストが来ているとも……紹介を待っているから早く進めようか」

源外もスカリエツテイも黒神の馬鹿げた提案に乗り、この『リリカル銀魂ゲスト杯』の実況をする事を考えた。

「はい、と言う訳で銀さん、フェイト、スバル……あとついでにテイア」

「ついであつて何だゴルア！！」

テイアナは怒り出して『クロスミラージユ』を取り出し黒神に向ける。

それをスバルが「テイア、落ち着いてえ！！」と苦笑で止める。

「ゲストの皆さんと楽しんじゃってください！！」

もう後戻りは出来ないと、銀時達は諦めだす。

そして溜息を吐きながらも、黒神の提案に乗る。

「……しゃあねえ、まあせっかくゲストの皆さんも来ているからお」

「このままほつとらかしにする訳には行かないしね」

「私はむしろ楽しみかなあ」

「はあ……もうやるしかないわね」

4人はこの大会に参加する事に決定した。

この瞬間、チーム『リリカル銀魂』は結成した。

「それではお待たせしました！！ただいまより『リリカル銀魂ゲスト杯』を始めたいと思います！！」

すると、巨大な大砲が天井に向けられて弾丸を撃ち、天井にぶつからずに大爆発して周りを轟音がこの地下室全体に響き渡る。

そして観客席にはいつの間にか数多くのミッドチルダの一般人達が数多く現れ、大会開始に歓喜の叫びを上げる。

「パパー、フェイトさあん、スバルお姉ちゃん、ティアさあん、がんばってエ」

ヴィヴィオは、プレシアの隣で銀時達を応援する。

「それでは、ただいまより参加チームを発表いたします！まずはこのチーム、数多の事件を剣1本で解決した伝説の武人を中心とした機動六課代表、『チーム・リリカル銀魂』！！」

観客達はワーワーと騒ぎ出して銀時達を見て興奮する。

銀時の存在はミッドチルダでも大有名である。過去の事件を含め、ミッドチルダにやってきてからの事件解決での活躍はミッドチルダでも耳に広まっている。

また、フェイトやスバルもここ最近の活躍ぶりは注目されている。フェイトは機動六課の隊長として、スバルは機動六課最強の魔導士として噂が広まっている。

「ほおー、何かすんげえ大会になりそうで……すんげえ嫌な予感しかしねえけど？」

「き……気のせいですよ銀さん！！」

銀時の嫌な予感には気のせいだとスバルは言い出す。

「続いてはゲストの登場です！！」

ここで黒神がいよいよとゲストのほうを紹介する。誰もが注目する中、黒神ははっきりとマイクを強く握り言い出す。

「竜と霸王、今ここに交わる。蒼き魂よ、天よりこの地に舞い降りよ!!!」『チーム・キングドラゴン!!!』」

「何そのシンクロ召喚みたいな台詞!? つつか遊 王ネタか!？」

銀時のツッコミが無視されるように、白い煙が噴射するかのよう
に現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、その中からエレベータが動
くかのように4人の姿が現れる。

その4人こそが世紀末雑魚さんの小説『恋姫†BASARA学園物語』伊達政宗、華琳、春蘭、星であった。

「舞い降りてきたぜえ、お待ちかねの竜がな!!!」

大きな声で叫びだす政宗。

派手な大会であると聞いてワクワクしていたようだ。

コレが最悪な悪夢の始まりである事を知らずに。

「華琳様あ!!!このような大きな大会に出たからには必ず優勝しま
しょう!!!(うっしやー!!!華琳様と一緒にいる機会が出来たぞオ
オ!!!)」

「ええ、いつか学園の頂点に立つ通過点としてはちょうど良いしね」

忠誠を抱く華琳と共に優勝を誓う春蘭。

本心は華琳と一緒にいる時間が長くなった事に嬉しく感じている。

一方の華琳は学園の頂点に立つ為の準備運動にはちょうど良いとし
て、この大会に参加したのだ。

「いやあ、にしても賑やかになりますなあ政宗殿」

「ああ……まあ肝心な竜の右目がいねえから今回は協力頼むぜ、y

ou see?」

「ふふふ、承知した」

小十郎の代わりにと、星に協力を頼む政宗。

一方の星はこれは政宗密着する最大のチャンスであると確信し、ゲストとして呼んでくれた黒神に感謝している。

すると華琳は銀時達に近づいて自己紹介をする。

「始めましてって言うところね。私は『恋姫†BASABA学園物語』の華琳よ」

「いやあ、ご丁寧にも……万事屋の坂田銀時と言って、銀さんと呼ばれていますんでえ」

丁寧な挨拶をする華琳に、思わず自分も丁寧に挨拶する銀時。名詞を華琳に渡すと、華琳はある事を確信する。

「じゃあ、さっそくだけど依頼があるわ」

「いきなり依頼？つうか何？」

華琳は右手の指である場所を刺す。

刺している場所は政宗に積極している星であった。

「その木刀であの小娘を血祭りにしてくれない？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ）

「うおおおおおいいい！！何かすんげえ怖え依頼がきたんですけどオオオオオ！？てかこの子壊すぎイイイイ！！」

華琳の星に対する嫉妬に、銀時は青ざめて叫びだす。

『『チーム・キングドラゴン』は、世紀末雑魚さんの小説『恋姫†

BASARA学園物語』のゲストとして登場してくれたメンバーを中心に、リーダー伊達政宗を中心とした竜と霸王の魂を持ったチームです!!」

「六爪流と言う特殊剣術を得意とし、カリスマ性を持った伊達政宗も注目じゃが、あの華琳とか言う娘も霸王としての素質をもつとるし、さらに春蘭の剛拳も勇敢で高速の槍使いの星の活躍もできるわい」

『チーム・キングドラゴン』の自己紹介を終えた黒神達。
次のチームの紹介をする。

「ボケ・ツツコミ・オタク!!三種の神器のような存在で結成されし集団!!」『チーム・オタクガンダム』!!」

白い煙が噴射するかのようには現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、その中からエレベータが動くかのように4人の姿が現れる。

ウツソ・エヴィンさんの小説『ウツソとリリカル銀魂 G・Striker』のゲストとして登場した、ウツソ、こなた、かがみ、そして烈火竜さんの小説『DRAGON NAIL』の竜の爪』のゲストとして登場した光翔竜が現れた。

「いやあ、この小説にくるのも久しぶりだよ」

「ほんとねエ、最後に来た日は悪夢な存在だったしねえ……」

かがみは以前のシャマル鍋を思い出してぞっとする。
すると光翔竜とこなたはフェイトの存在に気づき、

『フェイトちゃまああああああ!!!!』

「うええええええ!!?」

眼を光らせてフェイトに飛びつく。
だが、

『さつそくやんなポケエエエエ！！』

ドカア×2

『ふああ！！』

ティアナとかがみの連携ツッコミで吹き飛ばされるあなたと光翔竜。
光翔竜は大のフェイトファンであり、こなたはオタクの中のオタク
である。

「まったく！！」

「全然懲りてないわね！！」

ツッコミツインヘアコンビは呆れて溜息を吐く。

そんな光景に銀時とスバルは啞然としていた。

そして2人の元にウツソが駆けつけてきた。

「お久しぶりです、銀さん、スバル」

「おう、久しぶりじゃねえか？」

「ウツソさんも呼ばれたんですか」

「はい、黒神さんがどうしても出て欲しいと頼まれたので」

黒神の頼みでも、ウツソにとっては久しぶりに銀時に会える事が何
より嬉しかった。

そしてウツソはある事を聞き出す。

「そう言えば銀さん、新八君はまだ来ていないんですか……」

「……………ああ、アイツはまだ…」

新八の事を聞いた銀時は少し寂しげな表情をする。

いつもは新八に冷たい事を言っても、家族の様な仲間であるので……今頃どれだけ心配かけているのか想像するだけでも申し訳ない気持ちを持っている。

本心では一刻も早く再会したいと思っっているが、内部でそう思っ
いても外部には出さないでいる。

スバルも心配そうに銀時を見つめるが……

「スバにゃ〜ん!!!」

もみい!

「うにゃあ!?!?!」

突如、こなたが後ろからスバルの胸を揉みだす。

揉んでいるこなたはメツチャ気持ちよさそうな表情である。

「はあく、スバにゃんのおっぱい気持ちい〜?!?!」

「ひゃうう!!!こなたさん、止めてくださいよオ?!?!」

ドカア!!!

「死ねやアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「げふウウウウウウウウウウウ!!!!!!」

怒りだすティアナが渾身を込めた蹴りをこなたの腹に炸裂させて、
こなたは吹き飛ばす。

こなたは気絶して倒れる。

そんな姿を見て銀時とかがみは自業自得だと思い、ウツソと光翔竜
は青ざめる。

((.....怖エエエエエエ!))

もしうかつに馬鹿やれば、自分達もあのティアナの一撃にやられて
しまおうと思いい、恐怖する。

「『チーム・オタクガンダム』はウツソ・エヴィンさんの小説『ウ
ツソとリリカル銀魂 G・Strikers』のウツソ、こなた
かがみ、そして烈火竜さんの小説『DRAGON NAIL』竜の
爪』の光翔竜がチームを組んだポケとツツコミのバランスが取れ
た注目の一角です!!!」

黒神にとっては最も期待できるチームである。

何せウツソ・こなた・光翔竜のポケやかがみのツツコミがコラボレ
ーションしているからだ。

「確かに……。しかもそれだけではなくガンダムと言う巨大な機動兵
器を軽々しく扱うウツソに、オタクの知識を備えているこなた、チ
ームをまとめる様な性格をしているかがみに、戦闘力はかなり高い
と評価されている光翔竜、かなりバランスが取れたチームと言っ
ても良い」

スカリエツティモ『チーム・オタクガンダム』の存在に期待を込め
ている。

「では続いて紹介いたしましょう！！神話より表れし王に魔術師と超能力者が夢のコンビネーション！！『チーム・とある運命』！！」

白い煙が噴射するかのように現れ白い煙が現れた場所から扉が開き、そこからエターナルさんの小説『銀魂 FATE リリカルなのは 禁書目録』とある侍とサーヴァントと魔法少女』からのゲスト、遠坂凜、セイバー、ギルガメッシュ、一方通行が現れた。

「ここが、黒神の小説ね」

「はい……もう100話以上進んでいるだけあり物語の長さも伝わります」

「まあ……あの雑種作者が何を企んでいるかわからないが、我等を呼んだからには楽しませてもらおうか」

「ア、めんどくせえ」

と4人はそれぞれのコメントを言い出す。

「あら、銀時じゃない？」

凜は銀時達に気づいて駆けつける。

「ん……お前等って確かあっちの俺達と一緒に万事屋として働いている……」

「はい……サーヴァントであり万事屋の一員として働かせている者です。そしてこの小説の貴方の活躍は私達も耳にしています……」

セイバーは丁寧に挨拶をし終わると、スバルを見つめる。

スバルはセイバーと眼を合わせるとゆっくりと頭を下げて挨拶する。

実はセイバーはスバルの存在に注目していた。

神速の剣術を使い、さらには強力な魔法をも使いこなす魔剣士である。

(この娘が……確かにセイバーが目にするだけの事はある程度の強さはあるが…何だ？先ほどからこの娘から伝わる威圧感は……)

ギルガメッシュもセイバーの注目する剣士としてスバルの評価はそこそこ評価する。

しかしそれ以前にギルガメッシュはスバルには何か特殊な力が眠っていると感じだす。

(いずれにしろ、セイバーも油断できぬと言う訳だな)

「ん……どうしたギル？」

「いや…何でもない」

一方通行が声をかけると、ギルは我を思い出して平気な顔で入る。

「にしてもお前達も大変だなあオイ？…さんざんと変な展開に巻き込まれたりとか、誤字の多いこの小説で活躍すんのも苦労してんだろ？」

『『まったく(だ)(よ)!!』』

銀時とティアナは、一方通行の言うとおりに悩まされている。

誤字の多さに、変な事に巻き込まれるような展開。

「この小説の銀時も…めっちゃ苦労しているんだよね？」

凜もボソツと言い出す。

「スバル・ナカジマと言いましたね」

「は…はい」

「万事屋の一員、およびサーヴァントのセイバーと申します。是非とも手合わせを願いたいです」

「はあ……こちらこそよろしく願います」

剣を使うサーヴァントとして、スバルにライバル意識を燃やしているセイバー。

しかし、そんなセイバーの本心を知らないスバルであった。

「『チーム・とある運命』はエターナルさんの小説『銀魂 F A T E リリカルなのは 禁書目録』とある侍とサーヴァントと魔法少女』からのゲスト、遠坂凜、セイバー、ギルガメッシュ、一方通行が組んだ超協力チーム！！」

「ええ、あの騎士王や英雄王だけでも一騎当千的な戦力なのに、遠坂凜も優秀な魔導師としての素質を持っていて、一方通行は超能力者としての強さは学園最強と言われるほどだから、間違いなく優勝候補？！と言えるわ」

プレシアにとっては『チーム・とある運命』が優勝する可能性が最も高いと見る。

「まだまだ行きますよ！！次はどんな事件もその強さで解決する無敵の真剣使いと勝利の女神が共存、『チーム・マイティアテム』！！」

さらに白い煙が噴射し、白い煙が現れた場所から扉が開き、そこから龍の骨さんの『B S A A 学園』のゲスト、北郷零斗に真王さんの小説『リリカル銀魂 S t r i k e r S 銀の侍と4人の女神』のゲスト、ネプテューヌ、音無、ゆりが現れた。

「ついに来たぜ！！この小説でハジケまくる瞬間があー！！」
「いやあ、ようやくゲストとして呼ばれたから楽しみだなあ」

（最強の男女が手を組んじゃったってるんですけどオオオオオオオオオオオオオ！！！！）

ほぼ無敵に近い存在の最強主人公同士が組んだチームに驚く『チーム・リリカル銀魂』。

すると零斗とネプテューヌが銀時達に気づく。

「おお、あそこに入るのはフェイト・テストロッサ、スバル・ナカジマ、ティアナ・ランスターではないか」

「銀時もいるう」

2人は銀時達に駆けつけて走り出すと、零斗が飛びつく。

「愛しき乙女達よオオオ！！」

「「エエエエエエエエ！？」」

ドカー！！

「吹き飛べエエエ！！」

「あんぎゃあああ！！」

零斗の飛び付きにフェイトとスバルは驚き、ティアナは思わず蹴り飛ばす。

「おお、こっちの銀時も相変わらずだねえ」
「……あのう、どちら様で？」

銀時は突如、自分の目の前に駆けつけてきたネプテューヌに啞然として誰なのかを聞いてみる。

「あ……ごめんごめん、私『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神』のネプテューヌって言うんだよ。あっちの銀時の仲間だからよろしくね」

「ああ……どうも」

ネプテューヌも銀時に恋路を抱く女性の1人の為、『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神』の銀時じゃなくても銀時には少し優しくする。

「後、スバル編で見せてもらったんだけど……あれは……さすがにあれはなかったよ」

「てうおおおおおおいい！！まさか知ってんの！？俺の人生最大の汚点をお！！！」

ネプテューヌは笑いながら言い出す。

その笑い原因がなんなのか銀時は青ざめて知る。

それは、銀時の対紅桜様の切り札でありコスプレのお点とも言えるデバイス、『ブレイシルバー』であった。

確かに強力な戦闘力は得るが、バリアジャケットがブレイルールのラグナに似すぎているからだ。

「黒神のあのくだらねえアイデアのせいで、良い齡こいてコスプレオタクと思われちまうだろうがあ！！！」

「あははははは…… ああ、その事何だけどオ……」

ネプテューヌ又は銀時に、『リリカル銀魂 s t r i k e r s 銀の侍と4人の女神』も同じくコスプレしている事を教えだす。

しかもそつちは『I』の織斑 夏の専用I の白式のようなバリアジャケットコスプレである。

それを聞いた銀時は、何故かスカリエッティに殺気を放つ。

「うっし……今すぐスカリエッティにボコボ」

「気持ちわかるけど止めときなさいって」

銀時の暴走を止めようとネプテューヌ又は銀時の肩を掴む。

そして彼女はスバルを見つめだす。

そしてスバルを見て、ネプテューヌ又は感想らしき言葉を口に出す。

「なるほど……これは思った以上の実力を持っている訳だ」

「はい？」

スバルは一体何の意味なのか分からない。

だがネプテューヌ又は確信した。

少なくともこつちのスバルは自分所のより実力は高く、下手すれば自分でも苦戦する相手であると。

「ここがあの憎き腹黒作者の小説って訳ね？あの時の恨み、優勝して晴らさせてもらっわよ」

「ゆり……ほどほどにな」

以前、『リリカル銀魂 s t r i k e r s 銀の侍と4人の女神』の感想で無理矢理『シヤマル鍋』を食わされた恨みを持つゆりに、そんな彼女を落ち着かせる音無。

しかし彼等はこの『リリカル銀魂ゲスト杯』の真意をまったく知らない。

「よお、我同士よ!!」

「誰が同士だ!?! つうかお前いつの間に俺の後ろにいたんかい!?!」

いつの間に銀時の後ろにいた零斗に銀時は呆れ半分に驚く。

「今度一緒に、女たらしコンビとして活動しないか?」

「誰がするか!?! つうか一緒にすんな!!」

零斗は女にモテているので、この小説で女とハーレム生活(?!?)をしている銀時を同士と思っている。

「『チーム・マイティアテム』は、龍の骨さんの小説『BSAA学園』のゲスト、北郷零斗に真王さんの小説『リリカル銀魂 Strikers』のゲスト、銀の侍と4人の女神』のゲスト、ネプテューヌ、音無、ゆりが結成されたチームです!」

「『マイティ真拳』と言う常識敗れの流儀で戦う零斗、さらにネプテューヌは守護女神化すればパープルハートとなって凄まじい戦闘力を誇り、そして2人がやり過ぎないようにと医学知識とツツコミを備えた音無のサポートも期待できるチームだ! あ、ついでに白兵戦も得意とするゆりの活躍も見ものだね」

「何ですよ!! 何で私ついで扱い!?!」

「つうか何で俺の評価にツツコミが存在するんだ!?!」

納得の出来ないゆりとどうしてツツコミが評価されるのか分からない音無は思わずツツコム。

「んじゃ次もいきます!! その手に掴むのは信念・絆・炎、武器を

持たずに己の信じた強さは岩をも砕く！！『チーム・ファイター』
！！」

さらに白い煙が噴射し、白い煙が現れた場所から扉が開き、そこから支配者さんの小説、『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』からのゲストの相楽左之助、Charleyさんの小説『異世界合戦記録 リリカルBASARA Strikers』天下分け目の魔法戦記』からのゲストの徳川家康、Minosawaさんの小説『リリカルオブ銀魂 Strikers』戦士達の鎮魂歌』からのゲストの草薙京と八神庵が現れた。

「おお、ここが黒神の小説の世界！！独眼竜や真田が言っていた異世界か！！」

「いやあ、ありがてえなあ……こう言う面白い喧嘩が出来そうな時に呼んでくれてよオ」

この世界に来たことに感謝する家康に左之助。
だが一方の京と庵は不安な表情をしている。

それは、これから始まるのがただの大会ではない事に。

「……八神」

「言うな京……ここ最近の黒神の悪巧みは嫌と知っている……あの男の眼は何か企んでいる眼だ」

「ああ、無事に帰るには勝つしか方法ねえかもな……それにい」

京と庵は銀時を哀れな目線で見つめる。

自分所の銀時と同様、ここの銀時も同じ女たらしだと哀れ見る。

「ここのあいつも銀時だな」

「ああ」

この銀時も自分達と同じと思つて呆れてため息を吐く2人。
すると、家康は佐之助、京、庵の3人に言い出す。

「お互いに初めて出会う者同士だが、願わくば力を貸して欲しい…
…次元を超えた絆を繋ぎたい！」

家康らしい言葉であり、頼もしい限りの台詞である。

「良いぜ、お互いに拳で戦う者通しだな」

「確かにこの大会は1人だけじゃ勝ち上がれねえから、力を合わせるのが一番だな」

「……くだらん」

左之助と京は家康の言うとおりに力を合わせることを近い、庵は口では拒否するが黒神の悪巧みから逃れるには病む終えまいと思う。
3人の協力を確信した家康は、チームの代表として銀時の所に向かう。

「『リリカル銀魂strickers』攘夷戦争鎮魂歌」の主人公、
坂田銀時殿とお見受けする」

「ん、お前は確か……」

「某、『異世界合戦記録 リリカルBASARA Striker
S』天下分け目の魔法戦記」の主役を務めている徳川家康と申す
！！今回は黒神殿のお誘いの元にこの世界に現れた！！主の活躍は
この家康も耳にしている！！」

武士らしく挨拶する家康に、銀時は『異世界合戦記録 リリカルB
ASARA StrikerS』天下分け目の魔法戦記』の名を
聞いて頷く。

「ああ、確かそつちのスバルのお師匠さんか…どうも、万事屋銀ちゃんです」

お互いに挨拶をして、銀時は万事屋の名刺を家康に渡す。名刺を受け取った家康は、スバルを見て思い出す。

「主は…確かこの小説のスバル…」

「ああ、そう言えば家康さんと言えば『異世界合戦記録 リリカル BASSARA Strikers』天下分け目の魔法戦記』の私の体術のお師匠様じゃ!!」

お互いに顔合わせして、その存在をはつきりと確信する。

「お主の事は独眼竜と真田から聞かせてもらった。その武士の志、いずれかワシ等の所のスバルと手合わせしてもらいたい!!」

「はあ…その時はお手わらかに」

家康にとつても、このスバルと自分所のスバルが手合わせればどんな戦いになるのか興味があるようだ。

そしてこの期に、このスバルの実力がどれくらいあるのかも見極めたい。

「『チーム・ファイター』は支配者さんの小説、『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』からのゲストの相楽左之助、charylleyさんの小説『異世界合戦記録 リリカルBASSARA Strikers』天下分け目の魔法戦記』からのゲストの徳川家康、Minosawaさんの小説『リリカルオブ銀魂 Strikers』戦士達の鎮魂歌』からのゲストの草薙京と八神庵が組んだ武器をまったく使わないチームです！」

「確かに、岩をも砕く佐之助の剛拳、気と言う人間のエネルギーを腕から放つ武術を鍛え上げている家康、それにその手から炎を放つことが出来る草薙京と八神庵など、同じ戦い方をする者同士の結成された注目チームじゃな」

このチームも屈強なチームである事は間違いないと確信する黒神と源外。

特に注目は、別の意味で徳川家康である事は間違いない。

「以上持ちまして、ゲスト同士が結成したチームの紹介を終了します!!なお、まだsibugakiさんの『リリカル銀魂Strikers 蒼炎の龍』からのゲストや世紀末雑魚さんの小説『恋姫†BASARA学園物語』の5人目のゲストが登場していませんが、その人物は後から出てくるようにしていますのでお待ちしてください!」

「まだ出てくるの!?!」

間違いない最多のゲスト数記録を達成している事に驚くプレシア。

「続いては『チーム・リリカル銀魂』に続くリリカル銀魂チームの紹介です!宇宙最強の一族の血を継ぐ少女と小さき騎士、そして月下の美女と美しい銀髪がコラボレーション!!!『チーム・クイーン』!!!」

すると、今度は巨大な門が轟音が響きだすと同時に開きだす。

その中から、神楽、エリオ、月詠、リインフォースが姿を現した。

「きゃほー!!久しぶりに大暴れしまくるネ」

「たく……なんでわつちまでが」

「別に良いじゃないですか、今日は楽しんで行きましょうよ(よし

「！！神楽さんと一緒だ！！」

「何か、すんごくく久しぶりな出番ですね……しかも銀時と一緒にチームじゃないし！！」

楽しい大会に喜ぶ神楽とエリオ、あんまり乗る気にならない月詠、そして出番が久しぶりだけど銀時と一緒にチームじゃない事に不安に抱くりインフォース。

「神楽の驚異的な戦闘力とエリオの機動力が優れた槍裁き、それに月詠のクナイ裁きにインフォースの強力な魔法など、接近戦も遠距離戦も優れたバランスチームです」

『チーム・クイーン』の自己紹介を終えると、さらに続けて自己紹介をする黒神。

「続いては、江戸の平和もミッドチルダの平和も、その1本の刀で護ります！！『チーム・真撰組』！！」

『チーム・クイーン』に続くようにと、そこから近藤・山崎・ルーテシア・ディエチの4人が現れた。

「おお、数多くのゲストが来ているじゃないか！！」

「本当ですね。こんなに多くのゲストが来たの初めてですよ！！」

「ルーもワクワク」

「今回は凄く楽しいイベントだと聞いてみたら、凄くにぎやかになるね」

近藤達も大会に呼ばれて嬉しがるが、この後の地獄が待ち構えている事にまだ知る予知もない。

「僕が最もムードメイカー的に期待している新撰組とナンバーズのコラボレーション！！戦闘力もボケやツッコミのギャグ的性能も期待できるチームです！！」

「何その変な評価！？」

変な評価をされて思わずツッコむ山崎。

「続いても登場させます！！数多の事件を解決した英雄よ、魔導士の絆で更なる難関を乗り越えよ！！」『チーム・狂乱』！！」

今度は、桂、エリザベス、はやて、ヴァイスの4人が登場した。

だがヴァイスだけは何故か不安を抱いていた。

「おお、コレだけ多くのゲスト達がいればさどや賑やかな祭りになるっ」

『はい、すごく楽しみ』

「私も呼ばれて嬉しいわ」

3人は楽しみにしていたような感じでワクワクとしている。

「……なんだろう、こう言うタイミングで出番が来るのって大抵は俺が酷い目に会う様な事しか思いつかねえ」

しかしヴァイスだけは違う。

彼はこの所の長編の登場で、数多のトラブルに巻き込まれてしまった。

コーシ・カップの時も銀園祭の時も。

「『狂乱編』で大活躍しパワーアップした桂、エリザベス、はやての3人がどれだけ活躍し、ヴァイスがどれだけ面白いトラブルに巻

き込まれるのが期待できるチームです！」

「そんな期待はしないでくれエエーーーーーーー」

変な期待をされて涙を流すヴァイス。

「そして最後のチームの登場です！！『チーム・ナンバーズ』！！」
『『てちよつと待てエエエエエ！！！！！！』』

単純な紹介に、なぜか納得できないドウエ、トーレ、クアットロ、
ノーヴェの4人が怒鳴りだす。

「何で私達だけチーム名だけの紹介な訳！？」

「手抜きにも程があるだろ！！」

「黒神酷お〜い！！」

「お前いつかしばくからな！？後、何でこんな扱いするのか説明し
るやあ！！」

4人のナンバーズは納得の理由を聞きだす。
だが…

「4人の反発させる様な様子を見たかつたから」

『『うがああああああああああ！！！！』』

((こいつ……マジでドSだ))

ナンバーズをからかう黒神を見て、リリカル銀魂組やゲスト組も呆
れてそう思った。

これで全てのチームが紹介された事で、黒神は順調に計画が進んで
いるとニヤニヤする。

「ふふふ、この調子この調子……数は多ければ多いほど盛り上がりが増すもんだ。それに……」

黒神はある事を思い出して不気味に笑い出す。

「彼等の為の飛びきりの罰ゲームも用意してるしねえ……ふふふ」
（こいつ、マジおっかないんだけどオオオ!?）
「？」

黒神の不気味な笑いに、源外、スカリエッティ、プレシアは青ざめて心の奥底でツツコミだす。

ヴィヴィオは黒神の言っている意味が分かんなかった。

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!!!』』

銀八

「はあい。今日も銀八先生コーナーを始めたいと思えます。のア

シスタントはヴィヴィオでえす」

ヴィヴィオ

「はあい、ヴィヴィオ頑張ります」

ヴィヴィオは無邪気に笑い出して返事する。

銀八

「ではさっそく行きます。まずはペンネーム『白騎士君』さんの質問『白騎士君』スバルから質問。sibugakiさんの小説、リカル銀魂StrikerS 蒼炎の龍のスバルを見てどう思いましたか？もし修羅のスバルがこっちに来て戦って勝ってますか？質問の答えを待っています」

スバル

「うーん、あっちの私って何か怖い感じがするよ。あでも……今のあっちの私になら勝てるような気がする」

銀八

「ほお、それはどうしてだ？」

スバル

「何と言うか……コレは私の感だけど……あっちの私って私が持っているものを持っていないような気がするよ……」

スバルらしくない勝気のある意外な答えに銀八とヴィヴィオは頷く。

銀八

「と言う訳で『白騎士君』さん、こっちのスバルの答えはこんな感じでした」

ヴィヴィオ

「次はペンネーム『サディスト』さんの質問です『アリマに質問。

武市の変態っぷりをどう思う正直に答えてくれ。

黒神先生に質問。

銀八先生リターンズは読んだ？

今回の話に負けず劣らずの鬼兵隊が見れるぞ。

(読んでたら知ってるか)『……変態って何い?」

銀八

「うかつに近づいてはいけない人を意味する事です。だからヴィヴィオもあの変態ロリコンには近づかないように」

銀八の忠告にヴィヴィオは頷く。

するとモニターが現れ、そこからアリマの姿が映し出された。

アリマ

《まだ会ったことはないから知らないけど、少なくともむやみに近づかないほうが良いね》

と武市を侍の恥と言い出すアリマはむやみに近づかない事を決意する。

そしてモニターが切れると、銀八は思った通りだと呆れる。

銀八

「んで、黒神はまだ『銀は血先生リターンズ』は呼んでいないのでこの質問は答えられません。と言う訳でサディストさん、廊下に立っていなさい。んで次い、ペンネーム『レイガン』さん『銀八先生に質問です。』

1．また子さんに質問です。

武市先輩を今と昔でどう思いますか？

2．マリアさんに質問です。

鬼兵隊メンバー（高杉・河上・また子・仁蔵・武市）をどう思っていますか？

3．黒神さんに質問です。

前回メッセージで送った「生きてく強さ」を見てどう思いましたか？
『』

すると、モニターが映し出されて、今度はまた子が現れた。

また子

《昔も今も、変態である事は変わりないっす》

銀八

「だよねえ」

と銀時は呆れ半分に言い出す。

今度はモニターの映像がまた子からアリマに変わりだす。

アリマ

《高杉は、私と同じ悲劇を体験したから理解できるよ。その憎しみと憎悪が……だから私も鬼兵隊に入った。後、万斉もかなりの腕を持つている事は始めて会った時から理解できた。おそらく魔導士何か目じゃない程の剣豪だと思う》

銀八

「で、残り3人はどうよ？」

アリマ

《それは分からない。私はまだ、あの3人に会ったことはないからその質問は答えられない……以上だよ》

そう言つて、モニターが切れる。

銀八はやれやれと溜息を吐く。

銀八

「んで、黒神に質問答えさせましょう」

黒神

「ええ、まさに生きて行く事の強さを感じ取れた曲でしたので、今の東北大震災で被害にあつた人達に聞いてもらいたいくらいです」

銀八

「まったくそのとおり！！と言つ訳で『レイガン』さん、黒神も俺達も東北復興を祈っています！！」

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオも東北応援します！！」

東北大震災の大きさはここでも耳にしている。

それでも無事に復興する事を願う2人は、東北を応援する。

銀八

「んで次イ、ペンネーム『黒龍』さん『黒龍』そうですね。じゃあ質問いきましよう。銀さんラバーズに質問です。

俺の小説は今攘夷戦争編に入っていますが、銀さんラバーズはこの時の銀さんの姿を見てどう思いますか？」

ソラ「俺からリリカルメンバーに質問だ。とりあえず、お前らは攘夷戦争を見てどう思う？」

高杉「最後に俺から質問だ。くくく、俺が主役の小説、『三年乙組リターンズ』冷血硬派高杉君』を見て黒神含め、リリカルメンバーはどう感じる？くくく、もし見てなかったらすぐに見るのを勧めますぜ。俺の活躍が見られるからな」

『……なんか最初の質問ムカつくんだけど……じゃあねえから聞くとスツカ」

フェイト・なのは・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リイン
フォース・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・デイド・猿飛
『改めて惚れてしまいそう(っす)！！』』

銀八

「結局そうだろうね！！ムカつくけど！！……んで2つ目は代表としてヴィヴィオ、お願いします」

ヴィヴィオ

「……パパも大変だったんだね。たくさん仲間が亡くなって、友達も変わり果てるなんて…以前スバルお姉ちゃんが話していた『魔劍終焉戦争』と一緒にだよ」

銀八

「ああ、アイツのかつての仲間も結局は管理局の卑劣な裏切りによって殺されちゃったもんだ……あの天然パーマが攘夷戦争で天人に下った幕府に敵対されたように」

いずれにしろ、銀時とスバルの過去は同じであると深刻な表情をして複雑な思いをする銀八とヴィヴィオ。

銀八

「後、最後のはまだ黒神は呼んでいないので、お答えできなくてごめんなさい。と言う訳で『黒龍』さん、小説の復興のほうもがんばってください」

ヴィヴィオ

「次はペンネーム『亀鳥虎龍』さん『虎龍』シグナムに質問、僕の小説でも、銀さんにゾッコンです。自分から見えてどうですか？」

シグナム

「うっしやー！！あっちでは勝ち組だアアア！！！！／／／」

大はしゃぎするほど喜ぶシグナム。

銀八

「かぁー！ー！ー！っぺー！と言つ訳で『亀鳥虎龍』さん、廊下に立っていなさい！」

ヴィヴィオ

「（うわぁ……パパ以上に大人気ないよこの人……）次はペンネーム『ウツソ・エヴィン』さん？屁怒紹さんに質問です・屁怒紹さんはなのはさんたちの魔法を見てどうかんじましたか？（かがみ）

？なのはさん、フエイトさん、はやてさんに質問です・世界の人の姿が屁怒紹様のようになったら（自分も含めて）どうしますか？自殺しますか？（ウツソ）

？前のがみんの質問だけど銀さんもふつとに新八くんと同じようにベットインしようとしたよね？結局銀さんも新八くんと同じようにもっ　リスケベでないの？（こなた）『……屁怒紹さん、お願いします」

またもやモニターが現れ、今度は屁怒紹が現れた。

屁怒紹

「いやぁ、あんな妖術らしき物は始めてみました。機械からくりなしで己が能力であそこまで放つなんて僕感激しました……ミッドチルダの平和の為に今後も使つてほしいですね」：「」

と、屁怒紹がそう言うともモニターが切れた。

銀八

「（画像でも屁怒紹怖え……！）……ふ……2つ目の質問は3人
にお願いします！」

なのは・フェイト・はやて

『『いやあああああああああ!!!』』

あまりの刺激過ぎる質問に、3人は絶叫して気絶して倒れる。

ヴィヴィオ

「ああ、フェイトさん達があ!!!」

銀八

「まあこんな質問じゃ誰だつてそうなるわ……そして3つ目は銀さんは少なくとも新八程^{はっちゃん}じゃありませんので。と言う訳で『ウツン・エヴィン』さん、なのは達をイジめる質問は控えめに」

ヴィヴィオ

「次が最後の質問です。ペンネーム『sibugaki』さん『1・スバルにこちらのスバルから質問

スバル

「貴方が纏っている覇気はどのような生き物ですか？私は蒼い龍『蒼龍』を纏っています」『……スバルお姉ちゃんはどつなの？」

スバル

「え、私!?……分かった、やってみる」

スバルは一応、首飾りの日本刀のネックレスを握り、そのネックレスが光りだすと光の中から『ティルヴィングエア・ドラグーン』が現れた。

そしてあそこのスバルのように覇気を練ると……その覇気がまさか
のあそこのスバル同様、蒼き龍となった。

銀八・ヴィヴィオ

『おんなじダアアアアアアアアアアアア!!!!』』

スバルもまた蒼龍の覇気を放った事に驚きだす。

一体どうして彼女も同じ覇気を放つのかは知らないが、銀八はスバルの『ティルヴィングエア・ドラグーン』を見て思い出す。

銀八

「は！まさか『ティルヴィングエア・ドラグーン』が影響じゃ！！！
確か通称『刹那に切り裂く蒼龍の刃』だからスバルの覇気が『ティルヴィングエア』に影響されてんじゃ！！」

などと理由らしき言葉を言い出す銀八。

いずれにしろ、スバルの覇気はあつちのスバルと同じであった。

銀八

「と言う訳で『sibugaki』さん…こつちのスバルの覇気の生き物は蒼龍でした」

ヴィヴィオ

「以上持ちまして、今回の『銀八先生コーナー』は終了します」

銀八

「次回はせっかくの『リリカル銀魂ゲスト杯』ですので、ゲストとして呼ばれた人物をアシスタントさせてもらいますんで…お楽しみ」

第二百二十二訓：ゲストを呼ぶって言うネタも立派な長編ネタとして使える事がま

ついにこの時が来ました！！

エターナルさん、世紀末雑魚さん、龍の骨さん、ウツソ・エヴィンさん、烈火竜さん、Minosawaさん、真王さん、支配者さん、charleyさん、ワザワザありがとうございます。

なお、sibugakiさんのゲストは次回登場させますのでご安心を。

銀時

「次回、「金メダルだけが大会の優勝する目的じゃない」テイクオフ」

第二百二十三訓：金メダルだけが大会の優勝する目的じゃない（前書き）

今回から、新・OPと新・EDを紹介します！！

『風の如く』（アニメ『よりぬき銀さん』の第2弾OP） 121
話から

『桜音』（アニメ『よりぬき銀さん』の第4弾ED） 121話から

黒神

「以上です。それでは『リリカル銀魂Strikers』始まります！！

第二百二十三訓：金メダルだけが大会の優勝する目的じゃない

黒神の今後の『リリカル銀魂striker』攘夷戦争鎮魂歌』の進みについて話し合った中、本編にわざわざ黒神自信が表れ、数多くのほかの作者からの協力を得てゲストを大量に呼び、『にじファン』の銀魂小説初かもしれないゲストの共存長編が開始された。その目的は、その長編『リリカル銀魂ゲスト杯』で後半の始まりのインパクトを大きくして後半でも面白くする為の考えであり、黒神にじファン式オリジナル長編シリアスであった。

「えーさて、今回わざわざゲストとして呼んでくれた皆さんとこの大会に参加してくれた本編に登場する皆さん、心から感謝します。今更言うのもなんですが、僕がこの『リリカル銀魂striker』攘夷戦争鎮魂歌』の作者こと黒神でございます」

黒神は感謝を込めながら挨拶をする。

このような大会が開催できたのも、ゲストとして来てくれた他の小説のキャラクターのおかげであるからだ。

「そんなまどろっこしい挨拶はどうでも良いのよ」

「一々めんどくせエ自己紹介しねエでさっさと本題進めな」

「そうだ！！我等は貴様の様な雑種の無駄話を聞いている暇はない
！！」

ネプテターヌ、一方通行、ギルガメッシュの3人はさっさと本題に進めるべきだと言い出す。

そして家康は不思議そうにギルガメッシュを見つめる。

(あの黄金の鎧を身に付けた男…三成に声が似ているな)

「なお、この大会に一度参加してしまった以上棄権する事は無理です。何故なら、今回の為に特別罰ゲームを用意しましたので」

『『罰ゲーム!?!?』』

ここでまさかの罰ゲーム宣言に誰もが驚く。

その言葉に、『チーム・リリカル銀魂』と『チーム・オタクガンダム』（光翔竜は除く）は青ざめる。

「ま……まさか!?!」

『例の猛毒物質類!?!?』

フェイトとかがみは青ざめて嫌な汗を流す。

それもそのはず、黒神の用意した罰ゲームは2人が想像している物であるからだ。

「そしてその罰ゲーム用が今回のキーアイテム!?!」

黒神は隣にある布に包まれた物を指に指す。

そしてそのまま黒神が布を豪快に取り出す。

その布の中から現れたのが、何と普通のパイであった。

コレには誰もが意外だと思った。

「ば……パイ?」

「シヤマル鍋じゃない?」

「……ふう、助かったあ」

神楽とこなたは意外な物が出てきたと啞然とし、リインフォースにいたっては安心した。

「Ha、まさか敗者にはそのPieで顔面直撃って訳か!？」

「呆れた……そんな子供っぽい罰ゲームしか発想できない訳?そんな子供っぽい発想しか出来ないのに良く100話以上続けたものね?」

「ふん……大げさな」

政宗の啞然として、華琳と庵はそんな黒神の自信満々に言い出す罰ゲームがあほらしく見えた。

「ねえ、罰ゲームを用意するのも良いんだけど……それなんか罰ゲームにしては単純すぎだよ?まさかパイを沢山作る為に優勝賞品を用意する暇がなかったって訳じゃないでしょうね?

ネプテューヌははつきりと申して、黒神に質問する。

「もちろんそうですが?」

「ばっかじゃないの!?大体そのパイ自体でどんな罰ゲームをするって訳!?!ただ顔面にかぶせてクリームまみれにするだけじゃない!?!」

これにはネプテューヌも呆れて喋らずに入られなかった。

しかもそんな事の為に優勝賞品が用意できなかったと言うオチをした黒神には尚更どうかしていると疑う。

ところが、そのパイ自体が悪夢の命がけの戦いの引き金になる事をネプテューヌはもちろん……他の誰も知らなかった。

「……では、このパイを一口だけ食べて試してみてください。代表としてね」

黒神は1つのパイを取り出して、ネプティーンに近づいて優しく渡す。

ネプティーンはそれを疑わずに一口食べる。

「お、いつたださい」

パクウ！

彼女はどんな不味い物でも、美味しく頂けるアンチ不味料理素質を持っている。

以前、彼女はあのシヤマル鍋を口にしても平然と入られたほどであるから、何の変哲のないパイを口にしても大丈夫だと誰もが思う。

ところが……

ウギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

「てか何なんですかあれエ!？」

「人が倒れるほど不味いつて訳なのか!? そうなのか!！」

「やばい!!-- 対決前から1人犠牲になっちゃったんだけどオオオオ
!!--」

セイバー、京、も一体どうしてなのか分からなくなり、零斗にいた
つてた大ピンチだと騒ぎ出す。

一方の『チーム・リリカル銀魂』・『チーム・クイーン』・『チー
ム・狂乱』・『チーム・真撰組』・『チーム・ナンバース』・『チ
ーム・オタクガンダム』(光翔竜は除く)はそれを見て……

『やっぱそうなっちゃうんだねえええええええ!!--!!--!!--』

大泣きして叫びだす。

「ちょっとオオオオオオ!! 一体何をしたのオオオオオ!! と言う
より、あれ何イ!!--」

「うわぁ……あのお姉ちゃん、意識を失っているよ」

プレシアはありえないほどに驚いてツツコミ、ヴィヴィオはネプテ
イーヌが可哀想だと同様する。

「おい黒神!! コレは一体どう言うことが説明しろやあ!!--」

「お前は私達が罰ゲームに怯えるのを楽しく見る悪趣味を持って
いるアルカアア!! この腹黒作者アア!!--」

銀時と神楽が怒鳴って黒神に説明する事を要求する。

黒神は迷わずに憎たらしい笑顔でどう言うことなのかを説明する。

「これはただのパイではありません。シャマル特製の極不味包みパイ、通称『シャマパイ』です」

「またあの女の手料理かよオオオオ！！つつか何で一方的に不味くなる方向に進む訳エ！？」

美味しくなるどころが不味くなる一方に進む彼女は一体どんな料理の腕をしているのか訳分からなくなった銀時。

「彼女の話によれば、中身は牛肉にねぎに玉ねぎやトマトソース何だけど……最強の隠し味としてとんでもない入れたようです」

『『最強の隠し味！？』』

黒神の言う隠し味とは、黒神は気絶して倒れているネプティーンの隣に落ちているシャマパイに指を指す。

そのシャマパイの中には何かぶつぶつの者が入っていた。

「ん、何だこれは？変わった材料のようだが……」

春蘭がうかつにその材料らしきものを掴んでよく見てみる。

だが良く見れば……なにやらウジウジとしたようなうねりの動きをしているのが分かる。

一体何なのかを冷や汗流して良く見ると……

「……………」

春蘭はだんまりとなってしまうた。

政宗が一体如何したのか恐る恐ると聞いてみる。

「お……おい、いったいどう……」

「いやあああああああああああああああああああああああああ
あ！……！！……！！」

ドカア！！

「じふおお……！！」

突如、タツクルのごとくの勢いで政宗に抱きつく泣き出す春蘭。

「あア……どうしたんだ一体？」

一方通行も突如の春蘭の驚きと行動に啞然としている。
そして春蘭のタツクルをまともに受けながらも政宗は立ち上がる。

「て何だよいきなり！？」

「う……う……う……う……う……う……う……！！」

「A a！？あのP a iに何が入ってたんだ？」

「う……う……う……う……う……う……う……う……う……う……
イイイイ！！！！……！！」

「W h a t！？ 蛆虫だあ！？」

『 蛆虫……！？！？ 』

中に入ったたのは何と、蛆虫であった。
うねっているが実は死んでいる。

だが何故か不気味にぐらいウネウネとした動きをしている。

「そう何です。実はシャルルが使った食材は何と……あの蠅の幼虫
とも言える蛆虫なんです！！何故蛆虫が入っているかと言うと、1
ヶ月前に彼女がネットワークで、イタリアサルデーニャのチーズの

一種『カース・マルツウ』を見て、その蛆虫入りのチーズを見て感心したようです」

「んなグロテスクな食材を参考にしたんですか!？」

「てかそれ健康障害があるとして法律で販売が禁じられているんじゃないんですか!？」

まさかそんな危険食材を参考にした事に、山崎とティエチは呆れていた。

「ちよつとオオオオオオオオオオ! そんなのを俺達まで食べつて言うのか!？ それじゃあ俺達の体の中も寄生されちまうでしょうがああ!！」

「……だ……大丈夫だ……マイティ真拳の極秘治療奥義を使えば……あ……あるいは……」

近藤はいくらなんでもやりすぎだと近藤は青ざめて訴えて、零斗は体を震えながらも『マイティ真拳』の秘術医療なら大丈夫だと言い出す。

「なお、これは敗者様のシヤマパイであり、コレを逃れるには優勝するほかはありません。なお、棄権すると言うなればコレを強制的に食らってもらいます 後、このシヤマパイはかなりの高熱で煮込んだのをパイ包みにして焼いた者ですので、蛆虫は新でいますので寄生される事はありませんのでご安心を」

黒神はあくまで安全料理である事を言い出すが、シヤマルの不味さは常識外なので味覚崩壊の危険性がある事を無視している。

「あ、ちなみにシヤマパイの不味さはあの『シヤマル鍋』の50倍の不味さです」

どす黒い笑顔で、わざとらしく思い出した言い方で黒神は言い出す。それを見て、誰もが逆らえず、生き残るために優勝を狙うしかないと思った。

なお、その蛆虫は煮込まれているので、確実に死んでいるので寄生される心配はない。

しかし、この世とは思えない不味い食材の一種となっている・

「あんなのが私達の小説の作者なんて……」

「ティア……気持ちわかるけど抑えよう……」

青筋いっぱい浮かべて涙を流すティアナに、スバルが落ち着かせる。

「Huh!? 罰ゲームだあ!?!?……上等だ……ようは勝ち続けりや良いんだろ?」

「そうね、負けを恐れたら勝てる戦いにも勝てないからね」

「この超子龍も、竜の名に恥じない戦いぶりをするのみ!」

「絶対にあんなものは口にしない為にも、そして華琳様にあんなものを食わせない為にも、絶対に勝つ!」

『チーム・キングドラゴン』は負けを恐れずに勝つ事に気合を入れる。

負けを恐れると強さが劣ってしまうから、逆に恐れずに戦う方が効率が良い。

「皆、私はフェイト様の為に……そしてこれから共に戦う皆の為に力を合わせてこの大会に優勝する事を誓う!! 必ず勝とう!!」

『『おう……!』』

光翔竜は、絶対に『シヤマパイ』を食さず……そしてフェイトに食させない為にもウツソ、こなた、かがみと一緒に優勝する事を決意する。

3人も光翔竜と共に力を合わせて優勝を目指す。
結束力が強くなった『チーム・オタクガンダム』。

「いやあああああああ！あのトラウマが蘇るウウウウウ！！！」
「ゆりイイイ、落ち着けエエ！！とりあえず何としてでも勝つ方法を考える事が先決だ！！！」

以前、黒神にシヤマル鍋をぶつ掛けられた恐怖を思い出すゆり。
音無はそんな彼女を落ち着かせて、何とか勝つ方法を一緒に考えるようにする。

「ぐ……私をも気絶させる程の料理を作るなんて……シヤマルの料理の下手さ、恐るべしね」

「ああ、コレは俺達も何とかしないと無事じゃすまないぜ」

何とか零斗の治療薬により復活したネプティー又は、零斗同様に絶対勝ち上がることを決意する。

「ちよつとおおおおおお！？どうやったらこんなもんが作れるって訳ええ！？」

「私も絶対嫌ですよあんなの！！と言うか蛆虫入りって何て恐ろしいものを用意したのですかあの作者！！！」

「……あんなの、サーヴァントである我等も殺せるほどの威力は有りそうだぞ……我は絶対に食べたくない」

「俺だつてマジで御免だ！！この世と別れちまうだろうがア！！！」

新・極悪料理こと『シヤマパイ』の恐ろしさを嫌と理解し、生き残

るためにと優勝を狙う。

「いやじゃあああああああああ！何であんなもんを食わなきゃいけねえんだアアアア！？」

左之助はさっそくゲストとして呼ばれた事に強く後悔する。

自分が一体何をしたのか、てか何でこんな危険な状況に追い込まれなきゃ行けないのか理解できないほどに。

「八神イ、今こそ草薙家と八神家が力を合わせる時だ！！」

「おう！！！」

コレばかりは死んでも負けられないと決意した京と庵。

と言つよりあんなのを食べるぐらいなら死んだほうがマシだと考えている。

「ワシも命をかけねばならぬ……たとえ死より恐ろしい事があつても、それで死ぬとしても……ここで倒れる訳には行かん！！！」

家康も負ける事は許されないこの戦いに、無事に生き残ることを決意する。

「絆の力の元……徳川の名に懸けて、この大会を制覇する！！！」

本人はそう言うが、実際は制覇するよりも、罰ゲームの『シャマパイ』を裂きたい一心である。

何せ蛆虫など気色悪くてこの世とは思えない不味さまで調理されている料理であるからだ。

一方のリリカル銀魂達は、この大会が終わったら後で黒神とシャマ

ルをポコポコにする事を決意する。(スバル・ルーテシアを覗く)

*

何はともあれ、第一回戦が始まる。

「では、さっそく大会を始めたいと思います！！今回の大会のテーマは僕の趣味です！！」

『『黒神の趣味！？』『』』

黒神の趣味をテーマにした大会に啞然とする参加チーム。

「大会は一回戦、準決勝、決勝戦の3回に分かれています。その対戦では僕のテーマが別々に分かれています」

「て事は何ですか！？あなたの趣味が3つとも中心となって入るって訳か！？」

「あなたの事だから、相当な悪趣味じゃないでしょうね？」

近藤は3つもそんな競技がある事に意外性に考え、凜は疑うような目線で黒神を睨む。

「そのとおりです。後、心配無用です。この競技はあくまで一般的ですので危険度はそこそこ控えています」

「だと良いけど……間違えてもフェイト様に危害は与えないで欲しいですけど」

「そうだ！！セイバーを傷つける事は我が許さんぞ！！」

光翔竜もギルガメッシュも、フェイトやセイバーが傷付かない事を

要求する。

しかしその大会はそんな甘い事は不可能である。

「そして第一回戦は……『危険度マックスルーレット 超早抜け双六』……！」

「す……双六!?」

まさか一回戦が双六である事に意外そうに驚くフェイト。

しかもタイトル名から見てかなり危険である事には間違いない。

すると、闘技場全体が何と、500マス近く刻まれていて、かなり複雑なルートになって繋がっている。

「こ……これは?」

「何ですかこれえ!?!」

家康も山崎も、こんな大きな双六台……というより闘技場でこんなに大きな双六を見た事自体が始めてである。それを源外とスカリエツティが説明をする。

「諸君!ルールを説明するぞい!!これは通常の双六どおりに誰よりも早くゴールに到着するのが目的とされとるんじやが、問題はその数多くのマスの色にある!!」

「色鮮やかなマスは、赤、青、緑、黄色、白、黒、銀がある!!それぞれ、ペナルティ、ノーマル、ハプニング、ボーナス、アタック、ダメージ、デュエルと言うさまざまなマスが存在する!!止まる事で、何が起こるか分からないぞ!!」

普通に双六をするようだが、仕掛けはマスにあるようだ。

その止まった増すの色によって、何かが起こる事は間違いない。

「要するに、そのM a s sがM a i nって訳か……上等じゃねえか」
「面白い、我騎士王の名に恥じない強運でこの戦いを制覇して見せますー!!」

「やってやるアルヨ、絶対に負けないネエ!!」
「ふっふっふ、オタクを極めて10年つとも言えるこの私のオタク強運で勝ち上がってみせるとも!!!!」

政宗、セイバー、神楽、こなたの4人はヤル気をめらめらと出して闘志を放っている。

中には4人のように勝つ気でいたり、臆したり、敗北するのを恐れている者もいる。

特に零斗は勝利を確信したような笑いをする。

(コレなら、あの必殺奥義が使える!!)

どうやら、彼の『マイティ真拳』にはボートゲーム用の奥義もあるようだ。

「なお、進む数はルーレットで決めたいと思います。そのルーレットは、1から10までの数字も用意していますので、地道に進んでくださいね」

飛びきりの笑顔で、黒神はそう言い出す。

だが実際の彼の真意は、より長く誰かが苦戦して苦しむ姿を見たいと言うドSな考えであった。

特に彼は、リリカル銀魂側の苦しみの光景を期待していた。

別の意味で最低な読者である。

「あの顔、何か企んでいる顔ね」

「ああ」

「まったくじゃ」

プレシア、スカリエツテイ、源外の3人は黒神の悪巧みを疑いだし、ヴィヴィオはそれが何なのか理解できなかった。

*

進む順の結果は以下のとおりである。

『チーム・とある運命』

『チーム・ナンバーズ』

『チーム・オタクガンダム』

『チーム・真撰組』

『チーム・キングドラゴン』

『チーム・狂乱』（桂小太郎）

『チーム・ファイター』

『チーム・クイーン』

『チーム・マイティアテナ』

『チーム・リリカル銀魂』

「ちよつとオオオオオオオ！！私達が最後ってやばいでしょっがアアアアアア！！」

ティアナは最後尾の順になった事に青ざめて叫びだす。

これはヤバイと銀時、フェイト、スバルも青ざめ、他のチームからもお気の毒にと思う。

ちなみにスバル以外のリリカルメンバーは全てバリアジャケットに転装した。

スバルはいくらなんでも他のゲストから来た人達にあんな姿を見せるのが恥ずかしいのか、顔を真っ赤にしていつもの隊員衣装のままでいる。

「それでは諸君、健闘を祈る！！一回戦、『危険度マックスルーレット』超早抜け双六』スタート！！」

ドカーン！！

と、黒神がスタート宣言するとプレシアが杖から稲妻を放ち、闘技場の中心部の針にその稲妻は落下した。

特殊な金属で出来ている為、そう簡単にはビクともしなかった。

「じゃあ、さっそく私達から行くわよ！！」

凜が張り切って最初にルーレットを回すボタンを押す。

巨大なルーレットは人間の手では回せないなので、ボタンで機動的に回して数秒間回させて止まった数字だけ進む。

「ちなみに、各チームは最初はリーダーがルーレットを回し、そこから4人で一列ずつ回して頂きます」

黒神が説明すると、ルーレットの針が止まる。

止まった先は……まさかの10であった。

「よっしゃあああああああああああ！！」
『『良し！！』』

いきなり大きな数字に止まった凜達は大喜びである。

早く脱出^{ゴール}したいほど、この双六が何かよからぬ危険性があると知らずに。

そんな疑いをせずに『とある運命』は10マス進んで赤の増すに止まると……空に浮いてあるモニターが現れて何か内容が映し出された。

《失われる宝石》

「は？それどう言う意味……」

書いている内容がまったく分からなかった凜。

「赤のマスに止まりましたな？赤のマスはペナルティマス。ルールブックを回した者に罰を与えるミニゲームを用意しています」

「だからなんの……てあれえ！？」

「凜、一体何したのですか！？」

突如、自分の異変に気づいた凜の叫びにセイバーはたずねる。

「私の持っている宝石がない！！」

黒神は憎たらしい笑いで説明する。

「何って、ペナルティマスのミニゲームですよ。このマスはルーレットを回した人に合わせたペナルティを用意して、精神的に苦しめるのを目標として作られたんですよ。遠坂凜に最も効く精神的罰ゲームが宝石を失われる事なんですよ。」

『何て恐ろしいマス何だ!!!』

ペナルティマスの恐ろしさを嫌と知った他のチーム。
ギルガメッシュも青ざめて嫌な汗を流す。

(もし……我があの赤マスに止まれば…我、宝具があの男の手に…
…それだけは護らなければ!!!)

宝具を護る為に、絶対に赤マスは止まらないでおく事を決意するギルガメッシュ。

そうなれば、黒神のせいで宝具が台無しになるからだ。

「何て恐ろしいゲームだ……黒神の腹黒さが伝わってくる…ええい!!! 私達も行くぞ!!!」

トーレは絶対に負ける訳には行かないと、ボタンを押し出す。

「トーレ、ペナルティマスは2、4、7、8、10よ……て2分の1の確立で赤マスじゃねえかあああ!!!」

何でもこうも赤マスばかりが多いのか納得できないドウエ。

おそらく自分達が苦しむ姿を見たいと言う黒神の野望が満ちている。

「安全なマスに止まってエエ!!!」

「出来れば9をオオオ!!」

クアットロもノーヴェも流石に念を込めて赤マスに止まらない事を祈る。

そしてルーレットの針が指した数字は…

『10』

「ナアアアアアアアア!!」

そこは『とある運命』が止まったマスである。

だが、あそこのペナルティマスは宝石が失う罰ゲームだけ。

自分達は宝石を持っていないから大丈夫だろうと、落ち着いて考えればそう思う。

65

「まあ、我々は宝石など持っていないから…」

「そうね…私達はそんな高級な者を持っているわけないし」

トーレとクアットロも安心しながらマスを進みだす。

10マス目が止まると、モニターから新たなペナルティ内容が書かれている。

《ゴリラとブチュ〜っ》

「…は？」

「よし、2チームのおかげでこのゲームの内容が分かった。様は赤マスに止まらない事がこのゲームの勝利の条件！！僕達は絶対に良いますに止まるよ！！」

ウツソは強きでボタンを押し、ルーレットが回しだす。

そしてルーレットが止まりだしてその針の先は『9』になった。

「よし、赤マスのある場所じゃない！！」

「よ…よかったアアア！！」

ウツソは手ごたえありとガッツなポーズをし、かがみにいたっては安心して気を抜けた。

「あそこは、緑のマスだね。一体何があるんだろうか？」

光翔竜は緑のマスに何があるのかを不思議に考える中、こなたは気楽そうに先に向かう。

「まあまあ、とりあえず赤マスじゃない事だけでもよしとしようよ

」
「あ、こなた待ちなさいよ！！」

先に進むこなたに、かがみが急いで追いつく。

ウツソと光翔竜も同じく、別にペナルティマスじゃないから大丈夫だろうと思って進みだす。

そして9マス止まった瞬間、モニターから内容が現れた。

《攘夷浪士の火矢による奇襲攻撃を受ける真撰組。『チーム・真撰組』一回休み》

「え!?!」

『な……何イイイイイ!!!』』

とてつもない内容に『オタクガンダム』もだがそれ以上に『真撰組』が驚く。

すると天井から無数の火のついた矢が『真撰組』に中心に降り襲う。

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!!』』

当然のように近藤、山崎、ルーテシア、デイエチの4人は逃げまとう。

だが近藤の尻には何本の矢が刺さって燃えている。

「ぎゃああああああああああ!!!痛くて熱いんだけどオオオオオオオ!!!」

「近藤、水!!!」

ルーテシアが火矢を避けながら近藤に向かって水にぶっ掛ける。火は消えたが、何本の矢が尻に刺さって痛々しい光景が見える。

「ぎゃああああああああ!!!何で俺達にイイイイイ!?!」
「どんだけ降っているんですかアアアアア!?!」

山崎とデイエチもどうして自分達に他人の災難が振ってくるのか訳分からなく、ひたすら逃げるしかなかった。

そして火矢は消えて収まる中、別のモニターから黒神が映し出された。

リーダーとして政宗がボタンを押してルーレットを回す。
ルーレットは『1』に止まる。

「Shitee!このさいしゃあねえ!!--」

「行くわよ、皆!!--」

政宗と華琳はこれはしょうがないと思う。

1は赤マスじゃなく、黄色のマスであった為、とりあえずは罰は来ない。

そしてモニターから映し出された内容は…

《マリオカートのロケットスタートが決まった!!最初にスタートした物はあと10マス進む。後からの者は最も多く進んでいる者から10マス進んだ位置に移動する》

「おお、これは!!--」

「おーっと、『チーム・キングドラゴン』がいきなりボーナスマスに止まったああああ!!ボーナスマスはルーレットを回した者が今願っている条件を発動するお助けマスです!!--」

これは思わぬ幸運に『キングドラゴン』は『とある運命』と『ナンバース』よりも10マス先の場所に急激移動。
すると、突然蒼いバイクが政宗の場に現れた。

「Ha、こいつは良い!!文字通りのstart dashだ!!--」

政宗はバイクに乗ると、華琳、春蘭、星が続くように政宗の背後に座る。

「ておい！！何乗り込んでんだアア！！」

「いいから行きなさい！！」

「一台しかないから仕方があるまい！！」

「ふふふ……今度いつか貴方と二人つきりで……」

と3人は政宗の言い分を聞かずに言い出す。
特に星にいたっては怪しい言い方であった。

「Ha……まあ良い！」

溜息を吐きながらも、政宗はハンドルを握ってバイクは凄まじい勢いで動き出す。

そしてトップチームから10マス進んでいる場所まで到着する。

「『チーム・キングドラゴン』！！さっそくボーナスマスによって怒涛のトップにたったあ！！文字通りのスタートダッシュ！！」

「よし、では我々も続こう」

続いて『チーム・狂乱』のリーダー、桂小太郎がボタンを押す。
そしてルーレットの針は『9』に止まった。

「うむ、赤ではないな」

『良かったですよ！！』

桂とエリザベスは安心な表情をする。

「コレでうちらには被害はでいへんわあ……」

「いや、それ以前に他のチームが被害を受けるような……気が……」

はやても桂、エリザベスのように安心した表情で言い出し、ヴァイスにいたっては他のチームの事が心配である。
そしてハブニングマスに止まると……

《隣と最後尾がずるして順番無視。『チーム・オタクガンダム』 & 『チーム・リリカル銀魂』 15マス進む》

『うおおおおおおおおお！！』

「あーつと、ここで一番最後である『チーム・リリカル銀魂』と『チーム・オタクガンダム』に幸福のハブニング発生！！二チームは15マス進みます！！」

「しゃあああああああああ！！」

「うおおおおおおお！！これは来たアアアアア！！」

銀時とウツソは超嬉しいほどに喜びだす。

特に『チーム・リリカル銀魂』は最後尾の為、出番が回る前に進める事はかなり得である。

「ティアア！！私達、まだ希望が残されているよ！！」

「ええ、この調子で一気に優勝よ！！」

「かがみん！！この調子でじゃんじゃんハブニングを利用してやるうね！！」

「出来るかア、あとかがみん言うな！！」

スバルとティアナは嬉しそうに喜ぶ中、こなたのかがみん呼ばわりに怒鳴ってツッコむかがみ。

「きゃあああああ！！フェイト様と一緒に進むなんて、超嬉しい
イイイイ！」

「あ……あははははは！！」

光翔竜の喜ばしい叫びに、フェイトは苦笑して笑うしかなかった。
そして二チームとも15マス進み、トップは『オタクガンダム』へ
となった。

「ぐう！！先を越されてしまったか！！！」

「あかん！！フェイトちゃん達に先を越されてもった！！！」

『余計な事をしてしまった』

桂、はやて、エリザベスの3人はやってしまったような悔しい表情
を表す。

一方のヴァイスは自分に被害が来なかった事に安心を抱く。

「おっしゃあ！！エリイ、ツッチー、リインフォース！！私達もい
くアル！！！」

「はい！！！」

「……やれやれ」

「分かりました！！！」

エリオとリインフォースは気合万全。

月詠は乗る気にはならないが、勝たなければあの極悪料理を食べな
ければならない。

それだけは嫌と、ゲームにいやいやでも参加する。

そしてチームリーダーとして神楽が思いっきりボタンを押す。
ルーレットが止まった数字は……

「ち、微妙アル。まあいいネ、赤マスじゃないから」

「ああ、もし先走って10を出しても待っておるのは地獄じゃ」

「ここは懸命に進む事を決めて、『クイーン』は青のマスに止まる。

「ありやりや、青のマスはノーマルですので何も起こりませんね……
チ、地味なマスに止まりやがって」

「何を期待してたんですか?! 私達が苦しむ姿ですか!?! いくらなんでも酷すぎですよ!?!」

黒神の本心を一瞬でも見たリインフォースは怒り出して黒神に盛大なツツコミをする。

「何てどす黒え作者何だ……俺達の作者の方がまだマシだぜ」

「まったくだな」

京も俺も黒神の腹黒さはまさに最悪と認定する。

だが逆らえばこっちが酷い目に合うので反抗は出来ない。

「徳川さんよ、マジで頼むわ!! 俺はこんな所で死にたくないから

!?!」

「任せろ!! 主の期待にこたえて見せよう!!」

と、次に家康がボタンを押し出す。

回りだすルーレットがぴたっと止まると、出た目は5である。

「そこは……て緑のマスじゃねえか!?!」

「たしか……誰かが幸福にあったり悲劇にあう奴だな」

佐之助も庵も、何か嫌な予感しかしない中……『ファイター』はとにかく進むしかなかった。
そしてモニターからその内容が現れた。

《英雄王の大切な宝具に悲劇が!!》

「何イイイイイイイイイイ!!」

英雄王と言えばギルガメツシュしかない。
急いで『ゲイト・オウ・ハビロン王の財宝』を発動させ、ギルガメツシュの背後から無数の宝具が現れる。

この光景に誰もが驚くがそれは流しておいて、ギルガメツシュはちやんと宝具の数を数える。
そして数えた結果……

「……なんだ、何の問題もな……」

バキーン!!

と、突如浮いてある宝具の1本がバキッと折れてしまう。
突如の宝具の折れ音に唖然とする3人。
だがそれは悪魔で始まりしかない。

バキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ

そして次は『チーム・マイティアテム』のチームリーダーの零斗がルーレットを回そうとする。

「次は俺達の版だ……零斗、何とか良い数字を……」

「待つて、何か彼の様子が……」

音無が声をかけると、さっきと様子が全然違う零斗に気づくネプテイーヌ。

これは闘志を込めて、ボタンを押す体制をとっている。

そして気迫を込めて……

「てええい!!」

ポチ!!

勢い良くボタンを押し、ルーレットを回す。

そしてここから彼の必殺技が炸裂するのであった。

「マイティ真拳強運秘奥義!!」引き寄せられる数字『!!」

と、零斗は『1』と書かれた紙を出す。

するとルーレットが止まりだし、その針が刺している数字は……何と『1』であった。

「嘘オオオオオオオ!!」

「マジ!?!」

これにはスバルとかがみも驚きを隠せなかった。
何せ出した紙の数字がルーレットの針が差している数字とまったく同じであるからだ。

しかも零斗はかなり大量の汗を流している。

「ちよ、大丈夫か!？」

音無は駆けつけて零斗に近づぐ。

苦笑しているが零斗は平気そうに起き上がる。

「心配するな……この『引き寄せられる数字』は己の莫大な闘志を代表とし、サイコロ、ルーレット、カードのドロウなど自分が狙っているのを確実に表す奥義だ。だがこの秘奥義を使えるのはせいぜい、2、3回」

そんなきつくなる程大きな代表を支払ってまで発動する奥義を放つ程、零斗は絶対に勝つ気迫を込めている。

そして『マイティアテム』が1マス進むと、ボーナス内容がモニターで現れる。

《『マイティ真拳』炸裂でフィニッシュを決めた。30マス進む》
「よっしゃああああああああああああああああああ!!!でかしたわよ零斗君!!!」

ゆりは零斗の懸命な結果に大喜び。

「これで私達が一気にトップに立つって訳ね!!!」
「ああ、零斗のこの懸命な働き、無駄にしない為にも優勝しないと
な!!!」

ネプテューヌと音無も絶対に優勝する事を改めて近い、全員30マス進む。

「おーっと、『チーム・マイティアテム』のチームリーダー・零斗の『マイティ真拳』が早くも炸裂し、一気にトップを経ったアアアア！！さすが優勝候補の一角です！！」

「だが、今乗って別の意味でイカサマじゃないのかな？」

スカリエツティは今はイカサマに近い存在だと疑う中、黒神はそれを気にせず……

「OK！！何せ僕は、ルーレットを回して進めとは言いましたが、必殺技を使ってルーレットを回すなどは言っていないので」

イカサマではないと審判として言い出す黒神。
そして最後はいよいよ『チーム・リリカル銀魂』。

だが……

「おやあ、スバルだけがまだバリアジャケット転装していませんね？」

黒神はスバルに注目するような言い方でスバルに質問する。
恥ずかしがりのスバルは、あんな露出度が高いバリアジャケットが恥ずかしく、いくらなんでも無理に近いから転装しない。

「あ……あれだけは……／／／」

「別にいいですけど、その場合は『リリカル銀魂』は失格になりますよ？」

「あわわわわわ……分かった、転装しますよオオオ!!!／／／」
失格だけは免れたいスバルは、仕方がなく『ティルヴィングエア』
と『ペンドラゴブレード』を起動させる。
そして……

『『ティルヴィングエア、ペンドラゴブレード、セフトオン!!!』』
デバイスにより蒼い光に包まれる。
そして、スバルの衣装はバリアジャケットになった。

左手に握っている、柄の先に竜の顔が付いていて特殊な鍔の形をした長刀『ティルヴィングエア』に、背中に背負っているのが赤き竜の形をした大刀『ペンドラゴブレード』。
背中の肌が見える背中ぱっくりの蒼いコートに赤いネクタイをかけていて胸の部分は黒くて、背中の部分は肌が見えるセクシーな蒼い軍服衣装（ミニスカ+ニーソ+背中ぱっくり）。
『レイブルー』の『ン・キサラギ』のコートと『エル・ヴァーミリオン』の衣装の合成コスプレと思わせるバリアジャケットである。

「あつう……………／／／」

胸の大きさの表し方、短いスカート、肌と美脚の表し、露出度が高めのバリアジャケットにスバルは恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

『『来たアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!!!!待ってましたアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!』』

「ヤバイ、マジでエロいコスプレカッコウじゃん!!!!しかも鉢巻無

しのバリアジャケットもまた良い！！／／」

嬉しそうに鼻血をたらすウツソとこなた。

そしてスバルのセクシーでエロ可愛いと顔を真っ赤に染める零斗。

「……何でしょう……今すぐにあの者を斬り殺したいと言っこのモヤモヤした気分は？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！）

同じ剣士なのに、胸が大きく可憐な姿をしているスバルにとてつもない嫉妬を抱くセイバー。

「俺達のところのスバルとは大違いな姿だ」

「ああ……にしてもあれ露出が多くねえか……て家康？」

庵も京もスバルの意外なバリアジャケット姿に唾然とする中、京は何故か顔を真っ赤に染めている家康の存在に気づく。

「……………あ……………あれがこつちのスバル殿のバリアジャケットとか言っ戦闘着……………なんと言っ可憐な……………／／／」

以前のすばニヤンと同様かそれ以上に、家康の心の奥底からドキッとした感覚が現れ……顔が真っ赤に染めている。

他にもスバルの意外な姿に注目するゲスト達。

流石のスバルもさらに恥ずかしくなって、「あうっ」としか言えなくなっ

あの雰囲気と格好であんな事を言われたら……ワシの感情が変になつてくるウウウー！！）

今までスバルを弟子のように見てきたが、あの姿であんなに純粋な雰囲気を表すと、自分の気持ちの整理がおかしくなつてくる家康であつた。

そしてコレが、家康のスバルに対する恋路の始まりのきっかけになつた事はいうまでもない。

「スバル、あんたもしかして狙っている訳？」

「ふえええ！？そ……そんな事ないよお！！／／／」

スバルはあくまで違つたとティアナに否定するが、ティアナはそのシド眼で疑うようにスバルを見つめ続ける。

「あははは……と……とにかく始めようつか、銀時！！」

「お……おう、そうだな！！」

フェイトと銀時も、苦笑しながら話の流れを無理矢理流して銀時はボタンを押す。

すると回転するルーレットは、数秒後にピタツと止まりだす。そしてその針が刺さっている数字は『7』。

何も疑わずにそのままマス進むと、そこは赤マスのペナルティマスであつた。

「げえ、ここで赤マスかよ！！」

とても嫌な予感しかしない銀時。

これはみんなと同じじゃないかと思つ中、モニターに映し出され

一人のスバルがいた。

『す……スバルウウ！？』

「スバルが2人イ!?」

「私がもう1人いるウウウウ!?」

もう1人のスバルの存在に驚く銀時達。

特にスバルと家康にいたっては人一倍である。

「……坂田銀時イイ!!」

「てかあれ?こつちのスバルって何か妙に殺気を込めていねえか?何かメツチャ怖いんだけど?」

銀時は青ざめて、殺気をこめて放つスバルに怯えている。

そう、今時分たちの目の前にいるもう1人のスバルこそが、sibugakiさんの小説『リリカル銀魂Strikers 蒼炎の龍』の重要メンバーの1人、スバル・ナカジマである。

彼女はティアナを大切に思っており、銀時の事を敵対する修羅の戦士である。

そして彼女の体中から蒼い炎があふれ出て、とてつもない闘志を込めている。

その眼で銀時を睨み付けて、構えを出す。

「貴様だけは、殺すウウ!!!」

「いきなり最大ピンチ何だけどオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

果たして、彼女はどうして一段と銀時に怒りを込めているのか……次回対決が始まるのであった。

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生』』

銀八

「へえい、じゃあ『銀八先生コーナー』をはじめます。今回は『リリカル銀魂ゲスト杯編』記念としてゲストをアシスタントさせます。そしてそのアシスタントするのがこの人」

ウツソ

「はい、最も黒神さんに関わっていると言っても良いほどの小説のゲストと呼ばれている『ウツソとリリカル銀魂 G・S t r i k e r s』ウツソ・エヴィンです。よろしくお願いします」

銀八

「はい、こちらこそよろしく。んじゃさっそく行くとしますか」

ウツソ

「はい、まずはこの人からペンネーム『真王』さん『真王』質問に入る。『皆さんはもし屁怒紹さんの頭の花がマリオシリーズのパックンフラワーだったらどう思いますか？』」

レナ「はっ！？それ思いつきりやばいよ！？」

真王「もう一つ」もし追いかけられるのが屁怒紹さん以外ならどいつがいいですか？

バーサーカー（Fate）

バルバトス（テイルズ）

ハイパーゾンビ（バイオハザード）

ネメシス（バイオハザード）

PAD長（東方）

スキマ賢者（東方）

風見幽香（東方）

キラーマシン（ドラクエ）

パクンフラワー（マリオ）

カービィ（カービィ）

ワンワン（マリオ）

アトミックテレサ（マリオ）（目を合わせると恥ずかしくて止まる）

さあどれでしょう」

レナ「えっと……とりあえず皆さん頑張ってくださいかな？かな？」

……て何かさっそく怖い質問きたんだけどオオオオ！！」

ウツソは異常なまでに怖い質問に、思わず叫びだす。

銀八

「『銀八先生コーナ』ではいつもはこんな感じだからなあ……で最初の質問はどうだ？」

全員

『尚更凶悪になるから怖いですウウ!!』』

屁怒組の凶暴さがパワーアップして手が付けられないほど全員怖がっている。

ウツソ

「ですよねえ……」

銀八

「んで……もう一つの質問は……」

生徒全員

『是非アトミックテレサで!!』』

その理由は、眼を合わせれば止まると言う理由でなら、確実に逃げられると確信したからである。

ウツソ

「何か屁怒組マックスとも言えるような質問ですねエ」

銀八

「まったく……というわけで『真王』さん、廊下に立っていなさい」

ウツソ

「次はペンネーム『charley』さんの質問です『幸村』お館様!先の『茶吉尼ごっこ』の回は見事な武勲でありました!

ところでどうすれば其も、お館様のようにその生きとし生ける者の頂点に立てた究極の肉体を手に入れる事ができるのでしょうか?

それから大変無礼かもしれないが、どうすれば今のお館様のようにその慈悲深さを象徴する個性的な花を額に咲かす事が出来るのでございましょうか？どうか是非この幸村にお教え下さい！」

「」

銀八・ウツソ

『「てか、無理だろ！！それ別の意味で魔王と同じように人間を辞めるのと一緒にだからあ！！後、屁怒紹は親方様じゃねえし！！」』

いくらなんでも天然ボケがたつぷりの質問には2人も呆れてツツコム。

銀八

「と言う訳で『charley』さん、あの天然ボケな若武者に屁怒紹は甲斐の虎じゃない事をはつきりと伝えてください。はい次イ
！！」

ウツソ

「ペンネーム『白米』さん『質問

1 .

武「屁怒侶。俺の見立てでは、かなりの実力者と見た！」

どうだ？ 良ければ俺と組み手で手合わせしてみないか？」

白米「やめてエエエエエエ！！？ 下手したら、それは死亡フラグだからアアアアアア！！？」

2 .
刃「へ、屁怒侶殿。花が好きだと申ししていたが、一番好きな花は何だ？

後、よ、良ければお前の花屋に花を買いに行っても構わぬか？
／／／／

3 .

白米「第二百二十訓で屁怒侶と鬼ごっこしたメンバーに質問。

フリーゲームに『青鬼』というホラーゲームがありますが、ご存知ですか？

そして、その『青鬼』に出てくる青鬼ブルーベリーと屁怒侶、ぶつちやけどどちらが怖いですか？

『……武はマジで命知らずですね』

3つ目もかなりありえない質問内容に啞然とするウツソ。
そして質問の答えが始まる。

屁怒侶

「いえ、僕は争いごとは苦手なので遠慮します…後、刃さんには大量の紫陽花を上げます。ちょうど季節ですので…」

2つ目の質問に嬉しそうに答える屁怒侶であった。
そして3つ目は

銀時・神楽・スバル・ティアナ・エリオ・キャロ

『『屁怒侶のほろが怖いです!!!』』

と正直に答える。

銀八

「まあ3つ目は予想してたがな……というわけで『白米』さん…屁怒紹質問は控えめに……あ…あははは」

屁怒紹の存在に青ざめている銀八。

彼の前では絶対に怒らせるようなことをしてはならない。

銀八

「次行きますペンネーム『夜叉龍』さん『カイト・レン』iiiiiii
いいやあああああああ!!!」

ダダダダダダ!!

夜叉龍「あ、逃げた!。まあ、しかたないよね。俺だって逃げた
いもん。つか帰らせて今すぐ。」

では質問鬼兵隊のみなさんは屁怒紹さ……いや屁怒紹様を見て勝
つ自信ありますか?。では、更新頑張ってください。」「

『…………』

すると、モニターから鬼兵隊の姿が現れた。

質問を答えるように。

アリマ

《勝てる自信は分からないけど、戦^やる時には命がけになるかも知れ
ない》

また子

《無理つす！！何か怖えからアアアア！！》

変平太

《私は頭脳派ですから戦いには向いていませんので…》

万斉

《如何に優れた身体能力といえども、戦いを好まぬ者を斬る気は起こらんでござる。ただ言える事は、あの戦いに拒むところを突けば倒せるでござるよ》

鍬死楼

《あんな天人は斬りがいがあるから良いんじゃないかねえ？》

似蔵

《勝てる自信を持つ以前に…傭兵種族とやらと手合わせしてみたいねえ》

晋介

《勝てる自信があるかねえかのもんじゃないかねえよ……俺ア、ただ壊すだけだ。例えそれが茶吉尼相手でもなあ》

と全メンバーが答えだした。

結果は、勝てる自信があるのは晋介、万斉、似蔵、鍬死楼、アリマの5人。

ないのはまた子と変平太の2人。

銀八

「と言う訳で『夜叉龍』さん、廊下に立っていなさい。次行くぞオ、ペンネーム『龍の骨』さん『今回は、あの人から質問です。』」

エリオ

「向こうの俺に質問だ。ラッキースケベがあつた時あるか？俺は転びそうになつたときキャロの胸を触つた事があるぞ」「」

ウツソ

「あれえ！？何かあつちのエリオつてこつちのエリオを全然違うんだけどオオオオ！？」

性格がまったく違うエリオの質問に驚きだすウツソ。

実は『龍の骨』さん所のエリオは原作と黒神所のエリオとはまったくの別人である。

銀八

「ずばり答えさせてもらいます」

エリオ

「そんな事はありません！！／／／」

顔を真っ赤になって叫びだすエリオ。

銀八

「はい、と言う訳で『龍の骨』さん廊下に立っていなさい」

ウツソ

「次はペンネーム『烈火竜』さん『皆さんに質問です。』3年St

rikers組 銀八先生』の人気投票の結果はいかがでしたか？
『……あれは意外でした』

銀八

「俺はメツチャ嬉しいぞ！何たって1位だからなあ」

他にも、フェイト、スバル、なのは、ギンガは大喜びであり、他は納得できない結果にムスブツとなっている。

ウツソ

「てかラオウが5位って……やっぱ世紀末の覇者だけあるねえ」

銀八

「まったく……と言う訳で『烈火竜』さん、次の新しい小説を作る場合は銀魂関係でお願いしまあす」

ウツソ

「次が最後の質問です。ペンネーム『鳴神 ソラ』さん『マリオ』それにしてもなのは(冥王)の技は2つか…強力な技ばかりだから…んで質問良く誰に使うの？」
質問『良く誰に使うの？』

ネス「ギンガさんや銀さんLOVEズに質問『フォックスから貰う写真はありますか？』」

リュカ「屁怒紹さんに質問『家に遊びに来るのはたいてい誰ですか？』」
「てか最初おつかない質問が……」

ウツソは青ざめて途中で言うのをやめる。

何故なら後ろからは、とてつもない殺気を放っている冥王ことなのはが現れたからだ。

なのは

「ふふふ……私の事を魔王や冥王呼ばわりする人になの」「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……！！！」

飛びきりの笑顔とは裏腹にとてつもなく怖いさつきに、2人は青ざめて魔王の怒りが爆発する前に終わらせることを決意する。

銀八

「つ……次の質問ですが、あの写真でギンガや銀時に恋する乙女達は凄く喜んでいて、屁怒紹さんの話によると今の所は万事屋の銀さんやぱっつあんに神楽の3人のようです！！」

ウッソ

「と言う訳で『鳴神 ソラ』さん、次の質問も楽しみに待っています！以上持って今回の質問は終了します！！」

銀八

「次回もゲストがアシスタントしますので、では！！」

銀八・ウッソ

『『今日はこの辺で……！』』

銀八とウッソは大急ぎでこの場を去る。

だがしかし、もはや遅かった。

魔王は『レイジングハート』を構えて、とてつもない魔力を収束して一気に放つ。

第二百二十三訓：金メダルだけが大会の優勝する目的じゃない（後書き）

黒神

「うわぁ、さっそく銀時に修羅の手が…」

フェイト

「銀時、大丈夫かなあ？」

黒神

「まあ、原因作ったの僕だけだ」

フェイト

「あんたかい！！（怒）」

黒神

「と言う訳で次回「ただ強いだけでは真の強さは手に入らない」テイクオフ！！」

第二百二十四訓：ただ強いだけでは真の強さは手に入らない（前書き）

銀時に時はやって来た。

修羅の闇で武術を極め、そして銀時を誰よりも敵対する修羅の戦士。

『蒼炎の龍』 スバル・ナカジマ。

今ここに、白夜叉と蒼炎の龍が激突する。

黒神

「なお、今回の内容はちゃんとsibugakiさんの許可をもらいましたので、それでは『リリカル銀魂strickers』始まります」

第二百二十四訓：ただ強いだけでは真の強さは手に入らない

前回のあらすじ

突如、黒神のどす黒い計画に銀時達はゲスト達と一緒に『リリカル銀魂ゲスト杯』に参加させて超オリジナル長編シリアスを開幕したが優勝賞品は用意されていないが、代わりとして優勝チーム以外のチームには負けた罰ゲームとしてシヤマルの新作極悪猛毒物質^{ボイズン・マター}理『シヤマパイ』を食べなければならないと言うとてつもない罰ゲームが用意されていた。

生き残りと言う優勝賞品をかけた熱き大会が始まり、一回戦の『危険度マックス 超早抜け双六』が開催された。

上位5チームが準決勝進出であり、残り5チームは地獄の『シヤマパイ』を食べなければならない。

さっそく黒神のどす黒い内容に、誰もが悲鳴を上げて犠牲者が出る。

そして『チーム・リリカル銀魂』のリーダーこと坂田銀時は、まさかの最悪なペナルティとして『リリカル銀魂Strikers 蒼炎の龍』のゲスト、修羅の戦士ことスバル・ナカジマと戦う事になった。

とてつもない殺気に、銀時は青ざめている。

それもそのはず、何せ修羅スバル（『リリカル銀魂Striker S 蒼炎の龍』のゲスト、スバルのあだ名）は銀時の事を敵対していて殺意を放っている。

しかも、今回は一段と凄まじい殺気を放っているため、はつきり言っただけ怖い。

果たして銀時は無事に生き残るのか？

政宗

『『リリカル銀魂 Strikers』 Start!!』

赤マスのペナルティ内容の中で銀時にとって最も危険度が高い罰ゲームが発生した。

それが銀時を最も殺したく敵対すること修羅スバル。

彼女の覇気は、異常なまでに高くて他のメンバーも只者じゃないと確信する。

「いやあ、噂以上にあそこの蒼の字は銀の字に殺気放つほど敵対しているなあ？」

源外は意外に驚いて修羅スバルを見つめる。

「あつちのスバルお姉ちゃん、何か怖い……どうしてあんなに怒っているんだろう？」

ヴィヴィオも怖がって黒神にどうしてなのかを聞き出す。

「彼女は、あつちのティアナを護る守護者として忠実な誓いを立てている修羅の戦士。修羅の世界じゃ彼女は小物扱いだけど、それでもSSランクに達成するほどの実力を持っているそうだ」

「へえ、つまりこつちのスバルに匹敵するほどの手練れって訳ね」

「それにしても銀時君に敵対とは……」

プレシアもスカリエッティも、スバルの強さは知っており、SSランクとなれば修羅スバルの強さはスバルに匹敵すると言っ事である。

「ええ、しかも今回の修羅スバルがとてつもなくこっちの銀時にも一段と殺気を放っているのには理由があるんです」

『理由？』』

黒神は、修羅スバルの今回の怒りが何が原因かを知っている。それは何なのかを皆知りたがっているので、黒神は説明する。

「あれは、確かこの『リリカル銀魂ゲスト杯』が始まる前だった」

*

「それで話とは何ですか？もしくだらない事でしたら……」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！……！！）

修羅スバルは構えを出してとてつもない殺気を黒神に向けて放つ。黒神は臆せず、修羅スバルに話をする。

「いやあ、スバルにこっちの銀時とティアがどれだけ深い関係なのかを話しておこうっと思っ」

「何！？」

修羅スバルはその一言に驚愕の表情をした。

修羅スバルにとって銀時はティアナを汚さしかけない敵である。

ここでは銀時とティアナは深い関係になっている事に信じられない程驚いている。

だが修羅スバルは、これから黒神が話す内容はまったくの嘘である事に知る予知もない。

「いやあ、突然の事ですからねえ……突然、ティアナが銀時に接吻を仕掛けてきたのですから」

「!?!」

実際は、偶然の事故で銀時がティアナと接吻してきたのであった。だがそれとは知らずに修羅スバルは相当なショックを受ける。

「では、ごきげんよう」

と言って、黒神はこの場を去っていった。

残された修羅スバルは、とてつもない殺気を放って銀時に対する憎しみを増幅させた。

「坂田銀時イイイイ……」

「……!! 殺してやるああ……」

「……!!……!!……!!」

修羅の叫びを上げる修羅スバル。

これによって、修羅スバルと銀時の対決理由が出来たのであった。

*

「とまあ、こんなデマな感じで修羅スバルの増幅を倍増させちゃいました」

『にじフアン一の最悪な作者がここにいたアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』

まさに腹黒の領域に極めた黒神の腹黒さに誰もが大きいなるツッコミを入れた。

「つつか何だよあの作者！！マジで最悪じゃねえか！！」

「お前は人を苦しめて楽しむ奴なのか！！このドS作者！！」

政宗も春蘭もコレばかりは黒神はやりすぎだと叫びだす。

「なんであんな作者がいるんだ！？」

「今まで散々な連中と関わってきたが、コレまでにないほどに腹黒い作者は見た事がない……」

左之助も俺も黒神の腹黒さには呆れていた。

同時にどれだけドSかを思い知った、

「銀時さん……大丈夫かなあ？」

「大丈夫だよ、何たってあの銀さんだし……多分」

「多分って何！？今はつきりと聞こえたから！！」

銀時と心配するウツソに、こなたが心配しないように言い出す。だが最後の本音がかがみに聞こえて、かがみは盛大にツッコム。

「と言う訳で、坂田銀時……そのまま死ね！！」

「ちょっと待てエエエ!!!お前、それが黒神の馬鹿の出任せだと…」

銀時が何かを言い出すが、修羅スバルが両手を流れるように動かす
右手は上から下に、左手は下から上にと同時に動かす
そしてそんな両手に青いオーラが纏われていく。

「問答無用!!!機神双獣撃!!!」

修羅スバルが名を叫び両手を振るう
すると纏っていたオーラが龍の姿を模して銀時に襲う。

「ぎゃああああああああああああ!!!」

銀時は悲鳴を上げながらも交わす。

こっちのスバルとは違う戦いぶりに誰もが驚きだす。

「何だあれは!?!」

「ふうーん…中々おもしれえThe skillじゃねえか」

自分の弟子であるスバルとはまったく違う対術を使う修羅スバルに
驚く家康と、龍をイメージした技に興味深く見る政宗。

「…あれが、sibugakiさんが言っていた機神拳。なるほど、
確かに強力そうだな」

黒神もこっちのスバルとは違う強さを持った修羅スバルが果たして
銀時相手に何処まで戦えるか興味津々である。

「逃がしません!!!」

銀時からかなり離れた場所から修羅スバルが襲い掛かる。
そして何と、スバルほどじゃないがとてつもない速さで瞬間的に銀
時の前に移動した。

『！？』

これには銀時はもちろん、リリカル銀魂メンバーや『オタクガンダ
ム』も驚く。

何せ修羅スバルの使った瞬間移動は、こっちのスバルの十八番とも
言える魔法をも上回る機動力を誇る『刹那の瞬間移動』だからだ。

「刹那の瞬間移動だと!？」

「あの移動速度って……確かこのスバル・ナカジマが最も使う機
動力が優れた技じゃ!？」

桂も光翔竜も驚いていた。

しかし何故、光翔竜がスバルの『刹那の瞬間移動』を知っているか
と言うと、以前彼が入っている組織『竜の爪』でリーダーの真王竜
からスバルの強さを聞かされたのであった。

特に彼女の最大の武器は、その速さによって凄まじい機動力を發揮
する『刹那の瞬間移動』である事を。

「はあああ!！」

ガコーン!!

「ちい!！」

凄まじい速さで修羅スバルの渾身の拳が放たれる。

だが銀時は木刀を抜いて、そのまま抜刀して修羅スバルの攻撃を防

いだ。

「ふん、流石と言う所ですね……ならば!!」

修羅スバルはそのままバックして移動し、右手に気を込めて一気に放つ。

「機神拳奥義、機神・炎魔蒼天掌きじん・えんまそうてんしやう!!」

何と、その右手から蒼き炎が放たれて銀時を襲う。
しかも威力はオーバースランクは達成する上、銀時も避ける余裕はなく、

「何のオオオオオオオ!!」

ドカーン!!

何故かバットを構えるような体制に入り、そのまま打球を打つように修羅スバルの『炎魔蒼天掌えんまそうてんしやう』を打ち返す。
そしてそれが修羅スバルに向かうが、

「甘いですね!!」

素早く刹那の瞬間移動で交わしだし銀時の後ろに移動する。
そしてそのまま豪快な蹴りを放つ。

「危ねえ!!」

銀時は危機感を感じて体を回転させて交わしだす。
そしてそのまま銀時は攻撃するっと思ったら何故か修羅スバルから

遠ざける。

「逃がしません！！機神天地鳴動脚！！」
きしんてんちめいどうきやうく

さらに追撃するように、スバルの右足に青いオーラが纏われ、それを横一文字に振り払う。

青い衝撃波が銀時に襲い掛かってきた。

「嘘オオオオオオオ！！」

ドカアアアアア！！！！

「はにゃあああああああ！！」

直撃はしなかったが、銀時は吹き飛ばされてしまう。

そんな絶好のチャンスを修羅スバルは逃さない。

「逃さない！！機神拳奥義、機神八卦陣」
きしんはちげじん

修羅スバルが覇気を解き放つ。

彼女を中心に八方に丸い球体が姿を現し、其処から青き炎の龍が姿を現した。

コレをみた銀時は思わず、

「嘘オオオオオ！！！！！！」

その龍の数は八。

一斉に銀時に襲い掛かる。

体が宙に浮かれても銀時は強引に…

「死んで……たまるかよオオオオオ!!!」

木刀を豪快に連続に振り、8体の龍を斬って打ち消した。

コレには流石に修羅スバルも驚きだす。

何せ放った技は、自分の使う機神拳の中でも指よりの威力を誇るからだ。

「まさかあれを防ぐなんて、しかもあんな無茶な体勢から……なるほど、少なくとも私の所の坂田銀時よりは強いですね……ですが!!!」

すかさず『刹那の瞬間移動』を使い、刹那のごとくの速さで銀時に接近する。

「護りだけでは勝てませんよ!!!」

そういつてさらに追撃の拳を炸裂する。

銀時は素早く交わすが、修羅スバルの猛攻はさらに続く。

蹴り、殴りなど攻撃の豪雨とも言える容赦ない連続攻撃が炸裂し、銀時は交わし続けるしかなかった。

「はああ!!!百花繚殺!!!」

さらにスピードに乗って容赦なく銀時を襲いだす。

驚異的に繰り広げられる攻撃の嵐は、スバルの神速剣術に匹敵する速さである。

コレに対して銀時も木刀で振り続け、彼女の攻撃を防ぎ切る。銀時の護りが止まった瞬間だった。

「もらったアア!!!」

どかあああ!!

「がはあ!!」

銀時の腹に修羅スバルの剛拳が炸裂して、銀時は驚愕の表情をする。

『銀時（銀さん）』

「銀ちゃんが修羅のスッチーの攻撃を受けてしまったアル!!」

フェイト、スバル、ティアナの三人は悲鳴的な叫びを上げ、神楽はまさかの銀時が攻撃を受けてしまった事に驚いた。

「ハアアアアアアアアアアアアアア!!」

ドカドカドカドカ!!

「ゴフアラジ!!」

その後も容赦ない連続攻撃を修羅スバルは銀時に炸裂させる。1発1発が容赦なく銀時を襲いだし、血がチビチビと出血する。

容赦なく襲い掛かる連続攻撃を何度も何度も受けて、轟音が響きだす。

そして最後の1撃として……

「機神剛覇拳!!」

ドカーン!!

渾身の一撃が炸裂し、蒼い覇気を放った。その蒼い覇気が込められた衝撃波は銀時を吹き飛ばして壁に衝突すると大爆発する。

「銀時イイイイ!!」

「パパアアア!!」

「よ……万事屋が一方的にやられるなんて!!」

リンフォースとヴィヴィオは悲鳴を上げて、近藤は銀時の一方的に押されているなんて信じられなかった。これが修羅の力を持つ修羅スバルの強さ。その強さはまさにSSランクである。

「まさか、あの銀さんがこうも簡単に!?!」

ウツソにとっても信じられない光景である。

こなた、かがみ、光翔竜もウツソと同じである。

だが現在に修羅スバルに押されているように、銀時はポコポコにされてしまった。

これで勝負はあったと思いきや……

「あ痛てて……おいおい、やりてえ放題だなおい……」

と衝突によって爆発が起こった事による発生した煙が消えると、そこから頭から血が流れてちよつとポコポコになっている銀時の姿が現れた。

これにより、不愉快な表情をした修羅スバルが睨みだす。

「最後の機神剛掌きじんとうしようが決まる瞬間の前に、僅かに後ろに飛び込んだことでその衝撃を半減にさせましたか……流石に簡単に殺させてくれませんか？」

「いや、それヤバイでしょうが！……てか俺死んだらこの小説の主人公を誰が勤めれば良いんだア！？」

いくら修羅スバルが完全に殺す気で来ているとは言え、銀時は死にたくないなので護りに固めている。

「……にしても噂どおりの容赦ねえ攻撃だなあおい？これじゃあ、あつちの俺も苦労してるんだらうな」

「貴方も黒神の噂どおりの男ですね。あそこの腑抜けな坂田銀時も、貴方を見習うべきだと思いますが？」

「あつちの俺エエエエエエ！！何こんな小娘に舐められてんだアアアアア！！もうちょっとシャキツとしろやアアアアアアアアアアア
！！！！！！」

銀時が青ざめて、『リリカル銀魂 Strikers 蒼炎の龍』の所の自分に怒鳴りだす。
その声があつた聞くこえる事は出来ないが。

「……主人公の分際で情けないわね。あつたく話にならないわ！！」
「白夜叉と恐れられた武人の存在を一度見てみたいと思ったんだが、あつたたくの話にならん！！」

ゆりも春蘭も、銀時のあまりの押されっぷりに呆れていた。
あれが主人公の実力なのかと疑う中、

「ゆり、貴方は何にも分かっていないわね？」

「え？」

「春蘭、貴女もうちよつと人を見る眼になれるよう修行したほうが良いんじゃない？」

「華琳様！？」

突如、ネプテイーヌと華琳に何にも分かっていないような言い方をされた2人は啞然とする。

「あの天然パーマ、一件押されているように見えてんだが実際はそうじゃねエ」

「ええ、相手の攻撃を見極めているように反撃する機会をわざと見逃してあえて護りに入っている」

政宗と星には分かっていた。

修羅スバルは確かに驚異的な強さを持っているとしても、銀時は彼女の強さを調べるようにと見極めるように防いでいた。

もし本気になれば銀時は修羅スバルを一気に大打撃を与える事ができていた。

「確かにあの修羅の様な強さをもったスバルは強エ。攻撃力の高さ、技の切れ、速さは文字通り超一流でも小さい存在と思えるように圧倒的な武力を誇っている。だけどあの坂田銀時は、そんな相手でも攻撃もせずに相手に合わす様に守りを固めている」

零斗も銀時の方が一枚上であると高い評価する。

彼もまた、銀時の本当の強さを知る物であった。

「そして彼女の攻撃を食らってもなお、致命的な傷はおろかそんなに大きなダメージを食らっていない……見るだけじゃ戦いは判断できないのよ」

ネプティーンの言うとおり。

ただ見ているだけでは戦いの細かいところを見極める事はできない。

「でも、何でわざわざ見切る為とは言え、あんなにも護りに入っているんだ？あれじゃあ一方的にやられるだけだ！」

「それもそうね…銀時はそんな戦い方をしないはず。この小説の銀時だって…何か考えている様だけど？」

音無はどうして守りばかり入るのか気になり、ネプティーンも銀時がそんなまどろっこしい事はしないでいつもなら攻めまくるはず。コレには何かあるとしか言いようがない。

「あの天然パーマ、Defenseで固めて一気に反撃するような姑息な手を使う男じゃねえ。あえてそんな地味なFightをするには何か狙ってやがるな？」

「そうね…春蘭、ちゃんと見ておくのよ」

「は！」

政宗も華琳も、銀時が何か狙っている事は知っている。

そして春蘭も改めて銀時がどんな強い人物が見極めようとする。

「ふん、修羅か何かは知らんが…あんな小娘がギントキに叶うはずがなかるうに」

ギルガメッシュも一方的に押されている銀時に驚いたが、よくよく見れば銀時が修羅スバルに合わせている様にと、わざと護りに入っているのが見切った。

これは凜、セイバー、一方通行も一緒である。

「変だわ……銀時があんな守りを固めるような戦い方をするなんて……」

「ええ、ギントキらしくありません。まるであの者の力量を測るような……」

凜とセイバーは、彼は一体何を狙っているのかを不思議に思い出す。

「……あれが修羅の力を手にしたスバルの実力……確かに強い、じやが……！」

家康は修羅スバルの実力の高さに驚いている。

だがそれ以上に認めてはいけない強さであると確信する。それぞれの技の1つ1つが殺意を込めているからだ。

「あんなの、ワシがスバルに求めた強さじゃない！！人の命を軽々しく奪うような拳など、スバルが持つ力では……」

家康にとってはスバルに与えては行けない強さだと考える。

あそこのスバルは自分とところの弟子とはまったく別人とは頭の仲では分かっている。

しかしどうしても修羅スバルを見ると、あつちのスバルの面影を思いつく。

*

一方の修羅スバル自信も銀時らしくない戦い方に不思議に思った。こんなに守りを固めるなど彼らしくない。ましてや反撃するような気配を感じ取れない。

(まさかこの坂田銀時は、この世界の私の事を気にして……だとしたらずいぶんと舐められましたね)

自分などまったく相手しない銀時にますます許しがたい修羅スバルはさらに闘志を放ち、本気で倒す。

「攻撃しないで護り中心に固めるなんて、舐めるのも大概にしてもらいます!!!そんなんで貴方を殺しても気が抜けます!!!」

修羅スバルの怒鳴りに、銀時はまったく動揺しない。

それどころが平然とした表情で修羅スバルを見ていた。何かを疑うように。

「銀時、どうして反撃しないの!?!」

「しっかりとってお兄ちゃん!!!このままじゃ本当に殺されるよ!!!」

フエイトもティアアナもコレばかりは銀時が死んでしまう恐れがあると知る。

そして急いで援護に向かおうとするが、何故かスバルが立ちふさがって止める。

「『スバル!?!』」

「2人とも、御免……でも、邪魔だけはしないで!これは銀さんとあっちの私の戦いだから!」

「でもそれじゃあ、お兄ちゃんが……」

ティアナはこのままじゃ銀時がただじゃすまないと思って早く助けたい一心である。

フェイトも同じ気持ちである。
だがスバルは違った。

「銀さんは、ただ押されているんじゃないよ！」

「え、どう言うこと!？」

「きつと……試しているんだ、あっちの私の力量を測るために……どうしてそんな事をするのか分からないけど、銀さんにも考えがあつてこそかも知れない」

スバルだけは知っていた。

銀時が修羅スバルの力量を測るためにわざと攻めさせている事に。だが何でわざわざそんな事をするのかと言つと、銀時は何やら修羅スバルの戦い方が気になつて仕方がなかった。

こつちのスバルとは違って刀で戦うのではなく、己の体術のみで戦う事だけではない。

何かスバルにはあつて修羅スバルにはない欠けているものを感じ取っている。

「……1つ聞きてえんだが、てめエのその技…ギンガの『シユータイング・アーツ』のようじゃねえな」

「はい、名は『機神拳』。修羅世界で1、2を争う強さを誇る流派であり、この拳には死角が存在しません」

「修羅世界……いかにも物騒な世界からきやがった訳か？」

いかにもおつかない世界だと銀時は思う。

おそらく修羅スバルはそこで育てられたからここまでおつかない程に強い。

「私はミッドとは別の次元世界『修羅』で育てられました。そこでは常に戦いの中に身を投じている為この世界では戦いが絶えず、修羅の殆どが己の身を高める事を考えている為、その世界は弱肉強食が常識となっています」

「弱肉朝食…」

そんな世界が存在してた事に啞然と驚くフェイト。

銀時はただ黙って聞いているだけであった。

「私も修羅世界の常識を学んだ事で、無敵とも言われる『機神拳』を会得しました。生き残るこそが正義、弱き者が悪、修羅の世界じゃそれが当たり前なのですよ」

「そうかい」

修羅スバルの言った台詞はともスバルが言う台詞じゃない。だがそれでも銀時は平然と聞くのみだった。

「んじゃ、てめえは人の命つてもんがどれだけ重えか知ってるか？」

「は？」

「戦場じゃ確かに生き残るには時に人を殺める覚悟は必要だ…でなきゃこつちもやられるだろうしよオ…。けどその命を奪う事がどれだけ重えかは想像つかねえほど大きい。てめえはそんな事を考えた事はあんのか？」

銀時は命の重さについて修羅スバルに聞き出す。

すると修羅スバルの考えた答えは、銀時が思ったとおりであった。

「何を言っているのですか？人の命の重さなど、私には関係ありません。強ければ生き、弱ければ死ぬ。人の命の重さ以前に、弱いくせに立ち向かう相手の方が悪いじゃないですか？」

まさに修羅の戦士にふさわしい台詞に誰もが少し重い空気に包まれていく。

特に家康は人一倍厳しい表情になっている。

今の台詞は、残酷的な生活で命の重さを知らない邪悪なる魔王こと織田信長と一緒にいるからだ。

一方の銀時はそれが修羅スバルの本心だと考える。

「それに、何かを護るには相手を殺める事は常識の上。わざわざ命の重みなど戯言を……」

「よおく分かったわ」

「何？」

修羅スバルが言い出す途中で銀時ははつきりと一言で打ち切る。

銀時は呆れた目線で修羅スバルを見ていた。

「どおりで、身体能力も体術も力もおつかねえほどあんのに……そのどす黒い魂は醜くて弱え訳だ」

「なあ！！」

弱いとはつきりと言われて驚きだす修羅スバル。

すると銀時はスバルを見てはつきりと伝える。

「スバル、あつちのスバル……ちいとお仕置きしてくるわ」

「はい、やっちゃってください」

それはつまり、今すぐ修羅スバルを倒す銀時の撃退宣言。スバルもそれはしたほうが良いと言い出す。

「…ふん……命の重さなど、他人の事を考えている暇があれば」

修羅スバルは再び刹那の瞬間移動で銀時の目の前に移動し、拳を放とうとする。

「自分の事を心ば」

ドカアアアアアアアアア!

「い!!!??」

突如、銀時が素早く木刀を修羅スバルに向けて大きく振るう。そしてくの字曲がりの様な体となり、ついには大きく吹き飛ばされる。

「がはアアアアアア!!」

中に浮かべて大きく地面に叩きつけられる修羅スバル。その衝撃はあまりも大きく、痛々しいほどである。突如の出来事に、誰もが驚いた。

「さあ〜で、そろそろ万事屋銀ちゃんの大暴れショータイムの始まりだよオ? あつちの俺がふがいなエ分、てめエに教えてやんよ」

銀時は修羅スバルに木刀を修羅スバルに刺して向ける。そしてそのままゆっくりと木刀を居合いの様な構えをとる。

「命の重さを知らねエ、てめエの弱さをな」

鋭い視線で修羅スバルを見つめる。

一方の修羅スバルは一体何が起こったのかわからなかった。

(ば……馬鹿な、…一体何が起こったと言っただい!?…だが)

ようやく銀時が戦う気になった事はわかった。

修羅スバルも体制を立て直して構えだす。

「これで心おぎなく貴方を殺せます!!」

凄まじい勢いで銀時に剛拳を放つ。

銀時は素早く反応して交わしだす。

「まだまだア!!びゃっかりょうきつ百花繚殺」

さらに容赦なく拳と蹴りの連続攻撃が炸裂する。

それが豪雨のように銀時に向かって振ってくる。

だが銀時は、先ほどのようにそれを木刀で防ぐだけじゃなく、返り討ちにするように振り、少しずつダメージを与える。

徐々に痛みが伝わる修羅スバルだが、それでも気にせず銀時にもう攻撃を繰り返す。

そして

「んなちまちました攻撃が効くかよオオ!!」

ドカアア!!

「ぐあああ!!」

さらに木刀を素早く振り、スバルの神速のような剣太刀で修羅スバルに豪快な一撃を与える。

倒れはしなかったものの、修羅スバルはゆらりと体の体制を崩す。

「はいイイイイイ！次イイイイイ！」

追撃するように銀時は修羅スバルに飛び込み、追加太刀を与える。

さらにもう一太刀、またも一太刀、これでもかと容赦ない連続攻撃を炸裂させる。

(速い！！さっきまでとは比べ物にならない速さに、しかも一太刀一太刀が重い！！何なんだこれは！！?)

「あらよつと！！」

ドカア！！

「ぐああああああああああああああ！！」

フィニッシュをかけるように、突きだして修羅スバルに豪快な一撃を与える。

大きく吹き飛ばされた修羅スバルは何度も強く地面に叩きつかれ、そして壁に大きく衝突される。

「うはあ、やつぱアイツスゲエじゃんか！！」

「ああ、それにしてもおっかねえな」

左之助は銀時の強さに興奮して、大はしやぎする。

一方の京はここまでするかと思わず呆れている。

「さっきまでとは動きが全然違う!?!」

「あれが銀時の本当の力だね。修羅だろうが何だろうがどんな相手でも刀1本で斬る武人の魂!!」

ゆりも殺気とは別人と思わせるような銀時の圧倒的強さに驚き、ネプテューヌにいたってはあれが本当の銀時の強さと確信する。

「パパ、すごーい!!」

ヴィヴィオは銀時の活躍に大はしゃぎする。

何せさつきまで不利の状況から一気に大逆転したからだ。

「ヒュ〜（口笛） ……派手な反撃じゃねえか」

政宗も銀時の強さに感心して、とても予想以上に強い事であると確信する。

しかもあの様子じゃまだまだ本気を出していないように見える。

「銀の字め、はらはらさせおって。全てはあの蒼の字の…いや修羅・蒼の字の力量を測るためじゃったとは」

「やっぱりこうなったか」

源外もさつきまでの押されは銀時の演技だと確信し、黒神にいたっては結果はこんな感じになったと確信する。

その黒神の一言にプレシアは気になって聞き出す。

「やっぱりって？」

「今は言わないでおきますよ。いずれ銀時が言いますし」

黒神の言うとおり、プレシアはただこの戦いを見守るだけにした。

「な……何なんだこれは…さっきまでとは違う…!」

いきなりの銀時の猛攻撃をまともに食らった修羅スバルは、ゆらりゆらりと立ち上がる。

コレが白夜叉の実力なのかと修羅スバルは知った。

「おらどうした!?俺が憎いんだろ、だったら立てよ…!」

銀時は挑発するような発言で修羅スバルに言い出す。

「そんで、その醜い嫉妬を全部ぶつけて来いよ……一桁残さず叩き斬ってやりゃ…!」

「いい気になるなアアアアア!」

すると修羅スバルはこれまでにない程の覇気を最大限に放つ。

「これまでにない覇気量を……これはまずいかもれませんね」

「覇気?……何か知っている様だけど?」

「覇気とは、修羅が体内に宿している生命エネルギーであり、自身の流派を使用する際に使用する特殊強化法。つまり己の命を削って戦うのである諸刃の剣なんです」

黒神が説明すると、プレシアはとんでもない程に驚きだす。

命を削ってまでその分力に変えるなど、むやみに出来ない。

「だけど修羅の世界は何時戦いで死ぬか分からないから多少の寿命が縮むのはさほど問題じゃ無い為、修羅達は気にしてない様だ。また、覇気には魔力を打ち消す効果があるから、『AMF』以上に魔道士達の天敵のようだ」

すなわち、修羅は魔導士に負ける事は無い様子である。

その覇気を最大限に放つて事は膨大な生命エネルギーを使用する事である。

すると、修羅スバルの体から蒼い炎があふれ出て強大な力が漲ってくる。

それは修羅スバルがこの一撃に全てを賭け、銀時を殺す為に最強の技を放つ。

「これは貴様を殺す為に生み出した、最強の技だ！！修羅の名にかけて……貴様を殺す！！」

修羅スバルの両手から蒼い炎の覇気が包まれ、それは龍の形となる。

「機神拳最終秘奥義、機神・きじん・はきょくそつりゅうは覇極蒼龍波！！」

すると修羅スバルが両手の拳を大きく放ち、そこから超巨大な蒼炎の龍が放たれた。

それはただの龍砲ではない、全ての空気をも焼き尽くし触れる前でも草も焼き、そして水をも一瞬に蒸発する。

そしてどんな技でも飲み込み、威力を増す。

その威力は、修羅で例えるなら超絶はあり『機神蒼龍波』の数倍の威力を持つ。

全てを焼き尽くし、滅殺する対銀時様の修羅スバルの最強技が炸裂した。

これじゃいくら銀時でも無事じゃすまない……と思った瞬間だった。

「そいつがためエの最後の切り札か……じゃあ、思いっきり斬ってやりましようかアアアアアア！！！！」

何と、木刀をバットのようには振って蒼炎の龍にぶつける。だがさすが最強の技だけあって銀時も押される一方である。銀時の体も徐々に焼けてきた。

「無駄だ、この技は私の命を大幅削つてまで生み出した究極の蒼龍だ！ さつさと飲み込まれて消える！！」

「ぐううう……たしかに、さつきまでのちんけな技と比べ物にならねえほどに凄まじいって事はわあった……だが！！」

すると銀時の木刀にヒビがでる。

このままでは折れるのではないかと思うが、それ以上に『鬼神・覇極蒼龍波』に異変が起こる。

「こんなスゲエ技を得るためとは言え……」

何やら『鬼神・覇極蒼龍波』が押されているような気がするが、よく見ると銀時が強引に押ししているように見える。

これは修羅スバルにとっては信じられない事である。

ここの銀時は覇気を使えないのに対し、莫大な覇気を練つてまで放つた最強技が押されるなど信じがたい事である。

「自分の命も粗末に扱うんじゃないやエエエエ！！」

そして一気に木刀をありつた力の力で豪快に振ると、何と『鬼神・覇極蒼龍波』の口先から横一線に割れるように斬られてしまうのが分かった。

次々と続けて割れる中、ついには尾の先の所をも突破し、蒼炎の龍はまっ二つに斬られて消滅した。

「……………そんな、機神・霸極蒼龍波が……………敗れるなんて!!」

信じられない程驚く修羅スバル。

一方の銀時の木刀は完全に燃え尽きてしまい、刀身が消え去るよう
に柄だけが残った。

そして銀時は焼き折れた木刀を捨てて、溜息を吐いた。

「たくう……………120話以上もこの木刀で何とか乗り切ったつてのに、
どうすんだよ新しいの」

新しい銀時の木刀を手に入れるには、元の世界の『妖刀・星砕』を
手に入れるしかない。

だがしかし、今だに元の世界に戻る方法はないのであった。

コレ以上の戦闘続行は不能だが、それ以上に戦えないのが修羅スバ
ルである。

『機神・霸極蒼龍波』は修羅スバルの最強の技。

だが同時に、生命エネルギーである霸気を莫大に使った事により彼
女の体が悲鳴を上げて大きな疲労が襲ってきて拒絶反応を起こす。

「ぐう!!」

ドサア!!

そしてその代表が彼女を襲ってきて、修羅スバルは倒れた。

最強の技こそが最大の諸刃の剣。

『機神・霸極蒼龍波』が敗れて倒れてしまった瞬間、勝負は決ま
った。

「これが、白夜叉と恐れられた武人の強さ……」

銀時の圧倒的強さに思わず驚き出す光翔竜。

その強さは紛れもなく自分はおろが、真王竜をも凌駕するほどだと信じられない程にそう思う。

「銀時（銀さん）（お兄ちゃん）!!」

フェイト、スバル、ティアナの3人は銀時が勝った事に安心して叫び出す。

やっぱり信じた通り、銀時が負けるはずがなかったと。

「勝負あったか……勝者、坂田銀……」

「まだだアアア!!」

黒神の勝利宣言に、修羅スバルが強引に立ち上がる。

そのせいでかなりの激痛が彼女を襲うが、銀時にだけは負けたくない彼女の一心が彼女を動かしている。

「……てめエ、もうその辺にしとけよ……さっきの技でてめエの覇気とか言う命を削ってまで力を莫大に使っちゃったからまともに動かねエだろ?」

「黙れ!! ティアを誑かす貴様にだけは、絶対に負ける訳には行くものかアアア!!」

そして刹那の瞬間移動じゃないが凄まじいダッシュ力で銀時に突進してくる。

さっきより襲いが、銀時は動こうとはしない。そして……

「はああああ！！！」

ドカア！！

最後の力を振り絞った渾身の拳を放つ。

しかし、それが刹那のタイミングで銀時が左手で修羅スバルの腕を掴む。

彼女にとっては信じられない程であった。

「はあ〜……こんなおつかね工程にあそこの俺は敵対されてんのか？」

呆れ半分で銀時は溜息を吐いていた。

「お前、あつちのティアナの事を大事にしてんだろ？」

「そうだ！！ティアは私に大切な事を教えてくれた恩人だ！！それを貴様が……」

「立つたら、今ここで本編で関係なく命を無駄に扱っちゃったら……アイツどんだけ怒るんだろうな？」

「！？」

今、この場で無駄な命の消費をしてしまったらどれだけ彼女が悲しむかを……修羅スバルは分かっていたいなかった。

「覇気だか生命エネルギーだかしんねえけど……命を無駄に扱いその重さを知らねえってんなら」

そして銀時は柄だけしか残らなくなった木刀を捨てて、右手を強く

*

しばらくして、修羅スバルは目を覚ます。

隣には銀時が修羅スバルを見下ろして見つめていた。

「……………どうやら、貴方はあその坂田銀時より強い事が嫌と知りました。その強さは紛れもなく、超級…いや天級は行きます。覇気どころが魔力も持たない者がその領域まで達成するほどの実力を持つのは信じられませんか……………」

「そうかい……………んで何でお前が覇気とか言う生命エネルギーを使っちゃまうおっかねえ力を使うのかは聞かねえ……………けどこの最言っておくわ」

銀時はどうしても修羅スバルに伝えるべき事がある。

「スバル、てめエがどれだけ修羅の力で身体能力も力もアップしても俺には勝てなかった。それはどうしてか分かるか？」

「……………それは、貴方が私の所の銀時より強く、そして修羅王と双壁となる天級並の実力を持つ男だからです。轟級程度の私が勝てるはずが……………」

「馬鹿か！？全然違えよ」

「え？」

銀時が違うと言つと、修羅スバルは啞然とする。

「そんなんでお前がお前に負けたんなら、今頃俺はもっと痛い目に合ってたわ。けど俺はお前と戦つてこの程度の傷ですんだ……………なら、

どうしてこんなためエはあっさりと負けたんだ!？」

そんな単純な理由なら、銀時はもつと重症負って痛い目にあつた。しかし結構ダメージを受けたがそれでも、銀時から見ればこの程度で済んだ事である。

ならどうして銀時はこつも簡単に修羅スバルに勝つたのかを修羅スバルに聞き出す。

「答えは簡単だ……スバル！俺がお前より強いんじゃない……お前が俺等のスバルより弱えからだ!！」

「!?!？」

「……銀さん」

そう、銀時が修羅スバルに勝てたのは自分が単に修羅スバルより強いのではなく、修羅スバルがこつちのスバルより弱いからだ。

そして銀時はスバルに近づいて、スバルの腕を掴んで修羅スバルの所に近づいて歩く。

「こいつはためエとは違い、魔法よりも剣を極めて侍としての強さを手に入れる為にひたすら自分の志をも鍛え上げた!！年齢的にはお前と一緒にだが、こいつはある事に気づいて知ったからこそ、侍の領域に達成した!！」

「……まさか、それが」

「命の重さだ!！」

命の重さを知る事。

それはスバルにあつて修羅スバルにない強き魂である。

「……こいつは目の前で過去に何度も人の死を嫌と見てきた……そしてある事件でこいつは最も親しき仲間に敵対され、そして最も親し

き友を失った！」

それは、かつてスバルと同じ『だい第666まとうきかん魔闘機関』に勤めていた『まけんしちゆうし魔剣七勇士』の1人、アリマ・ヴァンミリオン。

そしてスバルの最大の親友であり、同時に同じ『タイプゼロ』の騎士の魂を持った『カリバン事件』を起こした魔剣士、アーサア・Kキンケ・ソルドウナイト。

銀時はスバルが背負え切れない程の宿命を成し遂げなければならぬ
いと言つのを何度も見てきた。

まだ15の少女とは思えないほどに、彼女は何度も修羅場を潜つて
強くなってきた。

「修羅の世界とかやらで、すでに弱肉強食の日常が当たり前つての
分かるが……てめエはそのせいで人の命の重さを知る機会を得られ
なかった訳だ。そして今のためエに、こいつの様に消え去った命を
背負う覚悟はあるか!？」

責めるような言葉を銀時は容赦なく言い出す。

しかしコレが彼なりの修羅スバルに伝えたい事である。
命を背負う事は、どれだけ重いのかを。

ましては彼女は人を殺めてきたのなら尚更重い。

しかし修羅スバルはそんな事はしなかった。

「俺の知っているスバルは、命の重さをどれだけ理解し……修羅の
闇を乗り越えてでも前に進む強く輝く魂を持っていりゃ」

だからこそ、命の重さどころがその価値をまったく知らない修羅ス
バルの命をどうでも言いと扱ふ暴行が許されなかった。

こつちのスバルの存在と魂を汚すからである。

「だから……命の重さを知らねえ今のためエじゃ、一生俺には勝てねエよ」

『『ヤバイ、こっちの銀時マジカッコいいんだけどオオオオ!!』』

と、凜とネプティー又は思わず叫び出す。

セイバーも銀時の強さに改めて尊敬以上の気持ちが出て見とれてしまい、それを見たギルガメッシュがこのままではヤバイと危機感を覚える。

「ふふ、中々決まって言うじゃない……政宗、春蘭、星、貴方達なら勝てると思う?」

「華琳様……情けない限りですが、あの男と戦えば返り討ちになります」

「木刀一本で妖術とも思える技を打ち破るあの男の剛剣は、私でも勝てる以前に本気ださせるか分かりませぬな」

華琳の質問に、春蘭と星は絶対に今の自分達じゃ勝てないと言い出す。

「今のアイツの実力は、もしかしたらあの生徒会長の豊臣秀吉や学園校長の織田信長にも匹敵するかもしんねえ。その上、全力を出し切ったアイツの強さは測りきれねえって訳だ」

政宗も今の自分でも銀時に勝てるかどうか分からない。
しかも見た限りではまだまだ全力を出してない様子である。

「……………」

家康にいたっては、銀時の戦いぶりやその思いに心を打たれて感心した。
命の重みと武士としての試み、そして木刀一本にも関わらず圧倒する強さ。

下手すれば忠勝をも凌駕する武人であると確信する。

「銀ちゃん、何とか勝ったアルけど……それ以上に修羅のスッチーに厳しいネ。いつもの銀ちゃんらしくないアルヨ」

「そう言えばそうですね……一体何ですか？」

神楽とエリオはどうしてここまで修羅スバルに厳しく言い出す銀時が不思議に思う。

「多分、銀時がスバルの事をどれだけ知っているかですよ」

とリインフォースは、銀時が修羅スバルに厳しい理由を言い出す。

「リインフォース、それどう言う意味アルか？」

「分かりやすく言えば、あそこのスバルは私達のスバルが持っているのを持っていないかもしれません」

そう、スバルにあるものを修羅スバルは持っていない。

それが理由だとリインフォースは言い出す。

「わっち等の所のスバルは、護るべき大切なものを護る為ならどんな相手からでも守り通す強き魂を持ってある。じゃがあそこのスバルはあまりにも心がなく、いくら実力が高くてその魂が脆い」

月詠も煙管を加えて理由を言い出す。

彼女から見ても、修羅スバルはスバルに比べて魂が脆い分スバルより弱い。

「修羅のスバル殿の実力だけなら、俺等のスバル殿と互角。だが、スバル殿は修羅のスバル殿とは違って侍の屈強なる魂を持った剣士。万事屋はそんな魂のない修羅のスバル殿に怒っていたんだ」

「俺達が知っているスバル殿は、侍としての心意気や強き剣士以前に…命がどれだけ重いか知っている。命を軽々しく見るスバル殿など、銀時や俺が認めたスバル殿ではない」

近藤も桂も真剣な表情で言い出す。

彼等も銀時ほどじゃないが、スバルがどんな思いで刀を持って侍としての魂を磨いてきたかを知っている。

そしてスバルは修羅スバルに近づいて……

「……もう1人の私」

スバルがしゃがみ出して、修羅スバルの頬を優しく触れる。

「奪った命を背負うのは何より重く、誰だって時には捨てて楽になりたい事だつてあるけど……でもそれを背負う事は命の重さがどれだけ重いかを知り、身体能力や魔力だけじゃなく、強き魂を持てるんだ」

「…強き魂……」

その強き魂が、人を本当に強くさせる。

どんな圧倒的強さを持った敵でも、その魂の輝きによって。

「もう1人の私の命は、もう1人の私のだけなんだよ。代替りの命

なんて存在しない……それに」

スバルは優しい笑顔で大切な事を伝える。

「大切なものを持っていてる事は、自分の為に生きるだけじゃなく大切なものの為にも生きるんだよ」

「!？」

修羅スバルの大切なもの、それはティアナを初めとした仲間。そして義兄のフォルカである。

自分の命が消える事は、すなわち死。

もしそうなればどれだけ彼等が悲しむか想像もしたくない。

「だから……もつと命を大切にしよう……」

「……ああ」

その言葉に修羅スバルは強く理解し、そして自分はまだまだ弱いと確信した。

銀時とスバルのように、魂が強い戦士になる為にも命の重さを知らなければならぬ。

特に銀時は、霸気なしでも天級に入る強者だから尚更彼を見習うべきだと思った。

「坂田銀時……いや、劍聖殿」

「は？」

修羅スバルは立ち上がり、銀時に声をかける。

しかし何故か劍聖呼ばわりしてまで。

「私は貴方の剣とその強き魂に心を打たれました。そして、覇気なしでも天級に達成する貴方の強さを知り、覇気ばかり頼っていれば強くなれない事も理解しました。これからは命の重さも学び、そして己自信を鍛え上げたいと思います」

「おお……そうかい。まあ、コレであっちの俺の事も認めてくれるならそれで……」

銀時は安心してホツとする。

しかし修羅スバルが信じられない言葉を口に出す。

「何を言っているのですか剣聖殿？私が認めた坂田銀時は貴方であって、あっちの坂田銀時は関係ありません」

「へ？」

コレには銀時も啞然とする。

無理もない、如何に同一人物とはいえこの銀時とあっちの銀時じゃ、修羅スバルから見れば別人としか見えないのであった。

「……てかどんだけあっちの俺は情けねエんだよオオオ！！！」

「あはははは」

「お兄ちゃん……可哀想」

どうにかして何とかしなければと銀時は考え、フェイトとティアナも強く同様する

とにかく修羅スバルに近づいて、あっちの銀時の事を聞こうとするが……

「隙ありイイイイ！！！」

ドカア！！

「あんぎゃああー！！」

「きゃああー！！」

突如、黒神が何処からか飛び込んできて銀時を修羅スバルに向けて蹴飛ばし、2人を吹き飛ばす。

「銀時！？」

これには思わずフェイトも叫び出す。

だが目の前の光景を見て、思わず固まってしまう。

フェイトだけではなく、この光景は誰もが信じられない驚愕する。

その光景とは、銀時が修羅スバルを押田押しているような体制から2人の唇が重なっている事である。

これには修羅スバルも顔を真っ赤にして動揺を隠せなかった。

「ぎゃはああああああああああああああああ！！！！！！／／／またこのパターン！？てか待って、これワザとじゃないから！！黒神に無理やりイイ！！！！／／／」

すぐに修羅スバルから離れる。

このままでは殺されると思ったその時だった。

「……………／／／」

修羅スバルは顔を真っ赤に染めて徐々に胸がときめく鼓動を大きくさせる。

自分は今、何をされたのかを信じられない程に驚いていたからだ。

「わ……………私ごときが……………剣聖殿と……………せせせせせせ接吻をお!? / / /」

「え……………何この予想外な展開? てかあの……………」

ボカーン!!

「あうう! / / /」

ドサア!

頭から噴火したような煙が浮き上がって、そのまま修羅スバルは倒れてしまった。

「おいイイイイイイイイ!! 何これ!? 聞いてないよこの展開イ!! てかこれ良いの!? s i b u g a k i さんの許可もらったの!?!」

「はい、許可をもらいましたので安心してください それよりも……………」

黒神は黒い笑顔で銀時を見つめる。

「いやあくちやった、やくちやった……………他の読者のキャラとキスしちゃったあ 女の嫉妬が爆発するう」

そう、コレが黒神の狙いであつた。

銀時が他人の女とキスした事により、銀時が他の女からとてつもない嫉妬攻撃を食らってボコボコされる展開であつた。

黒神はフェイト達から銀時がどれだけボコボコにされるかワクワク

エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ
エエエエエエエエ！！？？」

7人の怒りが大爆発して、黒神はポコポコにされ続けて断末魔の叫びを放ち、銀時にいたっては巻き込まれてしまった。

コレにはウツソは『黒神さああああんん！！』と青ざめて叫び、こなたにいたっては青ざめて震えていて、一方通行は『馬鹿だ、アイツァ』と呆れている。

そして他のメンバーも黒神の自業自得と哀れみする。

ちなみにスバルは突然の出来事に、思わず啞然と固まってしまった。

一方の源外とスカリエッティは大爆笑して大暴れしていた。

プレシアにいたっては、最初の銀時と修羅スバルの接吻からヴィヴィオの両目を塞いで隠し出し、それ以上にこの光景を尚更見せるわけには行かなかった。

だが、これはあくまで一回戦の一部であり、大会はまだまだ続きだす。

銀八
「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!!!』』

銀八

「へえい、銀八先生コーナーを始めたいと思います。今日のアシスタントもゲストにやらせてもらいます。今回のアシスタントはこの人でえす」

と銀八がアシスタント紹介すると、その男は現れた。

政宗

「Ha、今回は独眼竜・伊達政宗がassistantするぜ!!
……you see!?!」

と、『恋姫†BASARA学園』の主役の1人及びゲストと呼ばれた伊達政宗が現れた。

銀八

「いやあ、わざわざ有難うございますねえ政宗君……黒神は映画見たよ?メツチャ迫力あつて華琳が嫉妬するぐらいに面白かつたし」

政宗

「ああ、何かアイツそう言うの気にしなくなった様だぜ?」

銀八

「ええ!?!?どうして……」

政宗の予想外な華琳に対する一言に銀八は啞然と驚く。

政宗

「何だっけ……『真・恋姫†無双〜乙女対戦 三国志演義〜』だっ

「けか？そう言う『恋姫†無双』シリーズのアーケードゲームが出るらしいぜ？」

銀八

「マジで!？」

政宗

「それを聞いたら、アイツ相当に喜んでたなあ……恋姫シリーズのNew Partyが始まるからってな」

まさか恋姫シリーズもBASARAシリーズと同じ新しいゲームが登場する事に意外に驚く。

そしてそれで華琳の映画に対する嫉妬が消え去ったのだ。

うまくすれば恋姫シリーズの映画化も出るかもしれないと。

銀八

「まあ、ともあれ質問するぞお」

政宗

「OK!!まずはペンネーム『私にいい考えがある』さんからの質問だ『私に(以下略)』

「今回はこの質問です」

なのはとフェイトに質問

Q: 酔っぱらった銀さんに押し倒されました。もしもそんなことになったらどうします？

はやてに質問

Q: 私の所の蒼星石と霊夢にどんなコスプレをさせたいですか？

エリオに質問

Q：なんかキャラ口が怖くなってきていますが、屁怒紹さんとキャラ口、そしてフランドール・スカーレットの三つの内の人物が怖いですか？

『……Ha、何だこの質問は？』

銀八

「『リリカル銀魂 Strikers』攘夷戦争』じゃこつちが当たり前だ…んで答えは？」

なのは・フェイト

『その隙に……ふふふ』』

とてつもなく不気味な笑顔になるフェイトとなのは。
コレには銀八も政宗も青ざめる。

政宗

「何か、これ以上は聞かねえほうが良いみてえだ……んではやての方は？」

はやて

「もちろん、スクール水着で猫耳メイド！！後オ、魔法少女系なプリキューな衣装にい……」

政宗

「何この男顔負けのセクハラ妄想は！？つつかどんだけあるんだよ！！！」

と政宗は青ざめてツッコム。
最後にエリオの質問はと言つと……

エリオ

「し……しいて言えば、屁怒紹さん……多分」

屁怒紹と答えるが、キャロのほうもフランドールの2人も怒らせれば怖いとエリオは青ざめる。

銀八

「と言う訳で『私にいい考えがある』さん、廊下に立っていないさい。次イ、ペンネーム『ケン』さん『質問です。』

統夜「こつちのはやてはグラマーで髪が背中辺りまで伸びており大人っぽくなっています。リリカル銀魂のはやてと貧乳党の皆さんはどう思われますか？」

遊輔「こつちのなのはの攻撃パターンが近接攻撃も可能になりオーララウンダーになった。リリカル銀魂のなのははどう思う？」

『「

政宗

「貧乳堂って……」

これは胸のない女性に対する暴言だと政宗は青ざめる。
すると質問の答えが聞き出す。

はやて

「おー、コレは凄く大人の美女って感じで良いわ…… よっしや、私も髪伸ばしたるー!!」

キャロ・ヴィータ・九兵衛・アギド・セイン・オットー

『『マジでムカつく!!』』

と答えるはやてと貧乳堂。

ちなみに神楽の場合は、二年後の姿があるので別に答えないようにする。

なのは

「すごおい。私も参考して棒術を習おうかなあ?」

となのほも賛成して答えだす。

銀八

「と言う訳で『ケン』さん、廊下に立っっていないさい」

政宗

「Ha、次イ…ペンネーム『エターナル』さん『アーチャー』それはさておき、質問だ。『なのは組に質問だ。次の内に乗ってみたい機体はどれだ?」

1 . ダブルオーライザー

2 . デビルガンダム

3 . デストロイガンダム

『『『

なのは

「1で!!2と3はいやあ!!」

主役っぽい1のガンダムを選択するのは。

2と3はなんとなく悪魔っぽい。

政宗

「なんとなく理由が分かる」

銀八

「だな。と言う訳で『エターナル』さん、廊下に立っていないさい…
んで次イ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん」

キャラに質問です。もしもエリオがキャラの見ている前で神楽や月
詠にキスシーンを見てしまったらどのような殺害現場にしたいです
か？

狸女はやてに質問です。みんなから『狸女』って呼ばれていつその事狸耳
と狸尻尾をつけて『狸女』って認めちゃえばいいんじゃないでしょ
うか？」

政宗

「てか何だよこの最初の質問!?明らかに人の怒りをくすぐるよう
な質問じゃねえか!!」

銀八

「『正宗の胃袋』さんはこう言う質問をして……」

ギイイイインン!!

と突如、背後からチーンソーが聞こえる轟音が響きだす。

2人は青ざめて振り向くと、そこには『雷斬』を両手に持っていて
エイソンのキャラがいた。

銀八

「~~~~~!!!!？」

政宗

「……………え、何これ？」

銀八は青ざめて大量の汗を流し、政宗は啞然とする。

キャラ

「チヤイナアアア、小娘エエエ!!天誅ウウウウウウウウウウ
ウウウウウウウ!!!!」

エイソンの眼は今、銀八と政宗が神楽と月詠にしか見えていない。
怒りのあまり狂ってしまったからだ。
そして怒りの『雷斬』が炸裂して2人を襲い掛かる。

政宗

「Nooooooooooooo!!!」

銀八

「逃げろオオオオオオオオオオオ!!!」

2人は青ざめて必死に逃げ出す。

何度もしつこく追いかけても、殺されたくない一心で逃げるのであった。

*

しばらくして エイソンの姿は見えなくなった。
2人は息を荒くしてでも立ち上がる。

政宗

「つてえ!!何だよあれ!? Chara Collapseにも程あんだろ!!」

銀八

「ああ、マジで殺されると思った……んで次の質問」

はやて

「そんなん嫌やあ~~~~!!」

はやては涙を流して答えだす。
まあ予想はしていたが…

銀八

「と言う訳で『正宗の胃袋』さん、これからも本名をちゃんと覚えていきますのでご安心を」

政宗

「次はペンネーム『Minosawa』さんからだ」

京

「OK!まずは…キャラちゃんに質問『もしも…突然5、6歳成長したらまず何をしますか?』何だこれ?」

庵

「次は…神楽、ザフィーラ、アルフ、ギンガに質問、『KOFのキャラクターの中で戦ってみたいキャラはいますか?』作者…なんでこいつら限定だ?」

Minosawa

「ああ…こいつら素手で戦っているからいい勝負になりそうだから…」

京

「なるほど…」

Minosawa

「それじゃ!また質問送りま〜す!」

キャラ

「もちろん、神楽と月詠お邪魔虫共を排除してエリオ君とオ」

政宗

「黒iiiiiiiiiiiiん!!!お前は人のCharacter Collapseを楽しむ悪趣味をもってるのかアアアア!!!」

流石にやりすぎると、政宗は青ざめて叫びだしてツッコム。

神楽

「私、アテナと戦いたいアル。サイコパワーってマジすごいネ!!!」

ザフィーラ

・・・アア疲レタゼ、ホントハアトヒトツアルンダガ、ソイツハ
マタ今度ニスルゼ、アバヨ。」

『……………』

コレにはだんまりとなる2人組み。

そして後ろから伝わる強い殺気が徐々に大きくなっているのが嫌と
感じる中、振り向く事も無く」

銀八

「怖いのでこの質問は却下!!」『キサラク』さあん!!キャ口攻め
も控えめにイイイ!!!! (青ざめ)」

政宗

「この質問はいつもこんなんばつかかよ……………じゃあ最後の質問だ。
ペンネーム『ウツソ・エヴィン』さん?今話題の四天王編で出て
きた「まんびらびらびらこ」「さんは出てくるんでしょうか?」
シヤクテイ」

?銀時さまは最近ジャンプを読んでないので禁断症状とか出ていら
れないのでしょうか? (たま)

?最近銀時さまが大ファンの結野アナが見当たらないんですがお亡
くなりになられたんですか? (たま) 『』

銀八

「ずばり答えます……………黒神の考えだと、読者の予想外な展開で登場
させる可能性があります。後、銀さんのジャンプのほうですが……………
何か源外が開発した機械からくりで大丈夫のようです」

源外

「その機械からくりがこの、『ジャンプ移動装置』じゃー!!」

と突如、源外が登場してなにやらボックスの様な装置を持って現れた。

源外

「この『ジャンプ移動装置』にあるコイン入れに、210円入れると…」

チャリーン!

すると、ボックスの箱が突如大きく開きだすと、何とジャンプが出てきた。

源外

「このように、かぶき町のどこかの店から金と引き換えに最新ジャンプが出てくる!! 材料はミッドチルダ産の特殊魔石を元に作られるからこつも簡単に完成した!!」

政宗

「こいつはスゲエ Machine じゃねえか。長宗我部や真桜が見たら凄く興味深く見るだろうな」

異世界にある物体を転送装置させる機械を作る源外に感心する政宗。おそらく技術力なら元親や真桜より上であろう。

銀八

「最後の質問は結野アナは外道丸より出番が少ないのでまだ出番は先だと思えます。ちなみにちゃんと生きています。と言う訳で『ウツソ・エヴィン』さん、廊下に立っていなさい。以上持ちまして今日の質問コーナー終了。どうでした政宗君」

政宗

「個性的ってより怖え質問ばっかだった」

銀八

「だろうね、次回もゲストをアシスタントさせますので」

政宗

「楽しみに待ってな… I will see again!!」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします。

第二百二十四訓：ただ強いだけでは真の強さは手に入らない（後書き）

修羅スバル

「……………わ……………私が剣聖殿と……………せ……………接吻などと……………！！！！／／／」

黒神

「あーあ、やつちゃったよねえ。まあ s i b u g a k i さんの許可はもらっているし。何より修羅スバルもこっちの銀時を認めたのであればあっちの銀時を認めたのと一緒だ……………」

修羅スバル

「剣聖殿とただの女たらしを一緒にするなアアアア……………！！！！／／／（怒）」

ドカーン！！

黒神

「あんぎゃああああああああ！！！！」

突如放たれた蒼炎の龍が、黒神を焼き尽くすのであった。

黒神、哀れ。

ヴィヴィオ

「次回「混沌だらけのイベントは素晴らしい」テイクオフ」

第二百二十五訓・混沌だらけのイベントは素晴らしい(前書き)

ここ最近、スクーリングが続いてたのでしばらく最新できなかったんです。

遅れてマジで申し訳ございませんでした。

それでは始めたいと思います。

黒神

「『リリカル銀魂strickers』始まります」

第二百二十五訓：混沌だらけのイベントは素晴らしい

「あ痛てて……！！！」

全体包帯まみれの銀時は今、シャマルの治療魔法を受けている。

銀時に一体何があったのか不思議がるシャマルだが、フェイト達はあえて言わないでおく。

そして治療が終えると、シャマルは覇気を大量に使った修羅スバルの治療も行っ。

だが彼女の場合は生命エネルギーを大量に消費しているので銀時以上に重傷である。

そこで一時機動六課の保険所、またの名を『シャマル城』に向かうのであった。

「……ああ、マジで死ぬかと思ったあ」

「大丈夫ですか、銀さん？」

「銀時い……」

スバルとフェイトは心配そうに銀時に言い出す。

実際、銀時は黒神のどす黒い活動に巻き込まれて重傷を追ってしまったのだ。

「ああ、フェイト様が他人をあそこまで心配するなんて……羨ましいよ銀さん！！！」

「言ってる場合か！！！」

フェイトに心配されてる銀時を強く羨ましがる光翔竜に容赦ないツッコミを炸裂させるかがみ。

「銀時、御免なさい」

「私達、怒り任せにお兄ちゃんまで……」

「本当にゴメンね……」

フェイト、ティアナ、リインフォースは先ほど銀時を巻き込んでしまった事に謝罪している。

銀時が修羅スバルとキスした事は大目に見るようだ。

「ああ良いつて良いつて……黒神の大会に無理矢理参加された時点で覚悟はしてたし……何よりお前達がわざとじゃねえって事は知ってるしよオ」

『『銀時（お兄ちゃん）……／／／』』

銀時のその一言に嬉しがる3人。

銀時もまた、こう言うのは慣れてしまい簡単に許してしまうのであった。

「ぶー、銀時に優しくするんだつたら僕にも優しくしたつていいじゃないかい」

『『お前のは当然の報いだアアアア……！！！！』』

青筋を浮かべて怒鳴りだすフェイト、ティアナ、リインフォースの3人。

黒神は体中包帯まみれとなっていて、今回ばかりはやりすぎたと反省している。

「とまあ、こんな感じで1ターン目が進みました。なお、『チーム・リリカル銀魂』の坂田銀時が修羅スバルに勝った事により、ポーナ

スとして10マス進みます」

「おっしゃあ！！行くぞためエ等ア！！」

『うん（はい）！！』

銀時が気合入れて進みだすと、フェイト、スバル、ティアナの3人も後から続く。

リインフォースは『何で私銀時と一緒にのチームになれないのオ？（涙）』と悔しがり、『クイーン』の元に戻る。

「ようやく我等の番か……セイバー、ここででかいのを頼む！！」

「ええ……サーヴァント・セイバー！！参ります！！」

とセイバーがスイッチを押す。

するとルーレットが回りだし数秒後にピタッと止まる。

出た目は『4』である。

とにかく4マス進むと……

「げエ、ここでまたアペナルティマスかよ！！」

またもやペナルティマスに止まった事に嫌な表情をする一方通行。

他の3人も同じであった。

そしてこのままモニターから内容が現れる。

《恐怖に染まった夏の麻婆祭り》

『は？』

コレもまた、訳がわからない内容である。

すると、突如セイバーの顔面に麻婆豆腐が飛んできてかけられた。

ドゥーエはルーレットのボタンを握りだす。
だがクアットロとノーヴェの2人はどうしても気になる事があった。
それは、先ほどゴリラとキスされてゴリラに愛らしく抱きかかえられて
いる白目で気絶してるトーレであった。
彼女は乙女の大切なファーストキスをゴリラに奪われた事で女としての
幸せがぶち壊されてしまったのだ。

「ドゥーエお姉さまア、トーレお姉さまはどうしますウ？」
「可愛そうだけど、私達が生き残るにはそれぐらいの覚悟を持たな
きゃいけないわー!!」

トーレの事をかまっている余裕はもう無いドゥーエは、絶対にシヤ
マパイの恐怖から裂けたい一心で心を鬼にする。
そしてスイッチを押すと、ルーレットが回りだす。

「頼む、良い数字来てくれ!!」

ノーヴェは両手をつなぎながら念を込めて願う。
そしてその願いが届いたのか、出た目は何と10である。

「おーっと、ここで再び10が出た『チーム・ナンバーズ』!!」
「しかも、その先はペナルティマスではない!!」

黒神とスカリエッティが熱く解説する。

これはある意味奇跡に近い存在である。
出た目が連続で最高数値であり、しかも止まる先がペナルティマス
じゃない事など恵まれた運である。

だがしかし、彼女が止まったマスは自分の代わりに相手が痛い目に
合う『ハプニングマス』であった。

『げええええ!! 最悪なマスだアアア!!!』』

誰もが最悪なマスに止まったと思う。

そしてモニターに映し出された内容は……

《霸王少女に鬼辛麻婆豆腐が!! 『チーム・キングドラゴン』 50
マス進む》

「なあ!!?!?」

ここで自分にあの『鬼辛麻婆豆腐』が襲ってくる事に恐怖する華琳。そして彼女はおろが誰もが気づかない瞬間に、華琳の顔面に『鬼辛麻婆豆腐』がかけられる。

「辛アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアア!?!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

鬼のような辛さに華琳は口から天に向けて炎を吐き、そのまま凄まじい勢いで走り出す。

「華琳様アアアアアアアアア!!!」

「てかおい待てよ!!」

「政宗殿、我々も向かいますようぞ!!」

華琳の暴走に、春蘭、星、政宗の順に後から追いかける。

そして50マス進むと、そこには大量の水をゴクゴクと飲んでいる華琳がいた。

「ヒイ、ヒイ……この私にここまで深手の傷を追い込むとは……」
「己エエエエエ！黒神、よくも華琳様にこの様な仕打ちをオオオオオオオオオ！！！」

鱈子唇となった華琳は相当な痛手を受けてしまい、春蘭にいたっては怒りのあまり怒気を放っている。

そしてこの大会が終わったら絶対黒神をぶっ飛ばす事を決意する。そんな光景を頷いて、こなたはニヤニヤと笑う。

「いやあ、さすが黒神。名前が黒の神だけあってDSの神様って感じだよ」

「んな神様は絶対に存在しないでほしい！！」

もしそんな事すれば世界中がDSだらけになると、光翔竜は青ざめて恐れる。

「じゃあ、次私行くね ポチっと」

こなたがスイッチを押すとルーレットが回る。

そして止まった針は『2』である。

2マス進むと、そこはハプニングマスであった。

そしてモニターから内容が現れた。

《近藤勲、ツバキ号の肩のボタンを押す》

すると、突如、『真撰組』の前に『ぶるらじ』に出てくるツバキ・ヤヨイにそっくりな機械が現れた。

「のああ!!これはあ!!」

「ツバキ、『ぶるらじ』に出てくるツバキにそっくり!!」

近藤もルーテシアも興奮し、まさかここで本当に『ぶるらじ』のキヤラが登場した事に興奮する。

「と言うより、何で『ぶるらじ』ネタ!?!と言うより何でこの作者は無駄にブレイブルーネタを披露するの!?!」

「山崎さん……気にしたらキリがありませんよ……」

山崎がツッコミまくる中でデイエチが苦笑して彼の肩を掴む。

「おお、そう言えば確かツバキ殿からくりの機械の肩にあるボタンを押せて言ってたなあ……もしかコレって助っ人!?!」

「マジですか!?!」

近藤が、このツバキは助っ人として味方になってくれると思うと、山崎は思わず笑って喜びだす。

「だとしたら、かなり心強いですよ!!」

「味方、多いほうが頼もしい」

デイエチもルーテシアもそれは頼もしい限りと喜びだす。そして近藤は肩のボタンを押せばこのツバキは味方としてくれると期待満々と、さっそくボタンを押す。

ドゥーエとクアットロは近藤達が吹き飛ばされ、大パニックになっていた。

しかしクアットロはニヤニヤと笑っていた。

「まあ、と言う訳で『チーム・真撰組』は爆発に巻き込まれ2回休みです」

「何ておっかねえ罰ゲームを用意してんだためエは!!!」

「お前は本当に最悪アルヨ!!!後で覚悟するとヨロシ!!!」

黒神は顔色も変えずに言い出すと、左之助も神楽もそんな黒神に怒鳴りだすのであった。

「御免なさい、御免なさい!!!」

まさか二度も『真撰組』に被害を与えた事に信じられないかがみは青ざめて何度も謝罪する。

「まあまあ、かがみん謝つてしょうがないよオ。コレはもとわと言えは『真撰組』が異常なまでに運が悪かっただけで……」

「あんたも謝罪せんかアアア!!!」

ドカア!!!

「じふえ!!!」

無邪気で反省の色もないあなたにドロップキックを炸裂させるかのみであった。

「うむ、次は我々の番ですなあ」

「ええ、これ以上痛い目に合うのはこりこりだわ……今度は良い数字を出してみせるわ」

星の言葉に、華琳は霸王に名に恥じない運の良さを発揮させる事を誓いだす。

そして華琳はスイッチを押すと、ルーレットが回りだす。出た目は3であった。

「まあこの際良いわ。今の所トップですし」

華琳はそう言うと、『キングドラゴン』は3マス進む。

そして止まったマスはまたもやハプニングマス。

モニターから出た内容はこのとおりであった。

《かぶれキャラ対決》

コレもまた意味が分からない内容であった。

少なくとも『キングドラゴン』に対する事じゃない事はわかるが、一体何の事かはわからない。

すると……

「ふふふ、ようやく僕の出番が来たようだ……」

「!?!」

聞き覚えのある声に、桂は振り向く。

そこには、コスロリ衣装を身に付けたツインヘアの九兵衛がいた。

「貴様は!?!」

「出番無しから30話目、きつかけは『狂乱編』で貴様に散々と出番を撮られた屈辱感……だが……貴様の活躍は、ここで断ち切る！」

そう言つて、九兵衛は突如ゴスロリを脱ぎ捨てる。

そして彼女の姿は、白いセーラー服の身にスカートでニーソックスを両足につけている。

「この、美少女侍……セーラー九ちゃんが好きにさせない！」

と両手にはそれぞれスティックと刀を持っている九兵衛。何故かセーラームンの衣装を身に付けていた。

ドカアアア！！

『『キヤラ崩壊しすぎじゃボケエエエ！！』』

「ぎゃあああああああ……！！」

銀時、ティアナ、神楽、月詠の4人が盛大な飛び蹴りを炸裂させて九兵衛を吹き飛ばす。

「久しぶりに出てきたと思いきや、何キヤラ崩壊してんだためエは……！！」

「姉御に何て説明すりゃ良いアルか！！てかなんで『セーラームーン』アルカア！？」

銀時と神楽は容赦なく九兵衛に怒鳴りだしてツツコム。

「ふふふ、30話ぶりの出番なんだ……そう簡単にはくたばらない。だって、僕は可愛いもん！」

「いや、おかしいじゃろ！！以前の主の面影が全然見えぬほど代わりすぎじゃー！！」

「ふ、安心しろ月詠……僕っ子美少女こと柳生九兵衛が来たからには読者の恋心は掴んだも当然さ」

「何なんじゃと言うんだこいつは！？今自分の事を美少女とかいつたぞ！！つうかこの小説のキャラ崩壊はここまでするか！？」

もはや九兵衛の存在はおかしくなっていく一方である。
そんな中、突如空からレーザー砲が降ってきた。

ドカアアアアアアアアアアアン！！

「んぎゃああああああああああああああああ！！」
九兵衛はそれに飲み込まれて、黒こげとなってしまった。

「何だぁ？空からレーザーが振ってきたぞ！？」
「てかなんでレーザー……てあれは！？」

銀時とティアナが空を見上げると、そこには思わぬところである人物がいた。
長い銀髪、右目は赤色で左目の方には黒い眼帯をしている小柄な女性。

だが周りには特殊な機甲を身に付けていて空も飛んでいて、巨大な大砲を持っている。
それはすなわち、『IS』に出てくる人物ことラウラ・ボーデヴィツヒであった。

と思っただら

「ぶはははははははははははは！抜け駆けはさせないぞ貧兵衛！！」
『お前かよ！！』

そう、出てきたのはラウラそっくりの人物ことチンクであつた。

「今、一瞬ラウラが出てきたと思つた……」

と一方通行も思つたのである。

何せなんか違和感ないほど似ていたから。

「つつか何でお前も『IS』のラウラのコスプレ何だ！？てかなんとラウラが使用してるISをも持ってやがんだ！？」

「おかしいでしょ！？まさか盗んだんじゃないでしょうね！！」

銀時とティアナがツッコミまくる中、誇らしげにチンクは答えた。

「こんな事もあるつかと、その貧兵衛が怪しげなコスプレ練習をこつそり見たから何か企んでると思ひ、この日の為にドクターと源外にラウラが使用しているIS『シュヴァルツェア・レーゲン』にそっくりなIS『シュヴァルツェア・デトネイター』を作つてもらつたのだ！！」

「コスプレの為にIS作るの頼んだのオオオオオ！？」

いくらなんでもありえないとティアナが叫びだす。

確かに本物の『シュヴァルツェア・レーゲン』に比べれば、少し赤っぽい。

そして胴体に無数のナイフがついているのでチンクのISだと言うことは分かつた。

「つうか糞ジジイ！！IS作れる技術をもつてんなら元の世界に戻る装置をさっさと作れやポケエ！！」

「いやあ、何かコスプレ対決してもんを見てみたかったもんで……ついサボつてもうた」

「最悪なんですけどオオオオオオオオ！？」

これまで以上に大きなツツコミを炸裂する銀時。

こんな調子で自分達が元の世界に戻る可能性は遠ざかってしまったのであった。

「……何か、銀さんが可愛そう……」

ウツソもコレばかりは泣きそうな表情で銀時を哀れ見る。

「と言う訳だ、桂よ！！どっちがコスプレクールポケキャラか、勝負しようではないか！！そして、このチンク・ボーデヴィツヒが勝つ！！」

「ええ！？何その勝負！？てか自分からクールポケとか言っちゃったよこの子！？しかも名前変わってるし！？」

ヴァイスは青ざめてチンクにツツコム。

だがそんな彼のツツコミが無視されるように……

「ふふふ、面白い。久しぶりに血が騒ぐ………受けて立とうではないか！！」

と桂も着物を脱ぎ捨てると、漆黒のロングコートに黒いロングコートを身にまとい、これを素肌の上から着用して、胸部は露出して、銀色の肩当を当てている。

そして右手には長刀を握っているなど、『FF7』のセフィロスのコスプレをした桂が現れた。

「て、何対抗しようとしてんだよ桂の旦那あ!!」

「桂ではない、カツウロスだ!!」

「意味わかんねえよ!!何で名前もわざわざミックスしてんだあ!!」

ヴァイスは怒鳴ってツツコムも、桂…ではなくカツウロスは聞き流す。

2人の対決が始まる中、

「てちよつと待てエエエ!!」

そこに、セーラー九ちゃんが黒焦げの姿となってまで復活した。

「貴様等にこれ以上出番は渡さない!!このセーラー九ちゃんが次の長編シリアスの主役となってみせる!!」

「ふん、胸のない貴様に何が出来ると言う!!」

「貴様に言われたくないわアアア!!」

喧嘩を売るような発言をするチンクに怒鳴るセーラー九ちゃん。

「面白い、1人はセフィロス、1人はラウラ、そして1人はセーラームーン、どっちが真のコスプレクルボケキャラにふさわしいか

……勝負と行こうではないか!!」

「望むどころじゃアア!!」

「絶対に勝アアアアア!!」

カツウロスは長刀を両手に持って構え、チンクはビームサーベルら

「いやあ、カメラ持ってきてくりや良かったなあ!!」

「お前等マジで最悪だアアア!!」

鼻血をたらして大喜びするウツソとこなた。

そんな2人にマジで最悪と怒鳴りだすかがみ。

「これ、ボスが見たらどうなるんだろうなあ？」

光翔竜にいたってはコレは真王竜は鼻血をたらすか、もしくはセクハラしたはやてを殺しに行くか、どうなるか分からなかった。

「ふっふっふ、あの娘……中々やるな。今の容赦ないセクハラを参考にしてマイティ真拳の新たな奥義を……」

『参考せんで良い!!』』

さっきのスバルの下着を見て鼻血をたらたら流している零斗に怒鳴ってツッコむネプティーヌと音無。

ゆりにいたっては啞然と呆れていた。

「……なあ、女ってあんなにセクハラする奴だったけか？」

「分からん。だがあの女は少しおかしなところがありすぎるからじゃないか？」

「それもそうだな……」

京と庵は、はやてのセクハラ活動に呆れていた。

男でもあそこまで堂々と女にセクハラする者は絶対にいない。

今後、自分所のはやてにも要注意しようと思った時だった。

「家康ウウウウウ!!しっかりしろオオオ!!」

必死に叫びだす左之助が、青ざめて家康を呼ぶ。
一体何があったのかと思つた京と庵は振り向く。

「どうした左之助！！家康に何が……てえ！！！」

京が目にした光景は、鼻血をたらたら抑えて男の急所を必死に押さえて倒れこんでいる家康がいた。

「何かさつきから家康が鼻血たらしてあそこ抑えながら倒れこんでいるぞオオオオ！！？」

「おおおおおおおおお……何て事だアアアアアアアア！
！何か知らないが上も下も収まらぬウウウウウウ！！！」

「何興奮してんだためエはアアアアアアアア！！！！！」

メッチャ興奮している家康に怒鳴る京。

スバルの下着姿を見た事が原因で家康はこうなってしまった。

その面影が、スバルが家康所のスバルに重なってしまう為、家康にとっても抑えきれない光景であった。

「うわぁ、スバルお姉ちゃん可哀想……」

「……最悪だわ」

「最悪じゃ」

「最悪だ」

ヴィヴィオはスバルを心配する中で、プレシア、源外、スカリエツ
ティははやての異常なセクハラにシド目していた。

「マジ最悪アル……エリィ、将来絶対はやての様な女性と結婚した

ら駄目アルよ」

「は……はい／＼／」

神楽も軽蔑してエリオに忠告する。

一方のエリオは、顔を真っ赤に染めてしまっていた。スバルの下着姿を見てしまったので。

「じゃあねえ、次は俺の番だな。良い数字を頼むぜ？」

と京がスイッチを押す。

ルーレットが回転し、出た目は2である。

とりあえず進む『ファイター』が止まったマスは、ペナルティマスであった。

「げえええ！！ペナルティかよおおお！！」

「何やってんだアアア！！」

京と左之助は青ざめてしまう。

一方の俺は、先ほどから引っ張っている家康に呆れていてそれどころじゃなかった。

家康の鼻血と男の急所が全然納まっていなからだ。

そしてモニターから現れた内容は

《クサヤ地獄》

すると京の周りに大量のクサヤが落ちてきた。

「痛てて！！なんだよ……て臭エエエエエエエエ！！！」

京の周りに落ちてている1000個以上のクサヤ。
魚の嫌な匂いが容赦なく京を襲いだす。

「ぎゃああああああああああ！！臭エエエエエエエエ！！
マジ死ぬ、マジ死ぬから勘弁してく……」

ドサー！！

京は臭さに耐え切れずに倒れてしまった。

「ぐええええええええええええ！！！」

「京、そのクサヤを何とかしろオオオオ！！！」

「ぐぎゃああああ！！！！コレは勘弁してくれエエエ！！！」

左之助、庵、家康もクサヤの異様な臭さにもがき苦しんでいた。
特に京は、周りに囲まれていてタワーのように立っている大量のク
サヤに思い知らされて気絶してしまっている。

「うわあ、悪夢だ……」

「そう言えばあの人が、確か焼き魚好きだったよね……好物食べ
るときトラウマ思い出さないかな？」

ウツソとかがみは京が今後の食事活動を心配するのであった。

「それじゃあ、次は私達の番だね……良い数字を出すぞオオ！！！」

ネプテイー又はスイッチを押すと、ルーレットが高速回転する。

出来ればボーナスマスがある10が出て欲しいと願うのである。それを確信した零斗が再びマイティ真拳を炸裂する。

「マイティ真拳秘運奥義『願いの数字』!!」

と零斗は刀を取り外して地面に『6』の文字を刻み書く。するとその6が光りだした瞬間、ルーレットの針は『6』に止まった。

「おっしゃああ!!」

ネプテューヌは大喜びしてはしゃぎだす。

ちなみに零斗は大量の汗を流し、苦笑ながらも満足感に達成している。

『願いの数字』は相手に幸運を導く究極強運奥義。

その為、対象となった相手は運がよくなる。

だが代償として自分に莫大な疲労を襲いだす諸刃の剣である。

『マイティアテム』が6マス進むと……

《サイコロを拾ってふるう。》

「こ……コレって!!」

「あーっと、コレは凄いでしょ。チーム・マイティアテム!!これは出た目の数だけ、進めるチャンス!!と言う訳で音無、どうぞ!!」

音無が内容見て啞然と驚くと、黒神はサイコロを音無に向けて投げる。

音無は無言でキャッチすると、そのサイコロを良く見て、出来るだけ良い数字を出したいと願う。

(進める数は1〜6、最も出すべき数字は4!!)

そう、4を出せば4マス進んだところに再びボーナスマスがある。

「ここで一気に逃げ出す為にも4を出す!!」

「『願いの数字』!!」

音無がサイコロを振ると、零斗が再び刀で地面に『4』の文字を書く。

そして出た目は、奇跡が起こったかのように『4』である。

「よし!!」

ガッツする音無。

すると、突如零斗が大量の汗を流して倒れこむ。

これに気づいたネプティューヌ、音無、ゆりは零斗に近づく。

「ぜ…零斗!!」

「ちよつと、大丈夫!？」

音無とネプティューヌは心配するように倒れこんだ零斗を呼ぶ。すると零斗は笑いながらも言い出した。

「あはは…悪い、ちよつと負担かかる『マイティ真拳』を使いきた…ちよつと休むから…後は…任せた」

と言って、零斗は眠りつく。

彼が自らの命を削ってまで放つ技を3発使ったから、疲労するの無理はない。

音無は零斗を持ち運び、『マイティアテナ』は勝利する事を誓いだす。

「良い、零斗の命がけを無駄にしない為にも優勝するわよ!!」

『おう(ええ)!!』

ネプテューヌが気合を込めて言い出すと、音無とゆりも大きく返事をする。

そして4マス進むと、ボーナスマスにふさわしい内容がモニターに映し出される。

《近道発見。400マス進む》

『さ……400マスウウウウウ!?』

そんな大数字があつた事に驚く『マイティアテム』以外のメンバー。いくらなんでも進みすぎであるからだ。

「これはすごい!!ボーナスマスの中でもレアゲームを発生させた『チーム・マイティアテナ』!!これにより、『マイティアテナ』がダントツトップとなったアアア!!」

「いよっしゃああああああああ!!」

「お手柄よ、音無君!!」

一気にトップに上って大喜びする音無に、大手柄と褒めだすゆり。他のチームとの差を大きく広げ、現在1位と昇り上げた。

「てちよつと待てエエエエ!!」

「何だよ400マスつてエ!!明らかに進みすぎだろっがアアア!!」

春蘭も一方通行も怒り出して文句言い出す。

「彼等は運が良かったから、この様なレアイベントを発生覚ました。それにこの様なレアイベントはコレだけじゃないので、文句は後で聞かせてもらいます」

と黒神は堂々とした態度で説明する。

2人は納得していないが、これ以上言っても無理だと諦めかける。

「ここで、重大発表があります!!ネプティーも音無も、何故こ
うも連続にボーナスマスに止まれたかを調べた結果：何と北郷零斗
のマイティ真拳究極秘運奥義『願いの数字』が炸裂した事が分かり
ました!!『引き寄せられる数字』同様、莫大な大量を消費する代
わりに相手の運を最高値に上げる強力な幸運寄せ付け奥義!!コレ
で零斗は自らを犠牲にしてまで2人の運の良さを最高値に上げまし
たア!!」

「そんなのありイイイ!?!」

「なるほど……どおりで雑種の寄せ集めの分際で神の領域に達成す
るほどの強運を發揮した訳か」

全ては零斗の『マイティ真拳』による強運強化奥義による物だとか
がみもギルガメッシュも驚いて納得する。

だが代償として零斗はしばらく動けないほど大量消耗が激しくなっ
てしまった。

「それともう一つ……この双六のマス数は450マスとなっており、

何と『チーム・マイティアテナ』の現在地は445マスであります
！！もし次のターンでゆりが5以上の数字を出した場合、その時点で一番乗りで勝ち抜き決定です！！」

「うオオオオオオオ！！マジでアルカアア！！」

まさかもうここまで『マイティアテム』が進んでいた事に驚く神楽。
だが同時に、他のチームにとってはかなり焦りだす展開である。

「やばい……まさかもうここまで進んでいたなんて」

「北郷零斗……恐ろしい男ね」

凜も華琳も、零斗の『マイティ真拳』の無限の可能性に圧倒されてしまった。

次のターンでゆりが5以上の数字を当てる可能性は5分の3もあり、
そこまで低くない。

「ええ、『チーム・マイティアテム』って俺等の次に後のチームだよね。なのにもうあそこまで進んだってのか！？」

「やばいよお兄ちゃん……完全に追い抜かされたわよ！！」

銀時とティアナもコレはまずいと青ざめている。

自分達も急ぐべきだとあせり始めた。

そしてフェイトが念を込めてスイッチを押す。

「お願い！！奇跡を起こして！！」

そう願いだし、ルーレットは高速回転しまくる。

そしてぴたりとルーレットが止まると、針が差した数字は『7』である。

そしてマスを進むが、出た目は最悪な事にペナルティマスであった。

「いやああああああ！！！」

「最悪じゃアア！！！」

フェイトも銀時も絶望の元に叫びだす。

そんな2人を容赦なく、モニターから内容が出てきた。

《カツラップ》

これも意味がまったく分からない内容であるが、『リリカル銀魂』の背後から…何故かカツラップの衣装を身に付けたはやてとエリザベスがいた。

「エリー！桂さんが今戦っている今、私達がかつらップを再現したるでえ！！！」

『了解』

「え…カツラップて何？てかいつ着替えたんですか！！！」

青ざめてツツコミまくるヴァイスを無視するかのように、2人は踊りだした。

はやては持っているラジカセのスイッチを入れ、ウザイ程に気味悪い曲が流れ出した。

「やるなら今しかねー ZUR A やるなら今しかねー ZUR A
攘夷がJOY JOYが攘夷 幕府の犬には 天誅」

ギルガメツシュがスイッチを押すと、ルーレットが高速回転する。ギルガメツシュは自分は良い数字を出せると確信しているが、結果は「1」であった。

「何イイイイイ！！？？」

たった1マスしか進めない事に青ざめるギルガメツシュ。しかも止まったマスはペナルティマス。

「ちよつとおおおおお！！」

「全然悪化してあがんじゃねエかア！？」

これには凜と一方通行もギルガメツシュの予想外な結果に怒鳴るのであった。

そしてモニターに出される内容が来る前に……

「本当に貴方は情けないですね、ギルガメツシュ！！」

「ぐはああ……せ、セイバー……」

突如、厳しすぎるセイバーの一言に心が痛むギルガメツシュ。

「王の癖にその程度の運で幸福を導こうなどと、同じ王の名を持つ者として恥ずかしく思います」

「ぐはああ！！」

「大体貴方は欲張りすぎです。儀分の気に入ったものを我が物にしようとするその欲望を抑える気は無いんですか！？そんな貴方のところ私好きじゃありません」

「げほおおおお！！」

次々とギルガメツシュを苦しめる発言をするセイバー。

そして止めの一言として…

「貴方は英雄王として失格です」

「んぎゃあああああああああああああああああああ！！」

止めの一撃の様な衝撃によってギルガメッシュは傷つき、涙を流して倒れてしまったのであった。

ちなみに内容は《騎士王の暴言》。

内容が来る前に、セイバー自身がギルガメッシュに失望した発言を繰り返したのであった。

『『うわア、容赦ねエエ〜！！』』

銀時、ウツソ、光翔竜、政宗、音無、左之助、京、俺は思わず口に言い出す。

それほどまでにギルガメッシュはセイバーに相手にされなかったようだ。

「セイバー……あんた今回一段と容赦なく言うね……」

「ギルガメッシュには遠慮はしませんから」

「どんだけ冷てエんだよ！！」

凜と一方通行も、セイバーのギルガメッシュに対する扱いに呆れていた。

同時にセイバーがギルガメッシュに対してどんな気持ちを抱いていたかを嫌と知った。

「ふふふ、良い感じだわ 何か、この雰囲気って私に合うかも」

とクアットロは最悪なカオスな展開に酔いだした。

何せ元々、人格が狂ってる存在だから

「いやあ〜ん、なんか酷い扱いされちゃったあ〜……けどまいつか
」

ポチッと軽めにスイッチを押す。
すると、ルーレットが回りだす。

そして、回転が止まると出た目は『5』である。
とりあえずと、『ナンバーズ』は先を進むと止まったマスはハプニングマスであった。

《さっさとゴールさせたいので今トップに立っているチームに番
が回る》

『『最悪だアアアアアアアアアアアア！』』

『オタクガンダム』・『真撰組』・『キング・ドラゴン』・『狂乱』
・『クイーン』・『ファイター』のメンバーは青ざめて叫びだす。
それもそのはず、現段階でトップに立っているのは『マイティアテ
ム』であるからだ。

『マイティアテム』に番が来たと言う事は、『オタクガンダム』・
『真撰組』・『キング・ドラゴン』・『狂乱』・『クイーン』・『
ファイター』の番は飛ばされる事だ。

「来たアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！天は我
々を見片付けたわよ！！」

「いよし、ゆり行けエエエエエ！」

ゆりも音無も、勝利を目前に叫びだす。

ネプティーも零斗も2人ほどじゃないがやっとな予選突破できると

確信した。

「さあ、この仲村ゆりが一気に勝敗を決めるわよ!!それじゃあ……」

ゆりは勝利を祈りながらスイッチを押す。

「オペレーション・スタート!!」

ポチ!

高速回転するルーレット。

ゆりは勝利を確信するが、零斗、ネプティーン、音無の3人は願いを込めていた。

そしてルーレットが止まりだし、出た目は『4』であった。

「惜しい!!ただ次のターンで確実にゴールが決まるって……何このマス?」

ゆりが不思議に思ったのは自分達が止まった黒いマスである。

それを見た黒神は黒い笑顔でにやりと笑い出す。

「ふっふっふ、とうとうやっちゃいましたね愚かな小娘よ」

「はあ!?たかが黒いマスに止まったただけでなんなのよ一体!!」

「その黒いマスはダメージマス。止まったチームをゴールから遠ざけると言うゴールに近づけば近づくほどその威力を増すとんでもないペナルティ内容を用意しています」

「嘘オオオオ!?!」

これにはゆりも青ざめる。

何せ、さっきまでの猛攻が一気に水の泡に化してしまうからだ。
そしてモニターから出された内容を見た、『マイティ・アテム』達
は絶望した。

《先走りすぎて失敗した。スタートに戻る》

「最悪なペナルティイイイイ！？」

いくらなんでもここまでするかと青ざめるプレシア。

ヴィヴィオも『マイティアテム』が可愛そうだと思えてしまい、源
外とスカリエッティ、そして黒神は念仏する。

「も……もももも戻る？スタートに？」

「お……俺の命がけの『マイティ真拳』の成果が……」

音無と零斗は全てが無となって無駄になってしまった事に強いシヨ
ックを受けるのである。

さらにゆりも大量の汗を流してしまい、自分ほとんどないドジを
踏んでしまったと青ざめていた。

それ以上に、殺気から異常なまでの殺意を感じたのである。

そう、今回のゆりがここでの痛恨のミスをしてしまった事で怒気を
放っているネプティーヌ……いやハープルハートである。

「ユウリイイ……！？……覚悟良いわね？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

！……！

「え……いやちよ……」

「問答無用……！！！」

「いんやああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ……！！

！」

刀を強く握り、ハープルハートのきついお仕置きが炸裂してゆりの断末魔の叫びが響くのであった。

音無と零斗はそんな光景よりも、あんなにも一気にリードしたにも関わらず……それが一気に消え去ってしまった。

それからしばらくして、モザイクがかかるほどボコボコにされたゆりを引きずるようにとネプティューヌが足を掴んで引きずだし、『マイティアテム』は一気に『真撰組』と並んで再会に落ちた。

「……あのう、そう落ち込まずに……」

「私達なんか、まだルーレットを回してないので……あははは」

苦笑しながらも山崎とデイエチは『マイティアテム』を励ます。

だが、最下位に転落した『マイティアテム』は聞く耳もないまま絶望に染まってしまった。

「あ……あははは……じゃあ、次私が行きます」

スバルは苦笑してスイッチを押す。

出来ればマシなところで止まりたいと願いながら。

そして、ルーレットが高速回転して……しばらく立ってから止まると、針は『3』に止まった。

「あ、どうやらペナルティマスでもダメージマスでもなく、まともなマスだ」

「とりあえず、さっさと進むわよ」

スバルとティアナも、ペナルティマスじゃない事は確かだと安心する。

そして『リリカル銀魂』が3マス進んで止まったマスの色は、銀色だった。

「おお、そいつはデュエルマスじゃー!!」

『デュエルマス!?』

源外が、まさかここでデュエルマスに止まった事に驚く中で銀時達は何なのかを不思議がる。

「そいつは、他のチームと何かの競技を対決し、その対決に勝ったほうにはボーナスが、負けたほうにはペナルティが待っておる真剣勝負なんじゃ」

「マジで!?!てか今度はスバルが戦う訳!?!」

「スバル、絶対に勝ちなさいよ!!負けたら承知しないから!!」

「うん……うん……がんばってみるよ」

源外の説明を聞いた銀時は驚きだし、ティアナはスバルに絶対勝つようにと言い出す。

「さあ、ここでようやくスバルがゲストと戦うイベントが起こりました!!そしてそのデュエル内容が……コレです!!」

黒神が叫びだすと、モニターからその内容が書かれていた。

《騎士王と剣の決闘》

「!?!」

この内容を見て一番驚いたのはセイバー。
まさかスバルが止まったマスが、自分がこの小説にやってきた最大
目的を果たす事が出来るとは思いもよらなかった。
そして自然にと彼女は笑い出し、ついに念願がかなえることが出来
るのであった。

「まさか、この場であの腹黒作者に感謝する時がこよつとは……」
「セイバー……あなた」

こんなにも嬉しそうに笑い出すセイバーを見たの、始めてみる凜は
驚きだす。

「リン、アクセラレータ、ギルガメッシュ、この対決に勝てば私達
が…一気に有利になる事は間違いない……ですが申し訳ございません
が…今回の戦いは、私自信の為に戦いたいのです」

「え!?!」
「ああ? どういうこつたそいつはア?」

こんな事をセイバーが言うことに驚くリンと一方通行。
ギルガメッシュですら、こんなにも愉快に笑い出すセイバーを見た
のは始めてである。

今の彼女は、ただ純粹に戦いを求めている騎士王であるからだ。

「是非、戦いたい相手とよつやく戦えるのですから!?!」

侍の魂を持つ蒼き魔剣士 スバルと、伝説の騎士王であり最優のサ
ーヴァント セイバー。

今ここに、美しき女剣士同士がぶつかり合つのである。

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!!!』』

銀八

「へえい、『銀八先生コーナー』始まるよオ………そんで今回のアシスタントはこの人」

ネプテターヌ

「はあい、『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神』のメインヒロインことネプテターヌだよ」

銀八

「はい、じゃあ今回はよろしくね」

ネプテターヌ

「OK」

明るい雰囲気を表しているネプテターヌ。
本編での最悪な状況に遭遇したとは思えないぐらいに。

ネプテューヌ

「まず最初は真王の質問だよ」

銀八

「自分の小説の作者だから呼び捨てかよ……」

とネプテューヌに呆れる銀八だった。

ネプテューヌ

「『真王「やれやれ、質問に入る。観客側に私達（ゲスト以外）のキャラが出るんですか?』」

「べール」では次は私が、『この章は何をモチーフにしたのですか?』

」

『……うーん、出るか分からないよね。後、黒神の話だとかこのゲームは『マリオパーティ』、クイズ番組、そして遊戯王と言う黒神の趣味をモチーフしているらしいよ」

銀八

「マジかよ……というわけで『真王』さん、ネプテューヌの活躍もまだまだありますので楽しみにしてください」

ネプテューヌ

「次はペンネーム『黒龍』さんの質問だよ。1. はやて、桂、リン、なのは、フェイトに質問。エリザベスが伝説の傭兵部族、蓮蓬でしかも変態の元彼女がいる事実についてどう思いますか？」

2.なのは、フェイト、はやてに質問。屁怒紹とFate/sta

y n i g h tのバーサーカーは正直どっちが怖いですか？

3・辰馬に質問。本編で久しぶりの登場の感想はどうですか？」

『……いやア、あのエリザベスがまさかそんな恐ろしい種族の宇宙人だったなんて驚いたよ』

とネプティー又は驚いていた。

かなり序盤から登場したにもかかわらず、その正体が伝説の傭兵種族である事は信じられなかった。

銀八

「通りであの体制でもメツチャ恐ろしい戦闘力に器用さ……んで答えさせてもらいます」

桂

「たとえエリザベスがどんな種族であろうと、俺の友である事は変わらない」

はやて

「ほんま驚いたわ……てか元彼女までおつたん!？」

リン

「…何か、知らないけどショックです…」

フェイト・なのは

『………ガンダムとスターウォーズが融合したアアア!?!?』
『?』

桂はどんな正体であれ、エリザベスはエリザベスだと言い出す。

フェイト、なのは、はやての3人は驚いて、リンに元彼女がいた

事になぜかショックしていた。

フェイト・なのは・はやて

『どつちも嫌だけど、特に屁怒紹は怖いイイイイイイ！！！！』
『！』

辰馬

「いやあ、出番が久しうに出てもらったじゃき……これほど嬉し事アなかせよ！！あっはっはっはっはっはっはっは！！」

銀八

「はいと言うわけで『黒龍』さん、黒神は今回の原作銀魂長編は面白いと評価しています」

ネプテターヌ

「と言うより……何かある意味クロスオーバーって感じだったわよ……次はペンネーム『烈火竜』さん『なのは』には質問光翔竜を見かけたら、即抹殺しますか？

ちびっこ達に質問

原作アニメで子供からナイスバディになれたヴィヴィオが羨ましいですか？

ヴィヴィオに質問

また《聖龍王ヴィヴィオ》になりたいですか？『……』

1つ目と2つ目はもはやイジメに近いとネプテターヌは思った。
そして…

なのは

「ふふふふ……抹殺シテ殺ルノ」(ゴゴゴゴゴゴゴゴ……!!)

キヤロ、九兵衛、ヴィータ、チンク、アギト、リイン

『メツチャ羨ましいぞこんチクシヨオオオオオオ!!……!!』

ヴィヴィオ

「パパのように強くなれるなら、なりたいよ」

とそれぞれ質問を答えてくれたのであった。

銀八

「と言う訳で『烈火竜』さん、いつも質問感謝しています。んで次イ、ペンネーム『月光閃火』さん。1.アリマに質問…正直言つて、乙女な趣味は持っているか?アリマは基が可愛いんだから、乙女な趣味の一つや二つ持っていた方がより可愛いぞ?…と閃火が言っていた。

なっ……!?(赤面)それ言うなよ…何か気恥ずかしいじゃねえか…

(照)。次は俺からだ。

2.作者に質問…小説を書く時に、何か心掛けている事って…ある

?』

ネプテターヌ

「アリマ?だれそれ……」

銀八

「ん?そう言うやまだアリマって存在を知っていねエ様だな」

銀八はこの際、アリマがどう言う人物かを教える。スバルのかつての仲間であり、とある事件でスバルを裏切り者扱いとして敵意を抱いている。

その強さは、間違いなく今のスバルをも凌駕する魔剣士としての実力は最強レベルに達成している。生命体ロストログアの方がまだ可愛いと思えるほどに。

ネプテューヌ

「ふうん、とにかく相当な手誰って分け何だね」

銀八

「そのとおり……で答えは……」

とモニターが映し出されると、そこにはアリマが映し出された。

アリマ

《そうね……確かお菓子作りや可愛いネックレス作りとかもしてたかなア……今は、もうやらなくなっただけ》

とそう言うと、最後に悲しい表情を見せてモニターが消えるのであった。

ネプテューヌ

「へえ、かなりの美少女だね。胸の大きさ、ルックスの良さ、スタイルの良さ、可愛い姿、バランスが取れた美少女の中の美少女って感じかな」

とネプテューヌは言い出すが、それ以上に驚いたのは……彼女の強さである。

ネプテューヌ

「だけどそれ以上に、彼女の眼を見て分かった。何かとてつもない修羅場を通って侍としての強さが伝わってくるよ……」

おそらくは自分をも凌駕するほどかなりの凄腕の持ち主である。

ネプテューヌ

「確かスバルはアリマって子に敵対されているんだよね」

銀八

「ああ」

ネプテューヌ

「……おそらく、アリマはスバルにとっては最後の敵になるかもしれない……相当覚悟が必要かもね」

ネプテューヌはそう確信する。

スバルとアリマの因縁は、自分が想像するのよりもはるかに大きい。

銀八

「ま、そいつはスバルが勝つ事を祈りゃ良いつて訳だな……そしてもう一つの質問は、黒神どうぞ」

黒神

「へえ〜い、心がけなら……より銀魂のようにギャグを中心にしたと思います 後、スバルが銀時に憧れる印象を強くさせたり、侍としての強さを心がけています」

銀八

「確かに、この小説はスバルを初めとした侍の強さを学ぶ魔導士も増えてきているなア……と言う訳で『月光閃火』さん、アリマの活躍する場も考えていますのでその時をお楽しみください」

ネプテীর又

「次はペンネーム『次村陣八』さん『質問

1、銀魂人気投票で新八が奇跡の八位三連冠を達成しました、何か一言を。

2、銀時も一位三連冠を達成しました、何か一言を。

3、ぶつちゃけ今回の投票について一言を。』……そうね……」

銀八・ネプテীর又

『『新八がベスト10には入れるなんて…確かに奇跡だ』』

と正直に答える2人組み。

銀時

「うっしやあああああ！！俺連続？1！！！！」

銀八

「メツチャ納得できないんだけどオオオオオ！！」

ネプテীর又

「やっぱり流石ね銀時 ……後、今回は神威が凄く伸びたなアっと思
いました」

銀八

「俺ア、あのお妙がギリギリ10位に入れた事に驚いたなア……と
言う訳で『次村陣八』さん：新八が奇跡の連続八位つてのはわかり
ますが現実はそのようになってます」

ネプテイーヌ

「次はペンネーム『白米』さん『質問

武』銀時、ツラ、神楽、なのは、フェイト、はやてに質問。次の内、
トンネルの中で追い掛けられてマシだと思っるのは？」

A 青鬼ブルーベリー (フリーゲーム『青鬼』より)

B 魔列車 (『ファイナルファンタジー?』より)

C デモンズウォール(すばやさか二倍速) (『ファイナルファンタジー?』より)

D ジエイソン (『十五日の金曜日』より)

E 巨大ゴキブリの群れ

F 貞子 (『リング』より)

G ティラノザウルス

H バックベアード (『ゲゲゲの鬼太郎』より)

I レギオン (『悪魔城ドラキュラX』、『キャッツルヴァニア』
等より)

」 タイラント (『バイオハザード』より)

武「後、念のために『倒す』という選択肢はないぞ? あくまで、丸腰の状態で追い掛けられた場合を想像して答えな」『……』

銀時・ツラ・神楽・なのは・フェイト・はやて

『『何かそんなに怖くなさそうな青鬼ブルーベリーで……』』

ネプテューヌ

「青鬼ブルーベリーを舐めんなアアアア!!!!!!」

6人に対しての答えに、青鬼ブルーベリーを舐めている事で呆れてツッコむネプテューヌ。

銀八

「と言っ訳で『白米』さん、廊下にたつてなさい」

ネプテューヌ

「次が最後ね、ペンネーム『亀鳥虎龍』さん『虎龍

』シグナムに質問。こっちでの自分と銀さんに何か一言を。プレゼントとして、銀さんとのイケない関係の写真を差し上げます。」

日月

「全員に質問。こっちに登場した組織で就きたいと思うのは?」

万事屋

天草組

奴良組

真選組

『グループ』

『アイテム』『……ねえ、あのウジ乳女ぶっ殺して良い』(ゴ)
ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

銀八

「落ち着こつウウウウ！！気持ちはわかるけど落ち着こつー！！」

ネプティー又の爆発的な怒りに青ざめる銀八は止める。

数秒後、何とか止まったが今だに怒りは伝わってる。

シグナム

「ぶはアアアアアアア！！！！」

ドサア！！

シグナムは興奮して、鼻血を流しながら嬉しがって倒れこむ。

その写真を宝にして。

そして全員質問の答えはコレである。

万事屋 銀時、フェイト、スバル、なのは、ティアナ、神楽、エリ

オ、月詠、シグナム、ヴァイス、リインフォース、チンク、セイ
ン、セツテ、ヴィンディ、ディード、スカリエッティ、猿飛、お登勢、
外道丸、ヴィヴィオ、屁怒組、プレシア

天草組 キヤロ、シャマル、九兵衛、ユーノ、ギンガ、ウーノ、ド
ウーエ、トーレ、クアットロ、オート、ノーヴェ、

奴良組 桂、エリザベス、はやて、ヴィータ、ザフィーラ、リイン

真選組 デイエチ、ルーテシア、ガリユー、アギト

『グループ』

『アイテム』

銀八

「てえ、『グループ』と『アイテム』の人気全然ねえ!!」

ネプテイーヌ

「と言うより天草組って女が中心とした組織だよね……ユーノちゃ
っかり入ってるよ!!」

と青ざめて呆れる2人。

まあ2人は万事屋が一番人気あると思えば満足であった。

銀八

「と言う訳で『亀鳥虎籠』さん、廊下にたつてなさい」

ネプテイーヌ

「次回もゲストがアシスタントしますのでお楽しみイ」

銀八

「誰にしようっかなあ……迷っちゃまっぜ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします。

第二百二十五訓：混沌だらけのイベントは素晴らしい（後書き）

元・『^{だい}第666^{まとうきかん}魔闘機関』及び機動六課最強と謳われたフォワード
万事屋の1人

スバル・ナカジマ

イングランドの騎士王・アーサー・ペンドラゴンこと最優のサーヴ
アント

セイバー

侍の魂を持つ魔剣士少女と聖剣を持つ騎士王。

美しき戦乙女達の剣のぶつかり合いが始まる。

スバル

「次回「剣の鎖」テイクオフ」

第二百二十六訓：剣の鎖（前書き）

黒神

「今回もスクーリングがあったので、小説が書く時間は減ってしまいました。かなり遅れて申し訳ございませんでした。さっそく最新話を始めます」

シグナム

「『リリカル銀魂 Strikers』始まるぞ」

第二百二十六訓：剣の鎖

スバルがデュエルマスに止まった事で、最優のサーヴァントのセイバーと戦う事になってしまった。

だがセイバーにとってはコレは願ってもいない事である。

以前、黒神が質問コーナーをしてきた時に、セイバーはスバルの神速剣術使いに強い興味を持ち、是非とも戦ってみたいと願ってた。蒼き魔剣と黄金の聖剣を持つ者通しの剣の共鳴が繰り返すのは間違いないであろう。

そして闘技場の中心部にとスバルとセイバーが立つ。

「ようやく来ましたね……私と貴方、お互いに剣を交えるときが」

「…うん、初めはもっと先かなっと思っただけど、まさかこんなにも早く来るなんて思わなかったよ」

セイバーもスバルも、いつも以上に真剣な目線でお互いに見詰め合っている。

「私はセイバーさんの事はまだ知らない……だけど、確かにわかる事がある。貴方も数多くの戦場を駆け抜け、何かを護る為に多くの敵を倒した事は」

スバルにはセイバーがどれだけ戦場に駆け抜けたかを嫌と知る。剣を持った者しか分からない剣士の戦場の雰囲気、そして匂い。

それ以上に、彼女はスバルが最も大切に思っていた親友に似ていた。

そしてセイバーは無言で、透明になっていた聖剣の姿を現し、黄金の剣『エクスカリバー』の姿を現した。

「エクスカリバー……私がこの剣を手にした時から、覚悟を決めていました。聖剣を手に、王として国を護り……数多くの戦場で多くの命を奪ってきました」

何かを護るには何かを倒さなければならない。

セイバーの時代ではそれが当たり前である。

騎士王であるならば、尚更であり王としての勤めを果たさなければならないのである。

「確かに、剣をその手に持ったんならその覚悟は必要だね。それに……その気持ち凄く分かるよ」

自分も同じだからだ。

剣を持ち、剣術を学びだした頃からそれは人を殺める覚悟が必要だと、かつての剣の師であるサナダから聞かされた。

だからこそスバルはその覚悟を持って、修羅の道を進んだ。大切な何かを護る為に。

「剣士は、ただ人を斬るだけではない……己の大切な者を護る為に己が修羅に導いても自分と仲間の未来を護る為にその敵を斬らなきゃいけない」

「ええ、スバルの言うとおりです。かつて私も王として、自分の大切なものの為、民の為、そして国の為に戦いました……ですが、私は国を護れなかった」

「え？」

セイバーが最後に言った言葉に驚くスバル。

「国のために身を捧げるも結局国を護ることができなかつた後悔から、自分は王にふさわしい器ではなかつたと思ひ知らされました。だから私は、人生をやり直す為にかつて聖杯を求めていました……」

それは、過去の辛い思いによつて自分の過去を否定した者の言う台詞である。

かつてのセイバーはそれを知らず、気づかないうちに自分から逃げていった。

「ですが、かつて私と同じサーヴァントとして降臨され、敵側ながらも私に大切な事を教えてくれた仲間がいました。辛さや失つてしまった物を忘れてはいけないと」

その一言で、セイバーは聖杯は必要なしだと確信する。

その言葉をセイバーに言つた人物は誰かをスバルは理解した。

「それは、あつちの銀さんの事だね」

「はい…私はその言葉で本当に生きて行く意味を知り、そして救われました」

だからこそ、今自分は過去の失敗にこだわらず、自分の進んだ道は間違つていないと確信できている。

「そして、それは貴女にも言える事です」

「え？」

エクスカリバーをスバルに向けて構えるセイバー。

スバルが自分と同じだとはつきり言い出す。

「貴女も、その剣と共に数多くの戦場に立った者のはずです！！他の者には分からなくても私は分かっています！！」

同じ剣士として、セイバーはスバルが数多の戦に参加している事を確信する。

それもそのはず、彼女は他の機動六課と違って僅か13の年齢から数多の戦場に立ったのである。

数多くの犯罪者を倒し、それ以上に数多くの者を守って自分の大切なものを護ってきた。

スバルは左手に持っているティルヴィングエアを前に出し、右手で柄を握ってスウツと抜く。

その刀身はサファイヤの如くの輝きは美しく、そして何よりも他の刀にはない強い威圧感を感じる。

「私がこの剣を手にする事を決意したのも、全ては4年前の大火災事件で銀さんに出会ったときから始まったんだ」

スバルはセイバーに全て話した。

4年前、ミッドチルダ臨海第8空港のロストロギアによる大火災事件に自分は巻き込まれた。

姉と父を必死に探していたが、絶体絶命の頃に自分は銀時に助けられ、侍の魂と大切なものを護る強さを教えられ、自分も銀時の様な侍になる事を決意した。

必死に命がけの稽古をしていたが、彼女には致命的な欠点があった。それは自分に腕力が無い為、銀時の様な剛剣を得られない。

仕方が無く、自分は剛剣に対極となる速さを中心とした静剣を極める事に決めた。

それが幸いな事に、速さを活かす為にと機動力抜群にとダツシユ力

を大きく上げ、さらには剣裁きも神速とも言える最速の剣術を得ることが出来た。

自分も銀時の様な侍を目指す為の旅に出ようとするが、姉のギンガに理解されずに反対された為、強制的に訓練校で魔導士教育を受けさせられた。

そして問題を起こして僅か一年で卒業と言う名で追い出されてしまい、今度こそ侍の魂を手に入れ大切なものを護る強さを身に付くために修行のたびに出かけ、その3年後に『異種生命体事件』で銀時と再会し、今のように機動六課の一員となったのである。

「なるほど、つまり貴女は魔導士の身でありながらも魔導士の最大の武器である魔法よりも、ギントキの様な侍になる為に剣を鍛えるのを中心としてた訳ですね」

「うん……元々、私は魔導士としての素質があったからギン姉に無理矢理に空管理局武装隊ミッドチルダ北部第四陸士訓練校に入学させられてたんだ。立派な魔導士にさせたいと言う一心で」

「それは解せませんね。本来、魔導士は魔術師同様に魔法を中心に戦う存在、なのに貴女の姉は貴女の気持ちをも無視して自分の都合ばかりに魔導士にさせたのですか？」

スバルの侍に対する憧れを理解してくれないギンガに、セイバーは少しムツとしていた。

「あ、でもそれが全て悪い訳じゃないよ。ギン姉が無理矢理でも私に訓練校に入学させたおかげで、ティアを初めとした仲間達とあえたし……それに、私はそこで銀さんの次に最も信頼した隊長から、ある事を教えてもらったんだ。侍と魔導士の力を持つ2つの共存」

「侍と魔導士の力!？」

そんなのが存在するのかとセイバーは驚く。
そしてその存在をスバルは口に出す。

「……それが、侍の魂を持つ魔導士…魔剣士」

「…魔剣士」

侍の魂を持つ魔導士。

この世界にはそんなのが存在するのかと驚きだすセイバー。
だが、魔導士にしては刀持ちなど珍しい事なので……それが魔剣士
なら可笑しくないとセイバーは考える。

「だから、今はまだ侍としては未熟者だけど…いつか銀さん達の様
な侍になる事が私の最大の目標となっているんだ」

銀時の様な侍になる事。

それは自分の大切なものをどんな敵からや、状況でも守り通す事が
できる屈強なる守護戦士。

たとえ、それが人を斬る事になっても…覚悟を持った者しかそれは
なり得ない事である。

「その気持ちはわかります……そして、貴女も私と同じ存在である
事は分かりました」

セイバーは、スバルなら手加減無しで全力で相手できる人物だと認
定する。

そしてスバルも、セイバー相手なら全力で立ち向かうしかないと確
信する。

「……侍の魂を持つ魔導士……どおりで、あの娘からは妙な威圧感を持っていたわけか」

スバルとセイバーの話聞いていたギルガメッシュは、最初にスバルを見たときから感じた威圧感の正体を知った。

それは銀時ほどじゃないが、サーヴァントにも凌駕する屈強な魂、侍の魂が彼女の中で眠っていたのである。

「……あの子、セイバーに似ているね」

「何？」

凜が、スバルがセイバーに似ているとはっきり言い出す。それを聞いたギルガメッシュが少し驚きだす。

「形は違っけれど、お互いに銀時に出会った事から新しい何かを手に入れた。過去に進んだ道が間違っていないと理解し、そして剣を持つ騎士として新たな道を進みだすセイバー。そして大切なものを護る侍の強さに憧れ、その理想郷を追いつく為に剣を持ったスバル。たった1人の男が原因となった、たった1つの思い」

スバルもセイバーも、銀時と出会った事で自分が進むべき道を見つけた。

2人の女の思いが、重なり合っているからこそ似ている。

「己が進みだす道を進み続ける屈強なる信念……剣の鎖」

その言葉に、ギルガメッシュと一方通行はただ黙って聞いていた。その言葉には、彼女達がどんな思いで剣を握っているのか想像するだけで理解する。

「あの2人は、同じ鎖につながれた剣士なのよ。だけど2人には決定的に違う所がある。1人は己の過去に後悔し続け聖杯を求めてたけど、銀時と出会った事で己の過去も受け入れる強さを教えられて前へと進む本当の王としての力を身に付け、そして共に生き戦う事を決意してる。そしてもう1人は、最初は弱い存在だったけど銀時と出会った事で、本当の強さを教えられた。そして自分の大切なものを護る為に、魔導士でありながらも侍の領域に進みだしている」

「なるほど、端は同じであり、相容れあう程に認め合う2人の剣士と言う訳か……だが」

「ああ、どんな事であったとしてもよオ…斬り合いは裂けられねえようだなア……」

「この勝負……おそらくどっちが勝つかはまったく予測できないわよ」

『とある運命』から見ても、如何にセイバーでも今回の相手が自分とまったく同じ意味を持つ存在だからこそ勝てるかどうかは分からない。

セイバーが勝つか、スバルが勝つか、どちらにしる今までのより想定外な戦いにはなるやもしれない。

「剣の鎖か……」

銀時も、スバルとは言えあの騎士王として名が高いセイバーに勝てるかどうか分からない。

だがそれ以上に、銀時はスバルがそう簡単に負けるとは思っていない。

何せこの戦いは、スバルの侍の魂とセイバーの騎士の魂のぶつかり合いでもあるからだ。

「侍の魂を持つ魔導士と、伝説の騎士王の対決……こりゃどっちが

勝つても負けても、お互いボロボロには、なんだろうよ」
「スバル……」

どっちが勝つかは分からない銀時に、隣にスバルを心配するティアナ。

いかにスバルとはいえ、相手はあのイングランドの騎士王であり人類最大とも言える聖剣『エクスカリバー』を扱う者。

最強の魔剣士とは言え、伝説の騎士王相手にはそう簡単に勝てない事は確かである。

「ここでこっちのスバルが戦うのか……だとすれば見届けられる絶好の機会だ」

家康にとっては見逃せない一戦である。

いずれ自分所のスバルがこっちのスバルと対決する日は来る。出来るだけ、こっちのスバルの実力を知っておくべきだと考えている。

「政宗…貴女から見て2人はどう思う？」

「只者じゃねえ事は確かだ。あの嬢ちゃん達、まだ少女にも関わらずとてつもねえ威圧感を放っている。おそらく……実力は五分五分つて所だな」

「ふうーん」

華琳が政宗に尋ねてみると、確かにスバルとセイバーは見る限り実力は互角に見えそうだ。

セイバーの持つ黄金の聖剣に、スバルの持つ蒼き魔剣。対極となつてもいいぐらいだ。

「さあーって、魔剣士と騎士王の力……とくと見せてもらおうよ」

「ああ、あの2人は只者じゃないから、おそらくは俺達の予想をはるかに超える激戦にはなるかも知れねえ」

ネプティーヌも零斗も、スバルとセイバーの対決をワクワクとしていた。

本当は2人も戦ってみたいが、ここはあえて見るだけで我慢する。

「……あんな顔をしたスバルお姉ちゃん……ヴィヴィオ、始めてみた」

「ええ、あの子……今まであんなにも真剣な顔で他人を見るなんてね」

ヴィヴィオとプレシアも啞然として驚いていた。

「驚く事もない。スバルは強敵と戦う時にはあんな感じだしね……それに……」

スカリエツィは鋭い視線でセイバーを見つめる。

「今回は、今までの中でもかなり厄介な相手だからね」

「うむ……これまで、蒼の字は数多くの強敵と戦ってきたが、今回のあのセイバーと言う娘は今までとは別格かもしれんのだ」

「それは同感します」

とスカリエツィと源外が言い出すと、そこから修羅スバルが話しかかる。

「おお、修羅スバルじゃないですか。もう治療を終えましたか」

「ええ……おかげさまで先ほどの戦いで消耗した覇気の量分だけ回復させてもらいました。この件は感謝しています」

と、頭を下げてお礼を言い出す修羅スバル。
流石にゲスト呼び出しで大量の生命エネルギーが使われてしまえば、
それだけ命の危機が来るだろうと黒神は考えたので、シャマルに頼
んで治療してもらったのである。

「とにかく、もうすぐ試合が始まりますよ」

修羅スバルがそう言うと、今でも戦いが始まるうとする雰囲気は伝
わっていていき、闘技場内は沈黙の静けさとなる。

「私も貴女も、何かを護りたいが為に剣を握っている者同士。だか
らこそ、私は貴女とは是非手合わせしてみたいのです」

「……セイバーさん」

セイバーが剣を振るいだと、構えだす。

「さあ、全ての力を出し切りなさい……でなければ交流戦とは言え
…死にますよ？」

とてつもない威圧感を放っているセイバー。

とても少女が放つ威圧感ではない。

騎士王としての覇気、そして闘志。

それを肌からビシビシと伝わるスバル。

「安心してください……私は貴女相手に手は抜かないつもりです…

…それに、貴女を見ているとかつての親友を思い出すんですよ」
「親友？」

スバルはセイバーを見るたびに、かつての大親友であるアーシアを思い出す。

彼女の表情と顔、そして髪の色も全てセイバーにそっくりである。そしてアーシアもセイバー同様に騎士としての魂を持っていて、剣士としての誇りを持っていた。

「もう死んじゃったけど、その魂も…思いでも…全て私の中で眠っている。身代わりとなって私に未来を活かしてくれた、その親友の分まで今も生きている」

自分の胸元に右手を当てて、アーシアの事を考えるスバル。

自分の中に眠るアーシアの魂、そして彼女の形見である『ペンドラゴブレイド』。

「セイバーさん……いや、セイバーはその親友に似ているんだ。剣を使う少女として、そして騎士の魂をわが身に宿っていた所も。だから……」

スバルも抜刀術の構えとして今でも『ティルヴィングエア』を抜き出そうとする体勢に入る。

「手を抜くつもりも、負けるつもりもないよ……お互いに全てをぶつけよう」

いつもは遠慮がちっぽいスバルでも、今回ばかりはそうは行かないようだ。

ただの剣を持つ少女としてでもなく、魔導士としてでもなく、1人

の侍としてこの勝負を受ける。

「面白い。私の騎士の魂と貴女の侍の魂、どっちの魂が強いか……
全力で剣でぶつかり合おう!!」

さらに闘志を上げて、魔力も増幅して放ちだすセイバー。
それを見たスバルも対抗して闘志と魔力を發揮する。

「機動六課、スバル・ナカジマ……抜刀する!!」

「サーヴァント・セイバー……参ります!!」

お互いに名乗りだすと、突如凄まじい速さでダッシュし、スバルが
神速の抜刀を炸裂してセイバーも対抗して神速に剣を振るう。

ガキイイイイイン!!

お互いに剣が互いにぶつかり合う轟音が響きだし、あまりの速さに
銀時達はもう始まったのかと驚いた。
序盤から飛ばす2人のスピードに驚かずにいられない。

「ハアアアアアアアアアアアア!!」

「テアアアアアアアアアア!!」

ガキキキキン!!ガキキャン!!ガキキャン!!キイイイイン!!ガ

キヤキキキキキン！！ガキイイイイイン！！

互いに目にも止まらない神速を炸裂しまくり、連続にぶつかり合う轟音が次々と響く。

スバルの神速抜刀剣術とセイバーの豪快なる神速剣がぶつかり合い、お互いに譲れないような猛攻が続くのである。

ただ見ているだけでは、蒼い斬撃と黄金の斬撃が嵐のように振ってぶつかり合っているようにしか見えない。

分かる事は、速さならスバル、力ならセイバーが勝っている為、対極となっている。

「テエエエエエエヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

さらに2人は蒼い選考と黄金の閃光と化して、2つの閃光が宙に飛んでいるように、何度も何度もぶつかり合って空に舞う龍の如くに天を天かける。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「テエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

ガキイイン！！

そして互いに真正面にぶつかり合うと、彼女等を纏っていた蒼いオーラと黄金のオーラは消え、スバルの魔剣『テイルヴィングエア』とセイバーの聖剣『エクスカリバー』ばぶつかり合う。

ガキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ

庵と京も注目するほどの戦い。
どちらが勝っても可笑しくはないであろう。

「聖剣と魔剣のぶつかり合いかあ……真王竜が見込んだ魔剣士スバル、そしてイングランドの騎士王セイバー……間違いなく史上最大の剣士少女の対決だろう」

光翔竜はどっちが勝つか予想が出来ないほど、2人はまったくの互角と見える。

「思った以上ですね……これほど素早い神速の剣裁きを見た事はない……！」

「私もだよ！私と同じ神速の領域に達成する上にその豪傑なる太刀……！」

剣をぶつけ合う者通しだからこそ知る相手の力量。

スバルの神速の剣裁きに驚きだすセイバーと、速さと力を併せ持つセイバーに驚くスバル。

「私の持てる限りの力、貴女にぶつけます……！」

と、セイバーは『エクスカリバー』を風に包ませて姿を隠す。

するとセイバーの『エクスカリバー』は透明となった。

「剣が……消えた!？」

「はあああああ……！」

とセイバーの剣が透明になった事に驚くスバルに、容赦なくセイバーがスバルに襲いだす。

はっとスバルが驚く中でセイバーが剣を振るう。
スバルはその機動を読んで素早く避けるが、僅かに右頬に小さな切れ目が出て血が出た。

「スツチが先手を取られたアル!!」

「剣が消えるって、そんなのありですか!!」

神楽もリインフォースはセイバーの能力に驚きを隠せなかった。

今まで色んな剣豪を見てきたが、剣を透明に消せる剣士は2人共見た事がない。

「まだまだあ!!」

とセイバーが容赦なく見えない剣でスバルを攻撃する。

スバルは驚きのあまりに交わし続ける。

かする程度に当たるが、それでも下手したらやられる。

しかしよくよく考えて冷静になって考え、セイバーの攻撃を良く見る。

セイバーが一気に剣を振るうと、

ガキーン!!

「!？」

スバルがセイバーの見えない剣を『テイルヴィングエア』で防ぐ。
交わされたり、防がれたりするのはそんなには言え驚きはしないが、驚くべきところはスバルはセイバーの剣をまったく見ないでセイバーだけを見たまま剣を防いだのだ。

「剣を見ずに、私の一撃を防いだ!？」

「やっぱり……思ったとおりだ」

そう言つて、スバルはセイバーの剣を薙ぎ払うと刀を鞘に納める。

「セイバーの见えない剣は見切らせてもらったよ」

「我剣をそう簡単に見切れると思つたかア!!」

そう言つて、セイバーは容赦なく剣を振り続ける。

だが一振り一振りをスバルは刀で受け流したり、交わしたりなどセイバーの攻撃を見切つたような動きで防ぐ。

これにはセイバーも驚くあまりに、どうしてこつも攻撃が当たらないのか不思議がる。

そして剣を大きく構えて…

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

右斜めに振り下ろす。

渾身の一撃を放つが、スバルは見切つたように交わす。そしてその隙にと、

スパアーン!!

目にも止まらない神速の居合を炸裂させる。

蒼い一閃がセイバーに襲うが、セイバーは超反応で強引にも交わすが、驚くべき事にその鎧の右脇に斬られた後が残つた。

「!?!」

「セイバーが一撃を食らつただと!?!」

まさか騎士王として名が高く自分が唯一認められたセイバーがこうもあっさり和一撃を食らう事に驚くギルガメッシュ。

一方のセイバーはどうしてこうも一方的に交わされ反撃を不思議がる中、先ほどのスバルの行動を見て、何かを気づいた。

「まさか……貴女は私のエクスカリバーではなく私自身の動きを見てたのですか!？」

「うん。ようやく分かったんだね。その見えない剣、言うなれば『ステルス・ソード透明剣』の様な名で言うんだけど……確かに見えない剣には私も驚いたよ。けど、それには致命的な弱点が2つあるんだ」

「弱点だと?」

セイバーは、『インビジブル・エア風王結界』によって姿を隠した『エクスカリバー』に致命的な弱点があると言い出すセイバーに驚く。

しかもそれが2つもある事に。

「なるほどな……だからスバルの奴、セイバーの攻撃を防ぎまくれたって訳だな」

「え……何か分かったの、銀時?」

銀時もその理由を理解し、フェイトはどうしてなのかを聞きたがる。

「2つの内の1つは……透明となった貴女の剣。それを見切るのは透明と化した剣じゃなく……」

セイバーはゆっくりとセイバーに向けて指を指す。
その指した方法は……

「セイバーの腕」

「私の腕だと!？」

まさか、インビジブル・エア『風王結界』によって姿を隠した『エクスカリバー』の致命的な弱点が、セイバーの腕にあるとスバルは言い出す。

「透明になっても剣は持たなければ意味がない。大抵の人物はその見えない剣に惑わされてその剣を見る事しか出来なく、護りも攻撃も戸惑って脆くなってしまう。だけど、剣がいくら消えて見えなくなっても剣を持っている腕は透明になっていない。だから、相手が攻撃してきた場合は剣じゃなく剣を持っている手と腕の動きを見切れれば何処から剣が来るのか予測できるんだ」

「では、貴女は我がエクスカリバーを見ずに私を見つめ続けたのも、剣ではなく剣を振るう私の機動を見切る為だったと……」

だからああも攻撃を防ぎ続けたのかと、驚くセイバー。

しかし気になるのは、スバルが見抜いた2つ目の弱点である。

「だけどそれだけじゃ完璧に交わすことは不可能なんだけど、それを可能にさせたのが……もう1つの弱点である風の流れ」

「何だと？……まさかそれは……！」

「そうだよ、武器は大抵振るうと空気を押し出して別の風圧を放つ事になるから気の流れと風の流れが変わってしまう。それを見極めるにはそれ双頭の集中力が必要なんだ。だけどセイバーは剣を透明にする為に、何か特殊な魔力をその剣に込めた事で剣から風の波動が包まれているように放っていたから……それ以上に通常の剣の素振りより風の流れの変化が伝わってきたんだよ」

剣の素振りの機動だけじゃなく、その僅かな風圧と気の流れを感じた事で交わしだすなど驚きだすセイバー。

だが何より驚くべきは、魔導士としてじゃなく剣士としての相手の攻撃を見極めるその集中力と心眼。

「後は、その剣の気の流れと風圧の長さを分ければ相手の剣の長さ
が理解できる訳。だから……その2つを見極めればいくら剣を隠し
ても、丸見えも当然だよ」

スバルがセイバーの『風王結界』インビジブル・エア によつて姿を隠した『エクスカリ
バー』の弱点の説明を終えると、セイバーは『風王結界』インビジブル・エア 解除する
かのように。強力な烈風を放った後、『エクスカリバー』の姿を現
す。

「そうですか……まさか我が『風王結界』インビジブル・エア を僅かな時間で見極めよ
うとは……神速の剣裁きだけがとりえじゃないって訳ですね」

セイバーもスバルの見極める能力に感服したように言い出すセイバ
ー。

これほどまでに自分の宝具の1つ『風王結界』インビジブル・エア を見抜いた強者はい
なかった。

いや、それどころが彼女は宝具がない以前に魔力も一切使わずにそ
れを成し遂げたのである。

「ヒュ〜」（口笛）……あの嬢ちゃん、良い目してんじゃねえか」

「ええ……私もあのセイバーって言う女の剣を透明にする妖術には
驚いたけど、確かにスバルって子が言った通り、その2つを見極め
ればいくら剣を隠しても丸見え当然って訳だね」

「ほうほう……なるほど、そう言う戦い方も……」

「春蘭……参考にしてメモを取るのには良いけど、そう言うのはわざ
わざ書かなくても見て覚えなさい」

政宗と華琳はセイバーの『風王結界』インビジブル・エア には驚かされたが、それ以上
にそれを見抜いたスバルに感心した。

一方の春蘭はそれを参考にとメモを取ったところで、華琳に呆れられてツツコム。

「驚いたわ。魔導士だから魔法を使って対抗するんじゃない、剣士として見極めようとするなんて」

「スバルお姉ちゃんすご〜い」

プレシアもヴィヴィオも、スバルの動体視力には感心した。

魔導士だから魔法を使って対抗すると思えば、それすら頼らずとも見極めようとする集中力と、動揺をしない冷静さだけで魔法に匹敵するセイバーの宝具『インビシブル・エア風王結界』を見切った事に驚いた。

「プレシア、ヴィヴィオ、ただの剣士じゃあそこまでは不可能です。……あそこの私からは剣聖殿と同じ者を持っているからこそ出来る事です」

「剣聖殿……て銀時の事」

「ええ……」

修羅スバルは、スバルが銀時と同じ何かを持っているからこそ身体能力も優れていると言い出す。

それこそが、銀時とスバルの最大の武器とも言えるもの。

「それは、侍の魂って訳だね」

「ええ、あそこの私は剣聖殿と同じ侍の魂を持っている。だから魔導士にはない圧倒的強さを持っています」

「たしかに……だがこっちのスバルには彼女にしかない驚異的な力を持っている。それは魔導士でも侍でも持ち合わせてはいない彼女だけの特殊能力と言ってもいいだろう」

スカリエツティがスバルの事を説明すると、修羅スバルはスバルに

しかない特殊能力に強い興味を持つ。

それは魔法でも剣術でもなく、ある意味では魔法に匹敵する身体能力であった。

「それにしても、凄いよセイバー。剣を透明にする能力を持っているなんて」

「風を纏わせ武器を透明化することで間合いを測らせない第二の鞘インビジブル・エア『風王結界』を僅かに攻略する貴女こそ、凄いですね」

お互いに相手の力量を褒めあう中、スバルはにこつと笑う。

「そうか、『風王結界』インビジブル・エアって言うんだ……じゃあ今度は、私の力を見せてあげるよ」

とスバルが抜刀術の構えをすると、セイバーはそこからスバルの魔法が炸裂するのかと警戒する。

だが、それはセイバーの予想を圧倒的に超えるほどであった。

シュ！

『！？』
『』

突如、セイバーが消えた事に驚くセイバー。

セイバーだけではない。

それは全員（リリカル銀魂メンバーは除く）も同じである。

一体何処に言ったのか戸惑う中、セイバーは何か迫ってくる威圧感を守りを固めると、

ガキイイーン！！

「ぐああああ！！」

と突如、『テイルヴィングエア』を抜刀してセイバーに攻撃してきたスバルの姿が現れた。

スバルの剣はセイバーの『エクスカリバー』に突撃するが、セイバーは吹き飛ばされる。

だが、宙に浮かんだ彼女は体を回転させて綺麗に着地させた。

しかし彼女は驚愕の表情を隠し切れなかった。

何せ先ほどのスバルの動きは、修羅スバルと同じ刹那の様な瞬間移動を炸裂させたのである。

だがスバルの動きは、先ほどの修羅スバルの刹那の瞬間移動よりも数倍速く、まるで本当に瞬間移動したような速さでセイバーの所に駆けつけたのであった。

距離はかなり長かったのに、それを無視するかのような一歩歩いただけの接近。

これは何かの魔法の一種なのかと最初は思ったが、驚くべきことにその瞬間移動の為に魔力を全然使っていない。

つまりこれはスバルの魔法ではなく、スバルの身体能力による機動力であった。

（今の動き……最速のサーヴァントであるランサーをもはるかに上回っている……そうか、これが噂に名が高いスバルの刹那の瞬間移動！！）

セイバーはこれが刹那の瞬間移動であると確信する。

以前から名が高いスバルの異常なまでの機動力の噂は聞いていたが、まさに刹那の如くの瞬間移動であった。

「あれは私と同じ刹那の瞬間移動！？だが……私のよりはるかに速い！！」

修羅スバルも驚くほどの脅威なる速さ。

おそらくその速さは天級、いや神级は達成すると修羅スバルは思う。修羅の世界でも、かなり速い者は存在するがあそこまでの速さは見えない。

「そうさ、コレが彼女のもう一つの力。速さだけならおそらく、+SSSでさえも上回るほどに」

「馬鹿な……」

スバルが強い事は分かっていたが、あそこまで神の領域まで達成する素早さには驚きだした修羅スバル。

速さだけなら、神级は達成する。

他の全員も驚きだしていて、特に一番驚いているのは『チーム・フアイター』の家康と左之助である。

(速エ！……あの嬢ちゃん、今あんなにも遠く離れた場所から一秒も立たずに瞬間移動しやがった……今の速さは剣心の神速と互角……)

(何だ今の……ワシでも今一瞬何が起こったのか分からなかった。今、こここのスバル殿が瞬間移動したような……)

(いや、俺の眼がイカれてねえなら……今のは剣心のより僅かに……)

(それ以上に、今のはもしかすれば……三成や謙信殿をも超える速

さじゃ……)

自分の予想をはるかに超えた脅威の瞬間移動に驚く左之助と家康。だがいくらなんでも、スバルが剣心、三成、上杉よりも速いとまでは思えない。

「おい、確かあの嬢ちゃんってお前ところの三成って奴の弟子だったよな？何だ今の動きは」

「いや……ワシも初めて見る。と言うより、あのスバルは三成の顔を見た事ないから弟子と言うには……」

「はあ！？じゃあ何か！！その三成って男、まだ会ってもねえ奴を弟子呼ばわりしている師匠気取りして立って訳か！！」

「まあ……そうなるな。第一、あそこのスバル殿の戦い方が三成に似てた所から三成が自らスバルの師匠と名乗ったそうじゃ」

「おしいイイイイイイ！！それ全然師弟なりたってねえよ！！」

三成が単に師匠と名乗っていると家康が言い出すと、左之助は呆れてツツコム。

「一瞬で瞬間移動しやがった……てか、アイツ間違いない俺等のところのスバルより速くねエか？」

京はスバルの瞬間移動の如くの速さに驚いた。

『キング・オブ・ファイターズ』の参加者でもあそこまで速く移動できる者は滅多にいない。

それどころが、いつ動いたかも見切られなかった。

「あの娘の動き……まさか」

と俺は気づいたように一言言いだす。
もし自分が思っているのであれば、間違いなくあれは魔法の領域を
超えた能力である。

「速エ、あの女ア……一瞬間移動しやがったア」

「明らかに最速のサーヴァントであるランサーと同等、もしくはそ
れ以上の速さかもしれぬ。何だ今のは？」

一方通行とギルガメッシュも流石に驚きだしていた。
サーヴァントでさえも上回る最速の移動。

まるで本当に瞬間移動したかのような動きである。
それはまさに魔術、いや宝具級に達成しても良いほどである。

「今の動き……何か似ているんだけど……」

凜は今のスバルの移動速度に何か似ていると考える。

おそらく彼女自身でも聞いたような事がある言葉かもしれない。
いったい何なのか考える中……

「縮地」

と、聞き覚えのない声が聞こえた。

その声が聞こえた方向を振り向くと、そこには2人の人物がいた。
1人は赤髪で左頬に十字架の傷がついている刀を脇につけている着
物を着た優男。

そしてもう1人は背中に市内を背負っている青年。

その人物を見て、左之助は驚く。

「おお、剣心に弥彦じゃねえか!!」

そう、この2人こそ左之助と同じ『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』に出てくる重要人物、緋村剣心と明神弥彦である。

「左之、拙者達も黒神殿に呼ばれてやってきたでござる」

「おおそうかい!!」

「何か、お前がおつかねえ罰ゲーム付きの大会に参加してるって聞いてたら見に来てやったんだぜ……そんな事より剣心、その縮地って何だ？」

「おい!!俺の心配はそんな事よりかよ!!つつか心配してねえだろ!!」

と血管を浮かべながら怒鳴る左之助。

弥彦は剣心の言った縮地と言う存在がどう言うものなのかを気になる。

「この小説ではあの動きを刹那の瞬間移動と呼んでおるそうだが…その正体は間違いなく神速をさらに超えた超神速、縮地でござる」

『『神速をさらに超えた超神速!』』

それが縮地の正体である事を聞かされた誰もが驚きだす。

同時に、それがスバルの刹那の瞬間移動の正体である事が判明した。

「超人な脚力で初速から一気に最高速に達し、一瞬で相手の間合いを侵略する幻の体技。まるで仙術の類を使って距離を縮め、瞬間移動した様に見えることから縮地と呼ばれるでござる」

「マジかよー！」

そんな体技が存在していた事に驚いた弥彦。

だとすれば、スバルは仙人の領域に達成していると考えられる。

「つまり、それは目にも止まらない速さって訳な訳ね」

「確かに、一瞬消えたと思ったから……あんなの素人の眼じゃ見えなかった」

ゆりと音無がそれが縮地の能力であると思う。

だがそれはまったく違う事である。

「違う、それはせいぜい神速の速さの事……だがあの娘の刹那の瞬間移動と呼ばれる縮地は、目にも映らぬ超神速の速さでござるよ」

剣心がそう言うと、それを聞いて誰もがさらに驚きだす。

それが本当であれば、スバルの刹那の瞬間移動はある意味で魔法を越えている。

「神速を超えた超神速って……」

「通りで、あの動きは異常なまでに速いと思ったわ……確かにスバルはスピードに関しては誰よりも高く、剣の速さだけじゃなく身動きの速さも異常なまでに高い。けど、まさかそれが超神速にまで達成するほどなんて……」

フェイトもティアナもそこまで速かったのかと驚かされた。

フェイトは以前に、スバルとの模擬戦で見たその刹那の瞬間移動の速さに驚かされ、自分よりも僅かに速いと思った事がある。

だがそれが神速を超えた超神速の縮地によるものだとは思えなかった。

「るる剣だよ。コレ絶対るる剣ネタだよな！？……スバル、お前それが縮地だつて事を知ってたか！？」

「シユクチ……？なんですかそれ」

と銀時の質問にスバルは何も知らない様に答える。

「え……あれ、もしかしてスバル……お前知らねエの？縮地の事」

「はい……ただ一瞬に足に力を入れて強い脚力で一步踏み出せばかなり速く動けると思つて、今まで機動力を高める鍛錬をしてただけですよ」

と、スバルは縮地の存在を知らないにも関わらず、機動力と動きの速さを高める為に刹那の瞬間移動を極めただけのようだ。

「つまり、貴女は縮地と呼ばれる幻の体技を得られる程までに相当な鍛錬をした訳ですね」

「……だつて、私腕力が無いから……」

「腕力が無い？」

スバルが何か自分の最大弱点らしきものを言い出すとセイバーは啞然とする。

「元々、私は銀さんの豪傑なる剣に憧れて銀さんのようにどんな相手からでも大切なものを護る為にとぶつた斬れる剛剣を求めてたんだけど……私にはそれを得られるほどの腕力が無いから出来ないんだ」

そう、スバルの最大の弱点はスピードがある分だけ攻撃力が銀時どころがシグナムにさえも劣っている。

その為彼女は、どんな鍛錬を得たとしても剛の力を得られることは出来ない。

「だから、私は力の剣に対極となる技の剣を会得する事しか方法がなく……スピードに乗って攻撃すればその力も倍増すると思って、ひたすら剣を速く振って速く移動できる鍛錬をしたんですよ」

「力を倍増する為に速くなる鍛錬をしたって……まさか貴女はそんな単純な理由だけで、魔術はおるか宝具級に達成する程までの体技を得たと言っんですか!？」

銀時の様な力の剣に近づく為には、最速のスピードに乗った剣を得るしかないとスバルは考えた結果、『縮地』と呼ばれる刹那の瞬間移動を得られたのだ。

それはセイバーにとっても、他の誰かにとってもビックリする事であった。

「なるほど、つまりあの雑種……いやスバルは力不足を補う為に速さを極めたと言う事か……」

「確かに見る限りあの子の剣は銀時やサーヴァントは愚か、さっきの修羅スバルとか言う同じ人物に比べりやはるかに劣っている。けどだからって力不足を補う為に仙術の1つである縮地を得ているなんて……」

ギルガメッシュも凜も、そんな単純な理由でスバルが宝具の領域に達成する力を持っている事が信じられなかった。

「……そんな理由であんなに速く動けるって……」

「確かに速さに乗ればどんな小さな力でもその加速力を力に変える事が可能になるでござる……。だが噂に消えればスバル殿はフェイト殿達と同じ魔導士……おそらく、魔法と言う妖術よりも拙者達、侍と

同じ剣の鍛錬をひたすら続けた用でござるな」

それは魔導士の常識を無視した、侍としての強さ。そして大きな努力と技の磨き。

スバルは魔導士以前に、リリカルメンバーの中でもっとも侍に近い魔剣士であるからだ。

「じゃあ、お喋りはここまでにして……行くよ……!」

ドカーン!!

とさらに、一歩踏み入れ走り出すと目にも移らない超神速移動術、刹那の瞬間移動が炸裂する。

セイバーは急いで凄まじい速さで後ろに下がるが、スバルの方が圧倒的に速くて一気に間合いを侵略される。

「ぐ……」

「セイバー!!」

凜が思わず叫びだす。

だがすでに遅く、スバルの必殺技が炸裂する。

「斬蒼!!」
さんそう

神速の連続居合切りが炸裂し、目にも止まらない無数の鎌鼬のような蒼い斬撃が炸裂してセイバーを襲う。

セイバーは苦痛な表情をするも、剣を連続に振って防ぎだす。

だがあまりにも速くて全て防ぐ事ができず、何発かは当たって鎧が

削られるように斬られる。

「ぐううう!!」

セイバーは思わず悲鳴を上げそうだが、全ての斬撃が消えた後素早く剣を振るう。

スバルはその剣を『ティルヴィングエア』で受け止めずに受け流す。

そして刹那の瞬間移動で素早くバックし、一瞬で遠くまで下がった。さらに抜刀術の構えをして、これもかと言っばかりに刹那の瞬間移動を炸裂する。

「ハアアアアアアア!!」

セイバーは気づいたのか、危機感を感じて横にダツシユする。すると目の前には横一線にと抜刀しているスバルに、目の前で蒼い斬撃が発生しているのが見えた。

この隙にとセイバーは地に着地した後スバルに襲い掛かろうとするが、

シュン!!

「なあ!!」

すぐさまスバルが、さらに刹那の瞬間移動を炸裂させて今度はセイバーの真上まで移動してジャンプしている。

「飛翔蒼翼!!」

ガキイン!!

そしてそのまま神速の居合でセイバーを斬り付けようとするがセイバーは『エクスカリバー』でそれを防ぐ。

しかし今のもし一歩間違えてたら斬られてたと思う。
まさか空中からの居合切りをしてくるとは思えなかった。

そしてセイバーがスバルの剣を薙ぎ払うと、スバルは体を宙に浮かべながらも一回転させて綺麗に着地する。

「空中抜刀じゃと!？」

「あんなのありかよ!！」

家康と京は見た事がないジャンプしながらの抜刀術に驚いた。
しかもただ空中から抜刀しただけじゃない。

刹那の瞬間移動による最速のジャンプによる天空からの居合。
まさに必殺技である。

「テイルヴィングエア!！」

《Roger I exercise a magical
word than this!》

とスバルの目の前から、魔力で精製されたビリビリと電力に包まれてる蒼い魔力刀が20本現れた。
それを見たセイバーは驚きだす。

「あれが、彼女の魔法…」

「エクスキュート・ザ・ソードブリッツ!!!」

と、一斉に20本の魔力刀が放たれて弾丸が放たれたような勢いでセイバーを襲う。

「なんの!?!」

とセイバーは負けじと、『エクスカリバー』を振り続けて全ての魔力刀を斬り消す。

しかし、防いだとはいえ剣を持っている両手から伝わる衝撃は小さくなかった為、当たってたらヤバイと思った。

「はあああああ!?!」

とさらにスバルが、刹那の瞬間移動でセイバーを追い詰めるようにひたすら刀を振り続ける。

セイバーも対抗して剣を振るうが、スバルの神速剣裁きに翻弄され続けて押されている。

「おいおいやべエじゃねエかア……セイバーが剣で追い込まれてやがるしよオ」

一方通行もあんなに追い込まれているセイバーを見るのは始めてである。

セイバーの強さは彼も理解しているので、自分でも勝てる相手かどうかわからないのである。

「確かに、速さだけならサーヴァントをも凌ぐ。だが…セイバーがただやられてる訳ではない」

とギルガメツシユはスバルの實力を多少認めるも、それでもまだセイバーは負けていないと言い出す。
何故なら、セイバーは何か見つめるようにとスバルの猛攻を防ぎきりまくっている。

そしてセイバーはバツクすると、

「逃がさないよ」

とセイバーを追いかけるように刹那の瞬間移動で追いつく。

そのままスバルは神速抜刀をさらに炸裂させるが、

「そこだー!!」

「!?!」

とセイバーはスバルよりも速く剣を振るい、スバルは反応して途中で地面を叩き蹴るように大きくジャンプして交わす。

着地するが、スバルの背負っているコートの右腕部分が綺麗に切れた。

「まさか……今の予測したんですか？」

「ええ……先ほど貴女が『風王結界』インビジブル・エアを気の流れで見切ったように

……私も貴女の刹那の瞬間移動を見切る為に、貴女が異常なまでの速さで移動する気の流れを感じ……何処から来るのか予測させてもらいました」

そう、セイバーもスバルを参考にして気の流れを感じながらスバルの動きから発生する逆流による気の流れを感じ取った事でスバルの刹那の瞬間移動を見切ったのである。

「確かに、貴女の速さには感服しました。これほどまでに機動力が長けた者はいなかった……だが、速さだけで勝てると思ったら大間違いです……!」

「そうだね……それにまだお互いに本気出していないようだし」

スバルとセイバーも、まだ全然本気を出していなかった。

あんだだけの強さがあるってのにまださらに上が存在するのかと誰もが信じられない程に驚いた。

「私の聖剣の力と貴女の魔剣の技、どっちが強いか今ここで分かって上げましょう……!」

「いいよ、私も久しぶりに本気で戦わせてもらおうから」

と2人はここから本気を出すようにと、大きな闘志を放っている。剣と技のぶつかり合いは、どっちが勝つのか……今本当の戦いが始まる。

「てか、スバルの出番無駄に多すぎだアアアアア……!」

「ヒロイン私なのにイイイイイ……!」

とどうでも良いツツコミを炸裂するティアナとフェイトであった。

銀八

「教えて」

生徒全員

『銀八先生』』

銀八

「へえい、んじゃ銀八先生コーナ始めんぞオ。今回のアシスタントはこの方」

左之助

「『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』からのゲストキヤラ、相楽左之助がアシスタントしてやるぜ」

銀八

「ゲストとして呼ばれたキヤラの中でも指折りにツツコミが期待される人物がアシスタントさせてもらいまアす」

左之助

「ツツコミかよ！！何そのどうでも良い評価…てさっそくツツコミでしまったしい！！」

さっそくペースに飲み込まれて思わずツツコミだす左之助。

銀八

「んじゃさっそく行くとすつか…まずはこの人、ペンネーム『夜叉龍』さん『質問です。』

鬼兵隊のみなさんはシャマパイを食べてみたいですか？いや見てどういう感想を持ちましたか？では更新頑張ってください』」

左之助

「さっそくだなおい！！それ死ねって言うてるのと同じだろうが！！」

とありえない死の宣言並みの質問に青ざめてツッコむ左之助。

銀八

「ずばり、彼等の答えはこんな感じですよ」

とモニターから鬼兵隊の全員分の質問が現れた。

高杉

《んなもん、食つぐらいなら兵器にするぜエ》

万斎

《人を殺めるほどの物をむやみに口にしないでいじめる》

また子

《食えるかアアアアアア！！！！！》

変平太

《そんなもの、美少女にモテまくる愚か者に無理矢理食べさせますよコンチクヨー》

似蔵

《くくく、いくらなんでもそんな無謀な事はしないねエ》

鍬死楼

《ふざけんな！！それは死ねって言われるのと一緒にじゃねえか！！》

アリマ

《絶対御免だよ！！》

と予想通りの答えが返ってきた。

銀八と左之助は青ざめて同じく思う。

銀八

「と言う訳で『夜叉龍』さん、答えは全員食べられない事でした」

左之助

「いやそうだろ！！あんなもん敵側に投げつけるだけで全滅狙えそ
うだろ！！」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『葉月』さん？この中で一番恐ろしいな
と思うものは？」

- 1 鬼の形相をした屁怒組（全速力で追いかける）
- 2 ジエイソンと化したキャロ（チェーンソーをもつて滅ぼす）
- 3 不味いものを食べて凶王化したスバル（蒼い斬滅墮天使）
- 4 酒で酒乱になった月詠（かなり凶暴）

？ゲスト杯のメンツでシヤマパイを平気で食べられる人はいます？

……？の答えは……」

銀八・左之助

『『『全ていやじゃあああああああああああああああああああああ

あああああああ！！！！！」

声が合わさって咆哮を放つ青ざめている2人組み。
どれも絶対に殺されるからだ。

銀八

「？の答えは、間違いなく修羅スバルだろ？だってあいつ感想でも平気で食べらてるし」

左之助

「嘘だろ！！あんなクソ不味いもんがア！？」

銀八

「世の中広エって訳だよ、左之助君……と言つ訳で『葉月』さん、これからもよろしくお願いします」

左之助

「ええ、次はペンネーム『リヨク』さんだな…『ツナ』一つ目は無限の欲望（性的な意味）のスカさん」

もしも原作のように機動六課を襲う事になったとして、新たに戦闘機人を作るとします。

その元となる本物の細胞は誰にオリジナルしますか？
屁怒組ですか？そうだと言ってください」

二つ目

この三人で本当に一人で戦いたくないのは誰ですか？」

- 1、大邪神ダイクマスタなのは
- 2、怒った屁怒紹
- 3、高杉晋助

『……………て何だこの質問！…この質問こんなのはつかかよオオオ！』

もはや滅茶苦茶だと言い出す左之助。

銀八

「そんなもんだろ……………ではスカさんお願いします」

スカリエッティ

「いや、スカリエッティだが……………そうだなア、元となるなら銀時だな。彼の細胞なら最強の戦闘機人を作れるかもしれないが……………今の私はもう管理局の裏側と縁を切ってるから無縁だけどね。後、2つ目だったら絶対2だ」

銀八・左之助

『『分かる！！分かるぞその答え！！』』

と、銀八と左之助はそう答えたスカリエッティに同様する。

銀八

「と言う訳で『リヨク』さん、廊下にたっついていなさい。……そこで次イ、ペンネーム『白騎士君』さん『白騎士君』では質問。黒神さんこんなペナルティはどうですか？」

1 ウィゼル（白騎士）とアークナイト（剣）と対決

2 天元突破グレンラガンと対決

レナード「全く。今度は俺からの質問だ。シャマルに質問。シャマルの作ったシャマルパイとシャマル鍋を下さい。食べたいので」
…… 1はもう考えているので出せるかどうか分かりませんが…… 気持ちは凄く嬉しいですんで有難うございます」

左之助

「へえー……て2つ目の質問って何だよコレエエエ！！何であんなもんを食いたがるんだア！？」

銀八

「ちなみのすでに黒神が彼等に50日分はシャマパイとシャマル鍋を送ったようです」

左之助

「嘘だろオオオオオオオオオオ！？」

銀八

「と言う訳で『白騎士君』さん、レナードに宜しく。んで次イペンネーム『s i b u g a k i』さん『銀時に質問』ぶっちゃけこの中で戦いたくないのつてどれ？」

- 1 魔王化したなのは
- 2 完全にブチ切れたスバル（修羅）
- 3 修羅王

修羅王の強さは常識編に修羅のランクで乗せておきましたのでそれを参考に

続いて、こちらのスバルがそちらのスバルに質問です

スバル

「貴方はその様な力を持ちながら何故あんな女垂らしを好きになったのですか？それともそれは寝首を襲う為の前準備と言う物ですか？」

左之助

「何で修羅スバルの嬢ちゃんはあつちの銀時を殺したいんだ？恨みもってんのか？」

銀八

「百合だからしゃあねえだろ……それで質問は」

銀時

「そつだなア……なのはの怒りはおつかねエから？で」

スバル

「えつとう……元々私は銀さんに助けられたし、それに銀さんは本当に大切な事を私に教えてくれるから……／＼／」

とそれぞれ質問を答える。

その答えもまた、2人は頷いて納得する。

銀八

「と言う訳で『sibugaki』さん、廊下にたつてなさい」

左之助

「んじゃ次行くぜエ……ペンネーム『ウツソ・エヴィン』さんからだ

『？少し前に銀魂とS K E T D A N C E がコラボしましたよね。ここでもS K E T D A N C E はでるのですか？（シャクティ）

？『RSS（バカテス小説）』で銀さんの貞操がとあるキャラに奪われましたけどみなさんはどう思っていますか？（ウツソ）

？フェイトちゃんに質問。生コンクリートで固められたのにどうやって生きていて脱出したんですか？『ダブル・デスライト・スター ジャッジメント』を食らったから魔法は使えないはずだし（こなた）

『……ずばり答えます。？はおそらく馬鹿作者の考えによって出す可能性ががあります。場合によればこち亀やN A R U T O、そんなべるぜバフなども』

フェイト・スバル・ティアナ・アルフ・シグナム・リインフォース・
チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・デイト・猿飛
『ゴファア！！』

ドサア × 1 2

と、フェイト達はショックのあまりに吐血して倒れるのであった。

左之助

「何か滅茶苦茶だなおい！！」

と左之助も青ざめてしまうほどツッコむ。
銀八にいたっては不愉快な気分であった。

そして最後の質問をフェイトに答えさせてもらおう。

フェイト

「……あの後、銀時に達が必死に助けてくれたけど……もし下手してたら一生……ウウ」

少し涙目をして恐怖を思い出すフェイト。

よっぽどコンクリートに固められたのが怖かったようだ。

銀八

「……と言っ訳で『ウツソ・エヴィン』さん、フェイトにトラウマが増えました」

左之助

「もうカオスじゃねえか……それで次が最後だな。ペンネーム『エターナル』さん『ランサー』さて、質問と行くか。フェイト、はやて、スバル、ティアナ、シグナムに質問。次の中で乗りたいMSはなんだ？」

1・ターンX（ガンダム）

2・アルケーガンダム（機動戦士ガンダムOO）

3・ガンダムエピオン（新機動戦記ガンダムW）

4・ガンダムヴァサゴ チェスト・ブレイク（機動新世紀ガンダムX）

5・グランドマスターガンダム（機動武闘伝Gガンダム）

6・クシャトリア（機動戦士ガンダムUC）「『」

銀八

「では、答えさせてもらいます」

フェイト

「じゃあ……ガンダムエピオンで」

はやて

「私はメツチャ強そうなグランドマスターガンダムや」

スバル

「アルケーガンダムで」

ティアナ

「私はガンダムヴァサーゴ チェスト・ブレイク……」

シグナム

「私もテストロッサと同じくガンダムエピオンで」

それぞれ5人とも自分の乗りたいモビルスーツを選び出すのであった。

銀八

「と言う訳で『エターナル』さん、廊下にたつてなさい。以上もっ

て今回の『銀八先生コーナ』は終了します」

左之助

「何かカオスばっかな質問が多いんだけど……てかここじゃ当たり前なのか？」

銀八

「大抵の小説の質問はこんなもんだ、左之助君……んじゃ次回もゲストをアシスタントさせますのでお楽しみイ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第二百二十六訓：剣の鎖（後書き）

2人の実力はまったく互角。

蒼き魔剣と黄金の聖剣のぶつかり合いはさらに大きくなる。

史上最大の女剣士同士の戦いも、いよいよ決着が付く。

勝つのはスバルか、セイバーか！！

己の剣士としての誇りをかけた真剣勝負！

刮目して待て！！

ティアナ

「次回、「ライバル同士の対決は他の対決とは違い、見ていると興奮するほど注目する」テイクオフ」

第二百二十七訓：ライバル同士の対決は他の対決とは違い、見ていると興奮するほ

黒神

「ようやく完成しました。今回はスバルとセイバーの大激戦を中心に書いた話分です。おそらく自分が気づかない誤字もあるかもしれませんが、そこを見つけたら遠慮なく言ってください。では」

セイバー

「『リリカル銀魂 Strikers』 始まります」

第二百二十七訓：ライバル同士の対決は他の対決とは違い、見てみると興奮するほ

『リリカル銀魂シリーズ』史上最速の魔剣士スバルと最優のサーヴァントで伝説の騎士王セイバー。

静と剛の剣を持つ者同士の实力はまさに互角。

異次元を超えたライバル対決は通常の対決とは別格とも思える白熱さをます。

お互いに實力を認め合い、全ての力を出し切って全力でぶつけ合う。

「コレが、侍としての強さを持つ者と騎士王の名を持つ者の力…」

自分をはるかに上回る實力を持つ2人に驚きだす修羅スバル。

修羅の世界以外でコレほどまでの實力を持った強者が存在してた事に驚いている。

「あの2人の實力は間違いなく超級の上位に入ります。神級のスピードを誇るあそこの私に、バランスが取れている最優の名に恥じないセイバー。おそらく、どっちが勝つかは運次第であり、引き分けの確立が高い」

「そうね……魔法無しでどころが魔法をも凌駕する体技を持つスバルには驚かされたけど、セイバーもさすが騎士王の名に恥じない強さを持っているわ」

プレシアもこれは真正銘の剣士としての勝負だと確信する。

チーム戦ではなく、剣士としての誇りをかけた個人対決であり、おそらくはお互いに譲らないであろうと思う。

「スバルの剣は、魔力無しでもその優れた身体能力と刹那の瞬間移

動の体技を中心とした身のこなしの速さに、全てを斬り裂く剣術流儀『蒼刀術』と言う剣技を誇る技の剣」

「対するセイバーは、宝具と言うサーヴァントと言う者しかもっておらん能力に、素早い剣速に女とは思えぬ力で相手を押し切る一騎当千的な力の剣」

「つまり、これは技と力のぶつかり合いですね」

スカリエツティ、源外、黒神は2人の白熱した対決に、思わず真剣に解説する。

無理もない、ここで思わぬライバル対決とも思わせる見ているだけでこっちも心が騒ぐような鼓動は、何故か注目しやすい。

しかもここから2人は本気を出す為、正真正銘な真剣勝負が始まるのである。

「何はともあれ、私も参考にしてもらいます」

「ああ、俺等もこんな名勝負は滅多に見られぬようじゃし、瞬きする暇もあらんぞ」

参考にして強くなろうとする修羅スバルと、滅多にない名勝負を真剣に見届けようとする源外。

「……………スバルお姉ちゃん」

ヴィヴィオは、ただスバルが無事でいてほしいと願っている。

*

スバルとセイバー。

互いに自分の強さを相手に披露し、お互いにその実力を認め合う。

スバルはセイバーのその豪傑なる力に驚かされた。

同じ女であるにも自分とはまったく違う。

自分にはない恵まれたパワーに神速の領域に達成する動きの速さ。まさに騎士王の名に恥じない剣士である。

セイバーはスバルの刹那の如くの速さに驚かされた。

サーヴァント以上の動きの速さ。

そして魔導士でありながらも、魔法より優れた身体能力と神速抜刀剣術。

今までセイバーが見てきた剣士の中でも最も速い事は間違いないだろう。

「……あはは…騎士王の名は伊達じゃないってわけ何だね」

「私も貴女のサーヴァント以上の素早い動きには感服しました…噂以上に名が高い剣士といったところですよ」

お互いに相手の強さが自分の思っていた以上だと改めて確信した。

スバルはセイバーと戦う度に、自分の中から何かそわそわする感覚に落ち着きを感じ取れなかった。

「戦いはどちらかが勝ち、どちらかが負ける生死をかけた命がけだ

と思っただけど…セイバーと戦う度に何か別の戦いに対する思いが……浮かび上がる様な気がする…」

戦いはお遊びではない。

どちらかが勝って生き残り、負けて死ぬ真剣勝負の世界。

かつて『第666魔闘機関』で隊長であったサナダから教えられた事である。

しかしセイバーとの対決は何かが違う。

「剣を交える度に……心が騒ぎ出す戦いの闘志が……」

不思議がるように自分の胸元を触るスバル。

戦いにも関わらず、彼女の中に何か別の感情が疼きだす。

「それは、貴女がこの対決に魂の鼓動を感じ、楽しんでいる証拠です」

「!?!」

セイバーのその一言にスバルは驚愕の表情を浮かび表す。

自分が戦いを楽しんでる何て信じられなかった。

戦いはお遊びではなく、命がけの真剣勝負。

それなのにそんな真剣勝負を楽しんでいる何て、スバル自身は信じられなかった。

だがセイバーは違う。

「私は楽しいです！貴女のような剣士と戦える事に……！」

「何を……!?!」

戦いを楽しむセイバーにさらに驚愕名表情を浮かべあがらせるスバル。

セイバーはただ、自分に正直になって言い出し、そして剣を強く握って構える。

「貴女の言うとおり、戦いはどちらかが生き残りどちらかが死ぬ真剣勝負。それが戦いの本来の姿でもある事は代わりありません…。ですが私はそれでもこの戦いが、今までの戦いには無い何かがある。としか思えなくて仕方が無いんです！！」

いつものセイバーとは思えない台詞。

騎士王として名が高いセイバーがこんな言葉を言い出すことにスバルはもちろん、凜、ギルガメッシュ、一方通行の3人も信じられない程驚きだす。

そう、セイバーはようやく見つけたのである。

自分と対抗に渡り合える武人、誇り高き魂を持った屈曲なる戦士。何よりも自分の心を熱くさせる最強の好敵手^{ライバル}を。

「この戦いは今までの戦いではない…命がけでもなくチームの為でもない…。お互いの剣士の魂をかけた次元を超えた好敵手同士の真剣勝負！」

徐々に歩く速度が速くなり、ついには走り出すセイバー。

そんなセイバーの言葉と、徐々に大きくなっていくセイバーの闘志にスバルも抜刀術の構えをとる。

「だから私は、貴女とは決着をつけなければならないんだ！！スバル・ナカジマアアー！！！！」

ついに最大級の闘志を放ったセイバーは凄まじい速さでスバルに飛びかかり突進する。

対するスバルも自分の戦いを楽しむ心に素直に認め眼を覚ましたように、

「じゃあ、私も全ての力を出し切って…全て貴女にぶつけるよ、セイバアア…!!」

刹那の瞬間移動での超神速突進で対抗し、セイバーに接近する。

それは僅か0.55秒の刹那の瞬間であり、お互いに相手の間合いを侵略して神速に剣を振るう。

ガキキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

剣のぶつかり合いの直後、とてつもない衝撃波がお互いに襲い掛かる。

だがスバルもセイバーも怯まず、すぐさま攻撃を繰り返す。

ガキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキキ
キキキキキキキ

!!!!!!

闘技場内に響きだす無数の剣のぶつかり合いなる轟音。

スバルの神速抜刀剣術とセイバーの豪快なる神速剣が互いにぶつかる。

それはまるで魂のぶつかり合いのようであった。

「蒼田十字！！」

素早くスバルが剣技を炸裂する。
更なる斬撃がくるとセイバーは考えるが、何か違和感が2つやってくる感じがした。
すると

「！！！？」

何と円を描くような横一線の斬撃と、縦一閃の斬撃がまったく同時にセイバーに襲ってくる。
危機感を感じたセイバーは横一太刀の一撃を防いで、二太刀目の縦一閃の斬撃は右横に移動して交わしだす。

何とか交わせたとはいえ、セイバーは驚いていた。
まったく同時の攻撃を炸裂するなど…魔術の一種である『多重次元屈折現象』と同じである。

彼女の剣技は魔術に匹敵するのかとセイバーは驚愕の表情を表す。

その刹那の考えをし終えると、セイバーの目の前にスバルが現れる。

「はあああああ！！！！」

これはチャンスだとセイバーが『エクスカリバー』を振るうが、スバルが素早く『ティルヴィングエア』を神速の速さで納刀し、それを盾のようにセイバーの剣を受け流すと同時にスバルが体を一回転し、

「蒼鏡抜刀！！」

そこから一気に神速抜刀による一太刀を炸裂するが、

「ぐー!!」

ガキイイーン!!

セイバーが左手をスバルの所に出すように向けると、そこから黄金の光があふれ出て、その光の中から黄金に輝く筒らしきものでスバルの剣を防ぐ。

それはセイバーの『エクスカリバー』の鞘でありセイバーの宝具『アヴァロン全て遠き理想郷』である。

「はあああああ!!」

セイバーはその鞘を豪快に振るってスバルを薙ぎ払うように吹き飛ばす。

スバルは着地して『ティルヴィングエア』を鞘に納める。

「それがその剣の鞘なんだね」

「ええ……まさか『アヴァロン全て遠き理想郷』を出させるほどに私を追い込むとは……」

もし、鞘を出していなかったら今の一撃でセイバーは深手の傷を負ってた。

そして鞘は光に包まれて消えると、セイバーは両手で再び剣を構える。

「じゃあこっちは、二刀流で行くよ」

とスバルは鞘を左脇に収めると、今度は左手で背中に背負っていた大刀『ペンドラゴブレイド』を取り出す。

『七星神刀』の二本による二刀流でセイバーに対抗するつもりである。

「面白い!！」

とセイバーがそう言い出すと、凄まじいダツシユでスバルを襲いだす。

そして豪快な一撃を炸裂し、スバルは対抗するように『テイルヴィングエア』でそれを受け流すと『ペンドラゴブレイド』を振るう。

『テイルヴィングエア』ほどじゃないが、神速の太刀がセイバーを襲う。

だがセイバーも反応して、素早くその斬撃を薙ぎ払う。

ガキキキキキキキキキ!! ガキキキイン!!

そしてスバルの二刀とセイバーの剣が斬撃の嵐のように振り続けられ、お互いに互いの攻撃を防ぎながら相手に攻撃する。攻守の入れかえが続きだし、お互いに一步も譲らない。

そしてスバルが最初に刹那の瞬間移動で遠く離れるようにバックすると、

「蒼波一閃!！」

『テイルヴィングエア』に魔力を込めて、神速の斬撃を弾丸のように放つ。

だがセイバーはそれを防がず、交わしだす。

「ステインガア・レッド・レイブレイク!！」

すぐさま追加魔法を炸裂するスバル。

『ペンドラゴブレイド』に魔力を込めて、一気に投げる。
紅い閃光のようにさっきより僅かに速い神速の速さでセイバーを襲うが、

ガキイイイイイン！！

「ゲウウウウ！！」

セイバーが『エクスカリバー』で防ぎだす。

交わすところを狙われたのか、避ける余裕もなく防ぐのが精一杯であつた。

「ハアアアアア！！」

ガキイイイン！！

セイバーは『エクスカリバー』を持ち上げ、『ペンドラゴブレイド』は宙を舞うかのように回転して浮いてしまう。

しかしそこをさらに突けられ、スバルが『テイルヴィングエア』の鞘を素早く脇から取り出して刀を神速納刀すると…

「れっぶういあい烈風居合！！」

「！？」

刹那の瞬間移動で移動し、更なる神速抜刀剣術を炸裂する。

無数の斬撃がセイバーを纏うように発生する前に、セイバーも超反応でスバルの一太刀一太刀の斬撃を全て防いだ為、無数の斬撃がセ

イバーの周りに発生しても金属音のぶつかり合いしか聞こえずセイバーは一撃も食らわなかった。だが、そんな安心をする余裕がまったくないと思わせるほどスバルの更なる追撃が炸裂する。

刀を鞘に納刀し、足元には蒼い魔方陣が浮かび上がり、魔力で精製された蒼い魔力刀が500本以上現れた。

そして…

「エアステインガー・エクスキュードブレイド！！！！」

と、一斉に魔力刀が発射される。

無数の魔力刀が、まるで刀の豪雨のように振ってきて、セイバーは全てを避ける事も防ぐ友も出来ない。

だが、全てをはじめ返す事は可能である。

そしてセイバーの『エクスカリバー』は透明になり、ここで宝具で対抗する。

宝具『風王結界』インビジュアルエアからの開放時に弾丸のように放つ必殺技。

「風王鉄槌！！！！」ストライクエア

『風王結界』インビジュアルエアからの派生技で見えない剣から激しい暴風を巻き起こし、それを巨大な弾丸のように放ってスバルの放った無数の魔力刀を全てはじき返して打ち消した。

スバルの魔法と剣術の連携猛攻撃を全て防ぎきったセイバーだが、まさか宝具を使わせるほどまでここまで追い込まれるとは思ってはいなかった。

そしてスバルは落ちてきた『ペンドラゴブレイド』の柄を掴み、背中に納める。

あれだけの猛攻を防ぎきったセイバーに驚きだすスバル。
そして魔法と剣術の連携をコレまで長けているスバルに驚くセイバ
ー。

2人は構えだして、さらに突撃する。

『ハアアアアアアアアアア！！！』

ドカーン！！

ガキイイイイイン！！

爆発的なダツシユによる突撃、そしてその速さに載せた一太刀がぶ
つかり合う。

さらにスバルとセイバーも剣を連続に振るいだし、神速の速さのあ
まりに蒼い斬撃と黄金の斬撃が2人の周りの空間を包むように発生
してぶつかり合っている。

切りかかり、流したり、そしてまた切りかかるなど同じ事の繰り返し
しだけでも脅威なスピードで、2人は妖術で斬撃を一辺に放ってい
るのかと疑うぐらい振り続ける。

「タアアアア！！」

「テエエエイ！！」

ガキーン！！

2人は飛びかかり、そのジャンプした瞬間に剣をぶつけ合う。

そしてセイバーがスバルに切りかかるが、スバルはそれを刀で受け

「……………何…これ？」

「うはあ、俺もあの2人と戦いてエー！」

これまで数多くの激戦を見てきたネプティーマや零斗でも圧倒されていた。

ゆりと音無は次元の違いにまったくついて来れなくなったのか啞然となつてしまった。

自分でも勝てるかどうか分からなくなったネプティーマ。

零斗も是非、自分の『マイティ真拳』がスバルとセイバーに通じるかどうか確かめたくなつた。

「……………す…スゲエ、男でも顔負けの剣客同士の対決じゃねえか」

弥彦にいたつては圧巻していた。

2人とも速く強く、そして何よりも美しく舞い踊っているような剣舞に見とれていた。

剣の腕なら銀時や剣心にも引けをとらない。

（支配者殿の頼みを受けた黒神殿の誘いで来てみれば、まさかこれほどの名勝負が見られるとは……………2人の実力はまったく互角。あそこのセイバー殿は拙者達のセイバー殿に引けを取らぬ優れた身体能力での速さと力を合わせ持った剣士。宝具と言う特殊な武器を持っているため、まさに騎士王の名に恥じぬでござる）

バランスの取れたセイバーの実力を高く評価している剣心。

彼女ほど剣に優れた剣士は男でも滅多にいない。

だが剣心は、それ以上にスバルの異常なまでの動きの速さには感服

した。

（そして、あのスバルとか言う娘…確かに自分自身が言ったとおり腕力がない分、一太刀一太刀に剛なる力はないでござる…が、それ以上に縮地を中心とした超神速機動力と抜刀術を中心とした神速剣術を組み合わせた脅威なる技の連発と、侍の刀と力を想像した魔法と言う妖術を組み合わせてる……フェイト殿と同じ魔導士のようにだが、あの娘からは拙者と同じ侍の魂を感じる）

おそらくは、速さの機動力だけなら自分に匹敵もしくは僅かに上回るかもしれないと驚愕の表情を浮かべながらスバルに高い評価をす
る剣心。

（おそらくは、スバル殿は修行次第では飛天御剣流の力を完全に引き出せるほどの身体能力を持っておるでござる。力不足を軽く埋め込める程のあの爆発的な速さなら尚更でござる…だが、その速さの気の流れで予測し対抗に打ち返すセイバー殿も捨てがたい……この勝負、間違いなく引き分けの確立が高い！！）

どっちが勝つか負けるかよりも、相打ち確立が高いと予想する剣心。速さならスバルで、力ならセイバー、それ以外はまったく互角の実力。

勝敗を分けるのは何なのかまったく予想不可能である。

「しかし、支配者殿から聞いたとおりスバル殿はここの銀時殿に助けられ、侍の魂と大切なものを護る強さを教えられたから魔剣士と言つ侍と魔導士の共存の剣客になったとは言え…まさかこれほどとは…」

「…マジで尊敬するなア…」

「……………おろオ？」

何やら弥彦から予想外な言葉に剣心は啞然とする。
弥彦を振り向くと、そこにはスバルに見とれたような目線で見つめる弥彦がいた。

「剣術で戦う女って、何か可憐だなアって俺あの対決を見て分かったよ……何かこう……魅力でてんなア」

「おろろ……珍しいでござるな、弥彦。お主がそんな事を言うなんて……」

「いやだつて……女が剣術で戦う姿って、まるで剣を持ちながら可憐に踊ってるように見えるし……」

弥彦は以前、感想でスバルの神速剣術に強い興味を持っていたが生で見ていると本当に剣舞で可憐に戦っているように見える。そしてセイバーも凄まじく美しさが伝わっているようだ。

「あれが……この小説のスバルの実力……縮地と言う脅威の素早さに、剣術と魔法との連携……」

あまりの実力の高さに驚く家康。

これは自分達、武士達に匹敵するんじゃないかと思出すほどに。少なくとも、今の自分所のスバルじゃまだ歯が立たないのではないかと嫌でも思い出す家康。

「まじでスゲエ……やっぱ侍と魔導士の強さを持つと超人じゃねえか……」

「ああ、信じられねエけど速さだけなら剣心以上だ……あの刹那の瞬間移動とか言う縮地ってやりやが最大の機動力を持つているし……何よりそんな蒼髪の嬢ちゃんに対抗する金髪の嬢ちゃんもスゲエ」

京も左之助もまさに史上最強の女同士対決と思える戦いに注目していた。

俺はそれほど驚かないが、真剣にスバルとセイバーの戦いを眼に焼き付けていた。

彼でさえも2人の未知なる力量には見ずにいられなかった。

「そついやア、家康とこのスバルってアンタの弟子だったよな…あそこのスバルと戦わせたなら勝てると思うか？」

「分からん…じゃが、あのスバルはワシの所のスバルより戦いの経験がある上、武術と魔法とか言う妖術の連携も取れている。三成が弟子だと自慢するだけあったが、これほどとは…」

家康はこれほどなまでに完成された強さを身に付けたスバルに感服されている。

さらに実力は間違いなく武士としても強者として入れる程に達成している。

「そして、あそこまでの強者であるスバル殿に成長させた坂田銀時殿の存在に、ワシはあの男の器が大きいと見た」

「ああ…俺もアイツの存在がまさかあそこまで人を成長させるなんて思いもよらなかつたぜ」

スバルをここまでの強者に成長させた銀時が、器の大きい男だと確信する家康と京。

彼女は銀時に助けられ、侍としての大切なものを護る強さに憧れたからここまで成長した。

それは並な事では不可能だが、あそこまでの強さを得たのなら相当な鍛錬と大きな経験を繰り返したのであるう。

「じゃが、だからと言ってワシのところのスバルも負けてはおらぬ。

いつかあそこのスバル殿と戦うときが来るまで、きっと負けぬほど成長させる!!」

師匠として、スバルをさらに鍛えると決意する家康。
以外に負けず嫌い何だなと思う京。

一方のスバルとセイバーは心が騒ぐ剣士としての誇りをぶつけ合う戦いに、コレまででない楽しさに満ちている。

「初めてだよ…こんなに戦いを楽しいと思うのは…そう思わせる相手と戦うのはセイバーが初めてだよ」

「私もその最速剣術と魔法との連携には感服しました…その剣術と魔法の連携の戦い方、おそらくは貴女の我流とお見受けしました」

「……『蒼刀術』…。私の亡くなった相棒が名前をつけた私の我流剣術なんだ」

「なるほど、神速の抜刀術、脅威の速さでの機動力、そして魔導士の魔法、3つの力を1つに合成した剣術と言う訳ですか」

スバルの使う剣術流派『蒼刀術』。

それは最大の弱点ともいえるパワー不足の穴を埋める為に、『第66魔闘機関』の訓練でスバルが銀時の様な大切なものを護る強さを持った侍になるために、命がけで編み出した我流剣術である。

しかも、その『蒼刀術』には…スバルが機動六課に入った時に封印されていた『蒼刀術』の真意があった。

「……じゃあ、見せてあげるよ。進化した『蒼刀術』の力を」

まだ何か奥の手らしき物を持っている様な台詞を吐くスバルに、セイバーは信じられないような顔をする。

そしてスバルが次に披露する『蒼刀術』は、これまで見た事がない技であった。

スバルが抜刀術の構えをすると、セイバーも刹那の瞬間移動対策にと剣を構えて迎え撃とうとする……が

「斬蒼烈波——！」

すると、スバルは刹那の瞬間移動も使わず『斬蒼』による無数の蒼い鎌鼬のような斬撃を放つ。

なぜ突進してこないでその接近戦用技を放つのかセイバーには分からなかったが……

「避ける、セイバーアアアアアア——！」

と、ギルガメッシュが必死に叫びだす声が聞こえ、セイバーは振り向こうとするが……すると何かやな予感がする。

何故なら、スバルが放った『斬蒼』によって放たれた無数の斬撃が、飛ぶ斬撃のように一斉にセイバーに襲い掛かった。

「何!?!」

しかも神速の速さで襲ってきたため、セイバーは避ける余裕は無かった。

それはまるで、先ほどの『蒼波一閃』を一瞬で数十回放ったような勢いだった。

セイバーは剣を振り回し、苦しみながらも全て防いだ。

その隙にとスバルは素早く『蒼波一閃』を放ち、さらにその斬撃に続くかのように刹那の瞬間移動を神速程度に控えたダッシュユ力以後を追いかける。

(もらった!!)

そして斬撃がセイバーにヒットした後、追加として神速抜刀を炸裂させる予定に入る。

だが……

ガキイイイイイイン!!

「!!??」

セイバーが斬撃を斬り、そしてそのままその剣はスバルに襲い掛かる。

スバルは間一髪に素早く抜刀し、セイバーの攻撃を防いだ。

「驚きました。まさか剣技と魔法を合体させた魔剣技を疲労するとは……スバルよ、やはり貴女こそ私が倒すべき最大の宿敵!!」

そして剣を薙ぎ払いだすとスバルは後ろにバツクする。

だがセイバーはその隙を狙って、さらに剣を豪快に振り続ける。

その一太刀一太刀はさっきまでとは比べ物にならないパワーを感じる上、重い。

受け流そうにも、受け流せず受け止めてしまっしか攻撃を防げないスバルは苦しい表情を出す。

さっきまでとは別人だと思えるように……

「凄い!!セイバーの大反撃だ!」

「剛剣のパワーにスバルに衰えてもあの神速の剣速。まるで嵐の様な猛攻だ。あれじゃ流石に防ぐのも苦しいだろう」

ウツソはセイバーの反撃に驚き、光翔竜は騎士王の猛攻は凄まじいものだを見る。

あれならスバルは反撃する余裕もないはず。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

剣を振るうたびに力を増して速さも増す。

セイバーの攻撃はまさに嵐その物だった。

一方のスバルはそれを防ぐ事すら苦しく、完全に受け流す事はできず徐々に攻撃を受けてしまい、チヨビチヨビと血が出てしまう。

「うづ……… 凄い猛攻… 完全に護りきれない！」

「テアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

さらに容赦なく繰り返える連続剣。

パワーもスピードも、コレでもかとうがり続き、セイバーはスバルに反撃を与える隙も与えない上にその護りも少しずつ崩れていく。一撃一撃の剣が重く、そして凄まじい威圧感を放っている。

「ハアアアアアアアアアアアアアアア！！」

気迫を込めた剣はさらに威力を増し、速くなっていく。その攻撃はまさに、斬撃の竜巻であった。

騎士王としての全力全開か、もしくは新たな力の芽生えなのかは知らない。

だがこのままいけばスバルの護りは崩れてしまう。

それだけセイバーの攻撃は協力である。

スバルはセイバーの攻撃を受ける度に、セイバーから何か伝わってくる。

剣士としての気迫、そして絶対に勝とうとする騎士王としての信念。こんな相手と自分は戦っているのかと思うのであった。

(何て重い剣!!まさか…これが騎士王の本当の力!?)

さっきまで手加減してたのか、もしくは潜在能力最大限発揮なのかスバルは分からなかった。

しかしさらに倒しにくくなったにも関わらず、どこか嬉しそうに笑い出すスバル。

(だけど、心が……騒ぐ!!)

コレがライバル同士の戦いなのかと確信し、戦いに対する好尚心や楽しさも芽生えなかった。

「どんなに速い剣でも、追い込ませるほど攻めれば手出しできないって訳ね」

「攻撃こそ最大の防御……セイバーめ、ようやく本領発揮したか！」

凜とギルガメッシュも、セイバーの大反撃に安心した。

「確かに今はア…アイツが有利だけどよオ……あの蒼髪の女ア……」

一方通行は、一件セイバーが有利に見えていてもスバルにまだ何かあると疑うような目で見ている。

それは彼女もただ押されているだけじゃなく、反撃の際を狙ってい

る眼をしている。

一方のスバルはセイバーの急激な猛攻に護るのに精一杯の様子であった。

だが彼女は一方通行の予想通り、一瞬の隙を狙っている。

「ハアアアアアア!!」

セイバーが上段の構えを取り、さらに大きな一撃を与えようとする為^レに振るった刹那の瞬間だった。

「連蒼^{れんそう}!!」

スバルが神速抜刀で対抗し、セイバーの攻撃に対してのカウンター攻撃に対して攻撃を炸裂する。

当然その攻撃は剣のぶつかり合いによる轟音が響きだし、カウンターのよる一太刀によって攻撃をはじき返されたセイバーは体勢を崩してしまふ。

何とか立て直そうとするが……

カキイ!

スパアーン!!

「ぐあアア!?!」

何と、一瞬のうちにスバルが刹那の瞬間移動による居合切りを炸裂し、セイバーに一太刀をあびせる。鎧に大きな斬れ跡は出来てしまったが、多少なまで血が出てもそんな大きな傷じゃない為、セイバーはすぐに立ち上がる。

だがスバルの更なる剣技に驚愕の表情を隠しきれない。

今のは神速居合による攻撃で、相手の攻撃をはじき返した後、さらに神速の速さで納刀する。

さらにその納刀による鏢と鞘のぶつかりによる音が聞こえた瞬間、さらに刹那の瞬間移動による超神速によるダツシュで神速の居合切りを炸裂させる必殺技である。

すなわち、神速抜刀 神速納刀 神速抜刀と言う3つの連携の動きをする事で初めて可能にする事が出来る。

ある意味、絶技。

しかし、本来ならばセイバーはコレを食らったから深手の傷は負っていたのだが…スバルが刀を鞘に納めた事で何か仕掛けてくると危機感を感じ出し、すぐさま僅かに体を後ろに下げた事からそこまで大きな一撃は受けていなかった。

「やっぱりそう簡単に行かないか……じゃあこれで!!」

スバルは刀を鞘に納めて抜刀術の構えを取る。

そして『蒼刀術』の中でも激剣とも言える剣技を炸裂する。

「無刃・疾風静激!!」

刹那の瞬間移動でスバルの姿は消えるが、無数の蒼い斬撃の鎌鼬が神速の速さで次々と発生しセイバーに襲い掛かる。

「あれは、三成の究極奥義!？」

家康はスバルの『無刃・疾風静激』を見て驚きだした。

そうコレは、石田三成が使うBASARA奥義と同じ技である。

三成の弟子であるが、まだ会った事のない者の技を何処で覚えたのか不思議に思う。

実際は、3年前の訓練所でサナダによってゲーム雑誌で見せたゲームに登場するキャラの技リストに載っていたのを偶然と見たスバルが、自分流にアレンジして編み出したのである。

一方のセイバーはそれを無言で剣を連続に振るい、次々と斬撃を押し返すように叩き出す。

次々と響きだす轟音。

だがセイバーは必死にそれを防ぐ中、僅かだがスバルの姿を少し見えた。

「そこだ!!!」

その隙に一閃を食らわせ、スバルは防ぐが吹き飛ばされる。

だが宙に浮かばせた体を一回転させて綺麗に着地する。

そして鞘を左脇に納めて、背中に背負っている『ペンドラゴブレイド』を抜き出すとスバルは大きく飛翔する。

右手の『ティルヴィングエア』には蒼い風が螺旋のように刀身を包みだし、左手の『ペンドラゴブレイド』は紅い炎が燃え上がって刀身に包みだしている。

「双刃・風炎滅魔！！」

ドカーン！！

2つの剣を同時に振るう事で、風によってメラメラと火力があふれ上がった炎が爆炎と化して斬撃よりも大爆発的な威力を放つ。その威力は魔力ランクならオーバーSランクは達成する。しかしセイバーは大きくジャンプして回避した為、今の魔法を交わしだした。

さらに攻撃に仕掛けようとすぐさま攻撃を開始する。

「ウオオオオオ！！」

「テアアアアア！！」

そしてさらに繰り返される2人の激剣。

2つの魔剣を素早く連続剣に振るうスバルと聖剣を力を込めて振り続けるセイバー。

一件、見た目はただ2人に斬撃が纏っているようにと攻撃が全て防がれているように見えるが、良く見てみると2人は互いの剣を少しずつ当たっていて守りを固める余裕は無いのである。

「………なんと言う戦いでござる。……コレほどの剣の腕を持った者が異世界にも存在していたとは……」

「ああ、まったくござ……」

2人の戦いに驚きだしている剣心に、左之助が近づいてきた。

「左之助!？」

「今、あの2人の戦いはただの合流戦でもなく、チームの為でもない…。そして、魔剣士と騎士王の名にかけた戦いでもねエ…」

左之助が来た事に多少驚く弥彦。

そして左之助はこの戦いが単なる対決じゃないと言いだす。

「命よりも重く、あの2人にとっても最も大切なものであって気高く輝きだす魂…誇り高き剣士としての魂のぶつかり合い!!」

スバルとセイバー。

お互いに女の身でありながらも、強き信念の元で剣を握み剣士として生きてきた。

その思いが重なり合い、2人が互いに好敵手^{ライバル}として認め合い、勝利を譲らない大激戦を繰り返してる。

*

一方の黒神、源外、スカリエッティ、ヴィヴィオ、プレシア、修羅スバルの6人もその戦いに注目するあまり、だんまりとなっていた。源外とスカリエッティは、以前のアーサー戦以上にスバルが戦いに力を入っているかの様に見えていた。

「蒼の字め、ライバルと遭遇したようじゃな」

「ああ、彼女の魔導士の常識をはるかに超えた戦闘は何度も見てきたが、今回はそれをもはるかに超えた強さを発揮しているようだ」

源外とスカリエッティは驚きだしながらも言い出す。

それもそのはず、スバルはセイバーと言う異次元を超えた好敵手と出会った事で彼女の中に眠る新しい力が芽生えた。しかもそれはセイバーと同じである。

2人は数多くの宿敵と戦ってきたが、ライバルと呼べる強者は存在しなかった。

それが今存在した事で、彼女達の中に眠る何か別の力が芽生えたように力が発揮している。

今でも剣を連続に振り続けて斬撃の嵐を放っている2人の戦いは、コレまでの戦いが小さな存在と思わせそうな勢いにある。

「何か凄い戦いだけど……スバルお姉ちゃんもセイバーさんも楽しそう……」

「え？」

思わぬ台詞を言い出すヴィヴィオにプレシアも啞然と驚く。

「勝敗関係なく、戦いを楽しんでいるような気がして……まるで、剣をぶつけ合いながら踊っているような気がするの」

「剣舞のぶつかり合いって言いたい訳？」

「うん……そうかもしれない」

ヴィヴィオにとってはこれは、剣舞と剣舞のぶつかり合いにしか見えなくなった。

確かに2人の剣のぶつかり合いは、凄まじく魂を込められた誇りをかけた真剣勝負。

それは自分こそが最強の剣士である証を譲れない奪い合いでもある。

だが同時に、それは魂のぶつかり合いによる2人の剣舞が共鳴しあ

う美しさが見える。

一振りの太刀と思いを込めた力、そして鍛え抜かれた技、そこにある。

「貴女の言う事もわかります」

と修羅スバルが真剣な目線で戦いを見届けながら言い出す。

「修羅のスバルお姉ちゃん？」

「修羅の世界でもあれほどの勝負は見た事ありません……何が2人をあそこまで力を発揮させるのかは知りませんが……1つだけわかった事があります」

「ほう……それは一体」

修羅スバルが分かった事をスカリエッティは興味深く聞き出す。

それは誰もが考えた事がなかった台詞である。

「この小説の私は、剣聖殿の……坂田銀時の後継者だと言う事に」
『！？』

スバルが銀時の後継者？

そんな事は自分達も考えた事はなかった。

だがスバルが剣を持ったきっかけは銀時に助けられた事がきっかけであるから、それは不思議ではない。

しかしだからって後継者と言う程までは考えられなかった。

「坂田銀時の後継者……か」

それを聞いた黒神は、果たしてスバルが後継者となれるのかどうか興味を持ち始めた。

*

一方の銀時は真剣な表情でこの戦いを見届けている。

銀時も今までスバルが戦ってきた姿を見てきたが、今回のセイバーとの対決は今までとは比べ物にならない強さを発揮していると見える。

それはスバルがセイバーを好敵手^{ライバル}と認め、互いに力を最大限に発揮してぶつかり合っているようだ。

「好敵手^{ライバル}との対決で今まで以上の力を発揮するって…少年ジャンプに出てくるバトル展開見てエなもんじゃねえか」

と銀時は言い出す。

しかしだからってあそこまで白熱した戦いはジャンプ以外では見たことなく、実際に見るのは初めてである。

チームとしては勝利を求めているが、それ以上に銀時はスバルがこの戦いで自分の剣士としての信念…いや侍としての信念を貫き通せるかを見届ける。

（スバル……相手は間違いなくお前が戦ってきた者の中でも最強かも知れねえけど……だからってただ勝つだけじゃお前が本当に求めた強さには進められねえ……）

勝利よりも大事な事。

「オオオオオオオ!!」

そこでセイバーは大きく剣を構え、落下速度を利用して聖剣を大きく構えてさらに大きな一撃を放とうとする。

対するスバルは『ティルヴィングエア』を鞘に納め、ペンドラゴブレイドを両手に持って構える。

「ペンドラゴブレイド!!」

《The consent! I use a cartridge
e road!!》

ガシャンx8

と『ペンドラゴブレイド』は8発のカートリッジをロードする。

するとスバルの足元から魔方阵が浮かび上がる。

だがその魔方阵は蒼ではなく何故か紅く、スバルの瞳と髪の色が真紅の赤に染まりだし、『ペンドラゴブレイド』は真紅の炎に包まれて人間15人分の長さを誇る炎の巨大な刀身となった。

「何イイ!?!」

「バーストエンド・クレイモア!!!」

スバルは振り返りにしようと、灼熱の紅蓮剣を豪快に振るいだす。一瞬の変化に驚きだしたが、それでもセイバーは攻撃態勢に入る。

「ハアアアアアアアアアアアアア!!!」

聖剣に己の魔力をさらに込めて、大きく振るうと黄金の斬撃がスバルの『バーストエンド・クレイモア』と直撃する。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
ア！！！！！！

そして発生した巨大な大爆発。

その爆炎はスバルもセイバーも包み込み、他の参加者達にも衝撃波を放つ。

『きゃあああああああああ！！！！』

「チィ、何て威力だ！！！」

「うわああ！！！」

「ぐう……………！！！」

「ちィ……………セイバーの奴、大丈夫かよ？」

その衝撃波のあまりに気を抜いたらこつちも吹き飛ばされる程の威力が合った。

そして爆発による煙が徐々に薄れていくと、そこには多少ボロボロとなっているセイバーがいた。

そして目の前には、『ペンドラゴブレイド』を背中に背負っていて、蒼い風が螺旋のように刀身が包まれている『ティルヴィングエア』を持ったスバルがいた。

彼女は続けて超大型砲撃魔法を放つようだ。

先ほどの『バーストエンド・クレイモア』は本来であればカートリッジ1発ロードで発動できる魔法。

だが8発ロードしたのは、残り7発分の魔力をスバルの究極砲撃魔法を放つための布石であった。

(これで決める!!)

魔法の中だけならスバルの最強の砲撃魔法として注目される魔法。
それが今放たれる。

「エア・アルテマ・ギガブレイカー!!」

螺旋のように超高速回転し全てを破壊尽くす蒼い魔力砲が放たれた。
その威力はなのはの『スターライト・ブレイカー』に双壁の威力を
持つ。

これをセイバーに食らわせれば勝てる。

だが……

「!!」

セイバーの左手から光の球体が現れると、先ほど出てきた第3の宝
具『アヴァロン全て遠き理想郷』が現れた。

それを何と、聖剣『エクスカリバー』の刀身を納める。

これはどういう事なのか意味も分からなかったスバル。

だが、コレこそがセイバーの最強の宝具であり一発大逆転の切り札。

「アヴァロン全て遠き理想郷!!!!」

セイバーは鞘で納めたままの剣を自分の目の前に地面に突き刺す。
するとその鞘が最強の砲撃魔法『エア・アルテマ・ギガブレイカー』
を受け止める。

「!?!」

それにスバルは驚きです。
しかもそれだけじゃない。

「てえあああああああ!?!」

何と、セイバーはそのまま豪快に鞘に納めた『エクスカリバー』を
振るう。

それにより、受け止められた砲撃魔法が跳ね返されてスバルに向か
って襲い掛かる。

ドカーン!!

「!?!」

『『スバルウウウ!!』』

コレには銀時も流石に驚き、フェイトとティアナにいたっては思わ
ず悲鳴的な叫びでスバルの名を呼ぶ。

セイバーの宝具『アヴァロン全て遠き理想郷』。

鞘を展開して自身を妖精郷に置くことで、外界からのあらゆる物理
干渉を無効化する。

それはどんな宝具による攻撃をも無と化す最強最大の防御力を誇る
宝具。

砲撃魔法が跳ね返されて、スバルに直撃し大爆発した拠点に大きな

煙があふれ出ていた。

そしてその煙が徐々に薄くなっていくと、そこにはかなりの大打撃を受けてしまいボロボロになったスバルがいた。

しかも彼女のいる場所は、クレームと化してしまった拠点の中心部。

まさかこんな奥の手をセイバーが持っていたことに予想外であったとスバルは思う。

「まさか……魔法を跳ね返す鞘が存在してたなんて……」

「あらゆる魔法をも受け止め、全てを無に貸す理想の護り……しかもそれだけじゃありません」

とセイバーが剣を鞘から抜き、鞘に魔力を込めるとその鞘が黄金に光りだす。

すると信じられない事に、セイバーの傷が徐々に回復し、戦う前の状況ほどじゃないが5分の3ぐらいは回復した。

これを見たスバルは信じられない程、疑いながらも見る。

「傷が……治った!？」

「アウテロン全て遠き理想郷は傷を癒し、老化を停滞させる万能治療を込めています。コレこそが我が真の宝具。伝説の聖剣に秘められた理想の守りです」

と、説明しながらセイバーは完全復活を果たした。

一方のスバルには絶対ピンチに追い込まれてしまうのである。

「なア、そんな妖術をまだ隠し持ってたとは……!!」

これには思わず春蘭がありえない程に叫びだす。

全ての魔法を防ぎ、さらには治療も万全に回復するなど、理想の名

に恥じない宝具。

「信じられないけど、騎士王に名に恥じない力を持っているのは確かね」

「それに対し、あの蒼髪の嬢ちゃん……せつかくの切り札で攻めたのに、予想外の counters を喰らっちゃまいやがった……」

「これじゃ、状況は圧倒的に悪いよね」

華琳と政宗は、これはスバルの大ピンチだと見る。

取って置き、『エア・アルテマ・ギガブレイカー』を、逆に受けてしまった上相手が回復してしまった以上……勝ち目は無いのではないかと疑う。

「それが……貴女のサーヴァントとしての……騎士王としての力ですか………だったら！」

スバルは強引にも立ち上がる。

そして蒼い魔方陣が浮かび上がり、スバルの背中から蒼く輝きだす片翼が生えてきた。

戦闘機人にしかないIS、その中でも最強と謳われる能力『ラケナロク・ブルーウィング蒼翼』である。

背中に天使の片翼が生えたスバルの姿を見て、一部の者が見とれていた。

「……綺麗……」

「なんと言つ美しさじゃ……これは何かの魔法とやらの一種なのか？」

弥彦も家康も、まさに天女と思えるようなスバルの姿に魅力された。だがそれは美しさが上がっただけじゃなく、スバルの力を全解放す

るためのISであった。

「なるほど……それが貴女の切り札と言う訳ですね？」

「うん……『ラゲナロクナルヴィング神々の蒼翼』と言ってね、己の身体能力を上げて空中移動も可能にし、そして魔法の威力も上がる究極のISなんだ。今ここで、本当の取って置きを見せてあげるよ！」

『テイルヴィングエア』を前に向けて刀身を抜く構えをする。
そして……

「テイルヴィングエア…カートリッジロード」

I o p e r a t e i n b r a i d f o r c e , a f
u i l p o w e r .

ガシヤン×11

機械質の音声と共に薬莢ケースが排出ロードされる

それは七発ではない。柄から7発、鞘から4、合計11発のカートリッジをロードするスバル。

それらと共にスバルの周りに超巨大な蒼い魔方陣が浮かび上がる。

「カートリッジを11発!？」

始めてみる10発以上のカートリッジロードにフェイトは驚きだす。
これまでスバルが放ったカートリッジは最大7発。

だが鞘にもカートリッジが4発装填していた事に思いもよらなかった。

だが銀時とティアナは分かっていた。

スバルがカートリッジを11発もロードするのは、あの魔法…いや

魔剣技しかない事に。

「お兄ちゃん！」

「ああ……スバルはあれを使う気だ……」

以前にアーサー戦の時に見たスバルの究極奥義。

侍と魔導士の力が極限に放たれてさらに交じり合い、そして放たれる究極魔剣技である。

「行くよ、セイバー！！私の全てを……貴女にぶつける……」

覚悟を決めたスバルはセイバーに叫びだす。

それを効いたセイバーは、何かとてつもない危機感を感じとって聖剣を強く握りだし、構えだす。

するとセイバーの剣の刀身が黄金色に極限にまで輝きだした。

「ならば、私も取って置きを見せてあげましょう……」

セイバーが放つのは、全ての魔力を聖剣に収束し究極の斬撃として放つ最強攻撃。

蒼き究極魔剣技に対し、人類最高の聖剣の全てを放って対抗する。

黄金に輝く聖剣は、まさに王が振るうに相応しく、人の手では生み出せない神々しさが感じられる。星に鍛えられた、聖剣の中でも頂点に立つ宝具である。

「綺麗……！」

「アレが、セイバーの剣……」

その神々しい輝きを放つセイバーの聖剣に、全員が見惚れる。

それはスバルも思わずも見惚れてしまうほどである。
その美しさは、一瞬、今の状況を忘れさせる程だった。

「侍の魂を持つ魔剣士よ……我が渾身の一撃を受けてみよ!!」

全ての魔力を聖剣に込めた事で、その輝きはいつも以上に増している。

己の剣士としての誇り、魔力、そして信念を聖剣に込める。
全てをこめた聖剣の力を最大限に発揮し、最強の好敵手ライバルにぶつける。

「エクス約束された

」

魔力が溜まり、セイバーは聖剣を高く振り上げる。

「カリバー勝利の剣!!!!」

真名を解放し、セイバーの聖剣『エクスカリバー』が振り下ろされた。

魔力を聖剣に込め、その一振りによって極光砲として放たれる究極の斬撃。

それがスバルに向かって放たれた。

「嘘!?何あれ!?!」

「SSSランク……いやロストロギア級に入るよ!!」

セイバーの放った『エクスカリバー勝利の剣』。

それは魔導士ランクの最高ランクである+SSSですら上回り、ロストロギア級に入るほどである。

あの生命型ロストロギア『ゾーマ』出すら倒せるほど。

いくらスバルでもあれを対抗するのは不可能とティアナとフェイトは思った。

誰もがそう思う中、銀時は違った。

以前、アーサアが放った『ペンドラゴ・カリバーン』をはるかに上回る究極の斬撃。

まさに騎士王が放つ技であると驚かされる。しかし何故か分かってしまう。

たとえどんな強力な技であろうと、どんな強大な力であろうと、自分を貫き通して全てを斬る。

それを可能にするのが、侍としての最大の強さ…己の武士道を貫く強き精神と魂。

「自分の武士道^{ルール}を貫けよ…」

と銀時は他の誰もが聞こえない程の声で言い出す。

眼を瞑ったスバルは、ゆっくりと『ティルヴィングエア』の柄を握りだした。

その瞬間、究極奥義が炸裂する。

「絶蒼^{ぜっそう}！！」

スバルの姿が消える。

姿を消すと、信じられない事に極大な大量の蒼い斬撃が発生し、何とセイバーの放った『^{エクスカリバー}約束された勝利の剣』の極光砲をバラバラに切断する。

スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパ

アーン！！ スパァーン！！ スパァーン！！ スパァーン！！

「!?!」

「何だア!?!」

「嘘オ!?!」

「エクスカリバー約束された勝利の剣が破られただ?!」

これはセイバーだけでなく、一方通行、凜、ギルガメッシュの3人も驚きだした。

人類最高の聖剣によって放たれた究極の斬撃が、大量の斬撃によってバラバラに切断するなど信じられなかった。

しかも、その蒼い斬撃はセイバーの周りから大量発生する。

「!?!」

今までの連続斬撃発生とは違い、今回は極太で触れただけでもかすり傷程度ですらかなりの大打撃となる多くの斬撃。
一体何があつたのか疑ってしまう。

「な……何だありゃ!?!」

「斬撃が……一斉大量発生してあの小娘を囲んでいる!?!」

左之助と俺はコレも魔法の一種なのかと疑い、見た事もない連続斬撃に今まで以上の中で驚きだす。

「何あれエ!?! 斬激が結界のように放たれている!?!」

「す……凄エ!?!」

ネプティー又と零斗も、スバルの放った絶技に驚きを隠しきれなか

った。
ゆりと音無にいたっては、常識を大幅超えているので声を上げる余裕も無く圧巻されていた。

上からも斬撃、前から斬撃、左右からも斬撃など、逃げ道を防ぐようにセイバーを閉じ込めてバラバラに斬る為に放たれている斬撃は、スバルがあまりの異常なまでの速さで連続に剣を素早く振っている斬撃結界。

しかしそれは魔法の一種だと冷静に考え、セイバーはもう一度『全て遠き理想郷』を使用する。

「ならば、もう1度全て遠き理想郷で!!!」

と、『全て遠き理想郷』を前に向けて全ての斬撃を防ごうとするが

……

ガキーン!!!

「なア!!!」

何と、『全て遠き理想郷』の効果が発生せずそれ所が大量の蒼の斬撃によって、『全て遠き理想郷』ははじき返され大きく飛ばされてしまった。

そして凜達の手前に地面に突き刺さって落ちた。

スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!!
スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!!
!!! スパアン!!! スパアン!!! スパアン!!!

蒼の斬撃がさらにセイバーを包み込むように襲い掛かり、ついにはその連続攻撃を受けてしまうセイバー。

セイバーは剣で防ごうとするも、何処からでも脅威の速さで連続発生する蒼い斬撃を全て防ぐどころが守りを固める事ですら不可能である。

（速すぎる！！何だこれは……アウトローン全て遠き理想郷でも防げないなんて……いや、それどころが魔法じゃないと言う事はこれはただの剣技！？）

だが先ほどかた伝わる大量の魔力は一体なんなのか不思議に思う。さらには突如姿が消えてしまったスバル。

（！？……もしや！！）

セイバーはその原因を理解した。

そうこれは全ての魔力によってスバルは強化魔法らしきもので身体能力が爆発的に強化された。

それにより、刹那の瞬間移動の移動速度が信じられない程に上がって、他にも剣の太刀の威力も急激アップし、さらには剣素振りも神速をはるかに超えた領域、超神速の連続居合切りとなった。

それ以外何も考え付くモノがないとセイバーは思う。

強化魔法に大量の魔力を込めて放てば、確かに究極の身体能力を得ることが出来るが……その反面、使用后に己自身にさえも傷を負わせてしまうかもしれない諸刃の剣の為、誰しもがそう易々と制御できるものではない。

しかし、スバルにはそれが可能である。

銀時の様な豪傑なる剣を得られない己の腕力不足に悔やみながらも、

力と対極となる技を磨き上げる為に己が命を賭けて鍛え上げ、神速を使った剣術。

そこから派生してスバル自身が生み出した『蒼刀術』。

脅威の速さは、炸裂すれば体にも大きな影響を与えて壊してしまう。だがそれを制御して耐えられるには、速さとその速さに耐え切れる精神。

力不足を悔やみ、それでも諦めず速さを活かした剣術を鍛え抜かれたスバルだからこそ出来る究極奥義。

それこそが『絶蒼』である。

(そんな……そんな事って)

スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！

「ぐああああああああああああああああああ！！！」

蒼い斬撃は全て、容赦なくセイバーを切り刻む。

防ぐ事も不可能、交わすことも不可能、打ち破る事も不可能、全てにおいて絶対的に斬撃を繰り返す超神速連続攻撃。まさに絶技。

スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！
スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ スパアン！！ ス

2人とも、スバルがまさかここまでやるとは思いもよらなかった。ウツソにいたってはだんまりであった。

「……………これが、絶蒼！」

光翔竜はスバルの『絶蒼』を見て驚愕の表情を表していた。かつて、『竜の爪』と言う組織のリーダー真王竜を破った技の事を知っていた。

だが実際に見てみるとまさに絶技と言う程の威力を持っていた。あれなら真王竜が負けるのも無理は無い。

「これは驚いたな……………まさかスバル殿にコレほどの奥の手を持ってたとは……」

「スツチイ凄いアル！」

桂と神楽も感動した。

侍と魔導士の共存した絶技。

全てを切り裂く斬撃は、誰も真似できないと考える。

他のリリカル銀魂メンバーも驚愕する。

先ほどセイバーが放った黄金の閃光は、まさにロストロギア級に入る。

それなのに、スバルはそれさえもバラバラに斬りまくった。

もしかすれば、『絶蒼』はロストロギアでも斬る事が可能なのかと誰もが思う。

「……………全てを斬り裂く、無限の斬撃……………」

スバルの究極魔剣技『絶蒼』を見て、啞然とした表情をする家康。

神速抜刀術から超神速術による連続斬撃と、先ほどの黄金の極光砲をも切り裂く太刀。

そして間合いを囲むように大量斬撃を放ち、交わし、守り、反撃をも許さずひたすら敵を無限に斬るその剣技は、まさに絶技。

「にじファンには、まだあの様な見知らぬ強者がおると言う訳か」

先ほどの修羅スバルと良い、魔剣士スバルと良い、異世界のスバルは見知らぬ強さを持つ者ばかりだと家康は驚きだした。

コレは参考になったと、自分所のスバルにもそれを参考させて鍛え上げようと決意する。

「セイバー!!」

凜は思わず叫びだし、無我夢中に倒れているセイバーに向かって走り出した。

「まさか、セイバーが負けるなど……」

「…あんなもん、どう対抗したって無理だろ!!」

セイバーの敗北が信じられないギルガメッシュと、『絶蒼』を防ぐ事じたいが不可能だと思おう一方通行。

だれもがスバルの勝利だと思った瞬間だった。

「っアアアア!!」

と、突如セイバーが体中に血だらけになりながらも立ち上がる。それを信じられないような眼で誰もが見る。

凜にいたっても、突如立ち上がったセイバーを見て止まりだした。

まさか『絶蒼』を受けても立ち上がると思いきもよらなかった。

確かに交わすことも、防ぐ事も、反撃する事も出来ないが……絶対
に耐えられないとは限らなかった。

それだけじゃない。

セイバーは先ほど『アフアロン全て遠き理想郷』によって治療を受けていた為、
ダメージをそんなに受けていない状況になっていた。
後は己が気迫で耐え抜くだけである。

その僅かな確立を見事に勝ったセイバーは、まだ立ち上げられる。

「……………うう！」

一方のスバルは、『ラゲナロクナールヴィンゲ神々の蒼翼』が消えてしまい、さらには全ての
魔力を『ぜっそう絶蒼』の威力を大きくする為に強化魔法にかけた結果……そ
の効力が切れて魔力も尽きた。
さらにはポロポロの状態で、『ぜっそう絶蒼』を使用したことで、痛みが体中
に暴れるように伝わりだす。

「て、おいおい！！スバルがやべえじゃねエのか!？」

と弥彦は様子がおかしいスバルを見て戸惑う。

それもそのはず、『ぜっそう絶蒼』は最強の技であり同時に諸刃の剣でもある
からだ。

「確かに、あの縮地を超えた速さに、超神速連続居合による猛攻は
凄まじかった。だがぜっそう絶蒼は人間の領域をはるかに超えた禁断の最速
奥義。放った後はそれ相当の代償が支払われるでござる」

あれほどの異常なまでの速さで動けば、肉体に相当な筋肉痛が走っ

てしまうと剣心は見抜いていた。
しかし同時にあれは『天翔龍閃』を連発するような技な為、一撃必殺に近い絶技である事は違いない。

にも関わらず、それに立ち上がるセイバーの気迫は剣心も驚きだした。

「おいおい、あの技食らっても立ち上がるんかよ!？」

流石に銀時も予想外であった。

彼女を立ち上がらせるのは、騎士王として、そして剣士としての誇りにかけた執念。

しかし、セイバーも先ほどの『エクスカリバー約束された勝利の剣』によって魔力が尽きた。

お互いに魔力0で体のほうも限界に来ている。

それでも、彼女達は立ち上がる。

「ちょ、これ以上は限界でしょ!！」

「そうよ、2人共ここまでよ!！」

ティアナも凜も、これ以上やったら2人が死んでしまうと思いつめようとする。

だが……、何故か2人の後姿を見て逆に2人が止まりだした。

何故か分からない。

しかし、スバルとセイバーの戦いは誰も止められない……いや、止める権利が無いと2人の頭の中で浮かびだした。

立っているだけでも限界なのに、それでも2人は止まらない。

「まさか……あのような絶技を持っていたとは……宝具無しで約束クスカリバーされた勝利の剣を破るなど……正直言っただけ驚きました」

「私もだよ……まさか絶ぜつ蒼そうを受けても立ち上げられるなんて……そんなセイバーが初めてだよ」

互いに改めて相手の力量に驚きだす。

もはやいつ倒れてもおかしくない状況に、2人はまだ戦おうとする。剣士としての誇り、強い信念、あやうる譲れない何かの為に戦おうとしている。

「正直言つと……戦いたい相手と戦うのが事がこんなにも楽しいとは思ってもありませんでした……それ以上に貴女のその剣技には驚きました。それを成し遂げたのも……貴女の中に侍の魂があると言う事ですね」

スバルの力の源、侍にしかない屈強なる魂の侍魂。

それはどんなに普段だらしが無い者でも輝かせる事でどんな相手にも負けない屈強なる戦士にさせる魂。

「……ギントキと良い……貴女と良い……侍とは不思議な存在ですね。私達サーヴァントでさえも凌駕するその強さ、そして何かを護ろうとする屈強なる信念。私は徐々に分かりました。貴女は私と剣を交えながらも、自分の大切な何かを護りながら戦っている事を」

自分とは違い、スバルは勝つ事よりも自分の大切なものを護る為に戦っているとセイバーは確信する。

彼女が護っているもの、誇り高き侍の魂と自分の武士道ムシド。だからこそ彼女は強いとセイバーは確信する。

それ以上に、そんなスバルにセイバーは勝ちたいのだ。

「決着をつけよう、蒼き魔剣士…いや蒼き侍よ…」

もう魔力がない状況でも、セイバーは残りの力を込めて最後の一撃を放とうとする。

それはスバルも同じである。

「お互いにこの最後の一撃が限界のはず。私と貴女、どっちが最強の剣士として存在するのがふさわしいかを……」

「最強の剣士なんて興味はないけど……自分の大切なものを失うつもりはないよ」

スバルにとっては最強の称号は眼中に無い。

しかし戦う理由は他にある。

「セイバーもそうでしょ……。自分の大切な何かを譲らない為に護る。もうお互い百も承知のはず……。だったらその為に覚悟を決めて相手を倒すしかないよ」

「…ええ、そうですね」

たとえ、この場で相手の大切なものと倒しても大切な何かを護り抜き、進みだすのは戦いの常識。

今ここに、魔剣士と騎士王の対決に終止符が打たれようとした。

居合の構えを取るスバルと、聖剣を構えるセイバー。

もはやそれは剣士としての覚悟を決めた気迫を放っている。

「貴女がどんなに大切なものを護っているのかは知っている……そ

れでも」

「私の大切なものを護る為に……」

『『貴女を倒す』』

僅かに残った力でも全てを込め、凄まじいダッシュで突撃する。

互いに違えれど、その2人は似ていた。

形は違っても、2人は1人の男との出会いにより新しい何かを手に入れた。

1人は、大切なものを護る侍の強さに憧れ、その理想郷を追いつく為に剣を持った蒼き魔剣士。

もう1人は過去に進んだ道が間違っていないと理解し、そして剣を持つ騎士として新たな道を進みだす伝説の騎士王。

たった1人の男が原因となった、たった1つの思い

己が進みだす道を進み続ける屈強なる信念

剣の鎖

□ □ …… ツ ツ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア
ア
ア
ア !!

『 ！ 』

間合いに入った瞬間、お互いに残りの力を込めて剣を振るいだす。

ガキイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイインー！！

剣と剣がぶつかる轟音が響きだし、2本の剣が高速回転しながら宙に舞う。

そしてその剣が地面に突き刺す。

その剣は、スバルの魔剣『ティルヴィングエア』とセイバーの聖剣『エクスカリバー』であった。

「……引き分け……だよな」

「……ええ……そのようです……」

剣を弾き飛ばされ手放したスバルとセイバー。

互いの最後の一撃のぶつかり合いによる衝撃が大きく、剣を握っていたその手に衝撃が伝わって剣を握る圧力が弱まってしまったのが原因である。

力尽きたスバルは、両膝を地面に付き、セイバーにいたっては倒れる、

もはや立っているのも不可能だそうだ。

「まさか引き分けと言う形で終わるとは……出来れば決着をつけた

かったですね」

「あはは……その割には、凄く満足そうだね」

そんなセイバーを見て、思わず苦笑して言い出すスバル。

決着は付けなかったが、セイバーは何故か心地良い気分だった。

好敵手との対決がこれほどまで楽しめるとは思いもよらなかった。

「今まで数多くの戦士と戦ってみましたが、今回のように魂が騒ぐ剣のぶつかり合いは初めてです。貴女と戦って分かりました」

敗北をし、セイバーは何かに気づいた。

自分がスバルに負けた最大の原因を。

「私は騎士道を貫き通す為に貴女を倒す事だけを全て込めた……だけど貴女は、自分の武士道の為に戦うだけじゃなくその武士道と誇り高い魂をも護ろうとした……」

セイバーは、スバルに勝って騎士道を貫き通そうとしていた。

それはセイバーの騎士としての強さでもあり、彼女が最強の騎士王である証でもある。

だがスバルは、自分の武士道を貫き通すだけじゃなくその武士道も守り抜いた。

「まさか自分の信念すら護りながら私と対抗していたとは……いや、だからこそ貴女は強いのですね」

スバルの強さの秘訣を理解したセイバー。

だがそんなセイバーも己の騎士道を貫き通そうとスバルに対抗に戦い、騎士王としての強さをスバルに刻みだした。

「今なら分かります…貴女こそ真なる屈強な剣士。そんな剣士と戦えて誇りに思います」

スバルもセイバーも、剣士としての誇りがあつたからこそ対極に渡り合い、魂のぶつけ合いをした。

自分も相手も全ての力を出し切り成長させるこそが、好敵手^{ライバル}同士の戦いである。

「貴女のような剣士と戦えた事に、悔いはない」

セイバーは満足だった。

スバルはまだ銀時に及ばなくても、己の武士道を貫き侍としての魂を輝かせるその強さは本物だった。

だからこそ戦えてよかった。

決着はつけなくても、喜びと満足感が浮かび上がっていく。

そんなセイバーにスバルは、言い出す。

「……貴女も自分の信念と騎士道を貫いた……それは分かった。それに、私もセイバーと戦えてよかった…おかげでまた強くなれた気がするしね…」

剣を交え、互いにその気持ちを知った。

スバルはセイバーが自分との戦いにどんな気持ちで望んでいたかを。そしてセイバーと戦えた事で、スバルはまた強くなれた気分がした。

「だから、また戦う機会があつたら……今度は私から来るから……その時までもつと強くなつて見せるよ」

「……承知しました」

再選の約束を言いしたスバルに返事をするセイバー。
スバルは立ち上がって、地面に突き刺さった『ティルヴィングエア』
を抜いて鞘に納めて後ろを振り向く。
そしてこの場を立ち去ろうとする彼女にセイバーは言い出す。

「貴女との戦いは、絶対に忘れません……力に対抗する為に貴女が
鍛え抜かれたその剣技は偽りじゃない事も……」

セイバーの一言に、スバルは止まりだす。
そしてそんな彼女にもスバルは言い出す。

「私も忘れないよ……貴女は騎士王として、そして剣士として私に
全力で相手してくれた……。決着はつけられなかったけど、勝敗は関
係ないよ……」

そう言ってゆらりゆらりしながらもスバルは自分のチームの所に進
みだす。

そんな彼女の背中を見て、小さくても何か大きな力を秘めているの
が分かる。

セイバーは誰も聞こえないような声で「……私もまだまだですね」
と言い出す。

「流石に……無理しすぎた……か……」

と限界がきてついには倒れてしまうが……彼女の体は地面に付かず何
かに包まれた感覚が伝わる。

それはスバルの目の前に銀時が立っていて、倒れ掛かった彼女の体
をその身で受け止めた。

「……えへへ……ただいま……銀さん……」

もう動けなくても、その笑顔を銀時に見せるスバル。

「私、貫いてきましたよ……自分の武士道を」

「……ああ……良くやったよ……スバル……」

自分の武士道を貫いてきたスバルを褒めだす銀時。

それと同時に、彼女はもちろんセイバーもまた一段と強くなったかも知れないと思った。

そして、再び『リリカル銀魂ゲスト杯』が始まるのであった。

第二百二十七訓：ライバル同士の対決は他の対決とは違い、見ていると興奮するほ

黒神

「真に申し訳ございませんが、今回は質問を答える余裕が無いので『銀八先生コーナ』は休ませてもらいます。ですが質問はちゃんと保存してありますのでご安心を。」

かがみ

「それ以上に私の出番をもっと増やせやゴルアアアアアアア！
！（怒）」

黒神

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

と最近の出番の少なさにかがみは黒神に怒りをぶつけてポコポコにする。

こなた

「うわぁ……かがみ大胆だねえ……でもまあ、次回から出番が増えるから大丈夫だよ」

と言う訳でスバルVSセイバーの対決の決着付きました。

特にエターナルさんの感想を待っています。

スバル

「次回、「早い者勝ち」……テイクオフ」

第二百二十八訓：早い者勝ち（前書き）

『リリカル銀魂』と『とある運命』に助っ人キャラ登場。

一回戦も広範に入る中、ついに初戦突破チームが登場！！

黒神

「『リリカル銀魂 Strikers』が始まります！！」

第二百二十八訓：早い者勝ち

スバルとセイバーの大激戦。

それは剣士としての誇りをかけた技と力のぶつかり合いだった。名勝負とも言える大激戦の結末は引き分けと言う形に終わった。

だが、他のゲスト達はもちろんリリカル銀魂メンバー達も2人の力量には感服した。

スバルは戦い終えた後、あまりの疲労でまともに動けないので銀時にお姫様抱っこされてチームの元に戻り、フェイトもティアナも心配して駆けつける。

「この馬鹿スバル！！」

「ヒイ！」

突如、怒鳴りだしたティアナが思いつきりスバルに怒鳴りつける。それは先ほどの戦いでスバルが相当なまでに無茶したから怒っていて心配していたからだ。

「何であんな無茶な事をしたのよ！！下手してたら死んでたじゃないの！！」

「ティアア、ごめんなさあ〜い！！」

とティアナに心配かけた事に謝罪するスバル。

「まあ、その辺にしとけ。こいつは無茶してても自分の武士道^ルを貫こうとしたからよオ」

と銀時はティアナを落ち着かせようと言い出す。確かに無茶はしたが、スバルがセイバーとの戦いで何より自分の武士道を貫き、そしてその侍としての魂を護る為にやった事だと銀時は誰よりも知ってる。たとえ試合に勝ったとしても、その魂と武士道を護れなければ敗北したのも当然である。

「……まア、お兄ちゃんがそう言うなら／＼」

と顔を真っ赤に染めたティアナは義兄の銀時の言つとおりには落ち着く。

一方のフェイトはまた一段と強くなったスバルに驚いていた。以前、自分と模擬戦した時よりもさらに強くなっている…と言うよりあの時以上に本気を出していたように見えない。

それもそのはず、あの模擬戦はあくまでスバルが自分の新しくパワーアップした『ティルヴィングエア・ドラグーン』の力を試し、そしてフェイトのパワーアップした力を試す為に自覚無しに力をキープしていたのであった。

フェイトももつと魔導士としてだけじゃなく、身体能力も鍛えれば『バルディッシュ・デスサイズ』と『ライキリ』の力をさらに引き出せて、スバルのように魔剣士としての力を得られると確信した。

（大会終わったら、自主練しなきゃ）

と、フェイトも自分自身を鍛える事を決意した。

一方の『とある運命』もセイバーの予想外の大苦戦する戦いには驚いていた。

セイバーが見込んだ以上の力量を持っていたスバルの身体能力はサ

ーヴァントをも凌駕するほどであった。

そして何よりスバルの恐ろしいところは、どんな相手にも屈指ず大切なものを護る強い信念、侍の魂であった。

「危なかつたわね、セイバー」

「ええ、今までの戦いの中でも私の心を騒がせる戦いでした。彼女とはいずれもう1度手合わせしたいものです」

とセイバーは大苦戦しながらも、スバルと戦えた事に満足していた。一方のギルガメッシュは、先ほどのスバルの戦いぶりを見て、以前に銀時と戦った事を思い出す。

どんな相手でも修羅の恐怖を怯えさせて圧倒する侍の力を。

(あの娘は……ギントキの後継者と言う訳なのか?)

とギルガメッシュはそう思うしかなかった。

「えー、ただいまのデュエルマスの結果、『チーム・リリカル銀魂』のスバル、『チーム・とある運命』のセイバーの対決は引き分けとなりましたが、2人は予想外に疲労していますので2チームにはそれぞれ2人の助っ人を要します」

『助っ人!?』

とまさかここで助っ人が登場してくれるのかと『リリカル銀魂』も『とある運命』も大助かり。

正直、この大会はハードが高い以前に罰ゲームによるダメージが大

きすぎる為、大苦戦する。
だからこそ助っ人はありがたい。
勝ち続けられる可能性が高くなるからだ。

そして、それぞれのチームに助っ人として現れたのは…

「皆あゝ、お待ちせエ」

「待たせたな、加勢しに来たぞ」

と『リリカル銀魂』に現れた助っ人は、ポニーテールの騎士の様な雰囲気を表している女性と頭に狼の耳が生えているロングヘアの女性。

そう、その2人はシグナムとアルフであった。

『『アルフ!!』』

『『シグナム副隊長!!』』

と、まさかのシグナムとアルフの援護に驚く、ギントキ、フェイト、スバル、ティアナの4人。

「オメエ等、どうしてここに!？」

「いやア、ついさつきプレシアから銀時達が黒神の極悪な大会に強制参加されているから助っ人しに来てほしいって頼まれてね、加勢しに来たんだ」

「それに他の小説からゲストとして登場している強者達が続々とやって来ると聞き入れ、私もアルフ同様助っ人しにきたのだ」

と、どうしてここに来たのかと訊きだす銀時に答える2人。

しかもシャマルの手作り極悪料理が罰ゲームだと聞いていたが、そ

れでも黒神の極悪な罰ゲームから救いたいと言う気持ちを知り、銀時達は2人に感謝する。

そしてシグナムが『レヴァンティン』を構えてスバルに言い出す。

「と言う訳で……スバル、さっそく私と勝……」

ドカア!!! x 2

『状況をちゃんと見ろや、このバトルマニアアアア!!!』
「ブフェアアアアアアアアアア!!!」

とバトルマニア癖で状況をまったく見ないシグナムに容赦なく蹴飛ばすティアナとアルフ。

実は先ほどのセイバー戦での大激戦にシグナムの騎士魂が燃えて、さらに強くなったスバルと戦いたいと言う闘志を燃やしたのであった。

一方の『とある運命』からはと言うと……

「一方通行!!!助けに来たぞオオオ!!!」

「ミサカ達が来たからには安心だよ」とミサカはミサカは自信満々に言ってみたりイイ!!!」

と一方通行に駆けつけてくる2人の少女。

1人は軍兵の様な雰囲気を表している銀髪の眼帯。

もう1人はかなり幼い明るい生活をしている。

その2人こそ、凜達と同じ『とあるリリカル銀魂 / STAY NI
GHトストラトス』に出てくるラウラ・ボーデヴィツヒと打ち止めである。

「おめエ等ア、来てたのかア!？」

とまさか、2人が登場してくる事に予想外だと驚く一方通行。そう、『とある運命』の助っ人は彼女達であった。

「貴様等、どうしてここに!？」

「呼ばれたの私達のはずじゃ!？」

とギルガメツシュとかかなりの疲労で体が動かせないセイバーに背中を貸している凜が驚く。

その理由をラウラと打ち止めは言い出す。

「実は、うちの作者が黒神に是非とも私達を出して欲しいと言われてな」

「それでミサカ達2人も助っ人としてゲスト参加してみたミサカはミサカはゲスト呼びに嬉しそうに言ってみたり!!」

と2人は説明する。

理由はともあれ、ラウラと打ち止めの助っ人は凜達にとっても嬉しい誤算であった。

「とりあえず、2人が入れれば心強いわ。セイバーはもう…」

と凜はセイバーの戦闘不能に大打撃を受けたと苦しんでいたところだった。

戦力不足のピンチに2人が来てくれた事はありがたい事である。

「ああ……とてつもない戦いだっただ…後は私達に任せろ、セイバー」

「ええ、お願いします。私はしばらく戦えそうにも無いので…」

申し訳なさそうにと、後は2人に任せようとするセイバー。
2人はセイバーの代わりにと助っ人として『とある運命』には入る。

「私達が来たからには、もう安心だぞ一方通行」

「ミサカ達が力になるつとミサカはミサカはミサカはヤル気満々なりイ！」

とラウラと打ち止めは一方通行を助ける為に駆けつけた。

罰ゲームの脅威は2人も嫌と知っている。

だが、だからと良い愛する者を見過ごせない。

それが2人がゲストとして賛成した理由である。

「……………あんがとうよオ」

と一方通行はお礼を言い出す。

すると2人は顔を真っ赤にしながら嬉しそうに笑う。

*

「助っ人が入るなんて聞いてないよー！」

「とにかく……………コレであるの2チームが厄介になったな」

と助っ人の存在を羨ましがるウツソと、『リリカル銀魂』と『とある運命』を警戒する光翔竜。

助っ人として現れた2人もかなりの手誰だからだ。

「と言う訳で『チーム・とある運命』さん…ルーレットをお願いし

ます」

「はいよオ……」

ポチッ！

と黒神が言い出すと、次の出番として一方通行がルーレットを回すボタンを押し出す。

ルーレットは高速回転し、止まりだすと出た眼は『4』であった。そしてその4マスの先には、ペナルティマスであった。

「げエ！！」と一方通行は嫌な顔をする。

何せここの罰ゲームは厄介で精神的ダメージが異常なまでに大きいからだ。

そして『とある運命』は4マス進んでペナルティマスに止まると……。

《リーダーに黒手紙》

とモニターから意味不明な内容が現れた。

『とある運命』のリーダーは凜であり、空から黒い手紙が降ってきた。

「あ……手紙だ」

と凜は降ってきた手紙をつかみ出してその内容を読み出そうとする。その内容は……

神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽二死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ
神楽ニ死ヲ月詠ニ死ヲ…ブツブツ

「いんやああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！！！」

と、この世とは思えない邪気と憎悪がまつた手紙内容に、思わず
悲鳴を上げて大量の汗を流し手紙を破る。

すると「キジャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア！」と言う魔物の悲鳴的な声が響きだし、手紙からも
がき苦しむ黒い霧の悪魔らしき存在が現れ、ついには花火のように
爆発して消え去る。

これこそまさに、この世全ての悪ことアンリマユであった。

「一体何これ！？てか何この内容！！明らかに神楽と月詠に対する
憎しみを籠っているわよ！！てかさっきの霧の悪魔らしき存在何イ
！！てか何もかも怖すぎんだけどオオオオ！！」

と凜は青ざめて何が何だか輪辛いまま無差別ツツコミを炸裂する。
一体この手紙にどれぐらの憎しみを込めたのか創造しづらい…と
言うより想像したくない。

「アンリマユなのか…いやそれとはまったく別の邪気を感じたよう
な…」

「つうか誰だア!!こんなおつかねエもんを書いた馬鹿はアア!!」
ギルガメツシユでさえも青ざめて震えてしまい、一方通行は思わず
叫んでしまう。

セイバー、ラウラ、打ち止めにいたってはだんまりと怯えていた。

「何か知らないけど、気にしないほうが良いみたいだな」

とノーヴェは青ざめて言い出す。

次は『ナンバーズ』でルーレットを回すのはトーレ。

しかしトーレは先ほどのペナルティマスでゴリラと接吻してしまった
事から、乙女の初めてを奪われたショックから立ち直れなかった。
そこでノーヴェが代わりにとルーレットを回すスイッチを押す。

「とにかく良い数字を!!」

とボタンを押し出し、ルーレットが高速回転した。

そしてそのルーレットはピタッと止まり出た目は『10』であった。

「よし!!」

「ナイスノーヴェ」

と良い数字を出したノーヴェに褒めだすドゥーエ。

ドゥーエは気絶しているトーレを抱えて入るのであった。

そして10マス進みだすと、そこには銀色のマス『デュエルマス』
があった。

「お、デュエルマスか！よっしゃア、どんな相手だろうとぶっ飛ばしてやりあぁ！！」

とヤル気満々であった。

先ほどのスバルとセイバー戦で彼女も負けられないという気を持ち出し、戦いの闘志を燃やしていた。

だが内容は誰もが予想外していた事であった。

《速い者勝ち》

これもまた意味不明な内容であったが……それは誰もが望んでいたボーナスゲームである。

「おーっと、ここで全員参加のボーナスゲームが発生しました！！これから全チームにガジェット退治をさせてもらいます！！」

「制限時間は10分、より多くガジェットを撃退した2チームはゴールまで進めさせよう！！」

黒神とスカリエッツィの説明を聞いて誰もがピカアーっと光りだす。こんな極悪ゲーム、さっさと逃げ出したいからだ。

「なお、助っ人入っている『チーム・リリカル銀魂』と『ある運命』は6人の内4人だけが参加できるようになっておる。誰が出るかは決めてくれ」

と源外の説明を聞いて、銀時達は誰を参加させるかを考える。

「山崎イイイ！！ルー殿オオオ！！デイエチ殿オオオ！！これは俺

達が一気にゴールできる最大チャンスだぞオオオ!!」

『はい!!』』』

「ルー!」

最下位どころが出番もまつたくない『真撰組』にとつても大チャンスである。

この気を逃せば間違いなく罰ゲーム行きである。

「よっしゃー!!エリイ、ツッキー、リインフォース、私達も行く
アルヨ!!」

「はい!!」

「承知した…」

「一気にシャマパイ回避チャンスがきた!!」

ヤル気満々で声を上げる神楽に、エリオ、月詠、リインフォースも本気を出す。

シャマパイと言う脅威を避ける為に。

「おお、これは初戦突破の最大の勝機!!」

『ヤル気出てきたぞ!!』

桂もエリザベスも、ここで一気に初戦突破を狙う。

桂は先ほどの九兵衛とチンク of 激戦にボロボロになりながらも何とか勝つて戻った。

それでもシャマパイだけは避けたいから勝つ気で行く。

「ああ、桂の旦那もエリザベスの旦那がいてくれれば俺も助かるって、いつまでセフィロスコスプレしてんだ桂の旦那!？」

「桂じゃない、カツウロスだ!」

「しつけエよ、気につてんのかよ!??」

今だセフィロスのコスプレ衣装のままにいる桂。
そんな桂に呆れでツッコミだすヴァイス。

「よし、私も桂さんの力になるんや!!」

はやてにいたっては桂と一緒に戦える事でヤル気満々である。

「零斗、一気に抜け出すわよ!!」

「おう!!」

ネプティーヌや零斗も大チャンスだと考え、ヤル気倍増である。
先ほどのゆりのミスを取り消せるからだ。

「音無君、これは負けられない戦いよ!!もし足を引っ張ったりしたら……」

「アア!!」

「ヒイ!?!」

とゆりが音無に警告しようとする、ネプティーヌがとてつもない怒気を放ってゆりに鋭い視線で睨みつける。

「あんたさア、ついさっきまで足ひっぱいて置いて何言ってるの! ?もしツートップに入れなかったら……分かってるわよね?」(ゴゴゴゴゴゴゴ!!)

「ひいひいひい!!承知しましたアア!!」

そう、『マイティアテム』は先ほどトップであったにも関わらずにゆりの痛恨のミスで『真撰組』同様最下位である。

それにより、ネプティーヌはとてつもない怒りを抱えていて、ゆり

がもしまたミスしたら地獄行きにさせようとしているのだ。

(怖エエ、なるべく怒らせないようにしたい!!)

とネプテューヌの怒りをみてそう決意する音無。

それ以前に彼もシヤマパイは食べたくないからだ。

「ようやく、ド派手なpartyに参加できそうだな」

「そうね…たまには運動するのも良いし」

と6本の刀を抜いて構えだす政宗と、死神の大鎌を握りだす華琳。

いくら2人でもこのゲームに長時間長く参加していればこっちが罰ゲームを受けるはめになる。

「星、我等も行くぞ!!」

「うむ…先ほどの戦いで体中がうずまっていたからちよつど良い」

春蘭も星もヤル気満々で互いに得物を握りだす。

スバルとセイバーの戦いは武人の魂がぶつかり合う真剣勝負。

2人にとつても負けられない意思が芽生えたのだ。

「OK、Let's Party!!」

政宗を中心に『キングドラゴン』が出勤する。

「コレは明らかにかがみんと私は無理だねエ……というわけでウッ

ソ、光翔竜、頼んだよ」

「かがみん言うなアア!!」

これはどう見ても戦いなれていないこなたとかがみんには不利な為、

ウツソと光翔竜が参加する事になった。

「て作者もかがみん言うなアア!!!」

「ガンダムが使えないのが残念だけど……こつ見えても身体能力には自信あるから」

「はい……一人でも多く助っ人がいればこつちも助かります。ここから一気に初戦突破狙いましょう」

「はい!!!」

ウツソと光翔竜は力を合わせてより多くガジェットを破壊する事を決意する。

「おつしゃあああ!!!ようやく大暴れするときが来たぜエエ!!!」

と嬉しそうに喜ぶ左之助。

だが本心ではこんな極悪大会をさつさと抜け出したい一心である。

「八神、こいつはとつとと初戦突破したほうが良いみたいだぜ?」

「ああ」

とさつさとこんな大会を抜け出したいと左之助と同じ気持ちを抱いている京と庵。

「それに、あんなスゲー戦いを見た後だから負けられねエからなあ」

と京はスバルとセイバー戦を見て、さらに闘志を燃やし始めた。

「このまま長いすれば黒神殿の悪夢から抜け出せぬ……だからワシは絶対に負けられない」

家康も黒神の大会に長引けば長引くほどこっちの身が持たないからすぐに初戦突破したいのである。

そして4人は手を合わせ、（俺は嫌々だが）お互いに活を入れる為に叫びだす。

「ぜってえ勝つぞオオオ!!」

『『おお!!』』

「…ふん!」

『ファイター』が気合を入れる中で、助っ人が手に入った『リリカル銀魂』と『とある運命』も参加するメンバーが決まった。

『リリカル銀魂』からはフェイト、ティアナ、シグナム、アルフ。
『とある運命』からは凜、ギルガメッシュ、一方通行、ラウラ。

この8人が出るようになった。

なお、銀時は木刀を失いスバルはすでに体力の限界の為に戦闘不能。セイバーも戦う余裕も無く、打ち止めはセイバーと共に見守る事に決めた。

「悪いな…ここだって時に力になれなくて」

「うんうん、銀時もスバルもさっきの激戦で深手を負っているですよ?」

「ここは私達に任せて、2人は休みなよ」

「フェイトさん…アルフさん…頼みます」

フェイトとアルフに任せると言われ、銀時とスバルは4人に任せよ

うとする。

銀時は平気そうだが、獲物の木刀が折れてしまい修羅スバルとの激戦でのダメージが残っている。

スバルにおいては体力も魔力も限界で、銀時にお姫様抱っこされるほど動けない状況である。

「お兄ちゃんやスバルだけじゃない所を他の連中に見せてあげましょ」

「ああ、血が騒ぐからちようど良い」

とティアナとシグナムはヤル気満々であり闘志を燃やしていた。

「つつ訳だ、お前はセイバーとそこにいろよオ？」

「うんつとミサカはミサカは貴方のご武運を祈ったり!!」

一方通行の言う事を聞く打ち止め。

力になれないのは悔しいが、ここは自分が行っても役ただずである事は自分も嫌と分かっている。

だからこそ自分が今出来る事は一方通行の言うとおりにして無事を祈るだけであった。

「皆さん、すみません……こんな肝心なときに私は……」

とセイバーは申し訳なさそうに謝罪する。

先ほどのスバル戦で自分も魔力も無くなってまともに戦えないほどに限界まで来てる。

「無理しないで。正直、あの魔剣士・スバルがセイバーを追い込むほどの手誰だった事は私も予想外だったわ」

「だからこそ私が加勢しに来たのだ。今は傷を癒す事を最優先にす

るんだ」

「後の事は我等に任せよ、セイバーよ。ガジェットと言うガラクタは我等が全て滅ぼす」

役ただで申し訳なさそうに謝罪するセイバーに、凜、ラウラ、ギルガメッシュは励ますように言い出す。

セイバーが頑張った分、今度は自分達が頑張る番であると。

「感謝します、凜、一方通行、ラウラ」

「あれ、我はア!？」

とセイバーに無視された事に悲しむギルガメッシュ。

それほどまでに嫌われてるのかと思ひ知らされた。

そして各時点での準備が出来たところでステージに大量のガジェットが現れた。

ガジェットを始めてみるゲスト達にとっては最初は驚いたが、それほど強そうには見えなかった。

「制限時間は10分、それでは!!!スタート!!!」

ピーー!!!

増え鳴らしによりスタートの合図が上がり、ガジェットの大群は一斉に襲い掛かる。

「はあああああ！！！！」

ネプテューヌはパープルハートへと変身する。

そして両手が光りだすと、光が消えてそこから聖剣らしきものが現れる。

その剣こそが『エックスセイバー』だ。

「うおりゃあああああああああああああああ！！！」

ネプテューヌが最初に突撃し、ガジェットを次々と斬る。

銀時、桂、スバルにも引けをとらない剣の腕を誇っている。

「ガジェット狩りじゃあああああああああ！！！」

しかも今回のネプテューヌ・・・いやパープルハートは一段と気合を込めている。

それもそのはず、さつきゆりに大きな足を引っ張りをされてしまったからその怒りもガジェットにぶつけている。

「俺も続け！！！」

零斗も刀を構えてマイティ真拳を炸裂する。

「マイティ真拳：天雷龍の舞！！！」

と目にも止まらない連続の大量の面打ちの剣が炸裂する。

上段の構えによる神速の連続攻撃はまさに、天を舞う龍が怒り出してその影響で無数の雷が振っている。

さらに本当に剣を振った後に稲妻が振ってきた為、斬撃と雷撃を同時に受けてしまう。

零斗のマイティ真拳もネプティーヌの強さとまったく互角。次々とガジェットを破壊していく。

「シャマパイだけは嫌だアアアア！俺は死にたくないイイイイ！」

「私だつて負けられないわよイイ！！」

と音無とゆりも銃を撃ちまくっているが、ガジェットは銃では倒せない為、倒れないのであった。

「はあああ！！」

とウツソはガジェットの急所らしき所を思いっきり蹴り、機能停止した。

肉体的にも鍛え上げている為、ガンダム無しでもそれなりの強さを持っている。

パアーン！ パアーン！

と銃を取り出して、撃つ。

その弾丸はガジェットの急所を貫通してガジェットは破壊された。

実はウツソの銃はゆりと音無のとは違って改造された威力抜群の銃のため、ガジェットをも倒せる。

「シャイニング・レイ・シャワー！！」

と光翔竜も左手から光の球体を放ち、それを天に浮かび上げらせる。するとその球体が巨大化して、一気に無数の光の矢が放たれるようにと大量のガジェットが串指しにされていく。

「こう見えても、『竜の爪』のメンバーの1人ですよ」

と光翔竜は言い出すと、凄まじい速さで光り輝く剣を振るう。

光翔竜の戦いぶりを見て、こなたとかがみは啞然としてた。

光翔竜があんなにも強かった事に。

「H a a a a a a a a a a a a ! ! !」

一方の伊達政宗も、次々とガジェットを斬りまくっていた。

しかもかなり楽しそうに笑っていて、ヒートアップしてきた彼は一度剣を鞘に納める。

そして一気に6本の刀を抜き出す。

「WAR DANCE ! ! ! ! !」

政宗の十八番、『六爪流』が炸裂する。

竜の爪を放ったその剣技は先ほどの一刀流よりも速く力があり、次々と大量のガジェットを斬りまくっていた。

まるで竜が舞うように

「Y a i H a i ! ! !」

さらに6本の剣を豪快に振るうとその蒼い稲妻が包まれた衝撃波が放たれる。

それはA A A ランクに達成するほどの威力を持っており、まだまだ彼は本気じゃないようだ。

ただ暴れまわっているだけじゃない。

竜の逆鱗の如くの動きで多少荒っぽくも圧倒している。

「我が道を塞ぐ傀儡の集団よ…身の程をしりなさい!!」

と華琳も政宗に続くかのように死神の鎌を振り続け、ガジェットを切断しまくる。

竜と並ぶ霸王としての実力は衰えていない。

「我が剣は我が王の為、この剣で貴様らを斬ってくれろ!!」

春蘭も豪快に剣を振り続けてガジェットを斬る。

と言つよりも破壊に近い。

華琳を優勝させる為にと言つ希薄が彼女を強くさせている。

「我が昇り龍の槍、その身に受けてみる!!」

星も槍を構え、凄まじい速さでの連続突きを炸裂する。

ガジェットが次々と突かれて機能停止する。

竜と霸王の共存は伊達じゃない圧倒的強さを発揮している。

「オラオラオラオラ、オラアアアアアアアアアアアア!!!!」

左之助は蹴って殴って頭突いてなど繰り返してガジェットを破壊しまくる。

大暴れできる喜びが左之助に力を増しているのだ。

「こつこつを求めて俺はわざわざゲストに呼ばれてんだアアア！」

喧嘩屋らしい台詞を吐く。

だがその実力は本物であり、ガジェットごとくでは左之助の相手には勤まらない。

「東風の乱舞！！」

家康も左右のフックを連続でそして高速で放ち、ガジェットを粉々に破壊する。

左之助とは違い、家康は拳のみの体術で対抗している。

「はアアアア！！」

「うおおおお！！」

と京と庵も、それぞれ赤い炎と青い炎を放つ。

京は『百八拾弍式』と言う京の十八番とも言える超必殺技の1つ。

身体を捻り、渾身の炎のハードブローを放つ。

その爆炎の周囲にいたガジェットを焼き払う。

庵も『裏千弍拾九式・焰甌』で高い軌道で飛び込み、ガジェットを掴んで押し倒し火柱を浴びせ、さらに『鬼焼き』で焼き払う。

しかも『鬼焼き』で放った巨大な炎が螺旋のように放ったため周りのガジェットも巻き込んで焼き払う。

4人にとってはコレは絶対に負けられない勝負であるからだ。

「ガンドー！！」

凜は両手で魔力弾をマシンガンのように打ちまくる。
とてつもない勢いで次々と倒している。

ゲイト・オブ・ハルロン
「王の財宝!!!」

ギルガメッシュも無数の宝具を背後から撃ちまくる。
だが先ほどの家康が止まったハプニングマスのせいで半分の宝具が破壊されて威力は半減にされている。
それでも凜に引けをとらない数のガジェットを破壊しまくる。

「ウラアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

と一方通行も超人的な能力で拳をガジェットに当てた瞬間、そのガジェットだけじゃなくさらに周りにいたガジェットも衝撃波によって破壊される。

しかも襲ってくるガジェットにも、地面を強く蹴るだけでとてつもない衝撃波が放たれガジェットは一方通行に触れることも出来ず消滅する。

「ハアアアアアア!!!」

ラウラも専用IS『シュヴァルツエア・レーゲン』の力を発揮し、ワイヤーブレードでガジェット達を捕獲し、それを思いっきり振り回して他のガジェットに投げ飛ばして破壊する。

「食らえ!!!」

その直後、両肩に2門装備したレールカノン『パンツァー・カノニア』で電磁投射砲を放つ。

その威力はかなり高く、なのはの『デイバイン・バスター』級は誇る。

「行け行けエエとミサカはミサカは応援しまくりなり!!」

遠くから見守る打ち止めは叫んで応援しまくる。

一方のセイバーも黙って見守っていた。

「又オオオオオ!!」

近藤は豪快に剣を振って、ガジェットを次々一刀両断する。

「テエヤアアア!!」

山崎も刀とミントトラケットによる二刀流で、ガジェットを打ち返して斬る。

地味な彼も、今は護りたい者がいるのでパワーアップしている。

「発射!!」

デイエチも自身の身長よりも長いサイズの巨大な狙撃砲『イノーマスカノン』で巨大なエネルギー砲を放つ。

そのエネルギー砲が容赦なくガジェットを黒焦げにする。

「我は乞う、小さきもの羽ばたくもの、言の葉に答え、我が命を果たせ 召喚」

ルーテシアも、手甲型のデバイスである「アスクレピオス」を使い足元に召喚魔法陣を展開させ、そこから無数の透明の触手のような

ものを伸ばし、その中にある大量の卵のようなものから、微少の羽がはえた虫を大量に召喚する。

微力ながら攻撃力があり、無数の蟲は大群でガジェットを蝕んで破壊し、さらにはガジェットドローンに進入させて操り同時撃ちさせる。

「うおりあああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ!!」

一方のノーヴェも負けてはいなかった。

スバルの『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』、そしてフェイトの『ライキリ』と並ぶ七星神刀の1つ『カンシヨバクヤ』を両手で逆手持ちする。

その『カンシヨバクヤ』を豪快に振り続け、ガジェットを切りまくる。

さらには回転蹴り、パンチ、など以前の徒手空拳による格闘術をも忘れずに剣術と体術を合成させた異種合成剣術で戦っている。

「行くぜ、カンシヨバクヤ!!」

The consent!

ガシヤンx2

とノーヴェは双剣からそれぞれカートリッジを2つロードさせる。すると、『カンシヨバクヤ』の白刀と黒刀がそれぞれ白と黒のオーラに包まれる。

「ツイン・カオスブースト!!」

とノーヴェが双剣を左右に振ると白い斬撃と黒い斬撃が左右同時

に放たれる。

それによりガジェットを大量にまっふたつに斬る。

以前より強くはなっており、さらにはカンシヨバクヤの二刀流もキレを増してきた。

だがノーヴェは『カンシヨバクヤ』の真の能力をまだ知らない。

『カンシヨバクヤ』の真の能力、破魔の能力と魔力吸収と言う魔導士の天敵能力である。

白刀は相手の魔法を吸収してその魔力を得る。

黒刀は吸収した魔力を放ち、そして魔法を破壊する。

他にも2つの剣を合体させて大刀に変えるフォルムも存在する。

しかしノーヴェはそれを知っても自分流に『カンシヨバクヤ』を使いこなそうとしている。

最も、以前より強くはなっておりAAAランク魔導士級に入るのは間違いない。

そして次々とガジェットを破壊していくところで…

「て見てねエで手伝えやアアアア!!」

とノーヴェは怒鳴って叫びだす。

何故なら、後ろには気絶して倒れているトーレに土下座して高みの見物をしているドウーエとクアットロがいたからだ。

「いやあ〜ん、私こう言う肉弾戦苦手エ〜!!」

「ゴメンね、ノーヴェ。私今、トーレから離れること出来ないから
などと、妹任せにする姉達。

ドゥーエは仕方が無いとして、クアットロに関してはわざとらしい。
だが戦いに向いていない事は確かである。

「チクシヨーーーーー!!!!!!」

ノーヴェは怒りを込めて叫びだし、その怒りをガジェットにぶつけ
様と斬って蹴って殴る。

「ハアアアアア!!」

とフェイトが叫びだすと、『バルディッシュ・デスサイズ』の死神
の鎌が炸裂する。

美しく、そして鋭く、ガジェットを切りまくる。

パワーアップした『バルディッシュ』に合わせるにとフェイトもパ
ワーアップしている。

「行くよ、バルディッシュ!!」

《I understood it!!》

と『バルディッシュ』の死神の鎌の刃から、魔力によって発生した
金色の稲妻が巨大鎌の様な形になる。

「デスサイズ・セイバー!!!!!!」

と大きく『バルディツシユ』を振り、金色の稲妻の刃は三日月型のブーメランのように放たれて大量のガジェットを破壊する。これは明らかに『アークセイバー』が大幅にパワーアップした魔法である。

「クロス・ファイヤー・マシンガン!!」

ティアナも新魔法で対抗し、『クロス・ファイヤー・シユート』を上回る超高速連打発射で、マシンガンのように無数の魔力弾を放つ。これにより多くのガジェット達は蜂の巣になる。

「ウルフ・ウィップ!!」

とアルフは先が牙が生えている狼の顔の様な形をした鎖を無数に放って鞭に用に振り続ける。

そして鎖の先に付いている狼の牙が容赦なく次々とガジェットを噛み砕く。

これはアルフの新魔法である。

「飛竜一閃!!」

一方のシグナムも、シユランゲフォルム状態の『レヴァンティン』での魔法剣を炸裂し、魔力を刀身に集め、繰り出すと同時にシユランゲフォルムの連結刃が展開、魔力を撃ち出す。

炎を纏った純粹な魔力攻撃と鋭い連結刃による巨大な斬撃は『砲』とすら言えるほどのサイズと射程を誇り、一気に30機近くのガジェットを破壊する。

「銀時やスバルだけじゃないんだよ!!」

「私達もパワーアップしている所を証明させてやるわよ!!」

アルフもティアナも、新魔法を得て以前よりはるかに強くなっていく。

フェイトとシグナムもそんな2人を見て安心していた。

「うわぁ、皆張り切っちゃってますね…銀さん」

「そりゃ、お前がセイバーと対抗に渡り合う激戦をしちまったからフェイト達も火が付いたんだろうよ」

スバルがまた一段と強くなった事で、フェイト達も負けられないと言う気持ちが芽生えて強くなる信念が芽生えたのである。

「この前、はやてが行ってただるオよ…フォワード部隊の新人達の起爆剤として欲しいって」

銀時がそう言うと、スバルは『あ!』と踊りて思い出す。

「アイツ等、お前が強くなる度に追いつこうと強くなっていきやがるんだよ……お前を一人にしない為に」

「私を…一人にしない為に?」

どんなにダントツ的に強くなっていても、仲間同士であれば自分の強さに追いつける者がいなければ仲間との連携の時、力を合わせる為に制御しなきゃいけない場合がある。

フェイト達が強くなるうとするのは、ただ負けられない一心だけではなくスバルの仲間である事を続けるためである。

*

「うわあ、皆すごい」

「うんうん、皆順調に戦ってますなあ」

と大暴れして超人な強さを発揮している参加メンバーに感心するヴィヴィオにガジェットを破壊しまくる参加者を見て嬉しそうに頷く黒神。

弥彦、剣心、修羅スバルの3人もリリカル銀魂のメンバーだけじゃなく他にゲストとして呼ばれたメンバーの高い力量に驚きだしていた。

「スゲエ、他にもメツチャ強エ奴もたくさんいやがるじゃねえか」

「確かに…先ほどのスバル殿とセイバー殿に引けをとらない強さを発揮しているでござる」

「ええ、修羅の世界以外でもコレほどの強者が続々と存在していた事は正直驚きます…やはりにじファンは奥が深い」

「ああ……俺も負けちゃいらねえ」

特に弥彦は強者達の戦いぶりに強くなりたい一心を抱く。そんな弥彦を見て、剣心は思いついた。

「黒神殿、もしや弥彦も呼んだのはこの為では？」

と剣心が言うと黒神は言い出す。

「はい、弥彦って第一章と第二章もまともに出ていないようだし、支配者さんの新小説『超リリカル銀魂 StrikerS』大次元鎮魂歌』の準備の為に見通し稽古をさせようと思ひまして。そ

したら思ったどおりに強くなるうとする決心が付きましたね。やっぱり侍はこうでなくては」

弥彦をゲストとして呼んだのはこの為であった。

いずれ大活躍する時に、強者達の戦いぶりを参考にさせて強くさせたほうが良いと考えた結果である。

「それに……特に凄いやえば、あそこでござるな」

と剣心が指を指して言い出す。

その指に刺しているところは……

*

「ハアアアアアアアアア！」

桂：じゃなかったカツウロスが長刀を振りまくって次々とガジェットを斬りまくっている。

以前の刀は『キザラキ』戦で折れてしまい、むやみに『ゼフィロス』を使う事は好まないなので鉄子から新しい刀を打ってもらった。

その刀は以前より長めの長刀であり、これを桂は使いこなしていた。

『キザラキ』の一件以来、桂は己の未熟さを知って強くなった。

そして刀を振り続けてさらにより多くのガジェットを斬りまくる。

「機械からくりごときにこのカツウロスが止められると思ったかアア！」

いや、桂だろ？

「桂じゃないカツウロスだ!!」

いやだから桂だろ!!

「桂じゃないカツウロスだ!!」

いい加減にしやがれヅラアアア!!! (怒り)

「ヅラじゃない桂だ……!! あ、間違えたカツウロスだアアアア
!!」

ああもうきりがねえ!!

とナレーションと馬鹿な会話をしながらも次々とガジェットを斬りまくって力を発揮する。

馬鹿でも強い事は確かである。

『全員、粉々にしてやるわアアアア!!』

と書かれた鉢巻を頭にかけたエリザベスが、両手からガトリング砲を持って撃ちまくり、口からはロケット・ランチャーを放っている。それによりガジェットは粉々になったり大爆発したりなど、破壊活動が次々と発生する。

さらに近づいてきたガジェットにはガトリング砲を豪快に振って吹き飛ばす。

戦闘力は桂に引けを取らない為、ガジェットを圧勝する。

「デアボリック・エミッション!!」

はやても杖から漆黒の巨大な球体を放って、大量のガジェットを重力の暑さで押しつぶした。

なのは、フェイトに並ぶ魔導士の強さは伊達じゃない。

「まだまだアア!!」

と、追加として白い魔導弾を放つはやて。

以前よりも攻めるような勢いで魔法を放ち、ガジェットを破壊しまくる。

「ウオオオオオオ!!」

おお叫びして必死に離れた場所から『ストームレイダー』を打ちまくるヴァイス。

かなり気迫籠っているのかいつもより撃つ速度が速く、弾丸が性格に次々とガジェットを貫通する。

「シャマルの手料理だけはいやじゃあああああああああ!!」

そう、彼はただ優勝よりもシャマルの手作り料理である『シャマパイ』を避けたい一心である。

「ふおわちゃあああああああ!!」
「ハアアアアアアアアアア!!」
「テエエエエエエエエエ!!」

一方、『クイーン』では神楽、エリオ、月詠が中心に大活躍してガジェットを破壊しまくっている。

神楽が豪快に傘を振り回してガジェットを粉碎、そして殴ったり蹴ったりなど破壊しまくって超人的な強さを発揮する。

エリオも魔法に頼らず槍を振り回し、連続突きを炸裂しまくりなど、次々とガジェットを斬りまくる。

月詠も遠距離攻撃にクナイで性格にガジェットの急所を突くように貫通させ、さらに近づいてきたガジェットには小刀で斬る。

「エリイ!! 私について来てアルカアアア!!」

「はいイイイイイイイイ!!」

と神楽はエリオに叫びだす。

「私の傘が火が付くね!!」

神楽はさらに傘に仕込まれたマシンガンを炸裂させ、大量のガジェットを粉々にする。

しかもその弾丸はかなりの貫通力を持っていて、ガジェットが粉々になるのも仕方が無い。

「フオワチャアア!!」

神楽が大きくジャンプして、その落下速度を利用してガジェットを襲い掛かってチョップで一刀両断する。

「ハイハイハイハイハイイイイイイイイイイイイイイ！！」

エリオも超高速突きで連続にガジェットを次々と突き刺す。

神楽との修行でパワーアップしただけはあり、すでにAランク以上に強さを発揮している。

さらに言うと、更なる新魔法をも会得しており以前とは比べ物にならない実力を誇っている。

「ハアアアアアアアア！！！」

一回転して、槍を長く持つて横一線に振るつと周囲のガジェットを間っ二つに切断して斬る。

以前には無い頼もしい強さを誇っていた。

「ずいぶん腕が上げたようで……わっちも教えたかいがあって嬉しいのう」

と月詠はクナイを大量に投げて、空から襲ってきたガジェットを一掃するように串刺しした。

「これから先が楽しみじゃ！」

と嬉しそうに言い出して、小刀で次々とガジェットを斬る。
死神太夫として恐れられた強さは伊達ではない。

3人の強さは圧倒的でガジェットを次々と破壊していく。
そんな3人に、ラインフォースは唖然としていた。

「す…す…いい…神楽に月詠はともかく…エリオがここまで強くなるなんて」

神楽と月詠の強さはリインフォースもよく理解できている。

だがエリオの強さはそんな2人に近い実力である。

もしかすれば近いうちにAAAランクに達成するんじゃないかと思うぐらいに。

「私も負けられないわね…」

と言い出して、リインフォースは右手から白く輝く魔力剣『マナブレイク』を発動してガジェットに突撃して凄まじい強さを発揮して切りまくる。

『闇の書』としての強さは今だ健在である。

『狂乱』と『クイーン』が特に上位に立つほどの勢いでガジェットを破壊しまくっている。

「凄いですね、ここの神楽、桂小太郎、エリザベス、月詠、はやて、リインフォースの強さは圧倒的です」

「ああ、エリオって野郎もまだガキなのにとんでもなく強エ…」

「いや、弥彦もまだ小童でござるつに」

と修羅スバルと弥彦は7人の力量に驚いて、剣心は子供だと言い出す弥彦に呆れてツツコム。

「改めて見ると凄いわね、皆」

とプレシアはここまで凄いと予想外だと驚きだしている。
ゲスト達もリリカルメンバー達もいざとなれば本領発揮している。

「がはははは、やっぱり祭りごとはこうでなきゃいけねエ!!」

と愉快そうに笑う源外。

派手に戦う展開は源外の様なかぶき町の住民は好きなのである。

「そろそろ終わる頃だな」

とスカリエツティが言い出すと、モニターに移っているタイムリミットが徐々に0に近づいてきていく。
そして……

ピイイイイイ!!!!

「そこまで!!」

タイムリミットの合図が鳴ると、黒神が叫びだしてバトルは終了。
大量のガジェット達も退場する。

*

それから黒神、源外、スカリエツティの3人は計算中。
そして計算が終えたところで、黒神がツートップの結果発表をする。

「それでは、最もガジェットを破壊した上位二チームの発表をします！見事、初戦突破したチームは……」

と、突如会場が暗くなるとライトがランダムに動き回りだすように明かりを照らす。

それが数秒間続く中で、一瞬ライトが消えた瞬間だった…

パァーン！！

『狂乱』と『クイーン』の二チームにライトが当てられた。

「『チーム狂乱』 & 『チームクイーン』！！」

最もガジェットを多く破壊したのが、この二チームである。それを知った二チームはと言うと…

「やったぞオオオオオ！！」

『よっしゃあああ！！』

「やったんやアアア！」

「うっしやー、罰ゲーム開放だアアア！！」

「キャほー！！初戦突破アルウウウ！！」

「やりましたアアアアア！！」

「はあ……とりあえず一安心じゃな」

「ですねエ…あはは」

勝利した事に喜ぶ桂、神楽、エリザベス、はやて、エリオ。罰ゲーム回避に大喜びする月詠、リインフォース、ヴァイス。

これにより残りの初戦突破席は後3つになった。

同時に他のチームからは負けた事に強いショックを受けるのである。

一回戦の『危険度マックスルーレット 超早抜け双六』もいよいよ
終盤!!

残りのチーム

- 『チーム・とある運命』
- 『チーム・ナンバーズ』
- 『チーム・オタクガンダム』
- 『チーム・真撰組』
- 『チーム・キングドラゴン』
- 『チーム・ファイター』
- 『チーム・マイティアテナ』
- 『チーム・リリカル銀魂』

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

銀八

「へえい、久しぶりの銀八先生コーナー始まるぞオ。今回のアシスタントはこのゲスト！」

家康

「某、徳川家康！今回はアシスタントとして参加してまいった！」

銀八

「へえい…じゃあまずはこの人、ペンネーム『私にいい考えがある』さん『質問コーナー』」

？修羅スバルに質問

貴女は幽々子様を怒らせてしまいました。さてどうしますか？……
と言つより逃げて！！

？リリカル組と銀魂組に質問

私の所のゆっくりれいむとゆっくりまりさをどう思いますか？

？ヴィヴィオに質問

もしもトーマスの居るソード島に行つたとしたらどの機関車が牽く列車に乗りたい？『…』

家康

「なんじゃこの？の質問！？てか質問かこれエ！…」

銀八

「じゃあねえだろ？とにかく質問の答え！…」

と呆れてツッコむ家康を無視するかのようにな銀八が勝手に進める。

修羅スバル

「そんなの返り討ちにするまでです!!」

銀八

「?の答えは：リリカル組みは『面白い人』が7人、時に暴走する『が3人、他にもさまざまなコメントがあります。それで銀魂組は『ツッコミの修行をすれば鍛え上げられる』が10人、『色々大変だ』とかわいそうに思ってくれてるのが5人、他にも色々コメントがあります」

家康

「手抜きじゃないかそれ？」

銀八

「じゃあねえだろ!!たださえゲストを中心として作ってる長編シリーズは時間かかるし馬鹿作者もスクーリングを終えたばかりだからまともに答える暇ねえんだよ!!」

家康

「何だそれエ!?!」

と呆れてツッコむ家康。

そして?の答えは…

ヴィヴィオ

「可愛いから何でも良いよ」

と答える。

銀八

「と言う訳で『私のいい考えがある』さん、長らくお待ちしました」

家康

「じゃあ次だ！ペンネーム『真王』さん」

レーティア「質問だけどあなた（作者）懲りるって言葉知らない訳？」

真王「では私も、『もしif世界で『魔王神になったなのは』と対峙したらどうしますか？

忠誠を誓って部下になりますか？それとも反逆しますか？」

ジャンヌ「運命の分かれ道みたいだね。私も質問。『ゲストの人もろともみんなコスプレ好きかな？』」

銀八

「ずばり答えます。作者は馬鹿なのでおそらく知らないですよ」

家康

「なんじゃそりゃ!?!」

と家康はまた作者はやりすぎる事があるんじゃないかと呆れてしま

銀八・家康

『2つ目はどっちもむりじゃあああああああああああああ
あ!?!?!』

と忠誠誓っても痛い目に会うかもしれないし、反逆しても殺される。

どっちを選んでも地獄行きは免れない。

家康

「最後のはワシが代表として答えよう……別に普通じゃが？」

銀八

「と言う訳で『真王』さん、廊下に立っていないさい……んで次イ、ペンネーム『龍の骨』さん『質問ですが…』

エリオ

「さて、お仕置きだな」

キャラは両腕が縛られていた。

キャラ

「お、お仕置き？」

何かを期待するような目でエリオを見た。

エリオが手に持っていたのは、羽根だった。

エリオ

「お仕置き、始めるぞ」

そしてエリオは羽根でキャラの脇をくすぐる。

キャラ

「いや、だめえ〜エリオくん」

エリオ

ります

自分達の技の中で一度使ったらもう二度と魔力が使えなくなる究極奥義があったとします。もし目の前にどうしようもない強敵が現れたとしたなら仲間や大切な人達を守る為にその技を使いますか？

二つ目はなのはさんの個人の質問です

もし管理局に世界の平和の為に自分の家族や友達、大切な人達を全員殺されたとしたなら復讐しますか？それともしませんか？……これは少し真剣だが、攻めるような質問だ」

銀八

「たまにこう言う質問が来るから良いんだよ……んで質問の答え」

なのは

「私も大切な者を護る為ならその覚悟は出来ているよ……二つ目は答えたくないけど……もしそうだったら自分自身が壊れてしまうかもしれない……」

と恐怖のあまりに怯えだすなのは。

復讐の魔に取り付かれれば死んだのと同じだと銀時とスバルから聞かされたからだ。

銀八

「と言う訳で『桜』さん、？の答えはなのはは暴走して復讐の魔に堕ちる可能性がありますんで……それで次イ、ペンネーム『J a s

on』さん

『リリカル勢の人に質問です。』

銀魂の最強ともいえるキャラ 鳳仙 神威 阿伏兔
地雷亜に勝てる自身はありますか？

作者に質問です

また上であげたキャラはでますか？』」

リリカルメンバー（スバル・シグナムを覗く）

『絶対無理です！！特に鳳仙は！！』』

スバル

「大切な者を護る為ならどんな相手でも斬ります」

シグナム

「騎士の名にかけて絶対に勝つ！！」

黒神

「神威と阿伏兔の可能性は高いですね」

とそれぞれ答えだす。

銀八

「というわけで『Jason』さん、廊下に立っていなさい」

家康

「うーむ、色んな質問があるなア……じゃあ次はペンネーム『武田

軍兵士 清坂 剣麻『さん』黒神殿、お初お目に伺います。

某、武田軍兵士 清坂剣麻と申します。 新参者の私であります
が、どうぞ、よろしくもうしいたします。

それではさっそく質問があります。 『六課の方々に質問が、
次の内、自信が勝てると言っつのはあり申すか？

1・我らが主君、お館様こと、『戦神霸王 武田信玄』とお館様の
永遠の好敵手である『神速聖将 上杉謙信』のお二人

2・仮面ライダーディケイドご一考（ディケイドコンプリートフォ
ーム、ディエンドコンプリートフォーム、クウガライジングアルテ
イメット、キバーラ）

3・ファイナルダンクーガとダンクーガノヴァマックスゴッド

4・東方不敗マスターアジアとキング・オブ・ハートドモン・カッ
シュ

5・上条当麻、一方通行、浜面仕上（世紀末帝王HAMADURA）
、御坂美琴のとあるシリーズ主人公陣

最後になりますが、これからよろしくいたしもうす。『……ほお、
中々な挑戦的質問じゃなア』

銀八

「だな……じゃあ質問の答え」

リリカルメンバー

『『4のキング・オブ・ハートドモン・カッシュで！』』

銀八

「明らかにガンダム見下してんだろそれエエエ！！知らねエからな！！絶てえ知らねエからな！！」

と呆れて大きくツッコむ銀八。

そんな様子を苦笑するしかない家康。

銀八

「ああしゃあねえ！！」武田軍兵士 清坂 劍麻『さん、感想有難うございましたー！！』

家康

「次が最後の質問じゃ……ペンネーム『サディスト』さんからの質問『銀時に質問。』

この小説ではコラボ作品も含めて女の子達を口説きキスしまくってるけど……最終的にどうするつもり？

全員喰う？

それとも誰か選ぶ？

気になったから答えてくれ。

エリザベスに質問。

こっちの世界は侵略しがいあると思っ？

元侵略者として答えてくれ。』……そう言えば……この坂田銀時、やりすぎだ！」

銀八

「ああ、マジで憎しみに殺したいぐれエに」（ゴゴゴゴ……）

と怒りの怒気を放つ銀八。

同じ容姿なのにあっちが一方的にモテて自分はモテないのはどうしてか納得できないのである。

ちなみに答えは……

銀時

「んなもんだれかを選ぶしかねエだろ……ハーレムなんていつまでも続く訳ねエし」

銀八

「そして選ばれなかった乙女の逆鱗に触れて死にな……け！」

銀時

「んだゴルア！？まじで喧嘩売ってんのかア！？殺すぞごるあ……！」

銀八

「上等だア……！返り討ちにしてくれるウウ……！」

と銀時と銀八は醜い喧嘩を開始する。

その光景に、家康は流石に戸惑うのであった。

止めるべきか、それとも放って置くべきかを。

何はともあれ、質問の答えの続きをする。

エリザベス

『さアな……だけどあそこには色々世話になってるから侵略する気はねエし……し甲斐もない』

とクールに答える。

家康

「……というわけで『サディスト』さん、質問感謝する！！以上で今回の質問コーナーは終了じゃ……」

銀時

「この腐れ天然パーマ……！」

銀八

「てめエにだけは言われたくねエ……！」

と隣ではまだ喧嘩をし続けている銀時と銀八の馬鹿二。

2人は流石にポコポコになって、もはや限界に近づいてきている。流石にまずいと家康は止めようとする。

第二百二十八訓：早い者勝ち（後書き）

黒神

「新番組の『BLOOD・C』のOP『Spiral』は良いですね」

スバル

「うん、何か雰囲気ブラットって感じだけど心が騒ぐような気がして…」

黒神

「後、『BBB』と言う番組のEDの『塵気楼』ってまさか外国のバンド曲だったとは知らなかったなあ」

スバル

「日本だけじゃないってわけだよ、きっと」

黒神

「何はともあれ、スクーリングも終わったしそろそろペースを早くしなきゃですね」

スバル

「と言う訳で次回「ハプニングは何度も起こりやすい」…テイクオフだよ」

第二百二十九訓：ハプニングは何度も起こりやすい（前書き）

黒神

「いやあ、家族旅行ですっかり最新遅れてしまって申し訳ございません。今から最新しますので、では」

シグナム

「『リリカル銀魂 Strikers』、始まるぞ」

第二百二十九訓：ハプニングは何度も起こりやすい

先手を打って初戦突破したのは『狂乱』と『クイーン』。
桂達の底力はまさに戦鬼とも思わせるほどの強さであり、誰よりも多くガジェットを破壊した。

それを見た他のゲスト達も負けられない気持ちを抱いていた。

「コレが、『攘夷戦争鎮魂歌』で活躍する桂小太郎、神楽、エリザベス、月詠、はやて、エリオ、リインフォース、ヴァイスの力って訳ね」

「うおおおおおお！！ますます負けられねエエエ！！『マイティ真拳』の奥深さをさらに知らしめてやるぜ！！」

負けられない闘志を放つネプティーンと零斗。

その為には一刻も速く、初戦突破しなければならぬのである。

一方の、九兵衛とチンクはと言うと……

九兵衛は今だにセーラーームーンのコスプレをしており、チンクにいたってはラウラのコスプレをしたまま。

2人とも桂よりも気に食わない相手にマジで喧嘩していた。

だが結果的に互いに気絶して倒れてしまった所で桂はチームに戻った。

そしてその後、2人は起き上がったがすぐに再戦する。
そして……

「一万年殺しイイイイ！！」

「きゃあああああああ！！やっぱフェイト様サイコ〜〜〜！！」
とかがみが見た光景は、前回の早い者勝ちゲームでガジェットを次々と破壊し続けるフェイトの美しい姿を見とれながらくねくねしている光翔竜の姿であった。
実はさつきから立体映像型モニターで何度も何度も巻き戻ししながらフェイトの活躍を見ていた。
これには流石のかがみも……

「さつさとルーレット回せやアアアアアア！！！！」

ドカアアア！

「あべじ！！！」

と怒鳴って光翔竜に蹴飛ばす。

その後、光翔竜は目を覚ましたようにスイッチを押してルーレットを回し始める。

ルーレットは止まりだすと針が『2』に止まっていた。
とりあえずと2マス進むとそこは……

『『ペナルティマスじゃん！！！！』』

とやってしまったと叫びだす『オタクガンダム』。

そしてその内容は……

《白い魔王降臨》

『『ぎゃああああああああああああああああ！！！！最悪だアアアアア！！！！』』

とウツソ、こなた、光翔竜の3人は青ざめて叫びだす。
彼等は知っていた。
白い魔王といえどももちろんあの人。

「にははははははははははは……ここであつたら1000年目の」
と、聞き覚えのある声と同時にとつもない殺気を放っている1人
の少女が空から現れた。
その人物はもちろん、我等が魔王こと高町なのはであつた。
しかも、両手にはとつもない魔力を込めている『レイジングハ
ト』が握られている。

「感想の時にはよくも散々と言ってくれたわね？」（ゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴ！！
『ヒエヒエヒエヒエヒエヒエ！！！！』』

と抱きながら悲鳴を上げて叫びだすウツソとこなた。
かがみにいたつてはあまりの怖さに震えている。

「で……でたな豚町なのは！！相変わらず少女とは思えない女として
墮ら……」

「デスライト・スタージャツチメントオオオオオオオ！！！！！！」

ドカアアアアアアアアアア！！！！！！

『『塵と化すウウウウウウウウウウウウ！！！！！！』』

と悲鳴を上げながらなのはの超極大魔力砲を食らう哀れな3人組。

その光景を見たかがみは、「あは……あははははははは」と理性が壊れたように哀れみて笑うしかなかった。

この世で見たいいけない者を見てしまったからだ。

「ああああああアアア！…う……ウツソさん達がアアアア！…！」

「ヤバイ……あれは本当にやば過ぎます……！」

と次は自分達の出番であり、ウツソ達が魔王の裁きを受けた光景を見て青ざめる山崎とデイエチ。

「いやア……ようやく俺達の出番が来たなア……てかこれが始めての様な気がすんだけど……まアいつか」

と気楽にルーレットボタンのスイッチを押す近藤。

『真撰組』にとってはこれが始めての出番である。

ルーレットが高速回転する中でピタッと止まりだすと、出た目は『10』。

だがその先は……

「て、ペナルティマスじゃねエかアアアア！…！」

「最悪だけど！？てかようやく出番が来たと思いきや……いきなり罰ゲーム受けエエ……！」

と近藤と山崎は、死の宣告を受けたように青ざめてしまい……ルーテシアにとっては無言でプルプルと青ざめて震えている。

ルーテシアも、このゲームの恐怖の罰ゲームの恐ろしさを嫌と知っている。

そして覚悟を決めた『真撰組』はこのまま10マス進む。

地獄の捌きを受ける覚悟を決めて。

そして止まると、モニターからとんでもない内容が映されていた。

《自爆シマス》

内容は分からないが、近藤達はいやでも分かった。

それは今までのペナルティマスで発生した罰ゲームの中でも最も悪質な罰ゲームであると。

そして突如、『真撰組』の周りに数多くのぶるらじツバキが現れた。

『……ま……まさか……』

『『自爆シマス！』』

ドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカ
ドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカドカ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

剣心も「おろおろ？」と啞然とし大量の汗を流している。

「剣しいいいいいいいいん！！弥彦オオオオオオオオオオ！！
チエンジプリーイイイイイイイイイイイイイイイイイズ！！」

「貴様ア、何を抜け出そうとしているんだ！！」

「一人だけ逃げ出すなんてさせねエ！！！！」

「いやだアアアアアア！！マジで死にたくねエエエエエ！！！！！！」

と今でも逃げ出したい左之助は大暴走する。

そんな左之助を逃がさないようにと京と庵が押さえつける。

ちなみに家康は、今の光景を見て放心状態である。

ここで黒神が、ある事を思い出す。

「あ、アイツ等に『シャマパイ』を食らわすの忘れ……」

「止めるオオオオオオ！！アイツ等十分すぎるほど痛い目に合っているから！！」

と止めを刺そうと考えている黒神が言い出すが、弥彦が真剣に止めようとする。

「アイツは人間じゃねエエエエエ！！！！」

「ええ、このままじゃ私達もあの男の良い様になってしまうわ……
とにかく進みましょう」

と黒神のドS行動に青ざめてツッコむ政宗と、早くゴールしたほうが良いと思う華琳。

「華琳様、この春蘭が必ず勝利を導く数字を当てて見せます！！！！」

と、瞬蘭が張り切ってルーレットのスイッチを押す。するとルーレットは高速回転する。

そして止まったマスは『6』であり、その先はハプニングマスである。

「よし、私達には危害がないマスだ!!」

(その代わり他のteamが犠牲になるがな……)

と安心して言い出す春蘭に対して政宗は呆れながらそう思う。

そしてハプニングマスに止まると出た内容は……

《お天気お姉さんの未来占い》

と、今度は占いがあるのかと意外にと啞然とする政宗。するとモニター画像が突如入れ替わると、そこには……

《はぁい、皆大好きお天気お姉さんこと結野アナでええす》

『け：結野アナアアアア!?!』

と、突如現れたクリステルに驚くりりカル銀魂メンバー。

かぶき町でもお天気お姉さんとして人気が高い彼女は、今では寺門通のマナージャー及び、お天気お姉さんとして大活躍してる。

ミッドチルダでも彼女のお天気情報率は100%であり、英雄坂田銀時と同じ世界に来ている異世界の人物である為、異世界でも偉大な人物であるかもしれないと考えられる。

《それでは、良い一日を》

プツーン！

「逃げんなアアアアアアアア！！！」

とクリステルのありえない予言に政宗は青ざめながら叫びだす。
一体、何で自分が女にならなきゃいけないのか訳分からなかった。
そう考える中……

「とう！！！」

と黒神が素敵な笑顔でシャマル鍋を豪快に投げて、拔群なコントロ
ールで政宗にぶっ掛けた。

「びつぶじおじうおんふおういじょいが！！！？？」

ドサア！！

『政宗エエエエエ（政宗殿オオオオ）！！！？？？』

と、突如得たいの知れないシャマル鍋をぶっ掛けられて気絶して倒
れた政宗に、必死に叫びだす華琳、春蘭、星。

そして次の瞬間、蒼く光だす政宗に驚きだす3人。
その光が収まると……そこには1人の女性がいた。

「Aa……何かおつかねエもんを無理矢理食わされてしまったよう
な……て、どうしたんだオメエ等？」

と、そこにいた美女は男の喋り方で華琳達に聞き出す。

「最悪じゃねえか！！てかこれ戻るのか！？戻るよね！！てかマジで戻りてエよ！！てかなんて事をしてくれ……」

「お姉さまアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ドカアアアアアアアアアア！！

「ネグフオオオオオオオオ！！！！！！」

突如、捨て身タツクル級の勢いで政宗に抱きつく華琳。

突如の華琳の抱きつきに驚き、そしてその勢いで転んでしまう政宗。すぐに起き上がると、顔を真っ赤にしてでれでれとした表情で愛らしく自分に抱きつく華琳の変わり果てた姿がいた。

「…な…何やってんだ華琳！？」

「お姉さまア、これから貴女の事をお姉さまと呼ばせてくださあい／＼／」

「呼ぶなアアア！！つうかここでCharacter崩壊かよ！

？てか離れるオオオ！！」

「いやアアア！！お姉様とは離れたくないいいいい！！」

「頼むからマジで離れてエエエエ！！！！」

と完全に、美女化した政宗に惚れ込んで理性を失った華琳の暴走。

コレには政宗もまいるのである。

春蘭と星は今だに、今の状況について来れないほどに啞然と突っ立っている。

『『きゃああああああああああああああああ！！！！伝説の巨乳筆頭だああああ！！！！』』

と鼻血だらだとらししながら、写真を取り捲っているウツソとこ

なた、そしてビデオカメラにその存在を美しく写している零斗。

「な……なんて美しい…これはフェイト様に近い美しさ……いやいや、私はフェイト様一筋だ!!」

「……………」

思わず浮気心にとらわれながらも、フェイト一筋の心で我を取り戻す光翔竜。

一方のかがみはどうして男が女に転生の如く変わってしまったのかわりえないばかりに驚いていた。

「うーむ、混沌のだらけのイベントはやっぱりすばらしい……………」

「うわあゝ、やっぱり政宗お姉様は凄く魅力的で綺麗……………」

どす黒く笑う黒神に、政宗の美女としての姿に見とれるヴィヴィオ。弥彦、剣心はもちろん源外、スカリエッティ、プレシア、修羅スバルも啞然とだんまりとなっていた。

「ぢくしょおおおおおおお!!何で男が女に代わった瞬間にあんなにポインポインじゃアアアア!!」

「神よオオオオオ!!私にも胸をオオオオオオオオ!!」

と、政宗の女性化したグラビアアイドル級の巨乳の大きさに女としての屈辱感を味わい血涙を流す凜とセイバー。

「そんなに胸の大きさをこだわってしまったえば、絶対に胸は大きくなれないかもしれないとミサカはミサカは呆れながらも言います」

と打ち止めが止めの一言を言い出すと、2人は石化してしまい絶望のまま動かなくなる。

それを見たギルガメツシユは『セイバアアアアアアアア！』と涙を流しながら叫びだし、一方通行とラウラは溜息を吐いて呆れていた。

「……なんて事だ、独眼竜が女となってしまうなんて……」

「他人に合わせてそれ双等の罰ゲームを与える……なんて極悪なゲームだ」

黒神の考えた罰ゲームに、家康と京は啞然としてた。そして俺は絶対にマシなマスに止まる事を決意する。

「ふん、様はあの赤いマスに止まらなければ良いだけのこと……これ以上あの馬鹿作者の思う通りにならんぞ……！」

と俺はスイッチを押す。

ルーレットが一瞬だけ高速回転するが、僅か一秒で止まる。

そして出た目は『8』で、止まるマスは……

「何だとオオオオオオ！！??？」

最悪な事に赤マスのペナルティマスであった。

これは最悪な展開しか待ち起こっていない。

そんな俺に、京は一応、合唱する。

俺は信じられないと白眼となってしまう。

そんで左之助と家康が彼を引っ張ってまで引きずりペナルティマスに進む。

モニターから出た内容は……

ありつただけの力を込めて、力いっぱい黒神に怒鳴りだす庵。
黒神は間違いなくじフアナーの最悪なDS作者であるかもしれないと誰もが思うのである。

そして『マイティアテナ』のターンが始まった。

出番は本郷零斗だが…彼はもう、マイティ真拳を使う気力を失っている。

それは自分や相手の運の良さを無理矢理上げる秘奥義があまりにもエネルギー消失が高い為である。

「もう『引き寄せられる数字』や『願いの数字』は使えないが……ここで一気に逆転してみせる」

と『1』を狙ってスイッチを押すと……ルーレットが回りだす。
ルーレットが止まると、針は『6』を指している。

それは、ノーマルマスがある場所であり、とりあえずは一安心だとほっとする『マイティアテナ』。

「ふう、とりあえずは無事の内ね」

とネプティー又は安心したようにほっとする。

音無とゆりは罰ゲームだけは裂けたい一心で速く逃げ出したい気分である。

「んじゃ、次は俺等ってわけだな……頼んだぜ、ティア」

「うん、任せてお兄ちゃん」

と銀時の期待を裏切らないようにと、スイッチを押すティアナ。
ルーレットが高速回転して、数秒後にピタッと止まる。

止まった針には『9』が指されている。

『リリカル銀魂』はルーレットを進みだすと、止まった先はボーナスマスであった。

「来た！！ボーナス！！」

「ここで一気に逆転狙えるかも！！」

期待満々に嬉しがるティアナとフェイト。

ペナルティマスの罰ゲームが激しい分だけ、ボーナスマスのボーナスはかなり期待が出来る。

「で、内容は何だ？」

「私達に有利なら何でもいいよ」

シグナムとアルフも同じ気持ちである。

そして出た内容は……

《蒼のアイドルデビュー！！》

「教えて」

生徒全員

『銀八先生！！』』

銀八

「と言う訳で今回も『銀八先生コーナー』を始めたいと思いまあす……んで今回のアシスタントはこの人」

左之助

「おうよ、相楽左之助！！今回はアシスタントとして登場してきたぜ！！！」

銀八

「はい、超熱血なアシスタントが来ました……てか、今回の政宗が災難だったなあ」

左之助

「ああ、まさか性別を変えるもんまであるなんざア……黒神の野郎はとんでもねえ事を考えやがるわ」

銀八

「ああ……んじゃと言う訳で今回も質問すんぞオ……まずはペンネーム『烈火竜』さんからの質問、『デイエチに質問です。』

？山崎がコスプレした真田幸村「戦国BASARA」はいかがでしたか？

？お弁当とあんパン、どっちを作って、山崎に渡したいですか？

「山崎の変装の中で、一番気に入っているのは？」……んじゃデイエチ、全てお願いします」

と、突如デイエチが登場し、彼女が全ての質問を答える。

デイエチ

「はぁ……？はたくましい感じがして、？は山崎さんの望むものを作って渡したいですし……？は『テニスの王子様』の衣装も何でも似合っていましたけど、普段の真撰組の衣装が良いと……／＼／＼」

と顔を真っ赤にしながらも嬉しそうに答えるデイエチ。

左之助はこんな純粋な女に愛されている山崎は幸福者だと感心する。

左之助

「やっぱ、彼女にそこまで思われてる彼氏って幸せもんだなア」

銀八

「かっつぺ！！！！」

と気に入らない様子で、勢いよく唾を吐く銀八。

左之助

「何で唾吐いた！？しかもわざとらしく！！」

銀八

「と言う訳で『烈火竜』さん……廊下にたつてな！！」

左之助

「しかも怒ってんじゃねえよ！！！！」

と、さっそく左之助のツッコミが炸裂するのである。

銀八はそのツッコミを無視するようにと次の質問を進める。

銀八

「んで次はペンネーム『匿名希望』さん」

剣「では質問に入るでござるよ、リリカルメンバーへ

この中で欲しい武器はありますか？

- 1 逆刃刀・真打
- 2 斬馬刀
- 3 無限刃
- 4 テインペー & amp; ローチン
- 5 菊一文字則宗
- 6 無敵鉄甲
- 7 倭刀

『んじゃ答えてもらおうか』

スバル

「1の逆刃刀・真打に3の無限刃に5の菊一文字則宗、それと7の倭刀」

フェイト

「私は特にないかなあ？」

なのは

「私もなの」

ティアナ

「同じく」

エリオ

「じゃあ7の倭刀で」

キャラ

「チャイナ娘と小娘を最も滅殺しやすい2の斬馬刀で」

はやて

「じゃあ、7の倭刀で」

シグナム

「3の無限刃だ」

ヴィータ

「当然2の斬馬刀だな」

シャマル

「目立ちやすいと言う意味で1の逆刃刀・真打で！」

ザフィーラ

「6の無敵鉄甲だな」

ギンガ

「私も同じく6で」

ユ一ノ

「そんな事より出番よこせエー………!!」(怒)

などとそのままごまかす答えを言い出す。

銀八

「と言う訳で『匿名希望』さん、何か変な答えもありましたがこの辺で」

左之助

「本当にマジで変な答えがあつたような……まあ良い！！次はペンネーム『支配者』さんからだ『修羅スバルとのキスシーン……面白かつたですね。

では質問です

1、ヴィータさんへ

全く成長する事が不可能な永遠のロリータ事ヴィータさん、いやチビータさんですがそんな自分を如何思いますか？（黒笑）

2、豚町なのはさんへ

砲撃で相手を黙らせる事しか能のない頭の悪すぎる貴方ですが、そんな自分が銀さんと結ばれようだなんて都合が良すぎると思いませんか？そんなんだから豚町とか魔王とか言われるんですよ。今のうちにさっさと諦めたほうがいいと思います。どうせ無駄なんですから（黒笑）

3、銀八先生へ

銀時と違って『まるでもてずに駄目な人生を送っている男』略してマダオの貴方ですが、そんな自分を如何思いますか？（黒笑）

では今回はこの辺で

『……って何だこの質問！？明らかに喧嘩売ってんじゃないか！！』

とありえないほど大量の汗を流しながらツッコむ左之助。
彼もまた重要なツッコミ役でもある。

銀八・なのは・ヴィータ

『『喧嘩撃つてんのカアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！』』

ドカアアアアアアアン！！！！

左之助

「何故俺エ！？」

と、左之助に怒りをぶつけるようにと怒鳴りだす3人の怒りの鉄拳が炸裂した。

当然、左之助は気絶する。

銀八

「とつう訳で『支配者』さん……いつか覚えてるよ……んで次はペンネーム『白米』さんからの質問です。『質問

1.

武「青鬼を怖くないとほざいた銀時達に質問。

これを見ても、同じ台詞が言えるか！？」

（青鬼に頭から食われ、首から下が落ちた少年のグロ映像を流す）

武「後、そつちに青鬼ブルーベリー100体を送ったからな!!
その恐怖を体験しやがれ!!」(怒)

2.

刃「ヴォルケンリッター達に質問だ。

地球の友(桂)の為に、米墮卿に反旗を翻したエリザベス。

この時の彼についてどう思う?」「」

リリカル銀魂メンバー達

『『マジで舐めてました!!申し訳ございません!!』』

と青ざめて土下座する銀時達。

青鬼は見たため以上に怖いのである。

ヴォルケンリッター

『『エリザベスってマジで何者!?!』』

とエリザベスのありえない正体に青ざめて叫びだす。

銀八

「と言う訳で『白米』さん、廊下にたつてなさい。んで次イ、ペン
ネーム『真王』さん『真王』『黒神さん、ミニゲーム的な物って考
えてますか?』」

レーティア「『もしかしてこの大会にハプニング(ゲーム的には
なく突然モンスターが乱入する的に)でもあるの?』」

ジャンヌ「『負けたチームに超恥ずかしいコスプレさせてもいいかな？』」……「ずばり答えます。ミニゲームって言うよりほとんどが罰ゲームばかりでありまして、ハプニングの可能性はあり、コスプレの計画はないです」

と一気に答えだす銀八。

銀八

「と言う訳で『真王』さん、ネプテューヌが優勝しようがしないが……その結末を見届けてください……んで次イ、ペンネーム『charrley』さん」

今回はリリバサ屈指のバカ共からの質問です。

ユーノ

「そっちの僕に質問。どうやらそっちの僕もなのはに振られたみたいだけど、新しい恋は見つかったかい？そっちはまだなのはの事をあきらめてないみたいだけど、人間新しい恋を見つけたらすぐに幸せになれるよ。ちなみに僕は鶴ちゃん（鶴姫）のおかげで幸せさ」

続けて…

宗麟

「シヤマル女史へ質問です。

我ら聖王ザビー教会の間では、伝説の名シェフと噂されている貴方ですが、もしザビー教団名物のザビッシュを貴方に送ったらどんな料理を作ってくれますか？

ザビー様は貴方の作る料理をとても気に入っていますよ。ついでに僕も」……」

左之助

「つててて……あアヒデー目に合っちゃった……」

銀八

「おう、ちょうど良かったなアおい？次で最後の質問だ」

左之助

「マジかよ！？……じゃあねえ、最後はペンネーム『白黒』さんの質問だ。質問します。」

1、銀時に質問です。ドラゴンボールZのブロリーと北斗の拳のラオウ。戦いたくないのはどっちですか？

2、なのはとフェイトに質問。一番のライバルは一体誰ですか？

3、銀時ラバーズに質問。銀時に一番言われたい言葉は？」

銀時

「とにかくラオウは嫌じゃアアアアア！！」

フェイト・なのは

『『最近、無駄に出番が多いスバル（なの）！！』』

と3人は一斉に答える。

そして最後の答えは……

フエイト

「俺と一緒にいて欲しいっかなア／／／」

スバル

「……お…俺が絶対に護ってやる……よ…あつ／／／」

なのは

「これからも一緒にいるなの／／／」

ティアナ

「義兄妹でも、俺はお前と一緒にいたい…かなア／／／」

アルフ

「なのはと一緒にかなア／／／」

シグナム

「テストロッサと同じ気持ちだ／／／」

リインフォース

「当然、俺と一つになろう／／／」

チンク

「俺が最も愛しているのはお前だ…かなア／／／」

セイイン

「私も同じく／／／」

セツテ

「俺がずっと傍にいてやるです／／／」

ウィンディ

「俺の傍ですつといて欲しいっス／＼」

デイド

「ウィンディと同じく……／＼」

猿飛

「世界で最も愛しているなのオオオオ／＼」

などと答えだす13人。

銀八はイライラとなってムカついている。

銀八

「と言う訳で『白黒』さん…あの銀時バカに関する質問は控えめに」

左之助

「ただ嫌なんだよ!?分かる、分かるけどそこは抑えろよオ!
」

銀八

「以上持ちまして、今回の『銀八先生コーナ』は終了!!次回もお楽しみイ!!」

左之助

「強引に終わらせんなアアアアア!!」

と青ざめながらもツツコミを炸裂する左之助。
お疲れ様でしたア!!

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第二百二十九訓：ハプニングは何度も起こりやすい（後書き）

スバルのアイドルデビュー、再び!?

初戦突破をかけた家康の挑戦!!

華琳に悲劇が!!

次回も混沌だらけの爆笑展開が続々!!

アルフ

「次回、『大会の中には敗者復活戦もあり』テイクオフ!!」

第三百三十訓：大会の中には敗者復活戦もあり（前書き）

スバルのアイドルデビューで新曲を披露。

さらには華琳に悪夢の悲劇！

ティアナと光翔竜も大活躍！

そして最後に奇跡が起こる！！

黒神

「リリカル銀魂ゲスト杯の一回戦も今回で終了！！そして準決勝に進むチームは！！」リリカル銀魂『Strikers』が始まります！」

第三百十訓：大会の中には敗者復活戦もあり

突如、会場の前にステージが現れた。

そこはアイドル達が歌手を歌って踊る場所である。

その中心部に、何故かバリアジャケット衣装を着たまま立っている
啞然としているスバルと、ドラムス、リードギター、キーボード、
リズムギターなどスバルがアイドルとして活躍してた頃に組んでい
たメンバーもいた。

突如のボーナスマスの内容が、まさかスバルのアイドル活動である
とは思ってもよらなかった。

「はい、と言う訳で今日一日のスバルアイドル復活デビューが始ま
りました！！そして今回の企画に協力してくれたのは、天才音楽家
の音楽プロデューサーのマクロウさんです！！」

「どうも、マクロウです」

とマクロウは黒神に挨拶する。

どうやら、スバルのアイドルデビュー復活に協力してくれたようだ。

「突如、ボーナスマスに止まってスバルのアイドル歌手としての一
日復活デビュー！もし観客の評価が高ければその時点で『チーム・
リリカル銀魂』は一気に100マス進めます！！」

「ああ、今日一日だけとは言えスバルがアイドルとして復活する瞬
間だ。俺だって楽しみさ！」

となにやら嬉しそうに喋りだすマクロウ。

何せ彼がスバルにアイドルにスカウトした張本人であるからだ。

今ではお通のプロデューサーとしても活躍している。

詳しくは前編に登場した『アイドル編』の第六十二と六十七訓で。

『……………』(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！)

一方『リリカル銀魂』では、スバルがまたアイドル活動する事になった事に納得いかない表情で怒りの憎悪を放っているフェイト達が出た。

銀時はこのあまりの恐怖に怯えていた。

女の嫉妬は醜い以前に怖い。

もし下手に言い出せば、こっちもただでは起こらないからだ。

「何でスバルがアイドルになるんだろっかなあ」(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！)

「すんごくガブリつきたいんだけど？」(ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！)

とフェイトとアルフは嫉妬の憎悪が今でも大爆発しそうである。

シグナム、ティアナも一緒な気持ちであり、下手すれば4人同時の大爆発もありえなくはない。

(スバルウウウウ！！カムバア~~~~く！！)

と、銀時は涙を流して心からそう願うのであった。

*

「あ……あははは……また戻っちゃった」

と、呆れ半分で笑い出すスバル。

まさかもう縁がないと思っただアイドルに一日でも戻る事になることは思いもよらなかった。

とりあえず、一応マクロウからアイドルデビュー記念に貰った蒼いフェンダー・ジャズベースを持っている。

「久しぶりだね、アンタとこうしてまた一緒に歌えるのって」

「ユイさん……」

と可愛らしいショートボブヘアでやや垂れ目で茶色の瞳のパートはリズムギターのケイオン・ユイが言い出す。

「と言うより、一緒に歌ったのって最初の『ミューディック・ステーション』だけだな……まあ、私はスバルが戻ってきてくれた気分だから嬉しいけど」

「そうそう、今はせっかくフルメンバーで歌える事を楽しみなきゃそんな……」

と、苦笑してクスクスと笑っているのが腰までの長さがある黒と紫の混色髪で前髪は姬カットの翡翠色の瞳をしたパートはリードギターとボーカルのケイオン・ミオと気楽そうに今を楽しもうと言い出したのは赤と茶色の混色の前下がりショートカットにカチューシャをし、おでこを出している紫色の瞳をしたパートはドラムスのケイオン・リツ。

2人もスバルが組んでいたバンドである。

「リツさんの言うとおりですし、今を楽しみなきゃそんなですわね」

お嬢様風に言い出したのは、太い眉毛が特徴で、髪はウェーブの
かった（本人によるとパーマではなく癖っ毛）ロングヘアで、白銀
髪に近いほどの明るい色をしている。

さらには瞳の色は濃い水色で肌の色は、白くパートはキーボードを
するケイオン・ムギ。

4人ともスバルと共にバンドを組んでいたメンバー。
ちなみにスバルのパートはベースとボーカル。

「私達は、スバルが何処がどこかで別の活躍をしてもずっとバン
ドメンバーである事は変わらないよ」

「ああ、だから突然辞めたからって攻めるつもりはないよ」

とリツとミオは優しく言い出す。

スバルにはスバルの事情があるからこそ、アイドル活動をしている
暇はないのだ。

そんなスバルの事情を、ケイオン四姉妹は理解している事にスバル
は嬉しく感じた。

「リツさん…ミオさん…」

そしてユイが嬉しそうな表情で明るく言い出す。

「だから、今はいいーっばい楽しく歌おう」

「はい！」

*

「てあれ、普通に『けいおん』だよな？絶対『けいおん』だよな！
」？」

と呆れてツッコミだす銀時。

言つまでもなく、名前のモデルも原作に出てくる人物であるからだ。

*

「……あ……あのう……今日はこんな感じでアイドルとして再び歌
わせてもらう事になりました……！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

マイクを取って、観客に向かって言い出すスバル。
それに観客は歓喜に騒ぎ出す。

「一曲しかないけど、皆さんの為に精一杯思いを込めて歌わせても
らいます……！」

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

「それじゃあ歌うよ……『蒼い理想郷』!!」

そして歌が始まると、スバル達は楽器のメロディーを奏で始める。スバルは時々、暇な時にギターを使っている為、弾き慣れている。リズムに乗るようなドラムとキーボード、そしてギターの奏で、5人の楽器のメロディーが1つになる様に混ざり合う。

『蒼い理想郷』の歌詞は『スバルの新曲『蒼い理想郷』へと活動報告に乗せました、

『<http://mypage.syoSetu.com/mypageblog/view/userid/46319/blogkey/250377/>』

最後は楽器を奏で続け、歌い終えるかのように奏で終える。
最初は無言の雰囲気を表していたが……

ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアア!!

観客達は大喜びに歓喜に騒ぐ。

よっほど歌の出来が良かったようだ。

「おお、かなり繁盛良いようで……これは当然ミツシヨンクリアで『リリカル銀魂』100マス進みますね」

「今のは以前に俺が作ったスバルの新曲だな……それを本当に体験したような雰囲気で歌いだすとは……」

まるで本当に体験したような思いを込めて歌った事に驚くマクロウ。しかし皮肉にもそれは実際にスバルが体験した過去と共通していた。

「うわあ、スバルお姉ちゃん凄く歌上手う」

「ええ、そうね」

ヴィヴィオもプレシアもスバルの歌を高く評価する。

そして何よりも本当に思いを込めて歌ってた為、美しく歌えていたと2人は知る。

「良い曲だったね」

「ええ、本当に思いを込めて歌ってましたから感動しました」

と凜とセイバーは良い曲であったと高く評価する。

一方通行達も無言でいるが、今の曲は聞き惚れたようだ。

「じゃあ、私戻るね……有難う皆」

とスバルは、ユイ、ミオ、リツ、ムギの4人にお礼を言い出して頭を下げて、この場を去る。

4人は笑顔で親指を立てる。

それはスバルが今後もがんばれる事を祈る証拠である。

アンコール！！ アンコール！！ アンコール！！

と、アンコールと言い出す観客達。

もっとスバルの曲を聴きたい様であるが、一度だけのデビューだと言う事を完全に忘れている。

「スゲー、完全に客達が見惚れやがってる。つつかあの嬢ちゃん歌も歌え……どうした、俺？」

「……」

と気絶している京を抱えている左之助は、呆れているような表情で指を指す庵に聞き出す。

庵が指を指している方向には……

『アンコール！アンコール！アンコール！』

と、観客と一緒にアンコール宣言を言い出しているのは家康、ウツソ、こなたの3人であった。

『何やってんだお前等アアアア！！！』

ドカア！！x2

『アンギヤアアアアアアア！！』

と、呆れて怒鳴った左之助とかがみが同時蹴りを炸裂させて、3人

を吹き飛ばす。
その光景に他のチーム達も呆れてしまう。

*

『『スバル、お疲れ様でしたアアアアア！！』』

ガコオン！！

「げふいあ！？」

と、突如フェイトとティアナが2人がかりでスバルにリアットを炸裂させて、首を強くはさみこんで強烈に直撃する。

これには答えて気絶し、倒れるスバル。

そしてフェイト達はそのまま100マス進むが、銀時は気絶して倒れているスバルが流石にかわいそうに見えてきた。

「銀時達もかなり進んでいるだろうし……私達も行くわよ、打ち止め！！」

「はいとミサカはミサカはヤル気満々なりイ！！」

そう言って、打ち止めはスイッチを押す。

ルーレットが高速回転し、止まりだすと針が指した数字は『8』である。

『とある運命』は8マス進むと、そこにはハプニングマスが止まっていた。

そしてその内容がモニターに映し出される。

《3チームに1発大逆転チャンス》

「おーつと、これは『チーム・とある運命』！！チャンスを与えるボーナスゲームを発動させた！！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！』

誰もが喜びだす歓喜。

一気に罰ゲーム脱出する事ができる一世一代の大チャンス。その代表3チームを黒神が選び出す。

「そして、そのラッキーチャンスに選ばれたのはこの3チーム！！」とボックスからくじ引き3枚を引き当てる黒神。その中には3チームの名前が書かれていた。

『チーム・リリカル銀魂』

『チーム・オタクガンダム』

『チーム・ファイター』

「ぢくしょおおおおおおおおおおお！！！」

と悔しそうに叫びだす凜。

自分達のターンなのに、相手にチャンスを与えてしまった。

一方の3チームは大喜びである。

そして、空から60機のガジェットが現れる。

「今回、3チームが受けるミニゲームは遠距離ガジェット射撃です。制限時間30秒以内にガジェットを20機破壊したチームは一気にゴールに進めます。ですが、もし全て破壊できなかった場合はスタートに戻りますので！！！」

つまり、勝てば天国で負ければ地獄。

まさにデッドオブライブ。

これは自分達の運命をかけた最後のチャンスである。

『リリカル銀魂』代表 ティアナ・ランスター

「ここは私が行くね……一気にガジェットを蜂の巣にしてやるわ！」

「ああ、頼んだぜティアナ」

「うん、行ってくるねお兄ちゃん」

銀時の期待を裏切らないようにと、チームの中で射撃が最も得意なティアナが代表として参加する。

『オタクガンダム』代表 光翔竜

「ここは、私が出よう」

「頼んだよ、光翔竜君」

「はい」

とこなたが光翔竜を代表として選んだため、光翔竜が参加する事にした。

そしてこなたが光翔竜の耳元に近づき

「報酬はフェイトの生着替え画像入りのDVD50巻、それで良い？」

「OK！」

とニヤニヤと取引をするこなたと光翔竜。

『ファイター』代表 徳川家康

「ここはワシが行こう。大将としての責務を果たす為に」

「ああ、マジで頼むぜ……俺は死にたくねえし」

と家康に全てを託す左之助。

俺は無言で今だに気絶している京に哀れみしてる。

「それでは行きます！！1発大逆転ガジェット射撃ゲーム、スタート！！」

と黒神が笛を鳴らすと、家康が気を貯める。

そう、彼は気を貯めてそれを拳から弾丸のように放つことができる。しかもその命中率の確立も高いので期待できる。

「徳川家康、絆の名にかけてこの勝負を制する！！行くぞ、天……」
「じゃあさっきのはやてがスバルにした事を思い出さない？」

と、突如家康にこなたがニヤニヤとした表情で言い出す。
その言葉に家康の腕に込めていた気の力が消えかかる。

「八神殿が…スバルに……」

と、先ほどはやてがスバルにした行為を思い出す家康。
するとその光景は、はやてに大胆にも無理矢理ミニスカートをめくられてパンツが丸見えである。

「あつ！？／／／」

ドサア！

と、突如家康が股間の部分を両手で押さえて倒れこむ。

「てうおおおおい！！何で倒れるんだ！？起きろオオオオオオ
！！！！！！」

これには左之助は怒鳴って叫びだす。

俺はこなたにしてやられたと呆れて頭を抱える。

一方のティアナの周りにはオレンジ色の魔力弾が無数に浮かべており、光翔竜の周りは光り輝く矢が20本浮かべている。そして互いに一斉に必殺技を炸裂する。

「クロス・ファイヤー・シュート!!!」

「シャイニング・レイ・アロー!!!」

オレンジ色の無数の弾丸に、光翔竜の20本の光の矢が一斉に放たれる。

そしてそれらは全てそれぞれ20機ずつガジェットを貫通して破壊する。

僅か開始から5秒でティアナと光翔竜は全てのガジェットを破壊する。

だが、僅かに光翔竜の方が速くガジェットを20機破壊した。

しかもまだ彼は本気を出していない。

何故なら、彼が本気を出せば一秒で20機のガジェットを破壊する事ができるどころが他の人からガジェットを破壊活動の協力と言う形で余分に破壊する恐れがあるため、実力を控えている。

そんなこんなで30秒経過。

「えー、ただいま結果発表をします!!!見事に好みにゲームにクリアしたチームは...『チーム・リリカル銀魂』 & 『チーム・オタクガンダム』!!!よって二チームともゴール行き決定で初戦突破あ!!!」

「どうしてくれんだアアアアアア！せつかくの大逆転チャンスだっけ言うのに何て事してくれてんだこの馬鹿康！！」

「ゴヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ！！」

『乱打』と『二重の極み』の合体技『乱打の極み』で連続に『二重の極み』を連発する涙を滝のように流す左之助。

「死ぬ前に貴様だけはこの手で殺してやるああああ！！」

「げヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァ！！」

『八稚女』をひたすら連発して、追加として『豹華』で切り裂く暴走状態の庵。

暴走嫌いの彼でも、コレばかりは抑えられない。

リーダーとして任せたのに、家康のふがいなさでスタートに戻らなきゃいけないのである。

「左之……」

「アイツ、間違えて死ぬ事はねエよな……」

これはいくらなんでも可愛そうに見えてきたと青ざめる剣心と弥彦。

「……うっ……俺は一体……て何やってんだあの2人？」

と、そこに先ほど『初恋ジュース』を飲んで気絶した京が立ち上がる。

目の前には怒り任せに家康をボコボコしている左之助と庵がいた。そして京が眼を覚ました事を知った黒神は……

「では、『ファイター』には罰ゲームを……」

とどす黒い笑顔で言い出す黒神は、スイッチを押す。
すると天井から突如、シヤマパイが降ってきた。
それが不運に京にべちゃつと……

おんぎゃ あああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ……

この世とは思えない不味さに、京の断末魔が響き渡ってしまふ。
顔にメリハリつけるほどに深く、シヤマパイをぶっかけた京は生死
をさまよう地獄の不味さに気絶して倒れた。
コレにより、『ファイター』のメンバーは2人減った。

「何だよオオオオオオオオ!!??」

と銀時が青ざめて叫びだす。

「てちよつと待てエエエ!!何で京がシヤマパイ処刑されなきゃな
んねえんだ!!」
「てかこいつが何したって言うんだアアアア!!!」

と、納得いかないほど怒鳴って黒神に言い出す銀時と左之助。

そんな2人に黒神がわざとらしく言い出す。

「いやあ、実はクリアできなかつたチームの1人にシヤマパイを食
らわせる説明も忘れちゃって」
『『それを先に言えエエエエエエエエエエエエエエ!!!!』』

と精一杯黒神に向かって怒鳴る銀時と左之助。

(京……地獄で待っている……)

とまるで本当に死んだように京の気絶した姿を哀れみにする庵。
ちなみに彼は死んでいません。

「フェイト様アアアアア!! 見ましたか、私の勇士と強さオオ
オオオオオ!!」

「え……ええ……凄かったよ……あはははは」

と先ほどの活躍にフェイトにアピールできた事に大喜びする光翔竜。
そんな彼に苦笑しながらも評価するフェイト。

フェイトの前では変になる彼でも、その強さは本物である。

「やばいわ……コレで4チームが初戦突破したから、残りは後1チ
ームね」

「大丈夫です、この春蘭が必ず優勝に導かせて上げます!!」

と流石にあせりだした華琳に、春蘭が勇敢そうに言い出す。
だが、出番はまだ『ナンバーズ』にあった。

「とにかく、ここは良い数字を当てないと!!」

とルーレットのスイッチを押し出すドゥーエ。
彼女は今だに、ゴリラにキスされたとは言え気絶しているトーレに呆れていた。

ちなみに『ナンバーズ』がもつともゴールに近づいていて、このまま行けば確実に『ナンバーズ』が最後の勝ち抜けとなる。
高速回転するルーレットが止まると、出た目は『2』だった。

『ナンバーズ』は2マス進むと、止まったマスはハプニングマスがあつた。

一体何が出てくるのかと警戒する中、出てきた内容は…

《一席追加》

「おーっと、ここで出たハプニングゲーム内容は…何と『一席追加』！コレにより、初戦突破チーム数は5チームから6チームとなりました！」

「ええ！？つまり勝率が上がるって訳！？ラッキー！！」

とまさかの勝ち抜きチーム数が増えたことに大喜びする凜。
しかしコレはあくまで確立が増えただけであり、自分が初戦突破するわけではない。

「いよいよI a s t っ所か。ここは俺が一気に勝負を決めてやるぜ」

と、男らしいが外見は今だに美しい美女のままの伊達政宗。
一気に勝利を決めようとルーレットスイッチを押す。

高速回転するルーレット。
するとピタリと止まって出た目は『1』である。

「Shit!」

まさかまた1とは思ってもよらなかった政宗。
ここで重大なミスをしてしまったと思いきや……

「おや、どうやら悪い事ばかりではないようですぞ?」

と星が興味深く言い出す。

そのマスは、ポーナスマスであった。

「でかしたぞ、政宗!」

春蘭は大喜びに政宗を褒める。

ポーナスマスは、確実に止まったチームに有利に立たせる究極のマス。

そしてそのポーナスマスの内容は……

《誰か1人がジェイソン対決　そして無事に生き残れ》

『は?』

またもやわけも分からない内容に啞然とする『キングドラゴン』。
すると、突如4人の前に巨大な屋敷が現れた。

その屋敷はどす黒く入りづらい不気味さを表す。

黒神、源外、スカリエツティ、プレシア、ヴィヴィオは彼等に合唱

した。

何故なら、このうち1人がその館の中にいる最凶のジェイソンと対面しなきゃいけないからだ。

「1人って事は、誰かが代表って訳ね。じゃあ私が行くわ」

と華琳が言い出して館に入る事を決める。

「良いのか、華琳？コレは明らかにあのどす黒作者の陰謀かも知らねえぜ？」

「大丈夫ですわ、お姉様」

「だからお姉様辞めろオオオオ！！」

と今だに美女の姿となっている政宗をお姉様呼びわりする華琳。だが彼女も真剣である。

「私はいずれ覇道に進む者よ。コレぐらいの事で立ち止まれないわ…じゃあ行ってくるね」

「は！華琳様お気をつけて！！」

「油断しないで下されよ、華琳殿」

春蘭も星も、華琳が行く事に賛成する。

そして政宗もこのまま華琳を見届ける事にする。

華琳が館の扉を開けて、中に入りだすと扉が閉まる。

*

そこは、まるでホラー映画に出てくる洋風の室内。

言うなれば、『バイオハザード』に出てくるラクーンシティ洋館にそっくりだった。

何故か知らないが、華琳は青ざめていた。

「何……この圧倒的な恐怖は？」

恐怖に怯えだす華琳。

霸王としての気迫はあっても、まだ少女。

魔物が出てきそうな雰囲気的身も心も凍りそうなホラー恐怖。

それでも華琳は強がり出す。

「ま……まあ、別にゾンビとか殺人鬼とか出てくる訳じゃないし……

……流石の黒神も……」

「キエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ

エエ！……！！」

ドカアアアアン！！

「いやアアアア！！！！」

と突如襲ってきたチェインソーにギリギリに避ける華琳。

一体いつ来たのか把握できないほどに。

「なっ何！？一体なんなの！？」

と華琳は恐怖しながら叫びだす。

恐怖を隠しきれないのも、目の前にいる漆黒のチェインソー『雷切』を2つ持ったジェイソン仮面を被った少女ことキャロが彼女を鋭く

続けられ、ジェイソンと言うこの世の全ての恐怖を身に付けられたのであった。

*

「ベベベベベベ……別に怖くなかったんだもん！！平気だったもん！！」

「……何があったかとは聞かねエが、良く無事に戻ってきたことは分かった」

と平気そうな態度をしても大泣きして体を震えている華琳に、一体何があったかと恐る恐ると思う政宗。

彼女が相当なまでに怖い思いをした事は確信できた。

「黒しいいいいいいいんん！！良くも華琳様をオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「まあまあ、このまま行けば黒神殿にシヤマパイを食らわせられる派目になる為……ここは絶えるしかあるまい」

と暴走状況で黒神に襲い掛かろうとする春蘭を、しっかりと抑える星。

しかし彼女は、滅多に見られない華琳の姿を見て笑いを堪えている。

「くくく……とりあえず、見事ミッションをクリアした『チーム・キングドラゴン』は250マス進みます」

「250マス……て事は」

星が今現在の自分達がいるマスの位置とゴールの差を見ている。

すると、その差はちょうど250マスであった。

「おお、ちょうどゴールに到着するではないか!！」

「Good!！」

ここでようやくゴールまで進めると確信した政宗は大喜びだった。ようやく初戦突破できた事で黒神のDSゲームから開放されるのと一緒にだった。

「お見事!」チーム・キングドラゴン『ボーナスゲームをクリアして一気にゴールに到着!』コレで初戦突破チームの数は5チーム!生き残れるのは後1チーム!！」

『ええええええええええええ!?!?!?!』

黒神の宣伝に、誰もが青ざめて叫びだす。残りには後1チームのみ。

現在まだゴールできていないのは『とある運命』・『マイティアテナ』・『ファイター』・『ナンバーズ』のみ。この内3チームは確実に地獄の罰ゲームを受けなければならない。

「ちよつとオオオオオオオオ!不味いわよこれ!？」

「早くしないとミサカ達は地獄いきとミサカはミサカは恐怖で青ざめたり!！」

と凜と打ち止めは青ざめて叫びだす。

セイバー達も何とかしなければと必死に考える。

「零斗、体調は!?!？」

「ああ……今、ようやく回復したところだ。1回だけだけどマイテ

「イ真剣で次のターンで『1』を出し、一気にボーナスマスに止まれば逆転の可能性があるぜ！」

「そう、じゃあ頼むわよ！！」

と、零斗に全てを賭けるネプティーヌ。

零斗のマイティ真拳なら一気に大逆転できる可能性がある。

次のターンが回ってきたときが勝負である。

「てかヤバイんじゃないか！？あたし達もまだぜんぜんゴールに届いていねエし！！」

「そうねエ……クアットロ、貴女も何か考……えあれ？」

とドゥーエはクアットロに話しかけようとする、クアットロの姿はいない。

あるのは1枚の紙切れである。

「何だこれ？」

と、その紙を取り出すノーヴェ。

そこには……

ゴメンねえ。

私まだ死にたくないから、先に抜け出させてもらっよ。

2人の命運を祈っているから、じゃあねえ〜

クアットロより

「ふざけんなアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

「クアットロオオオオオオオオ！！死んだら呪い殺してやるうううううう！！！！！！」

と、自分達を置いてけぼりにしたクアットロに怒り出したノーヴェとドゥーエ。

後、どうしても良いがトーレは今だにゴリラとのキスによって地獄の狭間にさまよって気絶中。

だが、彼女達以上に最も絶望的状况に追い込まれているのが『ファイター』。

現メンバーは左之助と庵だけ。

京は家康のミッシヨンミスが原因でシャマパイを食らってしまう罰ゲームを受けて気絶中。

そして家康はミッシヨンミスにより左之助と庵の怒り任せによってボコボコニされて気絶中。

しかもスタート時点で戻された状況で、1発逆転を狙うなんて不可能である。

「……………終わっちまったな……………何もかも」

「……………」

絶望的に言い出す左之助と、無言でこの世の最後を迎える準備をする庵。

彼等の眼には希望が映っていない。

現在同じくスタート時点にいる『マイティアテナ』には零斗がいる為、彼等は彼のマイティ真拳で一気に逆転を狙う。

だが2人にはそんな強力な仲間はいない。

もはや、罰ゲームを受ける覚悟をしなければならない。

「左之助……」

「オメエの事は一生忘れねえぜ……左之助」

大量の汗を流し青ざめる剣心に、左之助に別れを言い出す弥彦。シヤマパイを食べて生き残れるなど、ほぼ不可能である。

「さあ、次は『チーム・ファイター』の出番です！！ルーレットを回してください……！」

と黒神は無邪気に言い出す。

これには剣心も弥彦も黒神が最も楽しんでいるとしか見えなかった。

「とりあえず……さっさとルーレットを回して終わらせっか」

と、諦めモードの左之助はそのままスイッチを押す。

するとルーレットが高速回転する。

しばらく経つとルーレットが止まりだし、その針は『1』に止まった。

1と言えば、そこにはポーンスマスがあった。

「今更、ポーンスマスに止まってもなあ……」

大泣きして喜びだす左之助。
絶望の中で、まさかの大逆転。
庵も左之助ほどじゃないが、黙りながらもまさかの勝利に興奮状況に喜びだす。

「おおオ、見事でござる左之ー!!」

「やったじゃねえか!!」

「やりますね……」

と剣心と弥彦は大喜びして、修羅スバルもまさかの左之助の1発大逆転に驚いた。

絶望の中で希望を掴むなど、ある意味神業である。

「以上持ちまして、初戦突破チームが6チーム決まりましたので、
『チーム・とある運命』・『チーム・マイティアテナ』・『チーム・
ナンバーズ』もリタイア決定!!」

と、黒神が宣言すると残ったチームの誰もが絶望してしまうのである。

「ぢくしよおおおおお!!」

「そんな……こんな所で」

「何だとオオオオオ!!我が敗北だとオオオオ!!?」

「嘘だろオ……あれ食えツて言うのかア!?!」

「ば……馬鹿な、私達が負けるなど……」

「ぎゃあああああ!!罰ゲームだけは勘弁してとミサカはミサカは命乞いしたり!!」

「嘘!?!出番が回る前に敗北なんて!!」

「ぐ……不覚!!」

と黒神が4つのボタンを押し出すと、それぞれ高速回転する。4つのルーレットが止まりだすと、その針に指されている名前が浮かび上がる。

山崎退

ネプテューヌ

北郷零斗

ノーヴェ

「お、私だ！」

「よし、もっと強い奴と戦えるぜ!!！」

「うっしやー!!生き残ったアアアアアア!!！」

選ばれた3人は喜びだし、山崎もまさかの復活。

そして選ばれなかったものはこの後、本当に罰ゲームを受ける。

「それでは皆さん、お疲れ様でしたア〜」

と黒神がスイッチを押すと、突如上から数多くのシヤマパイが降ってきてそれが凜、セイバー、ギルガメッシュ、一方通行、ラウラ、打ち止め、ゆり、音無に直撃した。

「うんぎゃああああああああああああああああ!!!!!!!!」

(いよいよ、一回戦終了した事だし……準決勝の準備をしようか…
ふっふっふ…)

とどす黒く笑い出す黒神。

次の準決勝は、黒神が今注目して流行っている究極のサバイバルゲームである。

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!!』』

銀八

「へえい、じゃあ銀八先生を初めまあす。今回のアシスタントは『チーム・オタクガンダム』を見事準決勝に導いたこの人」

光翔竜

「フエイト様ファンクラブ総長、及び『竜の爪』のメンバーの1人光翔竜です！皆さん、宜しくお願いします!!」

と堂々と答えだす光翔竜。

銀八

「いつもは7人の質問を順番に答えていますけど…今回は馬鹿作者のスクーリング解放記念として特別に8人の質問を答えます」

光翔竜

「へえ、黒神は大学に通ってたんだ」

と意外そつに驚く光翔竜。

黒神は大学に行かない人だと思ってたからだ。

銀八

「んじゃ、アシスタントお願いしまあ〜す」

光翔竜

「はい！じゃあまずはペンネーム『鳴神 ソラ』さん『マリオ』銀時達に質問『冥王についてどう思う？』」

ルイージ「質問『最近の内の兄さんについてどう思います？』」

ネス「質問『銀次さんについてどう思いますか？』」

銀八

「ずばり答えます。1人は、なのはとは違い接近戦も優れている為完全に、なのは以上の強さだと思います。2つ目はマジで超人ですからって思えるぐらいです。そして3つ目は……」

と3つ目を一時とめて真をあけて喋りだす銀八。

その答えは……

銀八

「とりあえず、その銀次さんって人は誰なのかまず教えてください」

光翔竜

「知らないんですか!?!」

と呆れてずっこける光翔竜。

銀八

「と言う訳で『鳴神 ソラ』さん、久しぶりの質問を有難うございます」

光翔竜

「次はペンネーム『次村陣八』さんの質問」

1、何だっけ? (ぶっ飛ばされた) 思い出しました。はやては常習犯ですか? それとも確信犯ですか? デスノート有ったら名前書きますか?

2、質問と言うより相談。感想板などでの話し方ってこんな感じで良いのでしょうか? コミュニケーションは下手な方なので、何か意見をいただければ嬉しいです。『……1は…上司だからって流石に部下のスカートを捲るのはどうかと…』

と光翔竜は、前回はやてが後ろから思いっきりスバルのスカートを捲った事を思い出す。

もしフェイトのスカートを捲ってたら大興奮して鼻血を出してたようだ。

銀八

「まあな……んで2つ目は次村陣八さんの好きなように黒神に話しかけてもいいです。下手でも問題がなければ十分良いと思います。荒らし読者よりは数倍良いし」

光翔竜

「確かに…」

と別に問題ないと思う銀八と光翔竜。

銀八

「と言う訳で『志村陣八』さん、もっと気軽に感想しに来ても良いですよ。んで次イ、ペンネーム『葉月』さん」

其の一。ゲスト杯に出演するみんなに質問です。シャマパイを平気で食べられる人はいます？

其の二。次に追いかけてもまだ大丈夫だというものはどれですか？

1・阿部さん（捕まったら握られますw）

2・恐惶化の三成

3・急くな発動中の大谷

4・青鬼

5・逃走中に出てくるハンター

6・ボルテッカー発動中のピカチュウ

7・大紅蓮脚発動中の幸村」

光翔竜

「1は今回のアシスタントとして代表的に言います…絶対無理イ！」

！」

と潔く叫びだした光翔竜。

絶対に絶えられるはずがないからだ。

光翔竜

「2は6ですね。だってピカチュウは可愛いし…何より他の6つに比べるとまずまし」

と答えだす光翔竜。

ちなみに他のゲストメンバーも全員6のようだ。

銀八

「と言う訳で『葉月』さん、廊下に立っていないさい」

光翔竜

「次はペンネーム『フレイス』さん『ジヨジヨの奇妙な冒険をしっているならば、

質問をさせてもらいます。

DIO「時止めの中で動けるものはいるのか？

いないのなら……ロードローラーで……」

…はい、まあ無視をしてもかまいません。

ペナルティとして…DIO様を

使ってもらってもいいですよ（チラッ

ユウキ「おっと、俺も質問してもいいかな？

銀時さんが一番大切な物といえれば何か…

教えてもらえると助かる…

銀時の言葉に刻みたいんだ!!!」

銀八

「ずばり答えます。絶対に時を止められたら動けません!!」

光翔竜

「確かに、そんな秘術の中の秘術が発動されたら動くほうが無理です
すね」

と、極悪最強技の存在にツッコミだす2人。

銀八

「2つ目は、我等が銀さんに答えさせてもらいます」

銀時

「そうだなア……しいて言えば……自分の武士道……そんで仲間みて
エなもんかな……」

とコレばかりは真剣に答える銀時。

彼にとつても自分の信念を貫き通す武士道ムシドと仲間は大切な存在だからだ。

光翔竜

「いやあ、かつこ良い!!私もいつかそんな事を言えるような男になつてフェイトさんに惚れ惚れさせたい!!」
と言つて訳で『フレイス』さん、この2つが銀さんの大切な物です!!!」

銀八

「はい次イ、ペンネーム『正宗の胃袋』さん『銀時に質問。スバルのパンツをみて鼻血を出したり下半身のアナログスティックが大きくなりませんでしたか?』」

エリオに質問。エリオはいつか神楽か月詠のどちらかに告白とかしようと考えていますか?』……んじゃ、銀さんお願いします」

銀時

「はやてがスバルの……ぶはあ!」

と、突如スバルのパンツ姿を思い出して鼻血をたらす銀時は思わず鼻を押さえる。

銀時

「おiiiiiiiiiiiiiiiiiiii! 変なこと言つから思わず鼻血たらしまつただろうがアアア!」

銀八

「たく……主人公なのに情けねエ……」

光翔竜

「いや、銀八先生も鼻血たらたら出ているから……」

と呆れ半分でツッコむ光翔竜。

銀八

「んで2つ目は……」

エリオ

「こここ……告白!? / / / ……まだ、分かりませんが……いつ

「……て結局片翼兄弟になっちまったんかよオオオオ!!」

とコレばかりはツツコミだす銀八。
光翔竜も唾然としてしまった。

銀八

「んじゃ、ぱつつぁんの寺門通のアイドルグッツを全て奪ってくだ
さい。そんであいつに絶望を」

光翔竜

「答えになってないから!!てかそれ冗談半分でも言っちゃ駄目で
すよ!!」

と銀八の答えに青ざめる光翔竜はツツコム。

銀八

「わあつたよちゃんと答えるから…1は、アイツマジで最強ですの
で本当に絶望してしまいます」

桂

「兄上よ……腐った幕府を絶望に遅らせるのであれば是非とも」

銀八

「シヤラアアアアアップ!!」

ドカア!!

桂

「しぶあああああ!!」

と銀八に思いつき殴られて吹き飛ばしてしまった桂。

銀八

「3つ目は、黒神だけでもすんげえおつかないの Good です!! と
言う訳で『黒龍』さん、廊下にたつてなさい!!」

光翔竜

「次はペンネーム『白神』さん『銀魂と遊戯王の小説を書こう思っ
ている白神です。』」

銀魂メンバー（まだ本編に出てない奴と鬼兵隊メンバーも含めて）
とリリカルメンバー全員に質問です。遊戯王をやるとしたらどんな
デッキを使います?」

銀八

「ほおー、遊戯王コラボねエ!! 実はうちの馬鹿作者もそんな事を
考えてた事もありましてなア」

光翔竜

「あ、ちなみにまだ本編に出ていない人がさっそく答えてくれたん
ですよ。これ、全て」

と光翔竜が手紙らしき物を出して、銀八に渡した。

銀八

「どれどれ…お、ぱっつあんのじゃねえか…アイツ、どんなデッ
キに……」

と銀八が興味深くその手紙の内容を見ると…

『ブラックマジシャンガール』と『四霊使い』を中心とした女の子中心の魔法使い族デッキ 新八』

バリバリ!!

と、無言で手紙を破りだす銀八。

これは明らかに新八のデュエルモンスターのアイドルオタクとしてのむつつりスケベ的な性格が表した理由であった。

光翔竜

「とりあえず理由は分かるけど、破る事はないと思うよ」

銀八

「シャラップ!! 大体アイツ何だよ!! 侍らしいデッキとか作れない訳!? 『六武衆』デッキとか作れよ!!」

光翔竜

「まあ確かに……」

銀八

「ちなみに他の答えはこんな感じですよ」

『チョコレートパフェデッキ 銀時』

『酔昆布デッキ 神楽』

『お札遊ぶには興味ないね お登勢』

『レディキャット・キャサリンスペシャルマックスデッキ キャサリン』

『サイバーデッキ たま』
『お妙さんと新婚ラブラブデッキ 近藤』
『六武衆デッキ 土方』
『土方さんをぶつ殺すデッキ 沖田』
『リリカル銀魂一の美女ヒロインは志村妙デッキ お妙』
『お妙ちゃんとラブ&チ コぶつ殺すデッキ 九兵衛』
『若の可愛らしいコスロリデッキ 東条』
『肉球デッキ 桂』
『攘夷志士デッキ エリザベス』
『銀さんに愛をデッキ 猿飛』
『痔を早く治すデッキ 全蔵』
『美女デッキ 辰馬』
『アイドルデッキ お通』
『陰陽師デッキ クリステル』
『外道デッキ 外道丸』

銀八・光翔竜

『『たまとマヨラー以外の答え、全然まともじゃねエエエエ!!』
『!』

と我を忘れて全て破りだす2人。

銀八

「何か決闘を目的としていねエデッキばつかじゃねえか!! 大体『
痔を早く治すデッキ』ってほとんど決闘よりも速く痔を治したいだ
けじゃねえか!!」

光翔竜

「なんか全然答えていないような気が……まあいいや。次はリリカ
ルメンバーの答えです」

- 『雷デツキ フェイト』
- 『剣士デツキ スバル』
- 『白魔導士族デツキ なのは』
- 『ガンマンデツキ ティアナ』
- 『BFデツキ はやて』
- 『アマゾネスデツキ アルフ』
- 『貫通デツキ エリオ』
- 『チャイナ娘と小娘を潰すデツキ キャロ』
- 『パワーデツキ ヴイータ』
- 『騎士デツキ シグナム』
- 『回復デツキ シヤマル』
- 『狼デツキ ザフィーラ』
- 『天使デツキ リインフォース』
- 『天界デツキ リイン』
- 『美女たつぷりデツキ ユーノ』
- 『研究デツキ スカリエツティ』
- 『大魔導士デツキ プレシア』

銀八

「1人だけメツチャ怖いにいるウウウウウ……！」

光翔竜

「ただ神楽さんと月詠さんに嫉妬してるの!?!この子、たしか
竜を操るから普通に『ロード・オブ・ドラゴン』を中心としたデッ
キで良いよね!?!」

と青ざめて叫びだす銀八と光翔竜。
ちなみに光翔竜は、なのはのデツキを見て納得行かずに普通に『不細工魔王デツキ』で良いという暇もなく、キャラのありえないデツキに青ざめてツツコムしかなかった。

銀八

「と言う訳で『白神』さん……全員分を答える暇はないのでマジですみません！そして是非とも『銀魂』と『遊戯王』のクロスオーバー小説をがんばってください！！」

光翔竜

「次が最後です。ペンネーム『ウツソ・エヴィン』さん……あ、今私と一緒にチームを組んでいるウツソさん、こなたちゃん、かがみんちゃんの作者だね」

銀八

「ああ、んで質問は？今回の話にはなのはさんは出てこないんですか？（ウツソ）」

「フェイト様に質問です。今一番誰をコンクリに固めてしまいたいですか？（たま）」

「銀時さんに質問。RSSでその……やってしまわれたんですが……どんな感じでしたか？（シャクティ）」……1は前回、出てきました」

光翔竜

「（もう出てこなくても良かったのに）……2つ目は……あれはあれで萌えました！！」

銀八

「おييييييييييッيي！フェイトに対する質問だけどもオオオオオ！！」

とありえない答えを言い出す光翔竜に呆れてツッコむ銀八。そしてフェイトが現れて。

フェイト

「……………すごく……………凄く怖かったアアア！！（泣）」

光翔竜

「きゃあああああああ！！泣いているフェイト様も可愛いイイ！！」

と、涙を流すフェイトの姿を何枚も写真で撮る光翔竜。

そんな光翔竜についていけない銀八はそのまま3つ目の質問を進める。

銀八

「3つ目は……………」

銀時

「……………フェイト達に黙っていれば大丈夫だ……………殺されないですむし」

それでもまあ、一応童貞は卒業した事になる。

良かったね、銀さん。

銀八

「俺は腹立つがな……と言っわけで『ウッソ・エヴィン』さん、廊下にたつてなさい」

光翔竜

「以上持ちまして、今回の『銀八先生』コーナーは終了です」

銀八

「まあ平和に終われただけでも良しとすつか……次回からいつもどおり7人ずつに戻りますのでお楽しみイ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第三百三十訓：大会の中には敗者復活戦もあり（後書き）

黒神

「と言う訳で、見事に生き残って準決勝に進んだチームは以下のとおり！」

『チーム・リリカル銀魂』

『チーム・オタクガンダム』

『チーム・キングドラゴン』

『チーム・クイーン』

『チーム・狂乱』

『チーム・ファイター』

黒神

「なお、ネプティューヌ・零斗・ノーヴェ・山崎も敗者復活したのでそれぞれ別のチームに1人ずつ助っ人として入り活躍もします。準決勝もお楽しみ」

フェイト

「次回、「休憩もたまには必要」テイクオフ」

第三百一十一訓：休憩もたまには必要（前書き）

前回のあらすじ

突如、黒神が銀魂ネタでもなくリリカルネタでもない完全銀魂風オリジナル長編シリアス、『リリカル銀魂ゲスト杯編』と言うゲスト達が中心となったシリアスを開催させた。

そしてその小説で黒神が招待したゲスト、そしてゲストに出して欲しいと頼まれて出したゲストは以下のとおり。

ウツソ・エヴィンさんの小説

『ウツソとリリカル銀魂 G・Strikers』

ウツソ 『チーム・オタクガンダム』（リーダー）

こなた 『チーム・オタクガンダム』

かがみ 『チーム・オタクガンダム』

世紀末雑魚さんの小説

『恋姫†BASARA学園物語』

伊達政宗 『チーム・キングドラゴン』（リーダー）

華林 『チーム・キングドラゴン』

春蘭 『チーム・キングドラゴン』

星 『チーム・キングドラゴン』

エターナルさんの小説

『銀魂 FATE リリカルなのは 禁書目録？とある侍とサーヴ
アントと魔法少女？』

セイバー 『チームとある運命』

凜 『チームとある運命』（リーダー）

ギル 『チームとある運命』

一方通行 『チームとある運命』

ラウラ 『チームとある運命』

打ち止め 『チームとある運命』

龍の骨さんの小説

『BASS学園』

北郷零斗 『チーム・マイティアテナ』

Sibugakiさんの小説

『リリカル銀魂Strikers』 蒼炎の龍

スバル・ナカジマ

烈火竜さんの小説

『DRAGON NAIL』竜の爪

光翔竜 『チーム・オタクガンダム』

Minosawaさんの小説

『リリカルオブ銀魂 Strikers』
『戦士達の鎮魂歌』

草薙京 『チーム・ファイター』

八神庵 『チーム・ファイター』

真王さんの小説

『リリカル銀魂 Strikers 銀の侍と4人の女神』

ネプテユヌ 『チーム・マイティアテナ』（リーダー）

音無 『チーム・マイティアテナ』

ゆり 『チーム・マイティアテナ』

支配者さん

『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』

相楽左之助 『チーム・ファイター』

緋村剣心

明神弥彦

charleyさん

『異世界合戦記録 リリカルBASARA Strikers』天
下分け目の魔法戦記』

徳川家康 『チーム・ファイター』（リーダー）

そしてこれらのゲスト中心の5チームに対してリリカル銀魂側でも
銀時・桂・神楽・近藤・ドゥーエをリーダーとした5チームも参加
された。

一回戦の双六と人生ゲームを参考とした罰ゲームメインの『危険度
マックスルーレット 超早抜け双六』により、さまざまな戦い、爆
笑展開、罰ゲーム、悲劇などさまざまな事が起こった。

そして一回戦とは思えないハードな戦いを制して準決勝に勝ち進ん
だのは以下のチーム。

『チーム・リリカル銀魂』

『チーム・オタクガンダム』

『チーム・キングドラゴン』

『チーム・クイーン』

『チーム・狂乱』

『チーム・ファイター』

これにより、『チーム・マイティアテナ』・『チーム・とある運命』
・『チーム・真撰組』・『チーム・ナンバーズ』の4チームは初戦
敗退。

しかしネプテューヌ、零斗、山崎、ノーヴェの4人が敗者復活に選
ばれたことによりそれぞれ別チームの助っ人と言う形で復活した。

ネプテューヌは『オタクガンダム』、零斗は『キングドラゴン』、
山崎は『狂乱』、そしてノーヴェが『クイーン』である。

彼等は、次の地獄の悪夢が来る様な準決勝がくる事を知らず、とり
あえずは初戦突破した者通しとして急遽話し合いをしていた。

そして準決勝で、更なる強豪ゲストキャラが登場する事に彼等はま
だ知らない。

黒神

「と言つ訳で、『リリカル銀魂 Strikers』が始まります！」

第三百一十一訓：休憩もたまには必要

地獄の大激戦に勝ち残った銀時達。

準決勝は明日行われると黒神から聞かされ、それまで彼等はミッドチルダのとある高級ホテルで止まっていた。

だが彼等は、何故か銀時が泊まっている『1503』号室で話し合っていた。

「と言う訳で皆さんにこの桂小太郎の作り話を聞かせたいと思います」

『てちよつと待てエ！！』

と、いきなり桂の作り物語が始まる直前にさつそくツツコミだすデアナ、月詠、リンフォース、山崎、ノーヴェ、政宗（女性化）など、ツツコミオールスターズ的なメンバーが大いにツツコム。

「いきなり呼び出した理由はそれかよ！！しかも何で自分の部屋じゃないく他人の部屋なんだ！！」

「こんな夜遅くまでに呼んどいて何だけど、貴方にプライバシーはないの？」

呆れて言い出す政宗（女性化）とネプティーン。

だが桂はそんな彼等のツツコミを無視するような感じで話を進める。

「まあ、せつかくだから聞いてみると良い。これはある人物が話してた事だがな……」

「完全に無視だよこの人……クールボケの次元を超えているよ」

と呆れて桂をシド眼で見る華琳。
しかし彼の話の聞かないと、この部屋から出られないようだ。
誰もがそう思った瞬間に、桂の無駄話が始まる

〳〵

時は西域28年

1人の暴君大魔女が降臨した

その名は、ジェイソ・キャロムス三千九百八十五世

天を支配すれば全てを焼き尽くすの忠実なる僕、暗黒竜王ことデイスパールが口から放つ暗黒の炎で全てを焼き尽くし

地を支配すれば2つの漆黒のチェーンソーで数多くの人を殺め、その身に数多の血を浴びて人々から暴君魔女として恐れられる

天と地の力をも手にした魔女は、ついには王国を1人で滅ぼして新たな帝国『ジェイソムスキラ帝国』を作り上げた

逆らう者には死を、従う者には容赦ないこき使い、もはや世界は地獄と言う名に代わってしまった

この世の破滅に誰もが絶望する中で、たった3人の勇者が姿を現し

た。

数多の敵を翻弄して一瞬に壊滅するほどの破天荒でたくましく、そして全ての敵に最も恐れられる存在

その男達の名は

ジェイソムスキラ帝国

「ふっふっふ……良くぞ我を恐れずに目の前に現れたなのう…愚か者達よ」

とジェイソ・キャロムス三千九百八十五世は3人を見下すような憎たらしい笑顔で笑い出す

だが暴君魔女の名に恥じないとてつもない殺気を放って、3人は警戒する

「貴殿等は我を倒そうとしているようだが、我から見れば主等からわざわざ殺されに来たの当然。死んでも文句は言えまい…」

愉快そうに余裕に言い出すその台詞

それはそれ双等の実力…というより圧倒的な力を持っているキャロムス三千九百八十五世が言える台詞である。

「下種野郎が……いくら胸がなくて体系が女らしくないからって、他人にその憎しみを押し付けやがって…」

「そのせいでどれだけの人々がハジケられなくなっちまったか分かってんのか!!」

「貴様によつて食界から消えてなくなっちまったところてんの仇、今こそ晴らさせてやるぜ!!」

頭がアフロヘアーのグラスンをかけた男に全身が棘棘に生えているオレンジ色の生命体、そしてプルプルよ震えている体全体が全てところてんで出来てる生命体

そう、彼等こそがこの世界を救う為に魔女を討とうとする3人の勇者。

その名は

「ボボボーボ・ボーボボ!!」

「ど……」

「この俺が、テメエの腐った根性ごとこの世から消滅させるぜ!!
首領パツチ、天の助!!」

『『エエエエエエエエ!? 魔女じゃなく俺達なのオ!? しかも自己紹介する暇ねえしイイイ!!』』

「はいストオーツプ!!」

と突如、ティアナが怒鳴って叫びだす。

〃
〃

「なんなのよコレ！？明らかにキャラをジェイソンとしての存在を暴君として悪化させている話じゃない！！」

「てか何で『ボボボーボ・ボーボ』のキャラも出てくんだよ！！明らかにおかしいでしょ！！」

と青ざめて叫び続けて怒鳴ってツッコむティアナと山崎。

「あのう、何でそこで銀魂には関係ないキャラクターも登場するのですか？」

と苦笑して質問を言い出すウツソ。

「いやあ、何かs i b u g a k iさんが『リリカルボーボ 爆闘！ハジケ対戦』と言う小説でボーボボ・首領パッチ・天の助の3人をゲストに呼んで欲しいと頼まれてな」

「だからってこんなくだらない無駄話に登場させんな！！何て言われるか分からないでしょうが！！」

桂が理由を言い出すと、リンフォースが怒鳴って叫びだす。いくらなんでコレはないだろうと言い出す。

「そうかなあ、私はコレはコレで面白いと思うよ。何かキャラ口ちゃんのジェイソン悪化ぶりなんかそれはそれで良いし」

「私も、何故か知らぬが話の内容も気になるしな」

とこなたと春蘭が気に入った様子で話の続きを聞きたいようだ。

「てか何であの娘を悪役にした？別に興味がないが何か恨みを持つてるのか？」

「いやア、最近のキャラのジェイソン嫉妬が面白いと高い評価が出てたもんで、さらに進化させたんや」

「マジで最悪だなおい！！お前それでも部隊長か！？」

と庵の質問に自信満々に答えるはやて。

そんなはやての質問はまさに最悪だと言い出す政宗（女性化）。

「じゃあ話の続きを……」

『『まだ続くんかい！！』』

（（

「敵に容赦なしイイイイ！！」

パチパチパチパチイイイイイン！！

『『ぎゃあああああああああ！！』』

ポーポボの容赦ない鼻毛真拳が炸裂して馬鹿首領バッチと天の助二匹を鞭のように叩き続ける。

「敵に容赦なしイイイイイイ！！」

パチパチパチパチイイイイインン！！

「ぎよええええええええええ！！」

さらに追加として容赦なく馬鹿二匹首領バッチと天の助に裁きを下すポーポボ。

「特に馬鹿二匹には容赦なしイイイイ！！」

パチパチパチパチパチパチパチパチパチパチイイイイインン！！

「ああああああああああああああああああああああああああああ！！」

そして姉妹には鼻から大量の鼻毛を放って無数の鞭のように振り続け馬鹿二匹首領バッチと天の助を一掃する。
そしてボロボロとなった馬鹿二匹首領バッチと天の助は気絶して倒れる。

「あーすつきりしたアアアアつと」

「主人公とは思えないほど外道なんですけどオオオオオオオオ！？」

とティアナはツツコミです。

『土下座!』』

と、何故か頭を下げて土下座する

「……………」

虚無の静けさに包まれる中、ジェイソ・キャロムス三千九百八十五世は黙りだす

ポーボボ、首領パッチ、天の助の3人は頭を下げてジェイソ・キャロムス三千九百八十五世を見つめる

そして……

『降参でえゝす』』

「デイスバール!」

幸福宣言を無視するかのように、魔女は『デイスバール』に命令する
すると『デイスバール』は顎を開き、そこからとてつもない魔力を
練りこんだ黒い炎を収束し、一気に3人に向けて放つ
そして漆黒の炎が3人を容赦なく焼き尽くす

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ』』

「そりゃそうだろ！てか合体奥義が土下座って意味わかんねエエ！」

山崎も続いてツッコミ出す。

しかも奥義どころが技ですらない上に合体もしてない行為には黙ってられない。

「やべえぞ、ボーボボ！！アイツとんでもなく強エ！！」

「数年間鍛え続けて編み出した究極奥義でさえも打ち消されちまつたし、どうすんだ！！」

首領パッチと天の助は慌てまくっている

究極奥義『土下座』でさえも通じないなど、もはや絶体絶命

「諦めるな！こんな事もあるつかと、秘策はある！！」

とボーボボが主人公らしいたくましい台詞を言い出す。
そしてその秘策が今すぐに発動される。

「おお、ボーボボそんな秘策もあったのかよ！！」

「ああ……その秘策は……」

『『秘策は！！！！』』

期待を高めてワクワクとする首領パッチと天の助。
そしてそのボーボボの奇策とは……

「鼻毛真剣奥義、裏切りの鼻毛ビーム!!」

ドカーン!!

『ぎゃああああああああああ!!』』

「ええええええええええええええええええええええ!!??」

突然、ボーボボが鼻から黄色のビームを放ち、またもや首領パッチと天の助を吹き飛ばした事に青ざめて叫ぶティアナ。

「てちよつと待てエエエエ!!何でまた俺達!?!」

「奇策つてそれ思いつきり俺達を裏切るだけじゃねえか!!」

突如攻撃された事に怒り出す首領パッチと天の助。

そんな馬鹿二匹にボーボボは…

「げはははははははははははは!!この世は力が全て何だよ!!弱者は強者に肉として食われてしょうがねえんだよ!!」

「何こいつ!?!本当に主人公!!」

あまりの外道ぶりにツッコまずにいられなくなったノーヴェは叫びだす

そして首領パッチと天の助は怒りの頂点まで達成した事であつてもない闘志を放つ。

「てめエエエエエエ!!もう我慢ならねエ!!」

「魔女に殺される前にテメエをぶっ殺してやるウウウウ!!」

と、首領パッチは『首領パッチソード』と呼ばれる葱を持ち、天の助は『ぬ』と書かれたハンカチと『魔剣ダイコンブレード』と呼ばれる大根を持つてポーボボに襲い掛かる。
しかしポーボボは容赦なく返り討ちにする為に、鼻毛真拳を炸裂させる。

「てめエ等全員、地獄に墮としてやるよ!!鼻毛真拳首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領パッチぶつ殺す天の助ぶつ殺す首領」

以下略分

「奥義!!」

「どんだけなんだよ!!」

と思わずツッコむ政宗（女性化）。

「『馬鹿二匹を裁く処刑津波-ウォール・ジャッチメント-』!!」

すると場は王室ではなく荒ぶる大波が押し寄せてくる海の岩場と変わってしまった。

ポーボボは仙人の様な格好をし、首領パッチと天の助は岩場の中心部にいた。

「てまたポーボボの必勝パターンにはまっちゃまったアアア!!」

「こんな感じで数多くの敵を倒し決まったけど、もしかして俺達もやられるって訳エ!!」

と首領パッチと天の助は怯える。
一体ポーボボが何を知れかすか分かったもんじゃないからだ。
すると、首領パッチはある事を予想した

「は！！もしかや大津波で俺達を飲み込むと言う雰囲気を作ってるけど本当は何かポーボボが雷を放って俺達を攻撃するんじゃない！！」

と首領パッチの予想は半分正解した

何故半分かと言うと、首領パッチの雷攻撃予想は当たっているがそれをを行うのはポーボボではなく……

「ジエイソンサンダー！！」

と、突如馬鹿二匹首領パッチと天の助の背後からジエイソ・キャロムス3895世が『雷斬』から漆黒の稲妻砲を放つ。

『ぎゃああああああああ、ここで魔女かアアアアアアアア
！！』

「何で魔女が！？てかこれ協力奥義！？」

と政宗（女性化）がツッコム
そして首領パッチと天の助は黒こげとなって倒れる寸前に……

「馬鹿二匹退場！！」

パチチーン！！x2

『ああ〜れえ〜!!』』

そして止めに鼻毛を鞭のように放って首領パッチと天の助を吹き飛ばすボロボボ。

そして馬鹿首領パッチと天の助二匹を吹き飛ばしたボロボボは大はしゃぎして喜ぶ。

「やったー!!俺達の勝利だああああああ!!イエーイ、イエーイ!!」

主人公とは思えない外道行為をした後に喜ぶボロボボ。

そしてジェイソ・キャロムス3895世の肩を揺らしながら喜び合う。

「やりましたなジェイソ・キャロムス3895世!!これで世界は貴女の者ですよ」

と、喜ぶボロボボを見ているとジェイソ・キャロムス3895世も思わず照れ笑いする。

「うむ…そなたの働きは高く評価しよう。これからも世の為にその力を尽くすが良い」

ピク!

「敵のお前が俺に命令するなああああああああああ!!」

パチーン!!

「おぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

と、ボーボボが大量の鼻毛を放ってジエイソ・キャロムス3895世とデイスバールを吹き飛ばし、魔女と暗黒竜王は2つの星と化した。

「結局は魔女を吹き飛ばすのかよ！！てか何がしてえんだ！？」

魔女も容赦しないボーボボの行為に怒鳴ってツッコむ政宗（女性化）。

そしてボーボボは一息をしてやり遂げた表情で飛びつきりの笑顔で笑う中……

「ボーボボオオオオオオオオオオオ！！！！！」

「ためエを1発ぶん殴らねえと気がすまねエ！！！！！」

と、爆走してそのままボーボボに殴りにかかるうとする首領パッチと天の助。

そんなしつこい馬鹿首領パッチと天の助二匹を見て、イラついたボーボボは、

「上等だアアアアアア！！こうなりや、ためエ等にこの世の地獄を見せてやりああああああああ！！！」

とボーボボが逆切れして馬鹿首領パッチと天の助二匹に襲い掛かる。

3人は一斉に飛び込んで行き……

ティアナとノーヴェは訳分からずパニくってる。

『お疲れ、ボーボボ』

『協力感謝するアル』

エリザベスと神楽はボーボボにそう言い出す。

「いやあ、俺も黒神さんの小説にようやくゲストとして呼ばれたから……スペシヤル嬉しい」

ボーボボは嬉しそうに言い出す。

自分もコレで大名キャラの仲間入りと確信したからだ。

「おい、ちよつと待てよ！」

と突如、顔中に血管を浮かべている政宗（女性化）が言い出す。

「さっきのこのクールボケ男のstoryを聞いている限り、お前散々と自分の仲間を好き勝手にいたぶってたじゃねえか！何でそこまでする必要があるのか言ってもらいてエが？」

「うむ、そう言うところは流石に感心できませぬな」

政宗に続いて星も同感する。

仲間を痛める行為は流石に良いとは言えない。

「いやあ、首領バッチと天の助馬鹿二匹を痛めつける事がサイコーってな感じで」

『外道退場オオオオオオオオオオオオ！！！』

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

「あんぎゃあああああああああああああああああああ
あああああ!!!」

ティアナ、月詠、リインフォース、山崎、ノーヴェ、政宗（女性化）
のツッコミオールスターズの正拳が炸裂し、ポーボボはそのまま星
と化してしまった。

「ポーボオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
『!』
『』

と逆に、桂、神楽、エリザベス、エリオ、はやて、こなた、春蘭、
零斗と言うポケオールスターズが叫びだす。

アルフ、シグナム、華琳、ウツソ、ネプティーン、庵、修羅スバル
は溜息を吐いていて、星にいたっては笑っていた。

とまあこんな感じでホテルの方は桂達のお馬鹿話は盛り上がってい
たその頃。

銀時とフェイトは……

*

「はあ、まったくうちの馬鹿作者のドS行動には呆れたもんだ」
「うん、まったくだよ」

銀時とフェイトはマンションの屋上で夜空の星を眺めていた。
今回の夜空は星が多く出ていて綺麗である。

2人は時々、夜の夜空を2人っきりでマンションの屋上で眺めている。

良くここで色んな話を話したり、悩みを話し合っていた。

「……………銀時／／／」

とフェイトはその身を銀時の肩に寄せて、銀時とくつつく。

「こうして2人っきりになるのも久しぶりだね／／／」

「そ……………そうだな……………／／／」

と顔を真っ赤にしながら右手の人差し指で右頬をかく銀時。

以前の自分じゃ絶対にありえない経験だが、最近ではこう言うのが慣れている。

フェイトを改めてみると、10年後のフェイトは美女として成長したと知る。

（本当に美しくなったな、フェイトも）

と銀時は左手で彼女の肩を掴む。

自分にはもつたいないほどの美女に成長したフェイトを見て、何か夢を見ているような気分である。

2人っきりの甘い雰囲気も朝までは……………

「きゃああああああああああああああああ！！フェイトさまとツ
ーショットなど羨ましすぎるウウウウウウウウウウ！！！」

とは続かなかった。

何故なら、2人の後ろからとてつもない速さで近づいて来てくる光
翔竜がいた。

「銀さん、是非とも私と変わってください……」

「はいストオ〜ップ！！！」

ドカア！！

「ぐふあああ！！」

と、光翔竜が飛び込もうとする前に背後から飛び蹴りを炸裂させる
かがみ。

光翔竜は銀時とフェイトの目の前で倒れてしまった。

「せつかくの2人っきりのロマンティックな雰囲気をぶち壊さない
ですよ！！空気読め、このフェイトさん一筋馬鹿！！！」

「だってええええええええ！！フェイト様と一緒にいられるなんて羨ま
しい過ぎるよオオオ！！私だって一緒に……」

「良いからジャマするナアアアアアアア！！！！」

ガコオオオオオオオン！！

かがみが渾身の一撃の拳を炸裂させて、光翔竜の顔面を地面に叩きつけるように殴る。

コレには光翔竜も流石に答えて、意識が飛んで気絶してしまう。

「…………お騒がせしました」

と最後に銀時とフェイトに謝罪するかがみは、気絶して倒れた光翔竜を抱えてこの場を去る。

しばらく虚無の如くに静かになるこの雰囲気、銀時とフェイトも啞然としていた。

「…………いやあ、本当に鏡はいろんな事があつたわ」

「…そうだね」

呆れてしまう銀時と苦笑するフェイトはそう言うしかなかった。

*

とある森の中

そこでスバルは1人、剣術の稽古をしていた。

『テイルヴィングエア』で居合いの構えをしてはいないが、眼を瞑つたまま何かを感じてる。

風が吹くと木に生えていた葉っぱが4・5枚飛んで行きスバルの隣にと織り出そうとするが…

スパアン

突如、無数の葉っぱがまっ二つに切れた。

いや、スバルが風と一体となっていつ抜刀したのかも分からないほどの速さで斬ったのだ。

虚無の如くの静けな太刀。

居合いを極めた者にしかできない境地。

「……………」

ゆっくりと眼を開いて場を見る。

そして彼女の頭の中には今でもはっきりと浮かんでいる。

剣士としての誇りを賭けたセイバーとの激戦。

そして侍の魂に匹敵する騎士の魂。

(騎士の魂……………まだ、私が知らない剣士としての強さが存在する。
異世界はやっぱ広いんだ)

もしそんな剣士が敵として現れるその時まで、もっと強くならなきゃいけないと思う。

だが自分の剣は強くても過去に何度も人を殺めた殺人剣術。

どんなに強くなっても、どんなものでも斬れても、それは決して変わりはない。

「……………それで、何こっそりと隠れているのかな？」

と、スバルは後ろの木に隠れている人に言い出す。すると木の後ろから1人の少年が現れた。

その少年こそ、明神弥彦である。

「いや、別にこそこそするつもりはねえんだっただけ……何か入れる雰囲気じゃなかったし……」

とオドオドと言い出す弥彦。

何かスバルに用事がある様だが、先ほどの稽古は弥彦が入り込めない程、空気が重かったようだ。

「……君は、確か支配者さん所のゲストの……」

「ああ…俺、明神弥彦って言うんだ……宜しくな」

と自己紹介を済ませる弥彦。

そんな弥彦にスバルも自分の名を言い出す。

「スバル・ナカジマだよ、宜しく……で、私になんか様かな？」

とスバルが弥彦に自分に何か様かと言いだすと、弥彦が真剣な表情でスバルに頼む。

「頼む、俺にもアンタの剣技を教えてください!!」

「……はい？」

突如、自分の剣技を教えてくださいと頼まれたスバルは思わず啞然とする。

「アンタの剣には魔導士とか言う魔法便りの連中とは思えない侍の

魂を感じ取ったんだ。縮地も抜刀術も……魔力とか言う妖術の力の源無しで神速の動きまで領域に達成したあの力こそ剣士としての究極の領域だと思っちゃまったよ」

それはセイバー戦でスバルが炸裂した居合いを中心とした神速抜刀術。

剣心をも凌駕する最速剣技は弥彦の眼にも強く焼きつかされた。同時にあれこそが自分の目指すべき強さじゃないかと思った。

「……俺、支配者の小説の本編で全然出ていねえんだ…薫に道場の留守番を無理矢理任されて、部外者扱いのようにされちまった」

と悔しそうに言い出す弥彦。

何せ、剣心達がそんな凄い戦いを繰り返したあげくに自分はその場に立ってはいない。

それは自分の強さが剣心達より離れている劣等感を抱きだす。

「だから俺、もっと強くなりてえ！！俺だって最強の侍を目指してえんだ！！」

強さを求める弥彦。

足手まといだけはなりたくないから強くなりたい。

己の存在を小さく感じ、弱いままの自分はもう嫌であると。

スバルは今、自分を見ている様な気がしていた。

己の力不足を悔やむところはかつての自分も同じである。

目の前にいる小さな少年がどれだけ強さを求めているのかを肌から伝わってくる。

だから弥彦の悔しさと力を求める思いを嫌と理解できてる。

「……君の気持ちや言いたい事、凄くわかるよ」

「じゃあ……」

「だけど…君には必要ないよ」

「なア？」

覚える必要ないと言われた事に驚く弥彦。

それはつまり、スバルは弥彦に『蒼刀術』の剣技を教えない事である。

「確かに、強くなる事は大事だけど……君が目指しているのは強さだけ？」

「だけって……それ以外に何が必要と……」

「それが必要ないんだよ、強さだけを求める事自体が。弱い自分であるのは嫌なのは私だって同じだよ……だけどそれだけじゃ駄目なんだ。強さだけを求めた先は、孤独で虚無に等しい修羅の道への魔の誘いだけ。」

と弥彦を見つめながら言い出すスバル。

強いだけじゃ、本当の強さは手に入られない。

ましてや、弥彦にそんな強さを手に入れてしまえば逆に彼の心が弱くなる。

「それに……元々私は剣技よりも力ある剣のほうを求めていた。どんな物でもぶった斬って障害も何でも何かを護る為なら何でも斬るような力の剣……剣技なんて力の剣に比べりゃまがい物だと思っていた」

「剣技がまがい物って……」

その台詞自体が弥彦には信じられなかった。

優れた剣技で相手を翻弄し最速の動きで相手に戦うのがスバルの剣の戦い方。
剣技がまがい物だと言うのは、自分の戦い方を否定しているのと同じ緒である。

「でも、私には力の剣を会得する為の腕力がない。だから技を会得するほかはなかった……けど、セイバーとの戦いで私……気づいたんだ。人にはそれぞれ自分に合った剣技があるって事を」

まがい物と思つても、『蒼刀術』ソウトウジュツはスバルの独自で編み出した自分の個性を活かした我流剣術。
どんなにまがい物と思つても、スバルは銀時の剣ではなく自分の剣を磨き続けていた。

それを、セイバーとの激戦で思い出させてくれたのだ。

「私は今まで自分の力をまがい物だと思つてたけど……思い出したんだ。どんな形であれ、これが私自身の剣何だって」

と、スバルははっきりと理解して言い出す。

そんなスバルの話聞いて弥彦はまるで自分に伝えている様に聞こえていた。

それは、モノマネだけじゃ本当の強さは手に入らないと。

スバルは、力ある剣にたどり着けないふがない自分に嫌気を刺していた。

だがそれでも銀時の様な剣士になる為に己の持てる力を極めた。

「スバルさん……分かったよ。俺、他人の力を求める事よりもまず自分自身を鍛えなおそうと思う。たとえスバルさんのように最速には行けなくても、それに負けない自分の剣を見つけてみる」

「うん、そのほうが良いよ」

と、スバルは弥彦に近づいてきて彼の頭を優しく撫でる。

「あつ……／＼／」

突如、頭を撫でられた事に顔を真っ赤にする弥彦。

普段は子ども扱いされるような行為でいやだが、何故かスバルからは子ども扱いされるような雰囲気はない。

「ちよ……いきなり何を……」

「弥彦君……私は君に大した力を与える事はできないけど、コレだけは言っておくよ」

とスバルは弥彦に剣士としてのアドバイスを言い出す。

「弥彦君は弥彦君しかない力が必ずあるから、それを見つけて出してそれが、貴方を強くさせてくれるから」

「……有難う、スバルさん」

自分にここまで言ってくれるスバルに強い感謝をする弥彦。自分も自分自身の強さを見つけて、強くなる事を決意する。

そんな様子を、木の後ろから見届けている剣心と左之助は安心した表情をする。

「……もう心配ねえから、ずらかろつぜ剣心」

「ああ」

ともう大丈夫だと確信し、左之助と剣心はホテルに戻ろうとする。

そして、翌日：黒神による悪夢の準決勝が始まるうとしていた。

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第三百三十一訓：休憩もたまには必要（後書き）

今回、とある事情があつて『銀八先生コーナー』はお休みします。

ですが次回は本編始まる前にいつもと倍にと『銀八先生コーナー』だけを始めます。

黒神

「次回、『表の嘘の中には裏の真実がある』。テイクオフ」

超教えて！！銀八先生スペシャル（前書き）

銀八

「超教えて！！」

生徒全員

『『銀八先生スペシャルううう！！』』

銀八先生

「へえ〜い、と言う訳で今回は『銀八先生コーナー』のスペシャルと言う事で本編の前にこのコーナーを中心に『銀八先生スペシャル』として進めま〜す。今回のアシスタントはこの2人」

こなた

「はいはあ〜い 『ウツソとリリカル銀魂 G・Strikers』のゲストキャラのみんなのアイドル、こなたとかがみんだよ〜」

かがみ

「さつそくかがみん言うな！！」

さつそく妙なあだ名で言い出すこなたにツツコムかがみ。

2人は本当に仲が良い。

かがみ

「にしても、いつもは本編の後に『銀八先生コーナー』を始めるのに今回はいきなりだね？」

銀八

「だってほらア、たまには質問コーナーのスペシャルやんねえと山のようにたまってるほかの作者の質問に答えられねえっしょ？」

こなた

「うん、確かにそうだね」

銀八の言いたい事を納得できるこなた。

それだけ黒神は他の作者からの質問を溜めてる。

銀八

「今回はスペシャルという事で、これまで読者の皆さんからもらった質問を全て答えさせてもらいます！！」

こなた・かがみ

『『おおおおおおお！！！！』』

と、まさにスペシャルにふさわしい豪華20人以上の読者の質問のお答えにこなたもかがみも眼を光らせる。

前のように今回は久しぶりに一気に質問を答えるのは滅多にないからだ。

銀八

「それでは！！」

銀八・こなた・かがみ

『 『 『 超教えてー！！銀八先生スペシャル』 スタートでえーすーすー！！』 』

超教えて！！銀八先生スペシャル

銀八

「んじゃさっそく行きますか…まずはペンネーム『月光閃火』さんからの質問」

かがみ

「『1・敵キャラ勢に質問：『シヤマルの特製料理必食』 某・ぶるうあああああああああ！！キャラによる【みつくみくにしてやんよ】熱唱の鑑賞』 『某・月光蝶でああああああああああああああるッ！！キャラによる【卑怯戦隊うるたんだー】熱唱の鑑賞』…この地獄コンボに耐えられそう？」

2・ドゥーエに質問：銀魂の男性キャラ勢の中で本気で色仕掛けで迫りたいのって…誰だ？』 さっそく変な質問来たよ！！」

こなた

「まあまあ、んじゃ質問は『鬼兵隊』達に聞いてみるとしようよ」

とこなたがかがみを抑えながら言い出すと、モニターから高杉晋介達が現れる。

高杉

《やられる前に殺りや良いだけだ…だから耐える必要はねえ》

万斉

《拙者は御免ごうむるでござる》

また子

《んなもん無理に決まってるっス!!》

変平太

《美少女の為なら耐え抜きますとも。後念の為に良いですけどね、私はロリコンじゃなくフェミニストな…》

似蔵

《様は斬れば良いんだろ？全てを？》

鍬死楼

《それで腐っちまった幕府を潰せるもんなら耐えられるだろうよ》

アリマ

《無謀な事はしない》

とモニターが切れる。

晋介、万斉、また子、似蔵、アリマは耐えられないほつで、変平太と鍬死楼は耐えられるようだ。

かがみ

「何か全然答えになってないような気がするけど？」

銀八

「気のせいだろ？んで2つ目」

ドゥーエ

「そうねエ……銀時や桂など良い男に色気付けたいけどねエ？って

そんな事より出番が欲しいわよ!!」

とドゥーエは泣きながら言い出す。

かがみは苦笑しながらドゥーエをかわいそうに思う。

銀八

「と言う訳で『月光閃火』さん、廊下にたっついていなさい。んで次イペンネーム『真王』さん『真王』では質問に入る。『作者は個人的に誰を罰ゲームさせたいんだ?』」

ジャンヌ「ある意味怖いんですけど…。『銀時が好きな人たちに、銀時が胸を揉んできたらどうするの?』」

シャル「セクハラだね。『キャラは月詠と神楽にカンチョーさせたらどう?』(黒笑)『』『』」

かがみ

「てシャルも変態じゃねえか!!!」

と思わず青ざめて叫びだすかがみ。

ちなみに答えは…

黒神

「僕は自分が面白く思う罰ゲームですかね」

とドゥーらしい質問の答えをする。

一方、フェイト達は

フェイト・スバル・なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リイン
フォース・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・ディート・猿飛

『ブハア!!』

ドサア×13

と妄想して鼻血をたらして倒れてしまう13人。

銀八

「相変わらずだがマジム力つくんだけど？」

こなた

「まあまあ…それに私だって美少女達の胸を揉みまくってやりたいしねエ」

かがみ

「スケベ親父かアンタ!!」

銀八は銀時にムカつき、こなたのセクハラ発言にツッコムかがみ。

かがみ

「ちなみに2つ目の質問は…」

ジェyson

「そんなの必要ねえ!! 蛆虫どもにはこの『雷切』で切断しまくってやりや!!!」

こなた

「ひいひい~~~~!!!」

とジェysonを見て怯え、かがみの後ろに隠れだすこなた。

以前にトラウマがあるそうで、ジェysonキャラは彼女にとってま

さに天敵。

銀八

「と言う訳で『真王』さん、ネプティー又達の活躍をこれからも見守ってください」

こなた

「次はペンネーム『亀鳥虎籠』さんからだよオ！』ノーヴェに質問。コッチでは、左之助に惚れてます。どう思いますか？

山崎に質問。

デイエチに着て貰いたい服はどれですか？

1・ワンピース

2・白地の長袖YシャツにGパン

3・タンクトップ」

ノーヴェ

「ベベベベ……別に、アタシはあっちのアタシとは関係ねエけど？
／／／」

と顔を真っ赤にして答えるノーヴェ。

こなた

「おやおやあゝ、何やら怪……」

かがみ

「止めい！……」

ガコオン！！

と後ろからかがみに殴られて痛がるこなた。

かがみ

「たくウ…んで次は？」

山崎

「デイ……デイエチちゃんなら何を着ても似合っけど、強て言っならいかなあ」

銀八

「はいイイイイ！！終わりイイイイ！！」

バコオオオオオン！！

山崎

「あんぎゃあああああああ！！！！」

と突如ムカついて木刀で山崎を吹き飛ばす銀八。
醜い男の嫉妬が生み出した悲劇である。

かがみ

「ちよつとおおおおおおお！！！！何やってんのあんたアアアアアアアア！！！！」

銀八

「いやア、マジでムカついたもんで」

かがみ

「マジで最悪なんだけど！？おかしいぐらいに！..」

とかがみは銀八の嫉妬理由に呆れている。

と言うよりそれだから女が出来ないと言いたいところだが、あえて言わない。

銀八

「と言う訳で『亀鳥虎龍』さん、廊下にたつてなさい」

かがみ

「はあ、まったく…。次はペンネーム『葉月』さん『では、ゲスト杯に出演するみんなに質問です。』

？夏といえば何ですか？

- 1．キャンプでバーベキュー
- 2．海（サーフィンとか、日向ぼっことか）
- 3．肝試し

？おばけ役は誰が適役ですか？

？次のうち、「怖すぎる！」「と思うのはどれですか？

- 1．井戸から出てくる貞子
- 2．呪怨（あ”あ”あ”あ”という声を出す）

- 3 ・ジエイソン（チエーンソー所持）
- 4 ・バイオハザードのゾンビ
- 5 ・着信アリ（呪いの着信音）

『
』

こなた

「個性的な質問ばかりだねエ、かがみん」

かがみ

「かがみん言うな！！……じゃあ？は私とこなたが答えます。2の方がいいかなア？」

こなた

「私も2だよ！！だってエロい水着が来ている美少女とかいそうだし」

かがみ

「たからおやじ顔負けのセクハラ発言止めい！！」

容赦ないセクハラボケをするこなたにかがみは呆れてツツコム。

こなた

「？は当然『リリカル銀魂 Strikers』攘夷戦争鎮魂歌』のキャラだね」

かがみ

「何で？」

こなた

「だってジェイソンだし？」

かがみ

「全然お化け関係ねエー！」

こなた

「まあまあ。そして？は……もちろん3のジェイソンー！」

こなた

「まあ、それは否定しないわ」

こなたが怯えながら3と答える事に否定しないかがみ。
ジェイソンはマジで怖いのである。

銀八

「俺だって嫌だよ、ジェイソンは……と言う訳で『葉月』さん、全員と答えるのはマジで大変ですのでゲスト代表はアシスタントのこなたとかがみが答えました」

こなた

「次はペンネーム『次郎長』さんの質問だよ『なのは、フェイト、はやて、ティアナ、シグナム、神楽、月詠に質問。』

各々にリストアップした機体の中で乗ってみたいと思うやつは何ですか？

また、その理由もお教え下さい。（例えば自分が使う魔法とかイメージとかに似合っているからetc…）

フェイト：ガンダムデスサイズヘル（EW版）、ガンダムF91、シヤア専用ザク、シナンジュ、ガンダムハルト、クロスボーン・ガンダムX2、ブレイヴ

はやて：ガンダム試作二号機（核装備）、ガンダム、ターンX、
デストロイガンダム、ガンダムDX

ティアナ：ガンダムヘビーアームズ改（EW版）、ガンダムサバー
ニヤ、ケルディムガンダム、ストライクノワール、プロヴィデンス
ガンダム

シグナム：ガンダムエピオン、トールギス？、ダブルオークアンタ、
リボーンズガンダム、ソードインパルスガンダム、ガンダムナタク、
スサノオ

神楽：ガンダムスローネアイン、ガンダムスローネツヴァイ、ガン
ダムスローネドライ、GN-X、レグナント

月詠：クシャトリヤ、キュベレイMK-？、クイン・マンサ、ユニ
コーンガンダム、ユニコーンガンダム二号機^{バンシイ}

なのは：アジール、アプサラス？、サイコガンダム、ビグザム、
デンドロビウム、ラフレシア、レグナント、ガンダムヴァーチェ、
セラヴィーガンダム、ガデラーザ、アルヴァトーレ、ジェネシス、
バルジ砲、メメントモリ、コロニーレーザー、それとも………デ
ビルガンダム？

『 』

こなた

「おお、次はガンダム関係だねエ。んで質問の答えは？」

はやて

「にやはははははは！！！世界征服しそうなデストロイガンダムや
！！！」

銀八・かがみ

『『何か、実際にガンダム手に入れて欲しくネエ（ない）人物が目
の前にいるんですけど！？』』

と、はやての怖い答え方に思わずツッコむ2人。

ティアナ

「そうねえ、二頭拳銃からしてストライクノワールかな？」

シグナム

「ガンダムエピオンだな。なんとなく私の攻撃パターンに似ている
から」

神楽

「イメージカラーでガンダムスローネツヴァイアル！！」

月詠

「特に興味ありゃしない」

なのは

「全部いやなのオオオオオオオ！！！！（涙）」

とそれぞれ独自に答えだす。
と言うよりなのは彼女が嫌がるのばかりであった。

こなた

「と云う訳で『次郎長』さん、中々見る眼があ…るぎゃあああああああああああああああああ！！！」

と無言で背後から『スターライト・ブレイカー』をお見舞いされて
黒焦げになるこなた。
しばらく再起不能。

かがみ

「自業自得よ…次はペンネーム『無目藻』さんの質問です。『？○
イソンモードのキャラとフルメタル・パニックの
大貫さん（狂戦士状態）が殺り合ったらどちらが勝ちますか？

？クロノ、はやて、エリオ、キャラに質問です。

実は、自分も小説書かしていたのですが、その中のひとつで貴方達全員死にます。

- ・クロノは艦隊戦の中、自分の艦と運命を共にして死にます。
- ・はやてはテロリストの凶弾で撃たれ、失血死します。
- ・エリオ、キャラは後退の時に多くの敵を道連れにして壮絶な戦死をします。ちなみに二人は相思相愛です。

銀河英雄伝説をもとに書いたらこうなりました。

どうでしょうか。『……………て？は知るかアアアアアアアアア！！！！』

銀八

「はつきり言って怖すぎて答えにくいんですけど！？」

かがみも銀八も想像するだけで青ざめる質問にどう答えれば良いかわからない。
ちなみに？は

クロノ・はやて・エリオ

『『どの道死ぬからイヤアアアアアアアアアア！！！！！』』

キヤロ

「うっしやあああああああ！！！！」

とはやて、エリオ、ついでにどうでも良いがクロノは嫌がりだし、キヤロはエリオと相思相愛で嬉しがる。

銀八

「と言う訳で『無目藻』さん、？の答えは一応フルメタル・パニツクの大貫さん（狂戦士状態）が勝つ可能性が高いと思います」

かがみ

「次はペンネーム『ケン』さん『早速質問するか・・・なのはに質問・・・もし銀さんが自分以外の女性と付き合い・・・新たな趣味としてしましまパンツ収集に目覚めますか？（黒笑）』て明らかに変態的質問何だけど！？／／／」

とかがみは顔を真っ赤にしてツッコミだす。

まあ彼女から見ればそうなるであろう。

ちなみに答えは……

こなた

「あいたた……いやあ、流石に私もやりすぎ……」

なのは

「天誅!!!!!!!!!!!!!!」

どカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!

こなた

「塵と化すウウウウウウウウウウ!?」

と、怒り任せになのはが放った『デスペレード・デモンブレイカー』
が起き上がったこなたにヒットして、こなたは黒こげとなって気絶
して倒れる。

かがみ

「こなたアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

かがみは青ざめて思わずこなたを呼び出す。

今度は不運な結果になってしまった。

なのは

「と言う訳で『ケン』さん、このような質問は二度としないでくだ
さい!!」

となのはは怒って席に着く。

次、彼女を怒らせてしまえばまたとんでもない事になるかもしれな
いと誰もが確信した。

銀八

「……………つ……………次はペンネーム『夜叉龍』さんの質問です『それじ
やあ質問。』

今回頑張ったスバルに二つ。

一つは前の質問に出てきたアラガミ、カリギユラ。

こいつと戦ってみたいか？ちなみにこいつは作者的に単体だったら最強のアラガミらしい。

次にここに新しいバリアジャケットの案がある。着てみたいか？

ちなみに容姿は下はショートパンツに前と後ろの布が無い膝よりすこし長めのロングスカート。上はノースリーブスで前に小さめのバラ、後ろに大きめの花があしらわれているぞ。色は基本白だが好きな色にしていぞ。スカートにはフリルが、前のバラには太く短めのリボン、後ろには細く長めのリボン、そして背中にスリットが。ただしこれは背中と真ん中をちよつと見せてるくらいだ。』」

かがみ

「次はスバルに対する質問ね。で、スバルの答えは？」

スバル

「そうだねエ…一つは戦ってみたいといやあ、あんまり戦いたくないけどもし敵として現れるなら戦うよ。二つ目はありがたいけど…はやて部隊長が却下しそう……」

と二つ目の質問に対してはしょんぼりするスバル。

はやてのセクハラ的理由で却下されそうで悲しいからだ。

かがみ

「うわあ、と言う訳で『夜叉龍』さんスバルをこれからも見守ってください」

「んで次イ、ペンネーム『白黒』さん『ナンバーズに質問です。ナンバーズの皆さんはどんな私服を着ますか?』」

『……そうだなあ、じゃあナンバーズのみんなに聞いてみるか?』

ウーノ

「そうねえ、適当にワンピースとかが多いわね?」

ドゥーエ

「いつも隠密的活動をしているから、あんまり代わらないけどね?」

トーレ

「上に同じだ」

クアットロ

「私もいつもと同じ戦闘着だよ」

クアットロ

「以前にホワイトデーで銀時からもらったゴスロリ衣装を私服として着てるぞ!!」

セイシ

「私は配色パイピング使いランニングドレスと短パンだよ」

セツテ

「スキップパードレープシャツに、ピンクのミニスカート」

オットー

「合皮使いニットデニムチュニックと灰色のクロップドパンツ」

ノーヴェ

「さあな、適当に白いシャツにGパンだけを着ているけどな」

デイエチ

「い……以前に山崎さんが買ってくれた黒と白をメインとしたマルチボーダーセーターにレギンス付の黒いスカートに靴はダークブラウン／＼／」

ウィンディ

「私は赤いUVカット指穴パーカーに赤黒シマシマのミニスカート
つす」

デイド

「教会のシスターの衣装です」

と、ナンバーズがそれぞれ答えだす。

銀八

「と言う訳で『白黒』さん、作者は全員答えるのを書くのマジで大変なのでわかってやってください」

かがみ

「それ、あんまり言わないほうが良いんじゃない？次はペンネーム『風花』さん『質問

？銀八先生の吸っている物って……ペロペロキャンディーでしたっけ？ どうすれば口に入れたまま喋れるんですか？

？銀八先生に活躍を！ って願ったらだめか？ (by森羅)『」

銀八

「ずばり答えます。？の答え、ええ〜ペロペロキャンディは煙は出ていますが吸うのではなくぺろと舐めるキャンディであり、それについては企業秘密です。そして…？は有難う！！銀八先生はこれから永遠と不滅です！！」

活躍を願ってくれる質問にマジで感謝してる銀八先生であった。しかも彼は大泣きしてる。

かがみ

「と言う訳で『風花』さん、これからも銀八先生コーナーを楽しみにしてください」

こなた

「こなたふつかあーっつ！！」

かがみ

「うおわ！！」

と、突如こなたがかがみの前に立ち上がって復活する。

かがみ

「ちよつとお！！いきなり立ち上がって危ないでしょ！！」

こなた

「次の質問行きます」

かがみ

「聞けエエエエ！！」

とこなたにムシされて怒鳴ってツッコムかがみ。
さすがに怒らないほうがおかしいであろう。

こなた

「ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』さんの質問『改めて質問させていただきます。』

御坂妹「高町なのはに質問。 次の内乗ってみたいと思う機体はどれですか」とミサカは問います。

1 . 天のゼオライマー

2 . デビルガンダム（最終形態）

3 . デスザウラー

4 . マジンカイザーの4択ですつとミサカは補足します」

信玄「僕からも問おう。 六課の者達よ、お主達も武田漢祭り（特別に女性参加有り）に参加せぬか！！？」

剣麻「某からも質問があります。 リリカル陣営の者達に質問。

以下の者達の事をどう思われる。

1 . 『征天魔王』 織田信長（第六天魔王）

2 . 『裂界武帝』 豊臣秀吉（霸王）

3 . 『天我独尊』 松永久秀

4 . 『君子殉凶』 石田三成

5 . 『南蛮我道』 ザビー

この者達でいいか」

以上でいいか。 『 『 『

なのは

「どっちもお断りです！！」

となのはは如何って即答する。

先ほどの『ケン』さんの質問にそつと怒っている様だ。

機動六課（スバル、エリオ、シグナムを覗く）

『『流石に体が持たないので却下です!!!』』

スバル

「まあ……銀さんの様な力ある剣に近づけるなら考えます」

エリオ

「男として参加します」

シグナム

「うむ、参加してみるかいがあるようだ」

と、などと答えだす。

そして3つ目の答えは…

機動六課（スバルを覗く）

『『ほとんど同じ人間とは思えません!!特に織田信長は人間ですか!?!』』

スバル

「うわぁ、何か独自の強さを持っている感じがします」

銀八

「いや、BASARAキャラはほとんど人間離れた超人ばかりだからしゃあねえだろ?と言う訳で『武田軍兵士 清坂 劍麻』さん、廊下にたつてなさい」

かがみ

「次はペンネーム『鳴神 ソラ』さん『マリオ』銀時達に質問『冥王についてどう思う?』」

ルイージ「質問『最近の内の兄さんについてどう思います?』」

ネス「質問『銀次さんについてどう思いますか?』」

銀八

「ずばり答えます」

全員（スバル・なのはを覗く）

「なのはそっくりな上にメツチャ強くて驚いた」

スバル

「なのはさんそっくりでも違う強さを持っていたことに感心したよ」

なのは

「うぬぬぬ、侮れないなの」

銀八

「以上、1つ目の答えです。2つ目は最近訳わかんなく感じます。

3つ目は銀次さんって言う人がまずどう言う人物なのか教えてもらえれば答えやすいんで、分からないので答えられませんので申し訳
ございません」

かがみ

「と言う訳で『鳴神 ソラ』さん…申し訳ございません」

こなた

「次はペンネーム『charley』さんって、むつつりスケベの徳川家康とスバルの師匠気取りの三成を中心とした小説を書いている人だね」

かがみ

「止めなさいその言い方。家康さんと三成さんに失礼でしょ？」

とこなたのさりげない言い方にツツコムかがみ。

銀八

「んで内容は『小十郎

「最近こつちの作品で我々に合流した政宗様の義弟の成実様はとんでもないゲテモノ食らいの悪食ぶりで有名なお方なのだが…そつちにも過剰な甘党やらマヨラーやらソースラーなど悪食な人間が多いが、作者から見て一番悪食だと思うのは誰だ？」

それから、そつちの者達から見て、シャマルの料理をものともせず
に食らう成実様はどう思うか？」

『……てはあ？独眼竜の弟つてシャマルの料理食べても平気なの！
？ある意味最強キャラじゃん！！』

と信じられないように驚く銀八。

かがみ

「ええ、あのシャマルさんの料理を？」

こなた

「マジで！？それ信じられないんだけど！！」

2人ですら驚くほど。

2人もシャマルの料理がどれだけ不味いかいやと知っている。

銀八

「つつか思わず後の質問のほうを答えちゃったけど！小十郎の質問の答えは……シャマルの料理を食べても平気な成実が最も悪食だ！！」

こなた

「と言う訳で『charley』さん、本編でも徳川家康のむっつりスケベぶりも書いてね」

かがみ

「しつこい！！たくウ…次はペンネーム『種地響介』さんの質問です『今日初めて新しくなったことに気付きました種地です。』

後編では暫くの間はこな（黒神さんのキャラへの制裁？）が続くみたいですね……。コワッ！！

種地

「では質問させていただきます。

今回筆頭が女体化してしまいましたが銀さんやヅラ達の西郷さんのとこでしていた姿をさせますか？

また、お二方のラバースの皆様はその姿をどう思いますか？

ここに写真を皆様の分の写真を贈らせて頂きます。」

シロガネ
白鋼

「ども、種地の小説で主役やらせてもらっています白鋼です。

俺からはナンバーズ組への質問です。

なのはさんがいる六課に協力して正直に言って後悔していると思いますが、もし仮に以下の方々がなのはさんの代わりにいたらどの六課に入りたくないですか？

？金色のガッシュー！！のブラゴ、クリア、ファワード、アシュロン、デモルト達とドラゴンボールのフリーザ、セル、ボージャック、ブロリー、魔人ブウ、超一龍達の

「主人公抹殺チーム」

？Gガンダムのデビルガンダム計五形態全機と遊戯王のブルーアイズシリーズ計三種類三体ずつに、ウルトラマンからベリアル計三形態十体ずつとハリポタのヴォルデモート二百人の

「海馬社長のお手軽世界征服クッキングチーム」

？ポケモンのピカチュウ、ピチユウ、プリン、ヒノアラシ、チコリータ、アチャモ、ポッチャマ達の

「ほのぼのチーム」

ただし？の鳴き声は全員若 さんです。」

ゲドガネ
外道鉄

「最後にオレ、外道鉄だ。」

キヤ〜口ちゃんツ

前回の感想でウチのバカ（作者）が言ってたとおり、エリオ君を墮とすためのピのつく薬1と最高級の拘束器具を黒神さん経由で受け取ってくれ

いや〜オレ黒神さんと気が合いそうだわ（ドス黒笑）

ンじゃ、バイビ〜」

有難うございました。『……………うわあ、また壊れ質問が来たわよ」

「はい、んじゃ質問の答えどうぞ!！」

フエイト・スバル・なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リイン
フォース・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・ディート・猿飛
『それはそれで良いかも!！」』

はやて

「お姉様と呼ばせてください!！」

ヴィータ

「いや、アウトだろほとんど!？」

とそれぞれ答えを言い出す。

続いて2つ目の質問は……

ナンバーズ

『『いえ、今の機動六課のままで充分（です）（っす）!！」』』

銀八

「だろうな……そして3つ目はこれ消滅!！」

と銀八は木刀でビのつく薬1と最高級の拘束器具を一刀両断に切断して斬る。

後がややこしいからだ。

そんな光景を、こなたとかがみは無言で拍手する。

銀八

「と言う訳で『種地響介』さん、これからも宜しくお願いします!！」

かがみ

「次はペンネーム『白米』さん」1.

刃「シグナムに一つ提案する。

ジャングルの女戦士アマゾネスは弓を射る時の為に、邪魔な右の乳房を切断してるらしいぞ。

貴様も切除するか？」（鎌を構えながら）

2.

武「機動六課のヘタレ共（スバル、エリオ、シグナム除く）に質問だ。

次のうち、体験してマシだと思っるのはどれだ？」

A Minecra^{クリーパー}ftから匠軍団に攻められる。

B ハガレンのアームストロングから暑苦しい抱擁。

C 尻穴に木刀で牙突・零式をされる。

D 屁怒侶から二重の極み

E ハタ王子に「余の靴を舐めよ」と踏まれながら罵られる。

F オカマ、又はオナベに貞操を奪われる。

武「解答拒否したら、全員連帯責任な上に銀八とスカリエツティも道連れに『貞子とディープリキスの刑』だからな」

3 .

白米「神楽とエリオとスバルに質問。

……バロットという食べ物をご存知ですか？ 一応、3
個人用意したので食べて見てください……。吐いちゃうかもしれませ
んが……。

知らなかったら調べてみてください……と言いたいところ
ですが、かなりグロいのでこの質問は解答拒否してもよろしいです。
思い出しただけでも……おえっ」「」

シグナム

「切り札の胸を切断したら私の特徴が消えてしまうのではないか！」

とシグナムは断った。

機動六課（スバル、エリオ、シグナム除く）

『『全部いやだけど、最もマシそうなの1で！！』』

とハタレ扱いされた事に文句を言う前に罰ゲームを避けるために答
えだす機動六課のメンバー！

スバル・神楽・エリオ

『『あ、美味しい』』

と3人は平気そうに食べる。

その後も残さず綺麗に食べ終えた3人は自分の席に戻る。

銀八

「アイツ等、シャマルの猛毒物質ポイズン・マターを食べなれたから一般のグロテス

ク料理が平気でいられる様になっちまった。と言う訳で『白米』さん、バロットには孵化しようとして力尽きたものなどは、腐敗しやすく、サルモネラ菌、大腸菌などが多く含まれているが多いので「ご注意を」

こなた

「次はペンネーム『私にいい考えがある』さんからね』1：すか…
…えーっと、スカリー博士に質問

幻想郷には河城にとりと言う河童の妖怪が居ます。彼女は機械に興味があるらしいので、にとりに見せたい発明とかがありますか？。

2：修羅スバルに質問

幽々子様を怒らせたらと言う質問を返り討ちにすると回答しましたが…

貴女は彼女的能力を知っていますか？、知らない場合は黒神さんに教えてもらってください。

3：フエイトに質問

私の所の霊夢とゆっくりれいむについてどう思いますか？

ゆっくりれいむの方は掃除サボったり、霊夢の着替えを覗いたり、霊夢の耳に息を吹きかけたりしています。

もし答えてくださいましたら、銀さんの女装した写真と、銀さんの好物のメモを差し上げます。

『』

スカリエッティ

「うーむ、興味深いが胡瓜を無限に増殖させる装置とかいつか作って見せたいなあ」

修羅スバル

「たとえば、どんな相手だろうが返り討ちにする。それが修羅に生き
た者の宿命の戦いだ!!」

フェイト

「そうねえ、サボる事はいけない事だし覗くのは問題外。はやての
様なセクハラ行為はもう止めた方が良いでしょう」

かがみ

「明らかにはやてさんに対する暴言言っちゃったよこの人!!」

とフェイトの答えに思わずツッコんだかがみ。
フェイトはそれをスルーする。

銀八

「と言う訳で、『私にいい考えがある』さん廊下にたつてなさい。
んで次イ、ペンネーム『白騎士君』さん『白騎士君』久しぶりの質
問です。』

1 銀魂組とリリカル組に質問。レナードの味覚をどう思いますか？

2 スバルに質問。この中で使いたい必殺技は？

1 ゴットフィンガー『Gガンダムの技』

2 ヘル・アンド・ヘブン『ガオガイガーの技』

3 ギガ・ドリル・ブレイク『グレンラガンの技』

4 無限拳『アクエリオンの技』

5 断空弾劾剣『ダンクーガ・マックス・ゴットの技』

3 フェイトに質問。こっちでは、レナードがフェイトの料理が美味しいと言っています。どう思いますか？

『 以上です 』

レナード「今回はこれにて」『 』。 ずばり答えます」

リリカル銀魂組み（シャルルを覗く）

『 『マジでシャルルの手料理に耐えられそうな気がする』 』

シャルル

「それどう言う意味!?!」

明らかに自分の手料理が不味いと言い出すみんなにシャルルが怒鳴ってツツコム。

スバル

「そうですねエ、じゃあ剣関係で5が良いなあ」

フェイト

「す…凄く嬉しいよオ!!」

と思わず涙を流すフェイト。

銀八

「と言う訳で『白騎士君』さん、クロノのケツ穴に思いっきり剣で浣腸してイボ痔にさせちゃってください」

かがみ

「おいイイイイ！何言っちゃってるのこの人オオオ！！」

と銀八のありえない一言にかがみはツツコム。

こなた

「次はペンネーム『HARU』さん『チャオブー』アリマ質問するけど、家族はいるの？」

「ジャノビー」後、スバルの家族はどう思ってる？」 『おお、アリマといやア敵キャラでありながらも最上級美少女として名が高いあのアリマだねエ」

かがみ

「どんだけおやし顔負け女知識があるのよ！？」

とかがみがツツコムとモニターからアリマが現れた。

アリマ

「家族はいないよ。物心をとった時から誰かに捨てられてサナダ隊長に拾われた時から隊長を実の父のように慕っていた……だから『だい第666まとうきかん魔闘機関』にとっては私の家族当然だった……なのに……」

家族として慕っていた『だい第666まとうきかん魔闘機関』の居場所を管理局に奪われたことに悔やみ、そして悲しむアリマ。

しばらくして泣きそうな表情をしている彼女はこれ以上、何もいないのでモニターが切れた。

銀八

「何か、俺等すんげえ申し訳がねエ気分でいるんだけど？」

かがみ

「うん、私も」

銀八とかがみはアリマに申し訳ないと思ひ込む。

敵意上に彼女も管理局の裏側の犠牲者の1人である。

ちなみにスバルの答えは…

スバル

「ギン姉は私の事を心配してくれてるし、お父さんは私の進む道を見守ってくれているから……家族に恵まれて嬉しいよ」

とスバルは嬉しそうに言い出す。

もし彼女も家族がいなかったら今頃、アリマと一緒に管理局に憎しみを抱く復讐鬼の様な存在になってたかもしれない。

銀八

「と言う訳で『HARU』さん、家族の存在は大切です！」

かがみ

「次はペンネーム『サラマンド』さんの質問『久々に質問をさせていただきます。』

ニール「ここで感想や質問するのは久しぶりだな！今回の質問は銀時と黒神宛一つずつだ。

1.もしクアंटムバーストが一度使えるところとしたら、誰と対話する？（銀時）

2・沖田の中の人がある有名女性声優と結婚したが、どう思う？（黒神）「『」

銀時

「そつだなあ……出来れば結野アナと会話してエ」

とあいも代わらず結野アナファンであった。

黒神

「いやあ、まさかそれは驚きましたねエ。他はどつ言えば良いのか分からないけど?」

と黒神はそつ考えて言い出した。

銀八

「とつう訳で『サラムンド』さん、久しぶりに観想をしてくれ有難うございます。んで次イ、ペンネーム『ヒヨウガ』さん」
質問です。

リリカル組に聞きたいんですが、もしアイドルになつたらだれをマネジャーにしますか?

ヴィヴィオに質問です。リリカル銀魂の中でお母さんになるなら誰がいいですか?

いつ見ても面白いので更新頑張つてください。『」

フェイト・スバル・なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リイン
フォース・ヴィヴィオ・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・デ
イート・猿飛

『もちろん銀さん(っす)!!』

はやて

「私は桂さんにしてもらいたいわ」

ヴィータ

(わ……私も)

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオもパパが良い」

エリオ

「ぼ、僕は神楽さんと月詠さんと一緒にいられるならそれで……」

キャロ

「もちろん、エリオ君だよ」

シャマル

「私だつてアイドルになりたいわよ!!」

ザフィーラ

「特になる気はないから別に良い」

ユーノ

「ぜ……是非ともなので」

デイエチ

「山崎さんがマネージャーなら…／＼／」

ウーノ・ドワーエ・トーレ・クアットロ・オットー・ノーヴェ

「興味ないからいい」

と答えだすリリカル組。

ちなみのヴィヴィオの答えは…

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオはパパが最も幸せに出来そうな女性なら誰でも良いな

」

と言い出すのであった。

こなた

「と言つ訳で『ヒヨウガ』さん、これからも『リリカル銀魂str
ickers』攘夷戦争鎮魂歌』の応援を宜しくお願いします」

銀八

「それ俺の台詞!」

台詞を取られて思わずツッコミだす銀八。

かがみ

「次は私達の作者であるウッソ・エヴィンからの質問『?今回のコ
ラボでガンダムは出るのですか? (ウッソ)」

？ウツソのお仕置きは誰が実行するのですか？できれば私がしたいのですが・・・（シャクティ）

？なのはちゃん、フエイトちゃん、ティアナちゃんに質問、風花さんのところではなのはちゃんたちもコンクリで固められたけどお気持ちちは？（こなた）『……て？の質問、何喧嘩を売る質問してるんだこの馬鹿アアア！！』

こなた

「痛アアアア！！」

とかがみは怒り出して、こなたの頭に拳骨を炸裂させる。

今のががみの拳骨が、先ほど怒りだしてるなのは達の怒りを納めてくれた。

銀八

「あの様子だと、？の答えはかがみのツツコミでなのは達の怒りは収まった結果になりましたア。んで？と？の答え」

黒神

「？出す予定です。ちなみにシャクティは呼ばれていないので良いです」

ウツソ・こなた

『助かったアアアアア！！』

と、2人はシャクティのお仕置きはないと黒神が言い出したので安心する。

かがみ

「と言う訳でウツソ、こなた、次からはちゃんとした質問をしないよー！」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『sibugaki』さん『そちらの銀時とスバル様に質問・・・ってかお願い

こつちのスバルに常識、ないしは歌の初歩教えて下さい

このままだと作者共々殺されます

音痴な歌に・・・

ではでは『……ずばり教えてください』

銀時

「いや、悪いけど無理だ」

スバル

「あの様子だと、全然修羅としての歌しか出来ないから……御免なさいー！」

と、銀時とスバルは謝罪して答えだす。

銀八

「という訳で『sibugaki』さん、マジで申し訳しありません」

こなた

「にやははは、災難だねエ。次はペンネーム『龍の骨』さん『質問です。』

BSAA学園のエリオはイカロス真拳の伝承者ですが、どう思いますか？

次回も楽しみにしています。』

エリオ

「ぼ……ボクがハジケリストになるなんて……信じられない」

と青ざめて苦笑するエリオ。

しかもかなりの変人に代わった事で信じられないと思う。

銀八

「と言う訳で『龍の骨』さん、零斗の活躍はまだまだあります」

かがみ

「次はペンネーム『黒龍』さんの質問です」1. 銀さんに質問。戦国BSAAの伊達政宗はマヨラーである土方と同じ声ですけど、嫌いにはならないんですか？

2. 銀時ラバースにこの銀さん人形を贈ります。ちなみに銀さんが木刀を肩に掛けて微笑を浮かべている人形です。

そして背中にあるボタンを押すと、『俺はフェイトの事を愛しているぜ』と言うセリフで出ます。

どう言う反応をするか見せてください（黒笑）

3. ジエイソン（キャロ）に質問。もう今の君じゃエリオと付き合えないから本物のジエイソンと付き合ったらどうですか（黒笑）

『……ずばり答えます』

銀時

「ああ？何か別人だから嫌いって感じはしねエなあ」

と素直に答える銀時。

次の質問は…

なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リインフォース・ヴィヴィオ・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・デイト・猿飛
『『フェイト（ちゃん）、天誅ウウウウウウ（つす）！！』』

スバル

「フェイトさんずるいよオオオオオオ！！」

フェイト

「あはははは」

とフェイトは嬉しいあまりに笑いながら逃げて、スバルは泣きながら言い出して他のメンバーは怒りのあまりにフェイトを追いかける。

銀八

「マジでムカつくんだけど？」

かがみ

「まあまあ……そして最後の質問は」

ジエイソン

「キイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ

なのは・ギンガ・トーレ

『ふざけるなアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』』』

と精一杯怒鳴って叫びだす3人組み。

他のリリカル組メンバーはそんな3人に怖く感じ、答える余裕が無い。

黒神

「次はボクですね……いやあ、トーレのゴリラ化が特に笑えて…」

トーレ

「天誅!!」

ドカア!!

黒神

「あべし!!」

と、大泣きしながら殴りだすトーレの剛拳に黒神は吹き飛ばされた。

近藤

「ふははははは……フェイト殿がいくら蜂蜜塗れだからって俺に勝てるとは限らない。何故なら、俺には女であるフェイト殿には無い男の最大の武器が……」

かがみ

「それは男性器と良いたいのカアアアアアア!!」

「とりあえず、別に興味は無い」

とチンクは即答する。

そして次の質問はと言つと

銀八

「俺だつたら喰らう前にお妙の暗黒物質ダイク・マターでカウンターを食らわして避ける」

こなた

「喰らう前におっぱいもモミモミと小股をモミモミを……」

かがみ

「だからセクハラ発言は止めイ！！ええーつと、私なら即座に喰らわないように避けるわ」

3人が代表として言い出す。

そして最後の答えは……

なのは

「あつちの私、ファイトなのオオオオオオオオオオオオ！！！！」

と必死にあつちのなのはを応援する。

銀八

「と言う訳で『エターナル』さん、廊下にたつてなさい。以上持つて今回の特別編『銀八先生スペシャル』は終了します！」

こなた

「次回から本編といつもおりの『銀八先生コーナー』が始まるよ」

かがみ

「リリカル銀魂メンバーとゲスト達の活躍もあり、更なるゲストキヤラも続々登場します」

銀八

「それでは！」

銀八・こなた・かがみ

『次回もお楽しみイ〜』

超教えて！！銀八先生スペシャル（後書き）

次回から本編を始めます。

第三百三十二訓：表の嘘の中には裏の真実がある（前書き）

黒神

「皆さん、最近の最新の遅さにマジで申し訳ないと思います。遅れてしまつて申し訳ございません」

銀八

「つつか、最近怠けてねえか？ここはビシイつと活を入れてやろうか？」

黒神

「とりあえず『リリカル銀魂 Strikers』始まります」

銀時

「聞けやあああああ！！！！（怒）」

フエイト

「あ……あはははは（苦笑）」

第三百二十二訓：表の嘘の中には裏の真実がある

戦士達の休憩が終わり、翌日に準決勝が始まる

その舞台は機動六課の訓練場

今は何故か市街地に变化している

そんな場所に、リリカル銀魂ゲスト杯の初戦突破した銀時達と黒神、そして源外、スカリエツティ、プレシア、ヴィヴィオ、修羅スバルがいた

『ファイター』には、左之助、庵、家康の3人だけがいて、京が今だにシャマパイの悪夢にうなされている為か気絶中である。その為、剣心と弥彦が助っ人としてチームメンバーに入る。コレには『ファイター』も嬉しい誤算であり、特に左之助は涙が流すほど剣心と弥彦に感謝した。ちなみに2人にとってもコレほどまでに涙流すほど左之助に感謝されたのは始めてである。

だが『狂乱』には1人メンバーが代わっていた。

それはヴァイスの変わりに何故かヴィータがいたからだ。

「……あのう、一つ聞きたいんですけど」

「何だ黒神殿？」

「何で、ヴァイスじゃなくヴィータがいるんですか？てかヴァイスは？」

と黒神は呆れ半分に言い出すと、ヴィータが答えだす。

「ああ、ヴァイスなら急に風邪をひいたから代わりに私が助っ人に来たのさ」

と答えだすヴィータ。

確かに風邪を他のゲスト達に感染うつしてしまったら他の作者に迷惑であるかもしれないのは確かである。

コレばかりは黒神も仕方が無いと思った。

銀時達もそう思う。

だが彼等は知らなかった。

夜中にヴィータが起こした悪夢の悲劇を。

それは夜中、訓練場にヴァイスはヴィータに呼ばれてやってきた。ヴァイスはヴィータに呼ばれたので話しかけようとするが、そこには後悔と絶望が結晶となっている予感しか待っていないかった。

「……………」

何故か自分の目の前には、何故か無言で『グラーフアイゼン』を握っていてバリアジャケットを転装しているヴィータがいた。

しかもとてつもない殺気と憎悪を放っていて、正直ジェイソン級の怖さであった。

あまりの迫力に、ヴァイスは青ざめて大量の汗を流す。
恐怖しか感じない彼は勇気を持ってヴァイターに話しかける。

「あ……あのうヴァイター、いやヴァイター様？い……一体こんな夜中に何の御用で……？」

「なあ……何でお前がヅラと一緒にチームにいらんだ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！）

「い……いやあ、それが何故か作者の腹黒い計画に巻き込まれてですなあ……！」

「はやくは一緒にチームに選ばれてるのに、私だけ部外者扱い……何でだらうな？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！）

と徐々に殺気が強くなっていて、今ならあのゾーマでさえも倒せそうな威圧感を放っている。

（こ、怖エエ……何……何これ、何で怒ってんのこの人……！やべえよ、怖えよ今すぐ逃げてえよ……！）

内心で恐怖に青ざめて叫びだすヴァイス。

つくづくに自分に災いが襲ってくるかもしれないいつか思ってたが、まさかこんな一番最悪な形で襲ってきたことに自分の不運さを呪った。

「なあ、この苛立ちを納めるにはお前をぶつ飛ばしたほうが良いのかなあ？」（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！！）

とヴァイターは『グラーフアイゼン』を構えだす。

今ここで、ヴァイスを吹き飛ばしてすっきりしたい気分のようなのだ。

「おいどうしたー!! さつきから黙ってねエで何か言ってみろやあ!
! それとも何か、凶星を突かれて恥ずかしくて声もでねえか!? 散
々と好き勝手言って調子に乗ってんじゃねえぞこのタコ!!」

「よし、分かった……塵も残さず吹き飛ばしてやるよ」

ガゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

そして、ヴィータは無言のままコレまで以上の最大級の力で『グラ
ーファイゼン』を大きく振り、ヴァイスは悲鳴を上げる事すら許さ
れずに夜空に吹き飛ばされて星と化してしまった。

その後、彼は見つかりだしてミッドチルダのとある病院で入院。
かなりの重傷だが命に別状は無い。

しかし彼の頭の中にはヤンデレと化してしまったヴィータと言う小
さな赤い破壊神の存在はしばらくはなれる事はない。
トラウマ

「今、何か昨日とんでもない事が起こったような……」

「左之、気のせいでござるよ……（多分）」

と多分だと思いつながらと左之助に気のせいだと言いつ出す剣心。

『狂乱』のメンバー変更は黒神によればルール違反ではないようだ。しかし彼女はこの大会の罰ゲームがどれだけ恐ろしい物かを承知の上でヴァイスに代わつて桂達のチームに参加する。

「シャマルがまた飛んでもねエ激不味い料理を作つたと聞いたけど、用は優勝すりやそれを逃れるつて訳だろ？」

「うむ、この世界どころが自分の元いた世界の国に革命を起こすまでは死ぬぬ…ヴィータ殿、ヴァイス殿の代わりに是非とも協力を頼む」

とヴァイスの代わりにメンバーに入つてきたヴィータに改めて力を貸して欲しいと願う桂。

そんな桂の真剣な頼みに、ヴィータは顔を真っ赤にする。

「……お……おつ……やるからにはそうするから／＼／」

と恥ずかしながらも嬉しがるヴィータ。

はやてはヴィータのヴァイスの代わりとして参加した事に青ざめる。

（アカン、コレじゃあヴァイスをメンバーに入れた意味があらへんやん！！）

実は、ヴァイスが黒神に参加メンバーに選ばれた理由がある。

それははやてが、ヴィータと言う恋敵よりも長く桂と一緒にいる為にヴァイスを自分と桂のチームに入れて欲しいと黒神に頼んだのであった。

黒神はそれはそれで腹黒い展開を予想して承知した。

しかし、それがヴィータがヴァイスを昨夜ぶっ飛ばした事でチェンジメンバーと言う形で桂率いる『狂乱』に入ったのだ。

「……………くう、さすがヴィータ…侮れん相手や」

『女の戦いはそう簡単に有利になれませんよ』

ヴィータの執念を侮ったは yet は自分の甘さに反省し、それを察したエリザベスはプラカードを出して甘くはないと言い出す。

一方の『キングドラゴン』では、政宗がようやくいつもの姿に戻った。

それは女性化からの呪縛から解放されたのと一緒にである。

「ふう、ようやく元の姿に戻ったぜ」

と安心して言い出す政宗だが、そんな彼を見て少し残念がっている華琳。

しかし政宗はあえてツッコまないでいる。

何せ後からややこしい事があるからだ。

「つつかさあ、さつきから思ってたんだけどよお……………なんでお前さんの？」

と呆れて青ざめながら銀時は言い出す。

彼が目線にしているのは、それは何とあの鬼兵隊のリーダーこと高杉晋介が目の前にいるからだ。

それはフェイト達も最初は驚いていたが、実はこの方はあの高杉晋介ではなかった。

「ああ、悪い悪い……俺は高杉晋介じゃねえんだ。次郎長の小説『魔法侍リリカル高杉』晋助の従兄弟は転生者』の主人公及び高杉晋介の従兄弟の間柄だ」

『た……高杉晋介の従兄弟!?』』

まさか晋介の従兄弟とは思ってもよらなかつた銀時達は驚きだす。

だが存在は似ているが、唯一違うところとして彼は晋介とは違い左眼もある。

つまり、晋介とは別人である事だ。

「せっかくゲストとして呼ばれたんだしよお、楽しませてもらうぜ」

と晋一は派手な祭りが出来そうだとワクワクしていた。

しかし、彼はこの祭りには極悪な罰ゲームが用意してある事をまったく知らない。

「どいつもこいつもヒロイン面しちゃって、キム力つく!」

とハンカチを加えながら悔しがる1人の生命体があった。

その人物こそ、s i b u g a k iさんの『リリカルボーボ 爆闘

!ハジケ対戦』の主役の1人、首領パッチである。

彼は今、フェイト達を睨み付けている。

「あ……あのう、別にヒロイン気取りをしているつもりじゃ……」

とフェイトが苦笑して答えるが

「ああ、最近ヒロインとしての株をスバルに奪われているくせに何ヒロイン余裕をしてやがんだ!」

ドカカカカカカカカカカカカカカカカッ！！！！

「あははは、駄目だよ首領パッチ君…世の中には言って良い事と悪い事があるから」

「は…はい…申し訳ございません…」

と、顔に血が染み付いているフェイトはニッコリと笑って叱る。そんなフェイトにボコボコにされた首領パッチは、顔中モザイクになっけていても絵にかけない姿になっていた。

(怖ええええ！！何ここのフェイト、マジで怖いんだけど！！)

(首領パッチ…南無)

と晋一は青ざめて叫びだし、銀時は首領パッチがお気の毒だと思う。他のメンバーも、フェイトの静かな怒りに青ざめていた。ある人物を除いて。

「いやア、やっぱりこんな感じになっちゃうんだね」

「にははははは、まあそれだけ面白い事があるの」

と余裕そうに言い出してるのは、鳴神 ソラさんの小説『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』からのゲストで現れたマリオと、

なのはそっくりの冥王であった。

『てか、何かなのはにそっくりな人いるんですけどオオオオオオ
!!???』

と、銀時、スバル、ティアナを除くりリカル銀魂メンバーと『オタクガンダム』が驚いて叫びだす。

まあ、初対面じゃ当然の反応である。

最初は誰もがなのはそっくりに驚いたが、マリオの後ろでフェイトの暴走に青ざめている1人の少年がいた。

「ふえ……フェイトさんって怒らせると怖いよお」

とマリオと冥王と同じく同じく鳴神 ソラさんの小説『大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版』からのゲストで現れたルイージは怖がっている。

「おや、よくよく見れば新たなゲストが続々と来てますな」

「ええ、おそらく黒神が頼んだもしくは頼まれてゲストとしてこの大会に参加しに来たメンバーの用ね」

「だとしても、倒しがいがある連中だな」

と星と華琳は黒神の仕業だと思い、零斗はヤル気満々であった。

「で、ここで準決勝が始まるって訳かよ……何かいやな予感しかしねえ」

とノーヴェは青ざめて言い出す。

しかし今回のゲームは緒戦よりはマシな方であった。

と、空からモニターが映し出されるとそこには黒神がいた。

《ウエルカーム ジェットルメ〜ン！！準決勝に残った皆さん、おはようございます！！》

「出やがったぜ、腹黒作者」

「どうせまたおっかねエ事を企んでんだろ？」

と政宗と銀時は黒神の狙いがロクなもんじゃないと思ってシド目で見える。

《今回残った6チームには、この機動六課の訓練場を部隊にあるゲームを参考にさせたゲームをさせてもらいます！！》

「あるゲーム？」

と、月詠は黒神が一体何のゲームを参考させたのか疑問に思った。

《時に皆さん、『逃走中』てのを知ってますか？》

「ああ、確かハンターって言うスーツを着たグラサン集団が追いかけるリアル鬼ごっここの事だな」

「そして、さまざまナミクションをクリアして行き、制限時間内までに最後まで捕まらなかったものは賞金がもらえるって言うゲームですよね」

とヴィータとエリオは言い出す。

そう、今回のゲームはそれを参考にした真ゲーム

《と言う訳で、皆さんには突然ですがワープしてもらいます》

パチン！！

と黒神が、指ならしをすると銀時達の姿が突如消えてしまった。

これは黒神が源外とスカリエツティに頼んでこの時の為に作ってもらった強制転生装置。

しかし、一度使えば壊れてしまう代物である。

「つてあり？ここ何処？」

と銀時が啞然としている中で、いつのまにか市街地の道路にいた。一体どうしてなのかを考える中で、フェイトとティアナが駆けつける。

「銀時（お兄ちゃん）！！」

「フェイト、ティア、オメエ等無事だったか……つて、スバルとシグナムとアルフはどうした？」

「それが、あの3人が突如いなくなったのよ！！きつと別の場所に移動されたのかも知れないけど……」

「チィ、あの馬鹿作者！一体何を……」

フェイトとティアナに再会できたが、スバル、シグナム、アルフの3人は2人と違ってバラバラに瞬間移動されてしまった。

《どうやら、皆さんそれぞれ各地にバラバラに移動できましたね》

とモニターは映し出されていないが黒神の声が市街地内に響き渡る。

「こいつがためエが用意した準決勝か？」

「ワザワザ仲間を分裂させて混乱を導きたいようね」

と市街地のとあるビルの屋上に政宗と華琳が呆れて言い出す。

2人も春蘭、星、零斗の3人とはぐれてしまったのである。

《今回の準決勝は生き残りをかけたサバイバルゲームです！！》

と黒神ははつきりと言い出す。

チームをバラバラにさせる事でよりサバイバルゲームが盛り上がるのである。

《ルールを説明します！！皆さんは各地でそれぞれ他チームと遭遇して戦いを申し込みます》

「勝負アルか？」

「ひよっとして勝ち続けて最後まで生き残るのがこのゲームのルールですか？」

と廃墟ビル内にいる神楽とエリオは言い出す。

彼等も月詠、リインフォース、そしてノーヴェと言う仲間とはぐれてしまった。

《敗北した者はその場でリタイアとなり、勝った者は次の対戦相手を求めて探し続けます。そしてチームリーダーが負けた場合、その

メンバーは全員失格となります」

と、黒神は言い出す。

ようは、各チームのリーダーがやられた場合、その時点でチームは壊滅する事になる。

「ようは、好きなように暴れて良いって訳か……上等だぜ！」

と左之助は1人になってもヤル気満々である。

彼は今、とある廃墟ビルの一階にいる

《なお、今回はハンターの変わりにさらに新たに出てきたゲストが皆さんを探し続けて勝負を挑んできます。彼等はただ貴方達を倒すための目的であり、勝ってもメリットはありません》

つまり、チーム以外のゲスト達もチームメンバーを狩る様に戦う為にある訳だと言う事である。

《また、今皆さんがさっきであった新たなゲスト達はあれで全員ではありません。すでにこのエリア内に遭遇して貴方達を倒す為に活動してますのでご注意ください》

「何イ、つまり俺達以外の新たなゲストもいるってのか！」

《当然です！！》

と黒神がそう言い出し、廃墟ビルの扉前にいる首領パッチは悔しがる。

それはつまり、ボーボボも出てくる可能性があるからだ。

《なお、このゲームは時にアクシデントが起こったりボーナスゲームも起こったりしますので、その内容に合わせたミッションが送ら

れます。ミッションクリアする事で、クリアしたチームが有利に進められる事となります。最後まで生き残った2チームが決勝に進めます!!」

と、黒神は説明を終える。

コレこそが今回、黒神が思いついた準決勝。

ゲスト同士やリリカル銀魂メンバー同士の戦いもあり、最終的に生き残った者だけが決勝に進めるサバイバルゲーム。

黒神の趣味である『逃走中』を参考にした新ゲームが開始される

《と言う訳で、準決勝究極サバイバルゲーム『サバイバルアイターSBH 闘争中』スタート!!》

今ここに、準決勝が開幕された。

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

銀八

「へえい、じゃあ今回からいつもどおりの銀八先生を始めたいと思います。今回のアシスタントはこの人」

剣心

「拙者、『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』のゲストである秘村剣心がアシスタントするでござるよ」

とニッコリと返事をする剣心。

剣心

「では、始めるとしよう」

銀八

「おう…えーまずはこの人ペンネーム『鳴神 ソラ』さん『スネーク』と言う訳で前に出たか分からないが質問『黒神が知ってるアニメ、漫画、ゲームは何だ?』」

フォックス「六課メンバーに質問『ウチの冥王と戦えるか?』」

明久「コラボした銀さん達に質問『冥王のバリアジャケットを見た感想はどうでした?』」

『……んじゃ、それぞれ質問に答えさせてもらつとするぜ?』

黒神

「そうだねえ、じゃあ銀魂、戦国BASARA、ブレイブルー、ストリート・ファイター、遊戯王、るろうに剣心、こち亀、リリカルなのは、IS、ボボボーボ・ボーボボ、とある魔術のインデックス、レンタルマギカ、スーパーマリオ君、イナズマイレブン、スケッチ・ダンス、ゼロの使い魔、けいおん、アイドルマスター、風の聖痕^{ステイグマ}、ほかにも……」

銀八

「もう切がねえから良いわ!」

黒神

「へえい」

としぶしぶと去っていく黒神。

剣心は黒神の姿を見て、銀八達も苦労していると苦笑して思った。

機動六課メンバー（スバル、シグナム、なのはを除く）

『何か全然勝てる気がしませんので良いです！！』』

スバル

「再戦の約束があるから、いつかまた戦う」

シグナム

「強い相手なら是非とも手合わせしたい！！」

なのは

「何か…ムカつくから頭冷やしてやりたいなの」（ゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！）

スバル、シグナム、なのははそれぞれ戦う理由を言い出す。
得になのはは怖かった。

銀時・ティアナ

『『てか、完全にミックスコスプレだろ（でしょ）！！！！』』

スバル

「あ……あれは私も驚いたかな…あはははは」

と銀時とティアナは答えだし、スバルは苦笑するしかなかった。

剣心

「と言う訳で『鳴神 ソラ』殿、これからも黒神の事を宜しくご
ぞるよ」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『真王』さん『真王』んじゃ行くぜ。『レ
ーティアとギルシアの間にリルという娘が出来ました。どう思いま
す?』」

チート・ザ・ハード「私からも。『チームの中でどっちが勝つとお
もいで?』」

サタン・ザ・ハード「なのはちゃん! 『銀さんが(薬盛られて)暴
走して襲われたら子作り準備をしてね!』 私はなのはちゃんの味方
だよ」

『」

銀八

「つつか、アイツ等出来ちゃってんの!? 娘いるなんて知らねえぞ
!?!」

剣心

「拙者も同感でござる」

まさか、あの2人に娘がいるなんて思いもよらなかった2人は驚き
だす。

まあ、驚かないほうがおかしい。

銀八

「そつだなあ、おそらくあんがい『オタクガンダム』なんかじゃねえ？」

剣心

「拙者は『ファイター』でござる……てか、負けてしまえば拙者の命が危うい……」

と銀八は答えて、剣心にいたっては負けた時の罰ゲームが襲ってくるのを想像して青ざめる。

黒神

「危険ですので削除!!」

と黒神はこのままじゃフェイト達が暴走すると恐れて、『エンア二サ』で怪しげな薬を全て焼き斬った。

剣心

「おろおろ!!」

と、突如の黒神の行為に唾然とする剣心。

しかし、黒神の行為が無ければフェイト達の暴走は免れない。

銀八

「と言う訳で、『真王』さん、リリカル銀魂パーティー編を頑張ってください」

剣心

「次はペンネーム『烈火竜』殿の質問でござる『質問です。』

？屁怒組が怖くないヴィヴィオの怖いものは何ですか？

？魔犬・オルトロスの力を得たティアナ自身は犬が好きですか？

？銀時に好意を抱く女性達は、フェイトのように蜂蜜まみれになつて誘惑しますか？』」

ヴィヴィオ

「…………お化けが怖いよ」

とヴィヴィオは今でも泣きそうな表情で答える。
何せ、それほどまでに苦手だからだ。

ティアナ

「まあ、可愛い犬なら好きかも……………／／／」

近藤

「いやいや、そんな事をしてカブトムシ取りじゃ俺には勝てないでしょ。何せ俺には男の……………」

銀八

「てえ、それは前回答えたから良いだろうがぁ—————！！」

ドカア！！

近藤

「あんぎゃあああああ！！！！」

と、しつこく現れた近藤に、銀八が怒り任せに蹴り飛ばす。
そして彼女達の答えは、

なのは・ティアナ・アルフ・シグナム・リインフォース・ヴィヴィ
オ・チンク・セイン・セツテ・ウィンディ・ディート・猿飛
「銀さん（お兄ちゃん）（銀時）が望むなら是非！！／／／」

スバル

「うう………は、恥ずかしいけど……銀さんになら／／／」

と、それぞれ答えだす。

銀八は気に入らずに唾を吐き、剣心はそんな銀八を見て唾然とする。

剣心

「と言う訳で『烈火竜』殿、質問感謝するでござる」

銀八

「あーチクショーがあー！！………次行くぞオ、ペンネーム『白米』さん『白米』それでは、今回から私が執筆している『東方双界伝』のキャラ達が質問します。

今回はこの三人」

刃「毎度お馴染み、風鳴刃だ」

マリア「エルフ族のマリア・リュミエールです」（ニコ）

魔理沙「東方キャラの魔法使い、霧雨魔理沙だぜ」

1 .

刃「神楽とエリオ、スバルに拙者の料理を振る舞おう。

次の内から一つ選べ」

- A テングダケのソテー
- B ナメクジの刺身
- C ミミズ素麺
- D ゴキブリの天ぷら

刃「選ばなかったら『青鬼にマミられるの刑』だから覚悟するよ
うに」

2 .

マリア「黒神さんと銀八先生、キャロちゃん、なのはさんに一言。

いくらなんでも、自分勝手な理由で他人を傷付ける事は駄
目ですよ？」（超時空シンデレラ三人分の笑顔）

白米「ちなみに、心が汚れた人がマリアの笑顔を見ると、浄化され
ます。

何せ、あのキャサリンですら悶死させた威力なので」

3 .

魔理沙「あー、銀時に質問。ヴィヴィオへの愛情は本物か？

『仮面ライダーオーズ』では、ガメルに愛情を注いでいた
メズールって奴が、実は遊びでやっていた紛い物の愛情だったと後
半に判明したんでな。

もし、偽物だったらマスタースパークだからな」

『

剣心

「いやいやいやいや、1つ目の質問はおかしいでござるよ！…てか
スバル殿とエリオ殿もなんとかす……」

ちなみにスバルとエリオの答えは全部無理って事になった。
そして次の質問は…

銀八、なのは、キャロ

『お前（貴方）にこの悔しさが分かってたまるかあああ！！』

と3人は魂の如く叫びだす。

それが届く事はない事も知らずに。

銀時

「バカヤローが、んなもん責任もって育てんのに決まってるだろ？
あいつが管理局の連中の様な腐った人間にならねえ為にも本当に大
切な事は何なのかを教えるさ」

剣心

「銀時…」

銀時の答えに剣心は感心した。

銀時はヴィヴィオが管理局の野望の為に生み出されたクローンであ
る事をスカリエッティから教えられた。

だから彼は父として、クローンではなく1人の人間として育てるこ
とに決めた。

不器用だが父としての責任は持っている。

銀八

「と言う訳で『白米』さん、青鬼がお仕置きしに来たのですがア…
スバルが返り討ちにしちゃいましたア」

剣心

「次はペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』殿の質問でござる。では質問します。」

美己「チツ、どれか選べよつとミサカは舌打ちしてから高町なのはにしばらくこれを背負ってもらいますつとミサカはコレを送りつけます」*投げられ地蔵グレート：あらゆる基礎体力作りに役立つ秋雨作の地蔵。 だんだん重くなっていくという逸話がある（事実には秋雨が取り替えているだけ）

美己「では機動六課及びその協力者に質問します。 次の内、美堂蚕の邪眼による一分間の悪夢ゆめを見せられる場合、どの悪夢がイヤですかつとミサカは問います」

- 1・腐留苦去主を永遠と喰わされる。 気絶しようにも悪夢だから気絶しない。
- 2・体がだんだん腐敗していき崩れていく。
- 3・幽霊や亡霊、死霊に襲われる（倒しても倒しても這い上がってくる）
- 4・様々な害虫が大量に体中に群がってくる。『』

黒神

「ぬうん!!!」

と黒神が再び、『エンア二サ』で地蔵グレートを一刀両断に斬り、黒き炎で焼き尽くす。

銀八と剣心は啞然としてしまつが、考えるだけ切が無いのでスルーした。

銀魂メンバー&リリカルメンバー

『全部嫌じゃああああああああああああああああああああああああああ!!!』

と青ざめて答えだす。

まあ、特にと選べるメニューじゃないからだろう。

剣心

「ひ…酷い……」というわけで、『武田軍兵士 清坂 剣麻』殿つと言
うより美己殿、他人に無茶な質問は控える様に」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『月光閃火』さん『1・黒神に質問…銀時
達』『戦国BASARAシリーズ』の戦国武将達の通り名みたいな
のを付けるとした、どういうモノにするんだ？」

ちなみに、閃火の思うなのは、『戦国BASARA』風通り名は『
冥獄凶砲』だって聞いた。

2・アリマに質問…今度一緒に大空の遊覧飛行をしない？ちなみに、
俺がアリマをお姫様抱っこして…だけどな（そういつて、遠隔技
法でアリマの頭を優しく撫でる）

『

黒神

「そうですねえ、じゃあこんな感じですかな」

『白銀武神』 坂田銀時

『金色死神』 フェイト・テストロツサ

『剣聖蒼魔』	スバル・ナカジマ
『狂乱破天』	桂小太郎
『純白魔導』	高町なのは
『双銃乱射』	ティアナ・ランスター
『紅傘夜女』	神楽
『夜天黒王』	八神はやて
『絶対大謎』	エリザベス
『月光百華』	月詠
『雷槍走突』	エリオ・モンディアル
『烈火拳狼』	アルフ
『烈火劍豪』	シグナム
『一撃大槌』	ヴィータ
『駄目食作』	シャマル
『蒼天牙狼』	ザフィーラ
『夜天絶女』	リインフォース

《誘いは嬉しいけど、復讐に染まった私にそんな資格はないよ……》
と、少し申し訳なさそうな表情で答えるとモニターが切れる。

銀八

「以上、こんな感じですよ。と言う訳で『月光閃火』さん、廊下にたつてなさい」

剣心

「次が最後でござるよ。最後はペンネーム『次郎長』さん『はやてに質問です。』

デストロイで世界征服出来ると言っていました、ターンタイプの方がやり易いと思つんです。そこんとこどうなんでしょう？」

はやて

「うーん、せつかくやけど今はまだ遠慮しとくわ。気が向いたらお願いな」

銀八・剣心

『いや、マジで勘弁してください！！』

とはやてがこの誘いに乗らないで欲しいと銀八と剣心は土下座して願う。

銀八

「と言う訳で『次郎長』さん、廊下にたつてなさい……んで以上持ちまして、今回の銀八先生コーナーは終了……どうだったか、剣心」

剣心

「正直言って、支配者殿の所に引けを取らないカオスな質問ばっか
でござった」

銀八

「だろっな…んじゃ、次回もお楽しみイ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいます。

お願いします

第三十二訓：表の嘘の中には裏の真実がある（後書き）

ここで、皆さんに改めて伝えたいことがあります。

忘れている方や、初めて質問する方に聞いてもらいたいことです。

『銀八先生コーナー』を進みやすくする為のお願いだと聞いてください。

質問は一度に3つまでです。

一度質問募集したら、答えるまで質問募集はご遠慮してください。

以上です。

華琳

「次回、『バラバラになっても思いは一緒』テイクオフ」

第三百二十三訓：バラバラになっても思いは一緒（前書き）

今回の『銀魂』の志村新八の変態妄想振りを見た銀時、桂、神楽、エリザベス、月詠の反応は……

銀時・神楽

『『……………』』（軽蔑目線）

桂

「武士を目指すものがそんな物にはまるとは…新八君、俺は君を見損なっただぞ」

エリザベス

『侍失格』

月詠

「あかん、これはもう精神的な重傷じゃ」

と、そんな感じでした。

黒神

「と言う訳で、『リリカル銀魂 Strikers』始まります。

第三百三十三訓：バラバラになっても思いは一緒

「ちょっとー、何よこの準決勝！？ 明らかに私達が不利じゃない！」

「まあまあ、とりあえずウツソと光翔竜を探そうよ。敵に見つかる前に見方を探したほうが良いしね」

とかがみは青ざめているがあなたは冷静に仲間とは焼く合流したほうが良いと言い出す。

それもそのはず、彼女達は他のメンバーとは違って戦いには向いていない。

唯一の戦闘力を誇る光翔竜とウツソとはぐれてしまった今、もし他の別のチームメンバーと遭遇してしまえば間違いなくこっちがリタイアである。

さらにヤバイのは、もしウツソが光翔竜とはぐれてしまえばさらに最悪の状況である。

チームリーダーである彼が、もし倒されてしまえば自分達も道連れ失格となる。

そうなれば地獄の罰ゲームであるシヤマパイを食わされるはめになる。

「とは言っても、何処にウツソ達がいるのかわかんないね」

「ええ、早く見つけないとこっちが危ないような……」

と2人は何処にいるのか分からず迷う中、意外な人物が教えだす。

「ウツソと光翔竜なら、南側の約100?ぐらい先で2人を探している所だ」

「さつきメールでそこで待っている様に言っておいたから、こつちから行けば会えるぜ」

「そう、有難う………てえ、何でボーボボと天の助がいるんじゃアアアアアアアアア！……！」

当たり前のように自分達の目の前にいる『リリカルボーボボ 爆闘！ハジケ対戦』のゲスト、ボーボボと天の助の存在にかがみが大いにツッコミだす。

「おおー、ボーボボに天の助だあ。2人もゲストとして呼ばれたの？」

「ああ、何かウチの作者が是非とも黒神にゲストとして俺達を呼んで欲しいと頼んでな…出てみてみやいきなり殺し合いのサバイバルゲームが始まりやがった」

「と言っても、流石に無防備のお嬢ちゃん達を倒すのもしゃれにならないし、この際協力しようと思った訳だ」

とボーボボと天の助は言いだす。

かがみは思わぬ助っ人に意外そうに驚きだし、勝機が見えた。

2人は常識外な人物だが、実力は間違いなく最強クラス。

上手くいけば2人の力を合わせて決勝に進められると確信する。

「で、本音は？」

とこなたがそう言い出すと、

「俺達より早くゲストとして登場した首領パッチをこの手でぶつ殺す為じゃあああああああ！！！」

「抜け駆け許さん、殺す、絶対殺すウウウウウウウ！！！」

「……………」
「……………」

まさかの首領パッチ抹殺宣言に、文字が間違えるほどかがみは青ざめて叫びだす。

一方のこなたは、2人のハジケっぷりに大爆笑をしていた。そんなこなた達の様子を啞然として遠くから見ていた春蘭と星は……

「……ここは、パスだな」

「同感、他を探してみよう」

と2人は別の場所に移動する。

ゾクウウウウ！！

「何、何かすんげエヤバイ予感がしたんだけどー！！」

と青ざめて叫びだす首領パッチ。

まさか自分がポーボボと天の助に命狙われているなど、この時まで知らなかった。

『銀時——！！』

一方の銀時、フェイト、ティアナの3人は後ろから現れたアルフ（狼モード）の背中に乗ったシグナムが駆けつけてきたのを確認した。これでメンバーが多く合流できた事で『リリカル銀魂』は有利に立った。

「アルフ、シグナム！！」

「2人ともご無事で！！」

と、嬉しそうに喜びだすフェイトとティアナ。正直言つてメンバーがバラバラになると不安でしよつがなかった。

「いやあ、狼の嗅覚つてのは人間の数倍もあるから銀時達の匂いをかぎつけてやつてきたのさ」

「いや、それ犬の特製じゃ……」

「狼だ！！」

と犬扱いする銀時にアルフはツツコミだす。

犬と狼は少し似ているからしよつがない。

と、シグナムは1人足りないのに気づく。

「む、銀時……スバルがいないか？」

「ああ、オメエ等と一緒にじゃねエのかよ？」

とシグナムが銀時に聞いても銀時はいないと言い出す。

「て、それ凄くやばいんじゃない？それって今頃スバルが他のゲスト達に狙われる可能性があるじゃないかい！！」

とアルフが青ざめて言い出す。

彼女の言うとおり、スバルの戦闘力は侍と魔導士が合体した魔剣士としての戦闘力を誇る。

その強さは、銀時と桂を除けば間違いなく機動六課最強と言ってもおかしくはない。

セイバー戦で誰もがスバルの戦闘力をその眼に焼き付けた為、如何にスバルとは言え一斉に大勢に攻められたらやられてしまう恐れもある。

「ヤバイよ、間違いなくスバルがピンチじゃないの！！」

とティアナは青ざめて叫びだす。

フェイトもスバルが今頃狙われていないのかと心配する。

しかし銀時は…

「アイツなら大丈夫だろ？」

とあつさりと言いだす。

何故なら、彼は信じているからだ。

たとえどんな相手でも、スバルは自分の武士道^{ルル}を貫き通して生き残る事を。

「こんな状況に耐用する為に、アイツは今まで自分自身の魂も剣技も磨き続けた……絶対に勝てるとは言えねエけど、簡単にはくたばらねえぜ」

「た……確かにそうだけどオ」

銀時の言葉でもやはり不安を隠しきれないフェイト。
仲間として本当に心配しているからだ。

「とりあえず、一応スバルも探して……て何コレ？」

とティアナが何か黒薔薇らしきものを見つける。
思わず触ってみるが……

シユルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルルル！！！！

「！！！？？」

突如、黒薔薇が巨大化してその根が無数に浮き上がって銀時、フェイト、ティアナの3人を同時に捕らえる。

「なあ！！！」

「きゃあ！？？」

「うああ！！！」

と、突如黒薔薇の根に捕まってしまった3人は驚きだした。
その黒薔薇は今回の大会の為に黒神が用意した代物であった。

「な……何だコレは！？？」

「植物型ロストロギア！？？」

《いえいえ、ロストロギアではございませんよ？》

と、突如天空から大きなモニターが転送される。
そこには黒神が憎たらしい笑顔で表してる。

「てめエの仕業がこの糞作者！！」

「ふっふっふ、それは僕が源外とスカリエツティに頼んで今大会用に発明させた生命植物、その名も『十六夜マキちゃん』！！対、魔導士対策の生命型防御兵器なのだ！！」

と、自信満々に言い出す黒神。

何故なら、それは魔導士に対して天敵でもあるからである。

「マキちゃんは生命体には害をもたらさないが魔導士に対しては天敵の存在！ その黒い棘棘の根で巻いた魔導士の魔力を空っぽになるまで吸収するのだ！！」

つまり『AMF』が生命体になったような存在である。

しかも十六夜マキちゃんは防御兵器でもある為、ある程度の打撃も防いで魔法攻撃をも吸収する。

「さあ、早くしないとフェイトとティアナの魔力が尽きてしまうぞオッ！ じゃあねえ」

と最後は凄く憎たらしい笑顔で笑い出すと、モニターが消える。

「黒神、絶対に大会後にはぶっ殺す！！つつか、速工所この根っこを何とかしねえと」

「銀時、フェイト、ティアア！！」

「今、助けるぞ！！」

アルフとシグナムは2人で銀時達を縛ってる根っこを何とかすべし
だど取り出そうとする。

「マジで頼む！！そうしねエと2人が……」

と銀時が体を強引に揺らしながら動かすと…

「あん！！／／／」

「きゃう！！／／／」

と、何やらフェイトとティアナが叫びだし、2人は顔を真っ赤にす
る。

「あ？どうした2人と……」

途端に喋るのを辞める銀時。

彼は今、自分達の状況を完全に把握していなかった事を判明した。

何故なら、フェイトとティアナがその身で左右に銀時をサンドイッ
チのように挟んでいた。

「ああああああああああああああああああ！！！！　ま
たこのお約束ううう！？／／／」

と、顔を真っ赤にする銀時。

何故なら、彼の体にフェイトとティアナの丰满な胸が押し付けられ
ている。

しかもそれだけじゃない。

銀時は両手の感覚に違和感を感じとった。

何故なら、右手にはフェイトのお尻を、左手にはティアナの前部分を揉んでいる状況になっている。

「あうう……は……恥ずかしいけど、何か良いかも……／＼／」

「お兄ちゃんと一緒なら……いつそうこのまま……／＼／」

「おいイイイイイイイイイ！ 何これ、やばいんだけど！
！ 明らかに18禁モードにいきかけてるよねコレエ！！」

何か危ない感覚に覚え始めるフェイトとティアナにツツコミだす銀時。

このままではある意味まずいと思った。
しかも……

「離せええ、銀時だけを離せええええ！！」

「2人はどうでもいいが銀時だけを離せやああ！！！！」

「あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ！！！！？
？ 何か2人が暴走してるんだけどオオオオオオ！！」

と、銀時とくつつき過ぎる2人に嫉妬したアルフとシグナムは銀時だけを助ける為に活動を始める。

アルフは根っこを噛み砕いて、シグナムは次々と『レヴァンティン』で根っこを斬る。

これには銀時も青ざめて叫びだす。

そこに、更なる騒ぎが……

「きゃああああああああああ！！ 銀さんずるいぞオ、私もフェイトしゃまとオオオオオオオオオオオオ！！」

と突如現れた光翔竜が突然、凄まじい勢いでフェイトに飛び込もう

とする。
しかし、

『『つるさあああああい！！』』

ドカア！！ x 2

「いふえあ！！」

と、怒り任せにアルフとシグナムが蹴り飛ばす。

光翔竜は吹き飛ばされてビルの壁に思いつきり後頭部をぶつけて気絶し、倒れてしまった。

光翔竜 リタイア

「おおーっとお、さっそく」チーム・オタクガンダム」のメンバー光翔竜リタイア！！ チーム内で唯一戦闘力が優れた光翔竜がまさかの最初の脱落者！！ 『チーム・オタクガンダム』、大ピンチイイイ！！』

と舞台内で黒神が大きくマイクで叫びだす。

誰もがその情報を聞き流せるようにと。

それを聞いたウツソ、こなた、かがみはヤバイと思ったのは言うまでも無かった。

「どうやら、最初の対戦相手はお前のようだな……」
「……そうだね」

一方、あるビルの地下室では弥彦とエリオが遭遇した。
弥彦の隣には剣心と左之助が、エリオの隣には神楽と月詠が2人を見守る。。

彼等は、銀時達と同じくはぐれてしまった仲間を探す為に動き回っていたところ、偶然にも出会ってしまった。

今ここに、最少年同士の戦いが始まるうとする。

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生！！』』

銀八

「へえい、今日も銀八先生が始まりまあす……今回のアシスタントはこの人」

華琳

「『恋姫十BASARA学園物語』のヒロインの1人、曹 華琳がアシスタントするわよ。ありがたく思いなさい」

と何やら態度をでかくして挨拶する華琳。

覇道を進む者としての態度なのか、それは本人しか知らない。

銀八

「んじゃ、さつそく行くぞオ……まずはペンネーム『葉月』さんの質問から」

では、まずは黒神さんに質問です。『リリカル銀魂』以外で、リリカルシリーズとクロスオーバーしたい作品はなんですか？」

二つ目。うちのドストリオ（三成、吉継、元就）は『葉月の凶悪兵器リスト』という内容がカオスの小説で、どの凶悪兵器を食べても平然としています。それについてどう思いますか？」

三つ目。作者は『無双OROCHI』『無双OROCHI』、『君と生きる道 僕が背負う罪』『戦国BASARAの転生パロ』、『こくだま言魂』『学園BASARA』、『のび太戦記』『のび太戦記』という小説を書いているんだけど、この中で好きな人は誰なんだい？ 作品の登場人物を答えてくれよ』 『ずばり、これらは全てウチの馬鹿作者に答えてもらいます」

黒神

「馬鹿作者は酷いような……まあ質問の答えはこうですね。1つはやっぱり戦国BASARA、ブレイブルー、遊戯王、どちらかですね。2つ目はそれでしたらシャマパイを大量に送りますので、是非ともドストリオに味見させてください」

銀八・華琳

『何か凄くヤバイ贈り物したんだけどこの人オオオオオ!!!』

と、青ざめて叫びだす2人。

黒神も腹黒い人物だからだ。

黒神

「3つ目は、『戦国BASARA』の転生パロの石田三成ですね。キャラがまったく別人になるかもしれないのが面白そうですし」

銀八

「と言う訳で『葉月』さん、この馬鹿作者にバスターカ砲を撃っちゃってください」

華琳

「次はペンネーム『sibugaki』さん?リリカル女性陣に質問

次の内でこれなら食らっても良いかな?って思っのを一つ上げて下さい(全部拒否したら全部来ます)

(1)

サービスマンの特大サービス

(2)

ライスと柸のダブル変態ハジケ

(3)

ソフトンのバビロン真拳(真説でライが食らった奴)

(4)
ところ天の助一気呑み

(5)
ギガにオブジェにされる(皆ブサイクなオブジェ)

(6)
ハレクラニに小銭にされる

(7)
OVERに丸刈りにされる

まあ、どね！

? キャロに質問

こちらのキャロはジェイソンモードの貴方を尊敬しています。
どう思います？

『……よ…予想以上にはじけた質問ね』

と流石に華琳も青ざめる。

まあ、少し常識な性格をしているのでコレにはなれないだろう。

銀八

「ずばり、質問お願いします」

リリカル組み女子メンバー

『『返り討ちにしやすい(4)で…!…!』』

キャラ

「ふっふっふ、ならばあのチャイナ娘と小娘の抹殺を……」(ゴゴゴゴゴゴゴゴ！)

華琳

「ヒイヒイヒイヒイヒイヒイ！」

と華琳は怯えながらしゃがみこむ。

何故なら、彼女はジェイソン(キャラ)に散々と恐怖を染められてしまつて以来、トラウマとなつたからだ。

銀八

「と言う訳で『sibugaki』さん、そつちのキャラは無理にジェイソンさせなくても良いです…て言つても遅えか！！」

と銀八は思い出したように言いだす。

銀八

「続いて、ペンネーム『ソドー鉄道員』さん」 Q: 銀さん、スバル、フェイト、なのはに質問です。

もしも幻想入りしてしまつたらどうしますか？

Q: リリカル組に質問です。

ミッドチルダにも、きかんしゃトーマスの話は放送していますか？

Q: スバルに質問です。

バリアジャケットの時に足にローラーが付いてますが、ゴードンと競争したらどちらが速いですか？

ちなみにゴードンの最高速度は160kmです。
『……ずばり答えお願いします』

銀時

「そんな時はそんな時だろ？」

スバル

「ですよねエ」

フェイト

「私は、銀時と一緒にいられるなら……／＼／」

なのは

「にはははは、私もなの／＼／」

と4人は言い出す。

ちなみに2つ目の答えは、

はやて

「代表として私が言うな。残念やけど、ミッドチルダじゃそれは知らされてへんから放送してへん」

と申し訳なさそうに答えるはやて。

最後の質問はと言つと…

スバル

「私、ローラーは付けない派なんだ。ローラーじゃあ足の動きと地面を蹴り付くダッシュユカの制御がしにくいから……ローラーを付け

る時点で完全にゴードンって言う人が早いよ」

と、機械頼りじゃ勝てないと言いだすスバル。

確かに姉ギンガのように『ブリッツキヤリバー』の様なローラーはスバルの『刹那の瞬間移動』の動きとダッシュ力を弱めてしまうのでジャマな存在である。

銀八

「と言う訳で、『ソドー鉄道員』さん…今までは『私にいい考えがある』と呼ばせていただきましたがこれからは『ソドー鉄道員』と呼ばせていただきます」

華琳

「じゃあ、次行くわよ」

と立ち直ってアシスタント側に戻る華琳。

華琳

「ペンネーム『黒龍』さんの質問」

1．銀さんラバーズに質問。ここにホストの格好をした銀さん人形があります。

そして背中にはボタンがあり、押すと、『今日はお前を夜まで寝かさなないぜ?…お姫様』っと言う音声流れます。

そしてこれを一つ贈りますので、誰が手に入れるか好きな方法で決めてください。

2．銀さんとフェイトに質問。

こっちのフェイトはとんでもない極悪料理、物体Xを作れるのです

が、どう思いますか？

銀さんなんかはフェイトを見損ないますか？

そして物体Xを贈るので食べた後の感想をお願いします。（黒笑）

3・黒神さんに質問です。

黒神さんの考えたロクティオが一章で出る予定なのですが、その事についてどう思いますか？

『……てやっぱこの読者、黒神級に腹黒さを感じるわ』

銀八

「ずばり答えます……」

銀時ラバーズ

『『うおおおおおおおおおおお！！！！！！』』

と、そこでフェイト達が銀さん人形を取り合う死闘をしていた。

この質問コーナー後にあまりの激しさに銀さん人形が壊れたと言っ
オチになった事はこの時、誰も思わなかった。

銀時

「何かフェイトが質問どころじゃないから…俺が答えるわ。て何
これ！？ あつちのフェイト、シャマル級にとんでもねえ物を作っ
てるんだけどおおおおお！！！」

といくら何でもありえないと青ざめて叫びだす銀時。

何せあんなのはお妙かシャマルが作る物であり、いくら下手だから
と言って作れる物じゃない。

黒神

「最後はボクですね、そうですね……でしたら第一章の最後のあたりでソラに因縁ありそうな一言を言わせる為に登場させるのも言いと思います。第二章を中心に作ったので第一章はあんまり目立たない様にしたほうが良いですよ」

銀八

「と言う訳で『黒龍』さん、ロクティオの技は今だに考え中です。んで次イ、ペンネーム『無目藻』さん」

質問1 シグナムさんに。次のうち使いたい武器はどれ？

・ ガリアンソード（機甲界ガリアン） レバ剣と瓜二つな攻撃をする武器。恐らくレバ剣のモデル。

・ イデオンソード（伝説巨神イデオン）正確には武器でないかもしれない。惑星を真つ二つにできる。赤ちゃんが泣くと威力倍増。

・ ビームサーベル（ガンダムシリーズ）敵を溶断する。お風呂も沸かせるスグレモノ。

質問2 慈悲深いキャラ・ル・ルシエ。貴女の目の前に拘束されたウジ虫ども。さて、どうします？

？ 苦しめないように殺る。

？ 髪を抜き、爪を剥いで、歯を一本ずつ抜きながら赦しを乞えと
言う。そして相手が屈服したところでご褒美に楽にして上げる。

？ 自白剤を大量投与して狂死させる。

？ 解放する。（おすすめしない）

どうします？ 『 』

シグナム

「そうだなあ……ガリアンソードだな。私と相性が良さそうだ」

キャラ

「そんなの決まってる……そんなもんより『雷切』で極痛の拷問処刑をしてやりやああああああああああああああああ！！！！ 工リ才君を誑かすあの女狐共を地獄の悪夢を見さしてやるわああああああああああ！！！！」

華琳

「いやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

とキャロのジェysonモードに大泣きして叫びだす華琳。
相当なまでにキャロが怖いようだ。

華琳

「怖いよ怖いよ怖いよお〜〜！！」

銀八

「………と………というわけで『無目藻』さん、キャロを刺激する質問は控えたほうが良いですよ………」

キャロのジェysonモードは流石の銀八も怖く感じた。
というより、キャロは間違いなくジェysonになるのか心配してきた。

銀八

「つ、次はペンネーム『ウツソ・エヴィン』さん『最近魔法少女って言ったら『まどか マギカ』だけど……あそこのメンバーをリリカルメンバーに当てはめると……」

まどか……なのは(色的なイメージ)

マミさん……フェイトかティアナ(髪の色 武器的に)

銀八

「と言う訳で『ウツソ・エヴィン』さん、なのはの扱いをもうちよつとましにしてください」

最近やりすぎてしていると銀八は呆れていた。

そして最後の質問を答える。

銀八

「んで、次が最後なあ…ペンネーム『ケン』さん『はやてへ

俺の作品ではやてはメインヒロインでスタイルが良く胸がD〜Eカップあります。五割以上の確率で統夜のベッドに潜り込み一緒に寝ています。

そんな貴方は俺のこのはやてを見習って桂のベッドに潜り込み一緒に寝てみたいですか？

黒神さんへ

DIE Sを超え、トップクラスの出力を誇るMIE S搭載型のデバイスはリリカルメンバーと銀魂メンバーの中から誰が持つに相応しいと思いますか？

因みに俺の作品の中で所持しているのは統夜と遊輔、雪蓮の三人のみです。

なのはへ

銀さんはフェイトさんに夢中だから…諦めてレッドエンジェルみたいにしましまパンツ収集を始め、腹いせにフェイトを始めとした女性陣のしましまパンツを収集してみてはどうですか？（黒笑）

『……んで答えはいい』

はやて

「凄くうらやましいわー！……そうやなあ、今度やってみるわー
／／」

と顔を真っ赤にして答えだすはやて。

黒神

「そうですねえ……やっぱり銀さんでしょ？だってバイク乗りながら木刀を振り回せるし」

と即座に答える黒神。

なのは

「天誅ウウウウウウウウー！」

ドカーーーーーー！

黒神

「何故僕ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ
！？」

と、怒り任せになのはは黒神に向かって『デスライト・スタージャ
ツチメント』を放つ。

黒神、哀れ。

銀八

「と言う訳で『ケン』さん、なのはの怒りの砲撃魔法は変わりにウ
チの馬鹿作者が受けましたのでご安心を……んで今回の『銀八先生

コーナー』は終了。どうだったか、華琳？」

華琳

「……いよ、怖いよ、怖いよ、怖いよ、怖いよ、怖いよ、怖…（以下略分）」

銀八

「てまだ怖がつてるんですけどオオオオオオ！？ ごめんねエ、何かウチの馬鹿作者がキャラにとんでもないキャラ崩壊しちゃったからあんなに怖くしちゃったからごめんねエ…！！」

てなわけで、次回もお楽しみ

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいます。

お願いします

第三百二十三訓：バラバラになっても思いは一緒（後書き）

最少年同士の戦い！！

エリオVS弥彦

槍使いの少年と剣道少年の槍と剣のぶつかり合い。

エリオの新たな力。

弥彦の我流剣術。

勝つのはどっちだ！！

神楽

「次回、『大人同士の戦いもあれば子供同士の戦いもある』、テイ
クオフネ」

第三百三十四訓：大人同士の戦いもあれば子供同士の戦いもある（前書き）

お待たせしました。

最近怠けてしまって申し訳ないと思っています。

黒神

「では、『リリカル銀魂 Strikers』が始まります」

第三百三十四訓：大人同士の戦いもあれば子供同士の戦いもある

神楽率いる『クイーン』は、神楽が突如ワープしてみんなとはぐれてしまった事で大パニックで大暴れしてた。

準決勝開始後に、彼女はものすごい速さでダッシュして仲間を探した。

とあるビルの地下室でも走り回っていると、偶然にもエリオと月詠を発見した。

何でも2人は飛ばされた後にこの地下室に飛ばされて仲間が来るのを待っていたらしい。

とりあえず神楽は一安心をして残りの仲間であるリインフォースとノーヴェを探す事にした。

だが途中で、『ファイター』の秘村剣心、相楽左之助、明神弥彦と言うるる剣メンバーと遭遇してしまった。

そこで、神楽は弥彦を見て『ちょうど良いネ』と言ってエリオに弥彦と戦わせる事にした。

理由は弥彦の年齢はエリオより僅か一歳年上だから自分が鍛え上げたエリオの強さを試すのにちょうど良い相手だと察ししたからだ。

そんな理由で、神楽の要求にエリオと弥彦も乗り、2人は戦う事になった。

「良いアルかエリイ、今こそ私とツツキーの猛特訓に鍛え上げた成果を見せる時ネ」

「はい！」

潔く返事をするエリオ。
彼の身体能力は、神楽と月詠の特訓に耐え抜いた結果急激に上がった。

特に神楽の特訓はとても激しく普通の人間じゃまず無理だと言わせるぐらい困難な修行ばかりであった。

それでもエリオは耐え抜き、今ではスバルに次ぐフォワード万事屋でも？2の実力を誇る。

神楽と月詠の特訓で鍛え抜かれた強さを今、弥彦にぶつける。

（相手は神楽と月詠によって鍛え上げられた槍使いか……面白え、俺も独自に鍛え上げられた神谷活心流を見せるときが来たようだぜ）

対する弥彦も、支配者さんの小説『リリカル剣魂スペシャル 侍たちと魔法少女』で薫に無理矢理道場の留守番を頼まれた事で、何の役に立てなかった事に悔やんでいた。

自分だけ置いてけぼりにされた事に悔しくて仕方が無かった。だからこそ弥彦はひたすら稽古をつけて強くなった。

悔しさをバネに、少年とは思えない強さを身に付けて今なら自分でもリリカルの世界で大活躍できると確信できる。

お互いに見つめあい、エリオは『ストラダー』を構えて強く握る。
対する弥彦も背中に背負っている竹刀を取り出して剣道の構えをする。

これぞまさしく最年少同士の戦い。

リーチ力なら間違いなくエリオの方が圧倒的有利。
しかしそんなの弥彦には関係なく、槍使いの戦い方などエリオは知っている。

お互いに睨めあい、鋭い目線は互いに自分が今戦う相手しか写っていない。

「おい剣心、こいつは今後の弥彦の為にもなるんじゃないか？」

「ああ……弥彦殿はフェイト達の世界の事をまったく知らぬ。しかも相手はリリカルなのはシリーズの第三期に登場するエリオ殿でござるから、この戦いは明らかに弥彦に良い経験を持たせるでござるな」

「それに餓鬼同士の戦いとは言え油断はできねエ」

と左之助はエリオの後ろにいる神楽と月詠を見た。

「あのエリオって餓鬼あ、あの2人の嬢ちゃん方に何かしらの特別な特訓を受けたに違いねえ」

「それは拙者も同感でござる。神楽殿と月詠殿ほどの手誰に鍛え上げられただけあり、あのエリオとか言う少年から放たれてる闘志……只者じゃない事が分かる」

2人は神楽と月詠の強さを理解していた。

宇宙最強生物及び傭兵三大種族の一角である『夜兎族』の血を流れて抜群的な戦闘力を誇る神楽。

そして吉原自警団『百華』率いる『死神太夫』と異名を持って恐れられた二代目頭領こと月詠。

エリオはそんな2人の特訓を受けたのだから、相当な強さを持っているに違いない。

「剣士と槍使いの戦いつてのは滅多にねえけど……槍使いの方が攻撃範囲が広いから有利つてのは実際の戦いじゃ関係ねえぜ」

「そんなの承知の上さ……僕はただ鍛え上げられた自分の強さを確かめたいだけだから手加減無しで行かせてもらう」

と今でも互いに攻撃開始しようとする体性に入ってる。

いざ参ろうとする中で、突如モニターが現れて黒神が映し出されていた。

「ここで、エリオと弥彦にミッション！」

「のあ、いきなり出てくるなよ！」

「て、ここでミッション!？」

まさかのミッションにエリオも弥彦も驚きだす。

そのミッション内容を黒神がモニターで表す。

しかもそのミッション内容は準決勝の舞台内でも無数のモニターで放送される。

《今からエリオ・モンディアルと明神弥彦が『チーム・クイーン』と『チーム・ファイター』がチーム代表として戦おうとしている。

この戦いで、エリオ・モンディアルが負ければ神楽と月詠、明神弥彦が負ければ秘村剣心と相楽左之助も失格となり、引き分けの場合はその場で4人も道づれ失格となる》

『何イイイイイイイイイイイイイイ!?!』

まさかの失格宣言に神楽、月詠、剣心、左之助の4人は青ざめて叫びだす。

《そこで、この4人以外の残りの『チーム・クイーン』と『チーム・ファイター』のメンバー以外のメンバーは今すぐに援護と言う形で戦いに参加するのを許可する。場所はビルが3階の所で途中で破壊されて無くなったビルの地下1階。分かりやすくする為に、今すぐ赤い旗を置く。そこが2人が戦っている場所である。チームが一気に減ってしまう前に各チームは自分のチームメンバーの援護に向かえ》

ミッションゲーム

仲間の援護に向かえ！！

「つまり、僕が負ければ神楽さんも月詠さんも……」
「こりゃ、ただの個人対決じゃ無くなっちゃったな……」

勝たねばならない理由が増えた2人。

もし負ければ、自分だけじゃなく他の仲間も巻き込まれ。

特にエリオの場合、『クイーン』のチームリーダーこと神楽がいるため、自分が負ければ神楽も失格。

そうなれば、チームリーダーが失格になった時点で他のメンバーであるリインフォースもスケットして入ったノーヴェも巻き込まれて『クイーン』はここでリタイアとなる。

*

「てか、メツチャ遠いところにいるじゃねえかあー!!」
「早く急ぎましょ!!」

と森の入り口前にいるノーヴェとリインフォースが、目的地の遠さに叫びだす。

そして猛ダツシユの勢いで急いで仲間の合流に向かう。
何故なら、その中にはチームリーダーの神楽がいる為、エリオが負けた場合は神楽も失格となり…自分達も強制失格となる。
それだけは避けなければと必死である。

*

「……くだらんが、家康だけでは不安だ。さっさとエリオって餓鬼を殺してミッションを終わらせる」

と俺は家康じゃ頼りにならないと思って自分も弥彦達の援護を向かう。

一回戦の家康の不甲斐なさが今でも忘れられない。

*

「ワシも仲間を助ける為に援護に向かおう!!」

と、庵から低い評価を受けた事も知らずに家康は絆の力の源である仲間の救助の為に走って向かう。

こんな時に戦国最強にして最も信頼している本多忠勝がない事は辛い。

いつもは彼の背中に乗って一気に空に飛んで移動する。

*

「弥彦オー、負けんじゃねえぞおー!!」

「拙者達の命は主に預けたでござる!!」

と大量にいやな汗を流して叫びだす左之助と剣心。

弥彦の敗北は、自分の命の危機でもあるからだ。

失格になれば、間違いなく地獄の極悪料理であるシャマパイを食わされるからだ。

「エリイ、絶対勝つアルヨオ!!」

神楽も精一杯、エリオを応援する。

ただ彼女の場合は、自分の立場の危険性よりも自分が渾身を込めて鍛え上げたエリオが負けない事を祈っている。月詠も無言だが、期待するようにエリオを見つめている。

(相手は竹刀を使うのか……変っているなあ)

と剣士なら剣を使うのは当たり前だと不思議がらない。だがエリオは弥彦の獲物が竹刀つてのが不思議のように思えてきた。

何かの作戦なのかと疑うが、エリオにはそんな関係ない。何故なら、真剣ではなく木刀を使って実践でとんでもない化け物を次々と倒してきた銀時を知っている。

たとえ相手が竹刀だろうが木刀だろうが、様は勝負は勝つか負けるかのどちらかである。

「じゃあ、行くとしようか」

「ああ、どつからでもかかってきな!!」

お互いにヤル気満々で今度こそ戦いが始まるうとする中……

「おお、そう言えばエリイに言い忘れた事がアルネ」

「え、何ですか?」

とエリオが神楽の言葉に反応して振り向く。

そして神楽はその口でとんでもない事を喋りだした。

「エリイ、今回の戦いはエリイの鍛え上げられた身体能力を試す為にアルヨ!!だからこの戦いは魔法を使用するの禁ずるネ!!」

『!!?!?』

と、コレはエリオはもちろんの事、弥彦、剣心、左之助の3人も驚きだす。

エリオは槍使いの以前に魔導士でもある。

そんなエリオに魔法を使用することを禁ずれば戦闘力が大幅にダウンする。

つまりエリオが弥彦に勝てる確立は下がり、自分の立場も悪くなる。しかも月詠も同感するように言いだす。

「わつちもそれは賛成じゃ。主の槍術は魔法の力なしじゃ戦えぬ訳じゃないじゃろ？」

月詠の言うことは最もである。

そもそも神楽と月詠がエリオの訓練に付き合ったのは彼が魔導士として強くさせるだけではない。

『ストラーダ』の元々の力の特製を行かす為の槍使いとして彼を強くさせるためである。

魔導士の最大の弱点は魔法を封じられてしまえば何にも出来ない事ではなく、魔法ばかりを頼ってしまえば本当の強さを身に付けられない事である。

神楽と月詠も、ミッドチルダに来てからエリオと共に活動する事が多くなり、彼が自ら自分を強くして欲しいと頼まれた時から決意した事である。

槍素振りと突き速度だけじゃなく、槍を振るう為に必要な筋肉強化、動きの速さ、そして正確な槍さばきの猛特訓の繰り返し。

そして万が一の為に槍無しでも肉弾戦でも戦えるように鍛え上げた。

もし、ここでエリオが魔法を頼ってまで戦おうとすれば、それこそ

最大の強さの源である精神も脆くなつてしまい、神楽と月詠が知っている本当の強さにはたどり着けない。

「ストラーダ…悪いけど…」

《I understand it. I believe a master and watch it (承知しました、私は主を信じて見守ります)》

と『ストラーダ』もエリオの気持ちを理解して魔力開放を停止する。ここからは、エリオ自身の身体能力と槍術の力のみで戦う事になる。

「分かりました、今までの特訓を信じて魔法は使いません」

「よし、じゃあ行くとヨロシー！」

神楽が笑顔でそう言いだすと、エリオも笑いだす。

そして弥彦に振り向き、真剣な表情で見つめる。

「と言う訳さ…でも、だからって君を舐めているから魔法を使わない訳じゃないよ。自分自身と槍使いとしての強さをさらに高める為に全力で君を倒すつもりだ」

「安心しろ、なんとなく直感でお前が他人を見下す人間とは思っちゃいねエ。俺も自分自身と剣士としての強さをさらに高める為に前を全力で倒す」

エリオと弥彦から、少年とは思えない闘志があふれ出ている。

彼等もまた、数多の試練を乗り越えて強くなつていき…大人顔負けの強さを持っているからだ。

「機動六課、フォワード万事屋ライトニング03、エリオ・モンデリアル…」

「神谷活心流、明神弥彦…」

『『雷走する（いざ参る！！）』』

互いに覇気を込めて叫びだすと、先手必勝にエリオが凄まじい速さで突進してくる。

そして高速の突きを炸裂し、弥彦に襲い掛かる。

「甘エ！！」

と弥彦は素早くしゃがんでエリオの突きを交わすと同時に、そのまま手を交差してエリオの『ストラダー』の柄を白刃取りする。

「神谷活心流　奥義の防り・刃止め！！」

コレが弥彦の神谷活心流の奥義の1つ。

剣を持ったままでも腕の甲で剣撃を止める白刃取りの一種である。

コレにはエリオも驚きだした。

「いきなり行くのか、弥彦」

と剣心は勝負に出る弥彦を見つめる。

この必勝戦術こそ、弥彦の最強攻撃。

「行くぜ、奥義の攻め・刃渡り！！」

刃止めで受け止めた武器を制したまま伝って、柄尻で人体急所（喉元や脇、顎など）に向かってカウンター攻撃を打ち込む神谷活心流・奥義の攻め。

刃止めの後に間髪入れず人体急所への確に打ち込まねば、相手の攻撃の勢いを利用したカウンター攻撃として成立せず、奥義本来の一撃必倒の威力を発揮しないので、こちらも土壇場での勝負度胸が必要。

しかし、弥彦は数多くにこの奥義を成功させている為、今では弥彦の十八番とも言える技。

このままエリオの喉下にヒットすれば自分の勝ちだと見える。

しかし……

「なるほど、良い技だけど……」

ドカア！！

「ぐはぁ！？」

柄の先がエリオの喉下に届く前に、エリオの脚が弥彦の腹をめり込んで大きく当たってしまった。

まさか返し技に対して、返し技返しの様に蹴り返すとは弥彦も剣心も左之助も思いもよらなかった。

あまりの激痛に腹を押さえて奥義の防りを解除した瞬間、

「僕には通じない！！」

どかああ！！

「ぐああああ！！」

今度はエリオは『ストラダー』を豪快に振って横一線にと弥彦の左脇にその柄で打撃して吹き飛ばす。

「弥彦オ！！」

「まさか、初見であの奥義を破るとは……」

左之助が叫びだし、剣心は信じられないように驚きだす。

神谷活心流の奥義をまさかこうもあっけなく敗れるとは思ってもよらなかった。

「奥義の防り 刃止め…それはおそらく相手の剣撃を手の甲で防ぐことで、得物を持ちながらも止めることが出来る白刃取りの一種。そして奥義の攻め 刃渡りは刃止めで受け止めた武器を制したまま伝って、柄尻で人体急所を打つ返し技」

と神谷活心流の奥義を分析するように喋りだす。
エリオの言っている事は全て正確であった。

「確かに、たとえ竹刀とは言え急所を突けば大抵は戦いに制覇できる…けど、その技には致命的な弱点がある」
「何！？」

神谷活心流の奥義に弱点があると言いだしたエリオに驚きだした弥彦。

「それは、柄の攻撃に乗せて一気に体当たりするかのような全身の力を一箇所に貯める余りに腹の部分と下半身がまったくの無防備。刃止めで相手の武器を封じたとしても体術にも優れた相手や二刀流相手に片方の剣のみを防げてもう片方の剣で返し技にさらに返されるだけだ」

「!?!」

エリオの言うことは最もである。

確かに『刃止め』からの『刃渡り』は優秀な返し技であり奥義の一種である。

しかしそれは相手の得物を封じてそこから一気に反撃した時の話。今のように蹴り返された事は弥彦の経験にはない。

それをエリオは見事に見極めて奥義を破ったのである。

「ちい、神谷活心流の奥義をこうもあっさり破りやがって…」

「どんなに優れた技にも、弱点がある…それは教わりませんでしたか？」

「ほう…」

と月詠が意外そうな表情で驚く。

その言葉はある日の特訓で自分がエリオに教えた台詞である。

エリオはその言葉を学び、実践でも再現させた。

さらに何故エリオが初対面の人物の技を見極めたのかと言うと、それは月詠がエリオに奇襲攻撃対処訓練と言う何処からか降ってくる無数のクナイを対処する特訓を受けさせたのだ。

戦いの中で、どんな奇襲攻撃や相手の予想外な攻撃戦法を刹那の間でも見極めて槍と体術で防ぎ反撃できる為にと鍛えたからだ。

(わつちの特訓の成果がさつそく出たようじゃ)

少し嬉しそうに笑いだす月詠。

口に煙管を加えて、エリオの成長は本物だと確信する。

「だから、その奥義はもう僕には通用しない!!」

とまたもやエリオは高速の突きを炸裂する。

遠距離からの攻撃に弥彦は回避する。

ここで刃止めをして返り討ちにしたくても、逆に返り討ちされてしまう可能性がある。

その為、弥彦の奥義は完全に封じられた。

「くそオ!!」

容赦なく襲い掛かる高速の連続突き。

直接当たっていないが、体中に斬られた跡が少しずつでる。

「やべえ、神谷活心流の奥義『刃渡り』は破られちまった上に状況は圧倒的に不利になっちまった。しかも槍と剣じゃ圧倒的に槍の方が圧倒的に攻撃範囲は広エ」

左之助もこれはまずいと思い始め、このままでは負けてしまつと思つた。

「はあ!!」

エリオは槍を大きく上げて、そのまま振り下ろす。弥彦に技と奥義を出させて、逆返りするつもりだ。

「ちい！！」

だが弥彦は刃止めをせずに関わす。

これは明らかに奥義の誘いの攻撃だからである。

エリオはそのまま追加として、右手で下右斜めに大きく振るう。

弥彦は竹刀の刀身で受け流し、一気にエリオに近づく。

「確かに遠距離じゃ不利でも、こんだけ近づけりゃ逆にこっちが有利だぜ！！」

「！？ ば…バカヤロ！！ むやみに近づいたら…」

ゴン！！

と、左之助が何かに気づいたように怒鳴ってもすでに遅かった。

「あ……がはあ！！」

何故なら、今度は弥彦の右脇にエリオの左手の拳が炸裂して大打撃を受けたからである。

しかも、

ドカカカカカカカカ！！！！

「ぐああああああああああ！！！！」

殴って蹴つての繰り返しで、弥彦に容赦なく肉弾戦で打撃まくるエリオ。
そしてフィニッシュに、

「ふおわちゃあああ!!」

ドカア!!

「グハア!!」

弥彦を蹴飛ばす。

その激痛に思わず意識を無くしそうになるが、弥彦は気迫で耐え抜く。

エリオと距離が縮まった中で…

「はいはいはいはいイイイイイイイイイイ!!!!」

そこからエリオが連続に槍を振り続ける。

突き、なぎ払い、横一線に振るうなど遠距離攻撃を繰り返す。

「ぐふ…ぐはあ…!!」

さっきの打撃が効いているのか受け流しのキレが悪くなっていき、弥彦はさっきよりエリオの攻撃を受けてしまっている。

「チィ、やっぱアイツはただの槍使いじゃなかった訳か!!」

「ああ、相手が近づいてきたら肉弾戦様に体術で、そして相手が離

れたら遠距離攻撃に長さで攻撃範囲の広さを活かした槍術：エリオ殿は間違いなくその2つを効率よく使いこなしている」

左之助と剣心もエリオの戦闘力には感心するように驚く。

確かにエリオの場合は魔法の力を除いても独自の槍術と神楽に鍛え上げられた体術がある。

魔導士としてのエリオの弱点は、魔力による強化魔法を中心とした魔法任せの勢いがある分、槍術の間合いの狭さが弱い事をまったく知らなかった。

もし相手が急接近して槍の刃よりさらに後ろに移動して本人に近づけた場合、槍の持ち直しをする暇も無くやられてしまう。

だから神楽と月詠はエリオの槍術だけじゃなく体術も優れるようにと鍛え上げた。

これにより、エリオは騎士らしい強さを失ったがそれをもはるかに上回る純粋な槍使いとしての強さに目覚めて徐々に成長している。

一方の弥彦は純粋な剣術に優れている将来が期待されている剣士。しかし接近戦じゃ体術で返り討ちにされて少し距離をとっても攻撃範囲が広い槍術で返り討ちにされる。

「よっしゃー！！ 良いぞエリィ、このまま押し勝つアル！！」

「…おかしい」

と月詠は何か弥彦の押されぶりに疑問を感じる。

「今はエリオが優先じゃが、あの少年の眼……追い込まれているにも関わらずに、さっきからエリオを真剣に見るような眼をしており」「そうアルか？」

と神楽は不思議そうに言いだす。

たしかに勝負では相手を真剣に見ることも重要。

けどあれだけ攻撃を連続に受け続けているにも関わらず、反撃もしないでただ守りを固めながら見すぎている。

そしてエリオの攻撃が止まり、エリオは警戒するように距離をとって離れる。

明らかに弥彦が不利であるが、弥彦はエリオの実力を見て何かに確信する。

「……痛てて…体術も優れてんじゃ神谷活心流が通じねえって事か」

と弥彦はエリオに神谷活心流の技は通じないと確信する。

「一方的にこっちが押してるけど妙な威圧感があると思ったら…やっぱり、試してたんだね」

そう、最初は弥彦は本気でエリオに攻めた。

しかし奥義を破られた時からエリオの力量を測るために技と追い込まれてる不利をした。

代償として相当な攻撃を受けてしまったが、たいした事はないようだ。

（だとしたら、長引けばこっちが不利になるから…）

「一気に終わらせてもらうー！！」

とエリオは凄まじく走り出して、先ほどより早く槍を突く。

今度は柄の先を持ってさらに距離を伸ばしての攻撃。

神谷活心流が来ようと返り討ちにしようとするエリオの考えの戦法だが…

「てめエは1つ大きな勘違いをしているようだから言っておくぜ…
…俺の技は、神谷活心流だけじゃねえ!!」

と弥彦の気迫の叫びと同時に、弥彦は左手で素早くエリオの槍の先を白刃取りをする。

「!?!」

「みょうじんかつしんりゅうのぬす明神活心流 技之盗み 刃取り!!」

そのままエリオの『ストラータ』を引つ張るように体を前に倒すようにと凄まじいダッシュでエリオに竹刀での渾身の一撃を喰らわせる。

バシィ!!

「ぐう!?!」

エリオの左肩に直撃し、エリオはその痛さの余りに痛がるがすぐに豪快にと槍を振るう。

だが弥彦は攻撃の直後に素早く後ろに下がった事で交わしだした。

『『『おお!!』』』

「エリイが反撃を食らったアル!!」

弥彦の新技に剣心と左之助は感心するように驚き、神楽は予想外の展開に驚く。

左肩を右手で抑えながらエリオは何かを確信する。

「……い…今は、さっきの白刃取りから攻撃態勢に移る技じゃなく…白刃取りと同時に攻撃を繰り返しの技…それに、明神活心流つて」

まさかの二種類目の流派には驚く。

しかも、さっきの技のキレは神谷活心流よりも良かった。

「第一章でも、第二章でも、俺は戦いに参加できなかった……その悔しさをバネにひたすら剣の修行をして来た」

と突如、己が置いてけぼりにされた事に悔やみだす弥彦。
しかし彼はそれをバネにし、自分を鍛え続けた。

「けど、それだけじゃ駄目だと…神谷活心流だけじゃ全然強くなれねえと思って……昨夜に俺は俺自身の強さを生み出せた」

弥彦は竹刀を強く握り、その竹刀をエリオに向けて言いだした。

「神谷活心流同様に殺すのではなく戦いを制覇し、そしてそれをさらに上回り相手の力も制覇する為の実践向けに特化した我流剣術『みよこじんかつしんりゆう明神活心流』だ!!」

少年剣士の中に芽生えた新たな新剣術。

戦いでも役立てたい強い思いが生み出されたその力が今こそ発揮される。

銀八

「教えて」

生徒全員

『銀八先生!!!』

黒神

「はあくい、それでは『銀八先生コーナー』を始めます。今回のアシスタントは作者の黒神でえす」

明るくアシスタント紹介を言いだす黒神。
だが…

銀八

「…はい、今回の『銀八先生コーナー』は中断します」

黒神

「ちよつと待つてエエエエエ!!!」

突如の中断宣言に青ざめる黒神は銀八を止める。

黒神

「何でいきなり中断!? てかそれだけ僕じゃ不安なの!？」

銀八

「うつせえ!!! 大体おめエのようなドS野郎がアシスタントだと変なトラブル起すに違いねえだろ!!! 俺、そんなの絶てえ嫌だからな!!!」

黒神

「そんなあ〜!!!」

黒神の腹黒い理由に銀八先生はブチ切れて、木刀で黒神を吹き飛ばす。

哀れな黒神は悲鳴を上げる暇も無く、星と化した。

銀八

「……………てなわけで、中断は前言撤回して今回はアシスタントなしで質問を答えたいと思います。まずはこの人、ペンネーム『リヨク』さん」アリシア「取り合えず質問します、」

もしも黒神さんのところの銀さんたちが聖杯戦争に召喚されたら何のクラスになりますか？ Fate 風のステータスで表してお答えください、高杉の所の鬼兵隊も含めてください。

……………普通に難しい質問かな？」

『。その答えは、以下のとおりになります」

セイバー 銀時・スバル

アーチャー フェイト・なのは・ティアナ・沖田・シグナム・チ
ンク・ディエチ

ランサー エリオ

ライダー 神楽・桂・ウィンディ

アサシン 月詠・ドゥーエ・猿飛

キャスター はやて・ヴィータ・アルフ・ザフィーラ・シャマル

バーサーカー キャロ・外道丸・屁怒紹

銀八

「て、屁怒紹はバーサーカーとして召喚してほしくねエエエ!!」

青ざめて叫びだす銀八。

もし屁怒紹がバーサーカーとなれば、理性を失った彼はもはや歴代最強最悪なサーヴァント以前に最凶の天人となる。

銀八

「…というわけで『リヨク』さん、絶対に屁怒紹がバーサーカーになる事を祈らないでください……。んで次イペンネーム『ヴァーラガルザ』さん『質問その1』

スバルへ

今の實力だつたらなのはさんに勝てるのではないのでしょうか？

質問その2

みんなへ

右手をサイコガンに改造されました。どうする？

質問その3

高杉へ

この中で手を組むとしたら？

・フリーザー味

・秘密結社ブラックロッジ

・秘密結社シャドルー

『』

スバル

「うーん、わかんないけど実践勝負なら勝てそうな気がする…」

銀八・生徒全員

『『お断りする!!』』

2つの質問が終えた事で、3つ目の質問に答える為にとモニターが映し出されて晋介が言いだす。

高杉

「別に1つだけ選べと言わねえんじや全部で言いんじやねえか」

と気楽そうに言いだすとモニターが消える。

銀八

「と言う訳で、『ヴァーラガルザ』さん、廊下にたつてなさい…んで次イ、ペンネーム『鳴神 ソラ』さん」

ネス「最後宣伝だね」質問『マリオゲームで出るアイテムで好きなのは何?』

リユカ「質問です。『ヴィータさんがヤンデレになってるけど…これも狙いですか?』」

『……ずばり答えます。俺の場合はスターであり、黒神はパワーアップきのこですね…そしてヴィータ、お答えを」

ヴィータ

「誰がヤンデレじゃあああああああああああああああああああああ
あ!?!?!」

と怒鳴って叫びだすヴィータ。

まあ、ジェyson化したキャラに比べればまだマシである。

銀八

「……という訳で『鳴神 ソラ』さん、乙女心を余り弄ばないよう
にしてください…次はペンネーム『charley』さんの質問『
今回は両方シャルマルに質問です。』

charley

「最近僕も黒神さんみたいに遅筆気味です。これって夏バテでしょ
うか?」

政宗

「作者それ質問じゃなくて診察じゃねえか?」

成実

「もうひとつは俺から…シャルマル姐さんの次なるオリジナル新メ
ニューは何か考えてるっすか?もしあったら俺試食したいっす!」
『…シャルマル、質問答えてください」

シヤマル

「そうですねエ、もう夏は終わったからバテる事はないかと思いますけど……後、成実さんとは凄く気が合いそうだから是非ともシヤマパイを遅らせたいわ!！」

銀八

「……嘘だろ？」

シヤマルの手料理を食べてまで平気な人間がこの世にいた事に信じられない程青ざめる銀八。

銀八

「……と、と言う訳で『charley』さん、これからも小説頑張ってください」

苦笑しながらも銀八は応援するように言います。

銀八

「で……では気を取り直して、ペンネーム『白米』さん『霊夢』そっちの人達全員に質問。

貴方達、本当に人間？私から見たら人の皮を被ったエイリアンよ？」

にとり「そっちのデバイス達にお願いがある。

分解くわいさせてくれないか？」（工具を持ちながら目をギラつかせる）

アルバート「私と同じ剣士であり、機械の身体を持つスバルに質問だ。次の技で修得してみたいものは？」

1 ダイゼンガーの雲耀の太刀

2 デカマスターのベガスラッシュ

3 ソルグラヴィオンの超重斬』……最初の質問は俺が答えます、彼等は異常なまでの強さを持っているだけあって人間であります。まあ、スバル、フェイト、エリオ、ナンバースは生命体だからしゃあないとして神楽は天人だからそう見られてもしゃあねえか」

だが彼女等も人間として生きている事は確かだと銀八は思っている。

銀八

「次に、この小説に対するデバイスの質問の答えは……」

バルディッシュ等全てのデバイス

《I decline it. Because I don't
ly some unpleasant feeling (お断り
します。何か嫌な予感しかないので)》

銀八

「だよなあ!!」

と呆れるほど納得する銀八。

最後の質問の答えは

スバル

「……うーん、そうねエ……ほとんど機械便りの剣技だから興味ない

かなあ」

銀八

「つまり会得する気はねえって訳か。と言う訳で『白米』さん、廊下にたつてなさい……んで次イ、ペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』さん『美己』ミサカから六課とその協力者の面々に質問があります。」

次の内魔法抜きで勝てる人又は戦ってみたいと思うと人はいますか？とミサカは問います。

1. 『無敵超人』 風林寺隼人
2. 『哲学する柔術家』 岬越寺秋雨（書、画、陶芸、その全てを極めたと謳われる天才芸術家と言う異名も有り、一言で現すとんでも超人である）

3. 『ケンカ100段の空手家』 逆鬼至緒（見た目はヤザだが、中身は優しい）

4. 『裏ムエタイ界の死神』 アパチャイ・ホパチャイ

5. 『あらゆる中国拳法の達人』 馬 剣星（実力は本物だがエロおやじである）

6. 『剣と兵器の申し子』 香坂しぐれ（しゃもじで斬鉄をしたことがある）

「二つめにあなた達は魔法抜きの生身で梁山泊の拷も・・・修行に耐えられますかとミサカは続けて問います」

「三つめは腐留苦去主を食べれますかとミサカは問いつつ腐留苦去主を向こうに送ります」

銀八

「ずばり、教えてください」

銀魂メンバー。機動六課全員

『『全員、勝てる気がないのでマジで申し訳ございません！！』』

と即座に土下座する。

銀八

「残り2つは俺が答えます。2つ目は神楽なら馬 剣星の修行を、スバルなら香坂しぐれの修行に耐えられそうな気がしますが…他のメンバーはアウトになりそうですね…そして最後の質問は…食べるかああああ!!」

と銀八は思いつきり送られた腐留苦去主を美己に向けて投げ返した。その後、彼女がどれだけ悪夢を見たのか言つまでもない。

銀八

「と言つ訳で『武田軍兵士 清坂 剣麻』さん、美己の攻めるような質問は控えさせてください。んでこれが今回の最後、ペンネーム『龍の骨』さん『零斗

「えーしつもん、『BSAA学園』のなのはは俺のマイティ真拳で負けたけど、なのは自身どう思ってるんだ？」

フランケン

「お前なんて質問をしてんだあ—————!!!」

なのは

「……………」

銀八は背後から伝わるなのはのとつもない殺気に大量の汗を流して青ざめている。

そして彼女はゆっくりと『レイジングハート』を構えて…

なのは

「デスライト・スタージャツチメントオオオオオオオオ!!!」

銀八

「ああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

そのまま怒り任せに銀八に向けて超極大な魔力砲を放つ。
と言う訳で『龍の骨』さん、質問有難うございます。

次回も『銀八先生コーナー』をお楽しみ。

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいます。

お願いします

第三百三十四訓：大人同士の戦いもあれば子供同士の戦いもある（後書き）

新剣術『明神活心流』で一気に反撃する弥彦。

その技は『神谷活心流』をはるかに上回る。

対するエリオも新たな力で対抗する。

新剣術と新槍術。

最少年同士の大人顔負けの真剣勝負は、まさかの予想外な展開で決着付く！？

次回に大注目せよ！！

エリオ

「次回、『結末には予想外な展開が起こるので、その予想を当てて
事はメツチャ難しい』テイクオフ」

第三百二十五訓・結末には予想外な展開が起るので、その予想を当てる事はメッ

黒神

「読者の皆さん、特に支配者さん、お待たせしました」

銀時

「エリオと弥彦、最年少同士の戦いも今回で決着付きまゝす」

黒神

「では、刮目してください！」

弥彦

「『リリカル銀魂 Strikers』始まるぜ」

第三百三十五訓：結末には予想外な展開が起るので、その予想を当てる事はメ

神谷活心流

神谷活心流道場師範代である神谷薫の父・神谷越路郎が創始した活人剣。

相手を殺すのではなく制することを極意とし、真剣ではなく木刀や竹刀を用いて戦う。

また、刀身を一切利用せず柄で打撃を与える技もあり、奥義も柄を利用したものとなっている。

しかしそれでは弥彦の独自の力を発揮する事ができず、攻撃範囲の狭さと柄様の技は柄で、刀身の技は一切ない。

1つの力を合体させる技など1つもない。

だからこそ、弥彦が自分なりに最大限の力を発揮する為に編み出した我流剣術を生み出した。

「攻めも護りも優れている万能的な新剣術…それが俺の明神活心流みょうじんかつしんりゅうだ！！」

「明神…」

「活心流…」

啞然として、内心でかなり驚きながら口を出す剣心と左之助。

弥彦は神谷活心流を流派として戦っていた…しかしそれ以外の流派、しかも独自で生み出した技を持っている。

「白刃取りを特化し、刀身と柄の連携攻撃の技をも使用し、さらに相手の攻撃をはじめ返し無効化する剣術流派って訳だね」

「ああ……けど今もっている技はさっきのを含めてせいぜい6つ程度。けど明神活心流みよっしんかつしんりゅうは技だけの神谷活心流とは違ってそんなに生温くねえぜ？」

技の数をワザワザばらした弥彦。

それほどまでに自分で生み出した我流剣術に強い自身を持っている。

「この剣術は俺自ら編み出した力、戦いを制するだけじゃなく相手をも制する力。それを俺は教えられたんだ」

「教えられた？」

まさか知ったのではなく教えられたんだと聞き、啞然とするエリオ。そう、明神活心流みよっしんかつしんりゅうは元々弥彦が自分自身も強くなりたいたいと言っ一心で編み出したのだが、それ以外の意味も彼は教えられたのだ。

「俺は……本当の強さってのを教えられたんだ……スバル・ナカジマさんに」

「!?!? ……す……スバルさんに!?!?」

まさか、自分達と同じ小説のメンバーであるスバルが弥彦に本当の強さを教えた事に驚きだす。

神楽も月詠もコレばかりは驚きを隠しきれなかった。

「はあ、スバルってこの小説の嬢ちゃんじゃ他チームのメンバーだったよな？」

「ああ……しかし昨夜に弥彦殿はスバル殿と接触したところはあったが、まさかスバル殿が教えるとは思ってもよらなかったでござる」

弥彦は確かにスバルから蒼刀術そうとうじゆつを教えてもらう事を求めていた。しかしスバルの剣技は元は大切なものを護る為ならどんな敵でも斬滅する脅威の暗殺剣術。

彼女からしても、力だけを求める弥彦に教えてしまえば間違いなく力の誘惑の元で人を殺めてしまう恐れがある。だからこそ弥彦に蒼刀術そうとうじゆつを教えるのを止めたのである。

「……俺は、あの人から本当の強さつてのを教えてもらった」

あの夜、弥彦はスバルからどう言う剣術流派を持っているのかを聞かされた。戦いに勝つだけじゃなく戦いを制する活心剣『神谷活心流』をスバルに話した。

「柄を使った剣術かあ…弥彦君って面白い剣術を使うんだ」

「まあ、学んだ事だけだな」

「それで、支配者さんの小説で第一章も第二章もまともに出されなかつたから悔しくて強さを求めて修行に励んだって訳だね」

「…はい」

弥彦の強さを求める理由。

それは置いてけぼりにされた屈辱感である。

自分も剣心達の仲間のはずなのに、自分は薫に無理矢理に道場の留守番任せ。

共に戦えないのは、自分はまだ子供であると言う理由が最大限にある。

「俺は、確かに周りからみりゃただの子供だろうけど……俺だって、剣心達と戦いてえんだ……！ 弱いままの自分はもう嫌なんだ……！」

悔しさを込めて叫びだす少年剣士の前に、スバルは今目の前にいるのは弥彦であると同時に銀時に会う前の自分に見えている。

「……無謀とは言わないよ、私だって同じだったしね」

弥彦は前の自分に似ている。

己の無力さに悔やみ、強くなりたいと言う思いはまさに以前の自分と同じである。

だからこそスバルは弥彦の気持ちがいやと分かる。

強さを求める事は悪くないとは言えない。

強さばかりを求めても本当の強さは得られない。

しかし、弥彦のように純粋な強さを求める心は悪いばかりではない。

自分も仲間達と対等に立てるように共に戦えるほど強くなりたいと言う気持ちのスバルに伝わっている。

「私も銀さんに憧れて……魔導士が当たり前のこの世界でひたすら剣術の稽古を死ぬ気で続けて、気がつけば力じゃなく技に特化した『蒼刀術』そうとうじゆつを身に付けちゃったよ」

自分の努力の成果を呆れて言いだして苦笑するスバル。
スバルにとつて剣は技と言う小細工ではなく強い心を込めた一太刀。
どんなに技を磨こうと、技じゃ自分には求められなかった理想の力
の前では粉碎される。

「私は腕力が無いから、どんなに剣の修行で強くなっても銀さんの
様な豪傑な剣は身に付けられなかった…だから私の剣はいくら神速
に速く触れても、真なる剣には適わないと思った…けど、それは私
自身の剣であり誇りであるんだってセイバーの戦いで分かったんだ」

銀時の剣は銀時の物。

それならば、スバルの剣はスバルの物。

人にはそれぞれ独自の強さを持っていると、スバルはセイバーとの
激戦で分かったのだ。

「弥彦君、君の強さを求める心は私にも分かるよ…でも強さを求め
るだけじゃ駄目なんだよ」

「え？」

「確かに、弱いままで良いって思っている剣士は絶対にいない…け
どそれはただの剣士としてあって侍は違う」

侍はただの剣士じゃないとスバルは言いだす。

「私の知っている本当の侍は、自分の本当に大切なものを護ろうと
する強い心を持っている。それは魔法や力よりもはるかに強い魂な
んだよ」

「…強い…魂」

そう、かつて銀時の姿をその眼で見たスバルだからこそ知っている
事。

弥彦を強くさせるには、まずそれを教えなければならぬと思つて彼に伝える。

「だから弥彦君、ただ強くなるだけじゃ本当の侍としての強さは手には入れないんだよ…それだけは忘れないで」

「…はい！」

スバルから本当の侍の強さとは何なのかを教えてもらった弥彦の心から、侍としての強さがさらに芽生える。

そんな弥彦の姿を見て、スバルは弥彦は強くなれると確信した。

「……後、問題は神谷活心流だね」

神谷活心流に問題があるとスバルは言います。何故なら、神谷活心流には欠点が多いからだ。

「一件、神谷活心流は剣士としての強さを発揮するには十分な素質がある。柄を使った奥義も、剣道だけじゃなく実践でも使える……けど、支配者さんの小説の第3章の舞台であるミッドチルダでの戦いじゃ、その剣術流派には欠点が多くあるよ」

「欠点!?!」

「それは、刀身には刀身、白刃取りには白刃取り、柄には柄という技が別々に分けられていて刀身と柄を同時に扱う技がない…それじゃ攻撃範囲が圧倒的に狭く攻めるときでも不利だよ」

「!?!」

スバルが言うと、弥彦も驚きですが納得する。

確かに柄を使う技は隠し技のように相手にも予想しづらい技。

滅多に見られない剣技の一種である。

しかし柄は刀身よりも圧倒的に短く、攻撃しようにもよほどの距離が無ければ意味がない。

「だから弥彦君を強くさせるには、君だけの神谷活心流を教えなきゃね」

「お…俺だけの神谷活心流!？」

突如、弥彦だけの神谷活心流を会得すべきだとスバルは言いだす。それには弥彦も当然のように驚きだす。

「正確には神谷活心流より優れた新しい剣術が必要だよ」

これから弥彦が使う神谷活心流は、はっきり言って神谷活心流よりも強くて弥彦だけのオリジナル流派になるかも知れないとスバルは確信した。

「刀身と柄の連携に、白刃取りにも特化した技、そしてさらに戦いを制するだけじゃなく相手をも制する『神谷活心流』の進化した新剣術……『明神活心流』って所かな」

「神谷活心流が進化した剣術……明神活心流……」

「そして、俺はスバルさんから技の編み出し方や侍として最も大切な事を教わった…。だからここからはもう小細工なんかは必要ねえ

から、改めて全力で行かせてもらっぜ」

「確かに、これから先は本当の君の実力が明らかになるかもしれないけど…それでも僕は全力で君を倒させてもらっぜ！」

「へ…やれるもんならやってみやがれえ！！」

少年達はさらに飛び込んで剣と槍をぶつけ合う。

さっきよりも木刀と槍のぶつかり合う回数が増え、ひたすら責め合う。

「はああああああああああああ！！」

弥彦は先ほどとは別の様にと剣を振り続けてエリオを攻め続ける。しかも一太刀一太刀に力が込められている。

それでもエリオも対抗するかにように『ストラーダ』を振り回す。

（さっきより力が込められているのが感じる…コレが彼の本気！それでも！！）

「僕もそう簡単に負けるわけには行かない！！」

とエリオが弥彦に向けて槍を突き刺すが…

「みよつじなせむじりゅう 明神活心流 わざのかえし 技之返し つかがえし 柄返！！」

今度はその攻撃を柄ではじき返し、その衝撃でエリオはふき飛ばされる。

「！？」

予想外の返し技に驚くエリオだが、中に浮いた体を綺麗に陸に着地する。

それを突く様にと弥彦が凄まじい速さで迫ってきて、その竹刀で太刀を浴びせようとする。

「ぐう！！」

パシーン！！

しかしエリオは槍の柄でその太刀を防ぐ。
だが…

「何のお！！」

弥彦が体を高速一回転させた瞬間、

ドカア！！

「ぐああ！！」

その回転力を加えた柄尻での攻撃をエリオの顔面に直撃させる。
その攻撃を受けたエリオは吹き飛ばされて倒れる。

『『エリイ（エリオ）！！』』

これには思わず神楽と月詠も驚いて叫びだす。
まさかここに来て弥彦の本領発揮は予想外だった。

「よっしゃ、弥彦のヤローやるじゃねえか！！」

「ああ、弥彦の言つとおり…明神活神流は神谷活心流を上回るやもしれぬ！！」

勝機が見えたことに左之助と剣心も期待が高まる。

「神谷活心流は、相手を殺すのではなく制することを極意とし、真剣ではなく木刀や竹刀を用いて戦い、刀身を一切利用せず柄で打撃を与える技も存在する特殊剣術の一種。だからもし刀身が折れたとしても、柄だけでも相手と戦える事が可能な流派」

と剣心が説明する中で、弥彦がひたすら竹刀を振り続けてエリオを押ししている。

「だがそれはあくまで一刀流剣士との戦いでの話…もし相手が二刀流や体術に優れていれば神谷活心流の強さは発揮せず、むしろ柄による奥義は無力当然。エリオ殿はそれを見切ったからこそ神谷活心流を打ち破ったのでござる」

「確かになあ、あの餓鬼の様に獲物を振るい体術にも長けている奴と二刀流剣士使いの奴とあ弥彦も戦った事ねえから神谷活心流は無力当然って訳か」

「それだけじゃない。柄による攻撃は本来は隠し技の1つでもあり、最大の弱点はその短さにある。如何に相手と零距离に近く接近しても距離が離れるだけで柄による攻撃はしづらい…だから神谷活心流の奥義の極意は実践に使われる事は滅多にない…だが」

反撃するようとエリオが槍を大きく横一線に振るう。

しかし弥彦が柄でその攻撃を防ぎ、さらにはそのまま前に進み刀身でエリオの左肩に面を喰らわせる。

エリオはその痛さに苦痛を感じた。

「スバル殿によって編み出された弥彦の新剣術、明神活心流は刀身と柄をも同時に扱う…つまり1つの剣を2つの武器に分裂するよう使い分ける事で攻めも護りの連携を可能にする」

エリオは蹴りですが、弥彦はそれを左手で受け止める。多少痛がるが、直撃するよりはマシのようである。

そして薙ぎ払うようにエリオの足を手放して攻めだして突きを放つ。だがエリオはそれを危機一髪に交わす。

「しかも白刃取りも特化した技もあり、あれで相手の動きを止めて一気に攻撃する手もある…弥彦の場合はスリとしての才能があるゆえそれを利用し、相手の攻撃をも受け止められるだけじゃなく獲物を奪い取る事も可能でござる」

「そして上手くすりゃそれで倍返しも出来るって訳か…刀身には刀身よりの技、柄には柄よりの技、白刃取りは白刃取り…て言う1つ1つに分ける神谷活心流に対して明神活心流はその3つを合わせる進化した剣術って事だな」

「ああ、それにて明神活心流は三つの力を合わせるによりさまざまな攻撃対策を備える」

「はあああああああああああああ！！」

掛け声を叫び、弥彦は飛翔して『見様見真似技 龍槌閃』を炸裂する。

エリオは槍で防ごうとする。

だが、それは単なる罠であり…何とそこから柄による攻撃で技とエリオの槍に当てる。

エリオは槍を手放さなかったが、槍を持っていた両手が思わず下に下がってしまう。

その隙に、着地した弥彦はそのままエリオの顎に向けて竹刀での渾身の突きを炸裂し、エリオは宙に吹き飛ばされる。

「無限の攻撃方法、それを弥彦は身に付けたのでござる」

そしてエリオは地面に強く叩きつけられ倒れる。

さつきまでの弥彦の動きが別人のように違い、明神活心流は神谷活心流をも上回っている証拠である。

「紛うことなき進化した剣術。戦いだけでなく相手をも制覇している弥彦の新たな新剣術」

剣心ですら認めるほどの進化した剣術、明神活心流。

相手を制覇する事によって戦いをさらに制覇する。

弥彦の強さは以前とは比べ物にならないほどに強くなっている。

それでもエリオは平気で起き上がる。

「まじかよ、まだ立ち上がれるなんて左之助並みの頑丈さか？」

「まあ体をも丈夫にさせる訓練を受けましたからね」

伊達にエリオは神楽と月詠の訓練を受けている訳ではない。槍術と体術だけじゃなく、体をも丈夫にさせる訓練も受けてきたのだ。

「おお、私の訓練の効果も出てきたアル!!」

「ほう…一体どんな訓練をさせたんじゃ？」

月詠は神楽は一体エリオにどんな訓練を受けさせたのかを聞きだす。神楽は自信たっぷりと答えだす。

「ふっふっふ、良く聞いたネツツキー。例えるなら…」

「エリイイイ!!」

ドカアアアアアアア!

「ハイイイイイイイイイ!!」

と思いつき殴って痛みを耐えられる訓練もしたし……

「いや…まあ確かにそれはありかも知れぬが」

「エリイイイイ!!」

バコオオオオオン!!

「ハイイイイイイイイイイイ!!」

と愛傘で思いつき吹き飛ばして丈夫な体を作らせる訓練もさせたし……

「……良く死なせなかったな」

神楽の無邪気な台詞に、月詠は青ざめて言いだす。
確かに神楽から見ても、魔導士としての強さを高める修行だけじゃ
エリオは強くなれない。

だからこそ、神楽は本当の強さを身に付けさせる為にと無茶でも急
激にエリオを強くさせることが出来た。

「今度は、こっちの番だぁぁ!!！」

とエリオは槍から超高速の連続突き…いや、スバルの神速抜刀術に
匹敵する神速の連続突きを炸裂させる。

「なぁ!!！」

さつきまでとは比べ物にならない速さに弥彦は驚き、竹刀で刀身と
柄を分けて、さらには左手で白刃取りは出来なくても受け流し続け
る。

それでも体中に少しずつ当たって完全に防ぎきれない。

「速エ、速すぎて槍が何本にも見えやがる!!！」

「おそらく、エリオ殿も本気を出したようでごさる…これは勝負の
行方がまだ分からなくなってきたぞ」

左之助と剣心も、エリオの隠された力に驚かされた。

しかし弥彦は冷静にそれに対処して冷静に防ぎきる。

「一気にカタを突けようとしている様だけだよオ、そんな事をして
も俺には致命的な一撃を与えられねえしお前も体力の消耗が激しく
なるだけだぜ？」

「それでも僕は一点に力を振り絞って君にぶつけるだけだ!!！」

渾身の突きを炸裂するも、弥彦は竹刀を大きく振ってはじき返す。

「ゆえに、お前は明神活心流の真髓が戦いを制する事であると完全に誤解している!!」

「誤解!？」

明神活心流の真髓は戦いを制するだけじゃないと言いだす。

左之助や剣心はもちろん、神楽も月詠も驚きを隠しきれない。

「さつき俺がスバルさんから技の編み出し方や侍として最も大切な事を教わったって言ったな!! 技はさつき見たとおり1つの剣を刀身、柄を2つの武器として扱い白刃取りをも合わせた俺なりの技を生み出す事、だが最も大切な事は技や力以上に最も強く侍にとつても最も大切な事だ!!」

と弥彦は勢いに乗って竹刀を振り続ける。

エリオは呆然一方で、体術による拳を炸裂しても弥彦は白刃取りのように左手でその拳を握る。

コレにはエリオも驚きを隠せなかった。

「明神活心流の極意は真剣での殺し合いでもなく、ましてや神谷活心流のように戦いを制するだけじゃねえ……敵から弱き者や仲間だけじゃなく己が大切なものを護るために戦い、たとえ自分より強い相手でも己が弱くても諦めずに前に進む!!その真髓を気づかせたのはスバルさんがある一言を俺に言ってくれた事だ!!」

「弥彦君、自分が道場で置いてけぼりにされてても剣の稽古を励んでいたんだよね」

「……はい、そうですが……でも、今思うと俺って何か惨めな感じがしますよ……まだガキとは言え、結局は自分じゃ力不足だって思い知らされて」

しかしそれは薫によって強制的に自分だけ留守を任され共に連れて行ってくれなかったからである。

弥彦はそれは自分じゃ戦いに参加するほどの強さを持っていない未熟ぶりを思い知らされたからである。

「……それは立派だと思うよ」

「え？」

「私だって、小さい頃は弱虫で力も何にもないただの少女だったからね」

と気楽そうに言いだすスバル。

しかし弥彦から見れば、スバルがかつては弱虫である事が信じられなかった。

自分から見てもスバルは間違いなく最強レベルの侍の1人だと見えるからだ。

「4年前、ミッドチルダ臨海第8空港で大火災が発生して……私はそこに巻き込まれてしまったんだ。苦しくても家族を助けたいと言う気持ちで探してたんだけど、危ないところに銀さんに助けられたんだ」

とスバルは銀時の最初の出会いを話します。

弥彦は意外なスバルの過去を聞きだす。

「それでも私は、自分の力不足を悔やみ…思わず泣いちゃった。だけど銀さんはそんな私に言ってくれた」

『泣きながらもいい。ボロボロでみつともなくても、諦めねエで進み続けたんだ。恥じる事なんてねーぜ』

その言葉は今でもスバルの中で刻まれていて、彼女が侍としての強さが芽生えさせた魔法よりも強い魔法の言葉でもある。

だからこそスバルは、銀時と同じく弥彦にも伝える。

「だから……惨めでもいい。今は弱くて力不足でも、自分の信念を貫き通して強くなろうと努力し続けたんだね。恥じる事はないよ」

とスバルは弥彦に近づき、彼の右手を両手で優しく包み込む。弥彦は顔を真っ赤になるが、スバルは優しい笑顔で言いだす。

「この手に出来ている子供とは思えないボロボロとなった竹刀ダコが、弥彦君が強くなっている証……だから自分は確実に強くなっている事に、胸を張れば良いよ」

「スバルさん…」

少年の中に浮かび上がる特別な感情。

自分の努力を、強くなる気持ちを理解してくれたスバルに対しての強い感謝。

思わず涙が出そうぐらい、弥彦はスバルに強い感謝を抱く。

「弥彦君、本当の侍は自分の大切なものを護れる強さを持っていると私は思うけど……弥彦君にもあるはずだよ、命がけでも絶対に護りたい大切なものが」

「俺の…大切なもの……」

「だから俺は決意した！！たとえ今は他人にどんだけ未熟とも思われようとも弱くて便りにならないと思われようとも…俺は俺の剣士としての信念を貫きとおして自分の大切なものを護る侍になる！！」

ばしいん！！

「ぐう！！」

さらに力を込められた竹刀での太刀筋。

エリオは思わずその激痛に苦しむ。

「今、ここで俺が負けちまったら剣心も左之助まで巻き込んで黒神の野郎の罰ゲームの餌食になってしまう！！」

『！？』

「だから俺はこの戦いに勝つ為にお前を倒すんじゃなく、俺の大切な仲間を護る為にお前を倒す！！」

バシィン！　　バシィン！！

さらに剣速も速くなる上、先ほどから弥彦の剣がエリオに当たっている。

しかもさらに勢いが増してエリオは反撃をする暇も与えない。

「大切なものを護る強さは、剣術による技よりも魔法と言う妖術よりもはるかに強く…人の肉体的強さも精神の強さも拡大にする！！」
「う………てえあああああ！！」

弥彦の竹刀を受け続けてもエリオは強引に槍を強引に右斜め下に振るう。

それでも弥彦は竹刀を左手に逆手で持ち、何故か鞘を持つような形になっている。

「己の大切なものを護れない事は、たとえどんな敵を多く倒しても負けになってしまう事と同じ！！だから俺は今ほどんなに弱く未熟でも、大切なものを護る為に強くなる！！敵が魔導士やロストロギアアッて言うおつかねえ奴でも、そいつ等から俺の大切なものを奪わせねえ為に！！」

バシィン！！

「ぐはあ！！」

「見様見真似、蒼鏡そうきょう抜刀はつたう！！」

何と、驚くべき事に弥彦はスバルの剣技を放った。

竹刀での抜刀術でエリオの槍を防ぎ、その刹那の瞬間で体を神速に回転させてそのまま神速の一閃でエリオの左脇を叩く。

「ええ、今のつてスツチーの必殺技アル!?」
「馬鹿な、何故奴がスバルの蒼刀術を…」

コレには神楽と月詠もありえないと驚きだした。
しかも…

「見様見真似、龍巢閃!!」

今度は連続しない素振りを炸裂する。

剣心の飛天御剣流の必殺剣の一種である。

剣心ほどじゃないが、高速剣による連続攻撃はエリオにヒットする。

「今度は拙者の技を!?!」

「見通し稽古つて奴か…俺達の世界でも数多くの強豪同士の戦いを見て、そしてこの世界でも数多くの強者達の戦いを見続け、通常の剣の稽古を加えて通常の2、3倍の速さで成長させてやがる…けどまさか剣心だけじゃなくあのスバルつて嬢ちゃんの技まで真似するとはあ」

これぞ弥彦のもう1つの力である見様見真似。

他人の技の一部を己が力に変えて会得する。

「他人からみりゃ単なるモノマネかもしれないけど、それでもこれが俺なりの強くなる事の1つだ。明神活心流はたとえ相手の強さを真似事してでも大切なものを護る為ならどんな形であつても強くなる!!」

剣心と左之助を護りたい。

それは大切な仲間であるから事、弥彦が思えて彼を強くさせる。

「はあ！！」

エリオは弥彦の強さを知りつつも、自分も負けるつもりはない為、弥彦に臆せず先ほどのような神速の突きを炸裂させる。

一方の弥彦も竹刀を強く握りだし、奥義を炸裂する。

「みょうじんざひこりゅう明神活心流 おくぎのう奥義之受け流しなが」

弥彦は刀身を円を描くような形でエリオの神速突きを受け流す。そして受け流して体当たりするようにエリオ自身に接近する。

エリオは素早く蹴り返そうとするが弥彦の攻撃の方が速かった。

「りゅうすい流水！！」

ドカアア！！

「ふあああ！？」

そのまま竹刀の柄先をエリオの腹の部分に直撃させる。

エリオは余りの激痛に苦しみだし、ゆっくりと弥彦から離れて左腕で腹を押さえる。

形は奥義の攻め 刃渡りと一緒である。

しかし刃渡りは相手の攻撃を止めてそのまま白刃取りをしたまま相手に接近して攻撃する技。

だが流水は相手の攻撃を受け流し、接近してくる相手の動きを利用して自分からも接近して相手に攻撃する。

これにより、その威力は刃渡りの1・5倍の威力を誇る。

「笑いたい奴は笑いたきゃ良いし、おろかと思われてもかまわねえ

「！！だが命がけの戦場じゃ綺麗なだけの剣術のこだわりだけじゃ護れるものも護りやしねえ！！」

それがスバルから教えられた大切なものを護る事の大切さ。

たとえ華麗なる剣技ですら、命がけの勝負じゃその剣術のこだわりは通用しない事もある。

弥彦の場合はたとえ蒼刀術そうとうじゆつや飛天御剣流とは違い、明神活心流が地味だろうがモノマネした剣技だろうが、大切なものを護る為に強くなる事が最優先である。

「それが今の俺の力……大切なものを護る為なら、たとえ神谷活心流を破門されようともかまいやしねえ！！」

神谷活心流を捨てる事になっても、弥彦は護る強さを求める。

護る事はすなわち、どんな相手でも屈しない屈強な魂を得られるからだ。

そのまま苦しんでいるエリオに近づき、

「コレが俺が己の未熟さを思い知ってまで努力して編み出した、明神活心流うじんかつしんりゅうの力だあ！！」

バシイン！！

渾身の一太刀をエリオに食らわせ止めを刺す弥彦。

彼の強さは魔導ランクで言えば間違いないくA Aランクである。

「うっしやー！！ スゲエぜ弥彦、アイツマジで強くなってやがる

！！ 行ける、この勝負は行けるぜ剣心！！」

「ああ……」

と予想外の成長をした弥彦の実力に、マジで大喜びする左之助。この調子なら、弥彦の勝利は間違いなしだと確信できる。しかし剣心は何やら喜びとは別の感情を表している。

「……剣心、おめエの考えている事は良く分かってるぜ……けどよお」

一方の左之助は、剣心がどう言う考えをしているのか分かっている。だがそれでも今はそれを考えている時ではないと弥彦に向けて指を刺す。

「弥彦は今、俺達を護る為に戦っている……ここはアイツの背中をただ見守ってやるこそが弥彦にとって為になるんじゃないかねエのか？」
「……ああ、そうでござるな」

と左之助の言うとおり、剣心は弥彦を見守る事にした。彼は今、自分達を罰ゲームの脅威から護る為に戦っている。それを今信じないでどうする。

そしてエリオは顔中に血があふれ出ても倒れず、それどころが眼が覚めたように覚悟を決めていた。

「やはり本気を発揮するには槍一本じゃ無理があるか……神楽さん、あれを！」

「よっしゃあ、受け取るヨロシー！」

と、神楽は何処からか布に包まれた棒をエリオに投げつける。エリオはそれを左手でキャッチし、布を取り出す。

その布から現れたのは……なんと十字架の槍、十文字槍であった。

「槍がもう1本!? ま……まさか?」

と弥彦はありえないと言っただけに、どうして二本目の槍を手にしたのか予想する。

エリオは右手に『ストラダ』、左手に十文字槍を強く握って、振り回して舞い上がって構えだす。

『に……二槍流!?!』

二本の槍を同時に使う事には戦っている弥彦はもちろん、剣心も左之助もそんな流派を使う相手は見た事がない。

槍は剣より長く攻撃範囲も広いが、長すぎて両手持ちじゃないと扱いはづらい代物。

それを2本同時に使う事は絶対にありえない。

一見単なるデタラメかもしれないが、弥彦はそれは単なるデタラメには思えなかった。

「……じゃあ、行くよ」

と、エリオは『ストラダ』による神速突きを炸裂する、弥彦はそれを竹刀で受け流す。

もう一度奥義で返り討ちにする為に……だが

「はあ!!!」

「!?!」

突きを放った後、素早くエリオが十文字槍を左横一線に薙ぎ払うよ

うに振るう。

コレを弥彦は慌てて交わすが、完全に避けられずに胸元の服が破れた。

「ちい！！」

「まだまだあ！！」

とエリオは豪快に二槍を振り回し、その連続攻撃を弥彦に繰り返す。弥彦は刀身と竹刀、そして白刃取りでの受け流しで攻撃を防ぎ続ける。

だが槍がもう1本増えたせいか、攻撃する隙がない。

(速え、しかも槍が増えたから攻撃回数が増えて反撃する暇もねえ！！！)

攻撃こそ最大の防御。

エリオの二槍流は攻撃連携が得意とし、攻めて攻めて相手に反撃を与える暇も与えない。

「まさかこの目で二槍使いの戦いを見るとは思いもよらなかった…しかし、槍は攻撃範囲が広い分、両手を使わなければ扱いづらく、とても二刀流のように二槍を使う事は不可能でござる…」

何か秘密があるのかとエリオの動きを見つめる。

そしてエリオが下から縦一閃に十文字槍を振るうと大きく左半身を動かし、『ストラダー』を右斜め一閃に振ると右半身が前に動く。

「もしま、あの少年左手に持っている槍を振るうと左半身を、右手に持っている槍を振るうと右半身を前に出す…そうする事で、例えば片手でも槍を大きく振るうことが可能になる」

「だがそいつは同時に、大きな隙を作ってしまう事になる…攻撃してきた時を突けば良いって訳だ」

と剣心と左之助はそう思ってる中、弥彦もすでにエリオの二槍の動きを把握した。

(読めたぜ、アイツは右槍なら右半身を、左槍なら左半身を前に出す癖がある…いくら攻撃が多くなろうとも隙さえ見つけりゃ…)

とエリオがまた『ストラダ』を突きだす。

しかし弥彦は回転してエリオの右側に移動し、竹刀を構えて突撃する。

「攻撃した側の方向の後ろを突けば良…」

どかあ!!

とそのまま竹刀を振ろうとするが…何故かエリオの背後の後ろから十文字槍の柄の先が弥彦の腹に直撃した。

「がはあっ!?!」

そして弥彦は逆一回転して転びだしながらも立ち上がる。

今の攻撃の際は囷であった。

「君なら、二槍の左右攻撃での動きの隙を見切れると思ったよ…でもそれは僕自身が分かっている事だし、そこを突かれるのを予想して振り返りにする対策も用意してあるんだよ」

とエリオは言いだす。

つまり今の攻撃はわざと隙を見せて、攻撃を誘う罠であった。
弥彦の柄による返し技のように、エリオも二槍による罠技で槍の柄
先で返し討ちにした。

「なるほど、あえて隙を見せて誘いだしそこを逆に突くって戦法じ
やな……」

「攻撃が最大の防御と言えるなら、防御も最大の攻撃ネ……」

感心する月詠と神楽。

二槍こそがエリオの本気であり、今の彼の力を発揮する戦法である。

「それに……」

突如、エリオは二槍による神速連続突きを炸裂した。

さっきまでとはさらに威力も速さも違い、弥彦は受け流しが間に合
えず攻撃に当たりまくる。

「ぐあああああああああああ！！」

「別に、左右に半身を前に出さなくても攻撃は可能ですよ」

と言い終えた瞬間に、エリオは『ストラダー』と十文字槍を同時に
突きだす。

一気にトドメを刺そうとするが、弥彦は眼を大きく開き、素早く『
ストラダー』には柄ではじき返し、十文字槍には刀身ではじき返す。

「！？」

「やってくれたじゃねえか……だけどそう簡単にやられてたまるか
よオー！！」

弥彦は気迫を込めてエリオに突進する。

エリオも二槍の槍を振りまくって対抗する。

弥彦は竹刀による胴打ちを炸裂するが十文字槍で防ぐエリオ。そこで『ストラダ』で左下斜めに振るうエリオだが、弥彦は左手の白刃取りで受け止める。

追加としてエリオは蹴りを炸裂するが、弥彦は『ストラダ』を手放して交わしだすがエリオが追加として十文字槍の突きを炸裂する。弥彦は竹刀の柄でそれをはじき返す。

弥彦ははじいた刹那の瞬間に飛び込んで『見様見真似技 龍槌閃』を炸裂する。

エリオは強力な一撃を喰らい、一瞬めまいをしたがそれでも気迫で持ちこたえて十文字槍を横一線に不利、弥彦の左脇がその十文字槍の柄にめり込んでしまう。

そして強引に薙ぎ払って弥彦を吹き飛ばす。だがエリオも先ほどの一撃が効いてすぐに倒れ掛かり、二槍を棒代わりとして強引に立ちだす。

「おお、これは大人顔負けの名勝負ネ！！ドンドン行けえエリオ！！」

神楽も見ていて興奮して叫びだす。

弥彦も弥彦だが、エリオも白熱した戦いに燃えてて普段の実力以上の力を発揮している。

「しかし……まさかエリオが二槍を使うとは思ってもよらなかった。神楽……一体どんな訓練をしたんじゃ？」

と興味深く聞きだす月詠。

神楽はエリオの二槍流を会得させたのかを言いだす。

「いやあ、ゲームも見通し稽古って感じで見れば立派な訓練になるアルヨ」

「いや稽古じゃないじゃろそれ…しかもそれで強くなれるなんて信じられぬわ!」

一体どうしてゲームをしただけで強く慣れたのかわけも分からず青ざめる月詠。

だが実際にエリオは二槍を使いこなしている。もう謎だらけであった。

弥彦もエリオもボロボロになっており、立てるのがやっとになってきた。

「…へへ、やるじゃねえか…やっぱその二槍流は本気の証って訳か」
「そういう君も凄いよ…昨日完成したとは思えない完成度の高い剣術流派。おそらく本当の強さは技ではなく、大切なものを護ろうとするその真髄」

弥彦もエリオも互いに実力を認め合い、少年同士笑いあう。
エリオは弥彦を見て、思ったことを言いだす。

「君は自分はまだ未熟で弱いと言っているけど、もうそんな事を思わなくてもいいよ」

「え?」

「たとえ仲間から認められなくても、他人から弱いと見られても…
…少なくとも君の強さを認めている人はここにいる事は知っておくと良いよ」

エリオは弥彦の明神活心流だけじゃなく、大切なものを護る為に戦う弥彦自身の強さを認める。

「だから、改めて君に名乗りだすよ…機動六課のフォワード万事屋
ライトニング エリオ・エリオ・モンディアル」

「……神谷活心流門下…いや、明神活心流 明神弥彦…！」

お互いに名乗りだし、その名をしつかりと覚える。

そして武器を強く握り、最後の力を振り絞る。

「君と戦えた事を得したと思うよ、弥彦」

「俺もさ……だけど、そろそろ決着をつけなきゃな！ 俺は2人を
護る為にも勝たなきゃならねえ」

「僕も同じだよ」

コレが最後の一撃となる。

少年同士の戦いも幕が閉じようとし、制覇するのは少年剣士か少年
槍士か。

「……エリイ」

「エリオ…」

「弥彦…」

「……」

神楽、月詠、左之助、剣心も2人の戦いを見守る事しかできない。

しばらく空気が固まる中で、何かの瓦礫が地面に落ちた瞬間

『はああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ』

気迫に叫び、渾身の力を込めて少年等は攻めだす。

と言つより、それ以前にどうしてギンガがこのような妨害を始めたのか訳も分からなかった。

「ギンガ!? どうしてギンガがいるアルカ!?」

「と言つより何か暴走気味じゃが…やばくないか!?」

ギンガの登場と暴走状態に神楽と月詠も流石に青ざめる。とても嫌な予感しかしないからだ。

「らぶりい〜らぶりい〜フェイトしゃま〜、可愛いフェイトは渡さないフェイトしゃま〜」

と変な歌を歌いながらも、ギンガは何処からか出したのか両手に『シヤマパイ』を取り出す。

『『え?』』

「好き好き大好きフェイトしゃま〜、愛しい愛しいフェイトしゃまアー!!!」

ベチヤ x 2

『『ぎゃあああああああああああああああああああ!』』

と、ギンガが暴走して無数のシャマパイを投げつけ、顔面にヒットした神楽、月詠の2人はシャマパイのこの世とは思えない不味さに断末魔の叫びを放つ。
そして白眼となって気絶して倒れる。
もはや戦闘続行不可能である。

「おっぱいモミモミフェイトしゃま、エロくて可愛いフェイトしゃまああーーーー！！！」

ドカアアアアン！！

と、ギンガは天井に大きな穴を開けるほどの勢いで大ジャンプしてこの場を去った。
よほど、フェイトに会えないのが彼女にとって発病を起すほど苦しい屈辱であった。

「え…エリオオオ！　大丈夫か、しっかりしろオオオオオ！！」

我に返った弥彦は、慌ててエリオに近づく。

しかしエリオはギンガの奇襲の一撃でもう起き上がれる気力も失った

「……いい勝負…だったよ…ね……」

とガクリと気絶して意識を失ったエリオ。

「エリオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

と、弥彦は大きく叫びだす。

結果的には自分は戦いを制覇して剣心と左之助を護った。しかしこんな結果で終わるはずが無かった。

神楽 月詠 エリオ・モンディアル リタイア

と、左之助と剣心はゆっくりと彼に近づく。

「…ま…まあ、結果はどうであれ…オメエの成長を見届けられたしよお…俺はコレで良いと思うぜ？」

苦笑しながらも精一杯褒める左之助。

結果はどうであれ、弥彦が強くなった事は確かである。

まだ完成したばかりとはいえ、明神活心流の強さはしかとこの眼で見させてもらった。

「それによお、お前の成長も努力の成果も俺達がこの眼で見届けさせたし…何より俺達はオメエに謝らなきゃならねえ事がある」

「はあ、謝る事って一体…」

どうして左之助達が自分に謝罪しなきゃならないのか訳分からない。弥彦。

すると剣心が弥彦の前に移動し、突如頭を下げる。

「すまぬ、弥彦!！」

「いい、ど・ど・どしたんだよ急に!？」

「お主が、そんな気持ちで剣士として強くなる努力をしていた事を知らず…まだ10の齡の歳の少年としか見ておらず、弥彦をここまで苦しめていた事にまったく気づかなかった!！」

弥彦はまだ弱い人間。

しかし、弥彦は侍として自分の大切な仲間を護ろうとする為に強くなるうとしていた。

明神活心流も、自分が強くなるだけじゃなく大切なものを護れる為に編み出した新剣術。

それを剣心と左之助は、知らなかったとは言え第二章の時も薫から弥彦も連れてくるべしだと言わずに置いてけぼりにした。

仲間なのに自分達は馬鹿やってしまったと反省してる。

「べ…別に良いって! 剣心も左之助もそんなつもりじゃなかったんだろ!! ……それに逆に言えば、それがきっかけで俺は本当の強さをスバルさんから教えられたんだ」

「本物の侍は、自分の大切なものを護る強さを持っていると…確かにそうかもな」

左之助にとつても、仲間としてスバルには感謝すべきと考える。

彼女は、単に弥彦の存在が前の自分と一緒に見えたから、弥彦に本当の侍の強さとは何なのかを伝えただけである。

しかし結果的に、弥彦は強くなり剣心の頼もしい仲間と成長した。

「弥彦…お主の成長も明神活心流の強さも認めるでござる。だがそれは神谷活心流の誇りを汚す事になる」

「な、何でだよ!! 確かに明神活心流は神谷活心流の進化した剣術

「ただ…別に見くびってはいねえし、むしろ神谷活心流の極意もちゃんと…」

「それでも…嬢ちゃんの道場剣術流派の面子も考えりゃそいつはやべえって話だ」

弥彦にとっては納得できないが、剣心と左之助もコレばかりは神谷活心流の名誉を汚すかもしれないと言いだす。

「弥彦、お主は神谷活心流の数少ない門下でもあり最も成長が期待されている。そんなお主が神谷活心流を捨てて独自に進化させた明神活心流の剣術流派として戦う事になれば…それこそ薫殿が護り続けた剣術道場も無駄になってしまうでござる」

剣心だつて弥彦の明神活心流は認めている。

神谷活心流を上回る護る為の活心剣術。

しかし弥彦が神谷活心流を捨てるとなれば、最悪の場合に神谷活心流は潰れてしまう。

「…進化させてまで拙者達と共に戦いたいののは分かる…だがもし仲間を護りたいなら薫殿の神谷活心流の名誉も護らなければならぬ」

「……」

認められても弥彦にとって痛い台詞である。

左之助はただその光景を見届けるだけであつた。

「けど、明神活心流の技と真髄は拙者も感服したでござる」

「剣心？」

さつきまでの真剣な表情とは違い、けろっと笑いだす剣心。

「それにスバル殿の言うとおり、神谷活心流はこのミッドチルダの舞台で力を発揮するには不十分かもしれぬ。刀身と柄を同時に扱い、しかも白刃取りにも特化し、3つの力を1つに合わせる明神活心流はまさに誇り高い活心剣と言っても言い過ぎる」

「もし嬢ちゃんがそれでも駄目って言うなら、俺と剣心が説教してやるからよお。師匠ってのは時々弟子の成長も素直に認めなきゃならねえしな」

それはすなわち、剣心も左之助も弥彦の進化させた剣術には賛成する。

2人は神谷活心流の強さも忘れるなど言うが、明神活心流は使うなとは言わない。

「第3章で、その明神活心流は頼もしい戦力になる。だから弥彦殿、神谷活心流も明神活心流と同じぐらいに強くして欲しい」

「ああ、そうとなりやこの大会が終わったらもっと強くなる為に剣の稽古の続きだあ！！」

弥彦は今、神谷活心流も強くさせる事を改めて誓う。

自分だけの剣術流派と師匠でもあり仲間でもある薫の剣術流派を同時に使いこなして強くすれば、しんの強さにまた近づき、大切なものを護れる侍になれる。

その為に彼はもっと努力する事を決心する。

「そんな時にあ、頼りにしてっからな弥彦」

左之助も弥彦の成長に嬉しく思い、頭を豪快に撫でる。

弥彦は痛がって怒鳴りますが、そこには何やら嬉しそうな表情が見える。

「ぢくしょー!!」

「ギンガアアアアア、呪い殺してやるウウウウウウ!!」

絶望になった事で、ノーヴェもリインフォースもギンガに恨みだし泣きだす。

だがどんなに泣いても、失格は取り消せない。

《と言う訳で、お疲れ様でしたあゝ》

ベチヤ×2

『ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああ!!』

と、空から落ちてきたシヤマパイを喰らって、2人は断末魔の叫びを出して気絶する。

その不味さはこの世とは思えず、2人はしばらく眼が覚まさない。

リインフォース ノーヴェ リタイア

現在の生き残り

『リリカル銀魂』 坂田銀時 フェイト・テストロツサ スバル・
ナカジマ ティアナ・S・ランスター シグナム アルフ

『オタクガンダム』 ウツソ・エヴィン こなた かがみ ネプテ
イーヌ

『キングドラゴン』 伊達政宗 華琳 春蘭 星 北郷零斗

『狂乱』 桂小太郎 エリザベス 八神はやて ヴィータ 山崎退

『クイーン』 全員リタイア

『ファイター』 徳川家康 八神庵 秘村剣心 相楽左之助 明神
弥彦

銀八

「教えて」

生徒全員

『『銀八先生!!!』』

銀八

「と言う訳で銀八先生コーナー始まるよお……今回のアシスタントは神谷活心流を踏み台に大活躍したこの人」

弥彦

「て踏み台かよ……まあいつか。支配者の小説『リリカル剣魂スペシヤル 侍たちと魔法少女』のゲストキャラの明神弥彦だ……よろしく」

銀八

「彼は黒神のように腹黒い事は言わないので安心してくださあい」

弥彦

「お前等の作者、ありやど言う性格してんだ？」

と弥彦も黒神の腹黒さは底知れぬ奥深さを感じていた。

弥彦

「んじゃ、さっそく質問いこうぜ」

銀八

「おう、まずはこの人ペンネーム『真王』さん『真王』質問行こう
『私の新キャラ創造力をどう思いますか？』

『黒神さんはホラー映画見た事ありますか？』

『ネプテューヌ又達女神組（候補生のネプギア達も入れて）をどう思いますか？』、ずばり答えます。オリジナリティがあつて、真王さんの個性がある創造力があります」

弥彦

「ああ、オリジナリティさは黒神以上と言っても良いぜ……でえ黒神は」

黒神

「無理無理無理無理…（以下略分）」

銀八

「はい、黒神は見たことがない以前に怖くて見れないようです。そして3つ目は……もう最強じゃねえって思っわ」

弥彦

「と言う訳で『真王』さん、これから自分の思った通りに頑張ってください。次はペンネーム『夜叉龍』さん」
カイト「さて、質問。」

シグナムに質問。

俺はこっちであなたと模擬戦をやるがその際そっちはレヴァンティンを展開しているが俺は素手でやっている。

で、いつも引き分けに終わっているが……俺と戦ってみたい？」

レン「では僕。」

AI搭載のデバイス持ちの皆さんに質問。

僕は神機に宿った人格が具現化したような存在ですがもしデバイスの人格が僕みたいに具現化したらどんな外見だと思いますか？」

「……ずばり、答えをどうぞ！」

シグナム

「面白い、いつか是非とも手合わせしたい！！」

とシグナムは闘志を燃やして笑いだす。

シグナムのバトルマニアをみて弥彦は啞然とする。

弥彦

「うわあ、噂以上だなこりゃ…でもつーつの質問の答えは？」

銀八

「これはスバルの愛刀のティルヴィングエアとペンドラゴブレイドに代わりにお答えさせてもらつとすつか」

スバル

「はい…」

とスバルは『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』を出して、2つのデバイスに答えさせる。

ティルヴィングエア

《It is interesting, but cannot answer because I did not think particularly. (それは興味深いですが、別に考えた事は無いのでお答えできません。)》

ペンドラゴブレイド

《Probably I will become the figure of the rouge knight who attached the armor of the dragon really (私はおそらく竜の鎧を身につけた紅騎士の姿になるでしょう)》

伝説のデバイスも素直に答えて、銀八と弥彦も頷く。

銀八

「と言う訳で『夜叉龍』さん、廊下にたつてなさい。んで次イ、ペンネーム『月光閃火』さん」

1. ヴィータに質問：いくら出番が欲しいからと言って、ヴァイスを伸したのは少々やり過ぎだな…。

という訳で、ヴィータ：瞬足肩車コースター確定だ。（そう言いながら、ヴィータを肩車して覚醒リガネーションで人狼姿になったあと…目にも止まらぬ速さで次元世界中を駆け巡る）

ハハハ：（滝汗）とりあえず、後で酔い覚ましの薬を用意しとくよ…。次は俺からだ。

2. ヴァイスに質問：ヴィータにキレた時のテルミ化、結構面白かったぜ？でよ…今度はエフェクツ的にテルミの力を体現してみてくださいないか？

『…えー、ヴィータの答えはと言つと…。』

ヴィータ

《ぎゃあああああああああああああああああああああああああああ
！！！！》

と、モニターでヴィータが余りの速さに悲鳴を上げているのが聞こえた。

弥彦

「ってこれ思いつきり質問じゃねえよ！！！」

銀八

「察してやれ弥彦：銀八先生コーナーじゃこれが日常な質問なもんだしよ……んで次はヴァイスの質問ですが：彼は今、入院中ですので質問に答える余裕はありません」

と銀八が言いだすと、しばらく重い空気に包まれる。

銀八

「と言う訳で『月光閃火』さん、ヴァイスの不幸をこれからも期待して待つてください」

弥彦

「他人の不幸を期待しろってどう言う言い方なんだよ！！」

いくらなんでもそれはないと弥彦は青ざめて叫びだす。
そんな弥彦を無視して質問を続ける銀八。

銀八

「次はペンネーム『Minosawa』さん」

テリー

「OK！ではまず銀時から：『某番組でもち米の上にこしあんをたつぷり乗った県民料理がでてきました。』

食べたいですか？」

Minosawa

「次は私から：エリオに質問、『KOFでは不知火舞やユリ・サカザキ、キングといった年上で美女達がたくさんいます：好みはいるかい？』」

テリー

「とんでもない質問してるよ！この人！？最後は…キヤロに質問…」
『今、思春期のエリオ君が美女・美少女（月詠・神楽を含めて）に囲まれています。君なら次のうちどれ選ぶ？』

1 ○ぐらしの鉈

2 チェーンソー

3 フレディ愛用の鉄爪

『…こしあんをたっぷり料理食いてえ！！』

弥彦

「いや、これ銀時よりの質問だろ！！…んで銀時の答えは…」

銀時

「メツチャ食いてえんだけどオオオオオ！！」

と銀時も即答する。

弥彦はさすが甘党だと青ざめて知る。

エリオ

「…………え…えっとう…そのう…／／／」

ともじもじと顔を真っ赤になるエリオ。

たくさんいすぎで答える余裕は無いようだ。

ちなみに最後の質問は…

キヤロ

「当然、チェーンソーである害虫共を切り刻みじゃあああああああああああああああ！！！！」

と化して2つの漆黒の『雷切』を振り回してヘドロボ軍団に対抗して切りまくるキャラの姿がいた。

キャラ

《支配者アアアアア！！舐めた質問してんじゃねえええええ！！》

とモニターからキャラが叫びだす。

よほど質問に怒り出したのであろう。

そして最後の質問はと言つと…

ぎゃああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

いやああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

うわああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

嘘だああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！

チクシヨオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
おおおおおー！

死んでやるっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ
っっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ

とさまざまな泣き叫びと悲鳴が聞こえる。

弥彦は一体どうすればいいのかと考え、銀八は平然としていた。

銀八

「と言う訳で『支配者』さん、まともな答えが出来なくて申し訳ございませぬ」

弥彦

「もつやりたい放題じゃねえか…ペンネーム『ボツスン』さん『スバル』何々、質問です。スバルさん以外の銀さんLOVEの皆さんスバルさんがかなりヒロイン扱いされていますから、銀さんはスバルさんに取られますから、諦めたらどうですかとこっちのスバルさんが言っていました。どう思いますか？」

キャラ「キャラちゃん、君はジェイソンになっちゃったから、エリオ君に神楽ちゃんか月詠さんに取られますから諦めたらどうですかとこっちのキャラちゃんが言っていました。どう思いますか？」

ユーノ「ユーノ君となのはさんとフェイトさんとはやてさんとスバルさん。」

ユーノ君のイメチェンはどれがいいか選んでください。」

1 一生フェレットのままになる

2 女の子になる

3 プリニーになる

4 妖精になる

5 永遠の「次回作の主人公」になる

6 キュウベえと契約して魔法少女になり、絶望して魔女になるか
お菓子の魔女ノシャルロットに頭をマミられる。

7 魔王になる。」

「……………」

フェイト・なのは・ティアナ・シグナム・アルフ・リインフォース・
チンク・セイン・セツテ・ウインディ・デイド

「『スバル、天誅——————！！！！』」

「

と、ボツスンさん所のスバルに向けて、フェイト達は一斉に魔力砲
と特殊な波動を放つ。

相当ムカついたようだ。

キヤロ

「舐めとんのか、ごるあああああああああー!!」

キヤロも漆黒の『雷切』から漆黒の稲妻砲を放つ。

弥彦

「うわあ、おつかねえ質問じゃねえか」

銀八

「まあここじゃ当たり前な事だ…んで最後の質問は」

ユーノ

「ヂクシヨーーーーー!!!!!!!!!!」

と大泣きしてこの場を去るユーノ。
相当、自分に対する質問がいやだった様だ。

フェイト・なのは・はやて

『『当然1(や)』』

スバル

「あ…あはははは……じゃあ4で」

とフェイト、なのは、はやての3人ははっきりと答えて、スバルは苦笑して答える。

銀八

「と言う訳で『ボッスン』さん、もうすぐ砲撃が振ってくるので」
注意ください」

弥彦

「次が最後だな、ペンネーム『sibugaki』さん『ぶつちやけりアルな質問をさせて頂きます。』

最近僕が書いているギャグ以外の小説が妙にバイオレンス色の強い感じになつてるのが薄々感じられます。

それは、何故か最近バイオレンスな感じを書くのが楽しくて仕方ないのでが・・・もしかしてこれってある一種の病気ですか？

それとも『永〇豪』先生の漫画が好きすぎるが故の一種の反応でしょうか？

黒神さんとリリカル銀魂メンバー皆様のご意見をお願いします

・・・まあ気楽に答えてくれてかまいませんよ』」

銀八

「んじゃ、ここは代表として黒神、銀時、フェイト、スバルの4人に答えさせてもらいます」

黒神

「僕は、自分が面白いと思えたように書いたほうが一番面白く書けると思つよ」

銀時

「まあ、無理して相手に合わせるよりまずは自分が書きたいように書くのが一番いいんじゃないか？」

フェイト

「他人のアドバイスを聞きながら自分流に書くのは可笑しい訳じゃないよ」

スバル

「逆に言うと自分に不安を持たないほうが良いんだよ」

と4人はそれぞれ意見を言って答えだす。

銀八

「はい、と言う訳で『sibugaki』さん…廊下にたってなさい」

弥彦

「以上持ちまして、今回の『銀八先生コーナー』は終了します」

銀八

「次回もお楽しみ」

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第三百二十五訓：結末には予想外な展開が起るので、その予想を当てる事はメッ

一方、その頃ボーボボ達はと言うと

「首領パッチどこじゃあああああああああー!!」

「出てきやがれえええ、俺達が時期に殺してやるあああああああ
あああー!!」

と、今だに自分達より出番が速く来た首領パッチに怒りだしてるボ
ーボボと天の助。

「…ねえ、あの2人って私達を倒すために現れたゲスト達だよね…
だったら何で見方の首領パッチを倒そうとしてるの?」

「さあ、仲が悪いんじゃない?」

かがみは青ざめて呆れて、こなたは愉快そうに笑っている。

「首領パッチィ、もし出会ったら棘を1本残らずもぎ取ってやるあ
ああー!!」

ボーボボの怒りは頂点に達している。

よほど自分より速く出た首領パッチが気に入らないようだ。

「その前に、俺と勝負してもらっぜ」

「誰だ!?!」

とボーボボ達の後ろから1人の少年が声をかけてきた。

その少年こそ、龍の骨さんの小説『BASS学園』の主人公および

『キングドラゴン』のスケットのゲストキャラ、零斗である。

「き・・・貴様は、マイティ真拳使い北郷零斗！」

「こいつが噂のじファンに存在する現代の真拳づかい」

まさかチームメンバーがワザワザ登場した事に予想外であると驚く
ポーボボと天の助。

零斗がポーボボの前に現れたのは理由がある。

「この時を待ってたぜ、鼻毛真拳の継承者及びキングハジケリスト、
ボボポーボ・ポーボボ！」

すると、零斗は剣を抜いてその先をポーボボに向けて刺す。

「俺のマイティ真拳とあんたの鼻毛真拳、どっちの真拳のほうが強
いか…勝負だ！！」

政宗

「次回、『自分にとっては真剣な事であっても他人から見れば同
も言い無駄なこだわりを持つ者もいる』、テイクオフ」

第三百三十六訓：自分にとっては真剣な事であっても他人から見れば同でも言い無

黒神

「いやあ、まさか3つの小説を書くことになるとは…連載速度が落ちたと言つのに我ながら大変ですなあ」

銀時・フェイト

『『しゃらーっぷ!!』『』(激怒)

ドカア×2!!

黒神

「あんぎゃあああああああああああああ!!!!」

ティアナ

「はあ…とりあえず『リリカル銀魂Strikers』始まるわよ」

第三百三十六訓：自分にとっては真剣な事であっても他人から見れば同でも言い無

ついに会ってしまったポーボボと零斗。

最強の真拳使い同士の激戦は、真拳で迫力、そこで爆笑で期待感が満タン。

史上最強のハジケリストの誇りをかけた激戦が今始まるうとしている。

天の助、こなた、かがみは遠く離れて見守るしかなかった。

「まさか今の時代でも俺達以外の真拳使いが存在しようとは…どおりでためエには俺と同じ力を感じると思ったぜ！」

と意外そうに驚くポーボボ。

『ボボボボ・ボボボ』の連載が終わって真拳使いも減ってしまった。

ポーボボ達の存在もはや異物で忘れられる存在ではないかと思う中、ポーボボは出会った。

それが目の前にいるマイティ真拳使い、零斗である。

「俺が知る限り、最強の真拳使いはあんただボボボ！俺はあんたを倒して最強のハジケリストになるぜ！」

新時代の真拳使いの挑戦。

彼が狙うのは最強のみ。

零斗から放たれるハジケオーラを見てポーボボも只者じゃないと見える。

「面白い！貴様がどれだけの実力者かは知らねえが、その挑戦受

けてやるうじやねえか!！」

と零斗の挑戦を受けて、ボーボボもとてつもないオーラを放つ。
最強のハジケリストのみが放たれる覇者の闘志は零斗だけじゃなく
天の助にも伝わる。

「ボーボボのあのハジケオーラは本気の証だ!!それだけあの男が
相当の手誰である証なんだ!!！」

「そうなの!？」

とまさかボーボボが本気を出すと思わなかったかがみ。
しかしボーボボのあの様子はマジで真剣な表情である。
これは名勝負を捧めるんじゃないかと思うかがみ。

だが、その考えは甘かったと思い知る。

「行くぞオオオ!!みかんの皮アアアアアアアアアアアアアアアア
!!!！」

と、ボーボボが突如みかんの皮を取り出す。

それを見たかがみは『は?』と啞然とする。

どうしてここでみかんの皮が出てくるのか訳分らない。

「しかも、みかん汁たっぷり版である!!！」

ドカア!!！」

「ぐびぎやああああああ!!！」

「!!」

「ぎよええええええええええええええええええ!!」

「牛の大群!?!」

と今度は牛の大群がポーボボを容赦なく踏み出して前に進みこむ。しかも何処からか現れたか訳分らない。

「そして決め手の烏龍茶!!しかも近々と冷えた飲み応えたっぷり!!」

と烏龍茶の巨大水鉄砲がポーボボに襲い掛かる。

「何の、相手に背を向けて背後からのドライアイス!!しかも5個!!」

「何イ!?!」

ドライアイスに驚く零斗。

すると、巨大な氷の壁がポーボボの背後を護るように現れて水鉄砲を防ぐ。

それと同時に水鉄砲は凍りだして零斗は思わず背後にバツクする。

「くう、さすがハジケリストの王者の力!!まさかそんな手で防ぎだすとは!!」

「そう言う貴様も、この時代のハジケリストにしては中々の実力の持ち主だな!」

「だが、こんなの挨拶代わりだ…まだまだ行くぜ!!」

とわけも分からない事をしまくるポーボボと零斗。

天の助とこなたは白熱した戦いに注目してかがみは青ざめてだんまりとなる。

そしてその戦いを遠くから見守っているのがこの方。
黒い制服を着て刀とラケットミントを左脇に身に付けている真撰組
一のツッコミ使いこと山崎退である。

方眼鏡でポーボボ達の戦いを見た感想はと言つと…

「て、全然意味わかんねエエエエエエエエ！！」

と怒鳴って叫びだす。

何故なら山崎の様な常識な知識をもっている者から見れば彼等は何
をしたいのか訳分らない。

「どう言う戦いをしているんだよあの馬鹿二匹はあ！！ みかんの
皮や幕の内弁当やドライアイスやら叫びながら言いだしたあげくに
何か変な攻撃を仕掛けているよ！！ 雷！？ 牛の大群召喚！？
氷の障壁！？ て、やりたい放題じゃねえかアアアアアアアアア
！！」

山崎には付いていけない戦い。

だがコレがハジケリスト同士の戦い。

「アレが真拳使い同士が戦える己のハジケリストとしての誇りをぶ
つけ合つた真剣勝負よ！！」

「って、猿飛あやねさん！？何であんたがここに！？」

と山崎の隣に突如現れたのはロングヘアのメガネをかけてマフラ
ーを巻いたくの一。

猿飛あやねが真剣に遠くから離れて戦っている馬鹿2人を見届けて
いる。

ちなみに忍の眼は一般の人間より遠くから離れて見えるので方眼鏡

なしでも見える。

「黒神の誘いに乗ってゲスト達を始末して欲しいって頼まれたのよ、後、私の事はさっちゃんって呼んでね」

と猿飛は言い、あの2人の戦いは一体何なのかを言いだす。

「それよりも、私と貴方もかなりラッキーかもしれないわよ山崎君。あの2人はただふざけあっているんじゃないわ」

「え、それどう言う意味ですか!？」

自分達がどうしてラッキーなのか訳分からなくなった山崎。その理由を猿飛は言いだす。

「『ボボボーボ・ボーボボ』の連載が終わって数年の時が経ち、急に数が減っていった幻の戦士 ハジケリスト。そのハジケ同士の戦いでのみ可能になる究極の戦い、ハジケルティメット!!」

ドーン!!

背後から雷が落雷するほどの衝撃な迫力を放って言いだす猿飛。

「ハジケルティメットって何だアアアアアアアアア!!」

もはや叫ばない訳には行かなくなった山崎は言いだす。

「ハジケルティメットとは、ハジケリスト同士の戦いで自然的に開始する究極のハジケバトル!! そのふざけた行為と常識外の行為が、特殊能力的に発動して攻撃と防御と化す超特殊型闘争法!! 真拳使いとしての力が高ければ高いほどその力を発揮する、常識人

と大離れした変人と常識外の者だけが発生する究極の戦いよ!!」
「んな訳あるかアアアアアア! てか原作の『ポーボボ』を見たけど、どう見たってどっかで見た戦いだろぅがあ!!」

真剣に説明する猿飛に対して怒鳴ってツツコミだす山崎。

そして彼女の説明には続きがある。

「しかも、この戦いにはある法律があるのよ。しかも最悪な事に関わるような重要な事が」

「最悪な事に関わる重要な事!？」

その重要な事はおそらくとてつもないものだと言った猿飛は言いだす。
山崎もそれはどんなのかを聞きだす。

「ハジケルティメットバトルの法律!! 絶対にやってはいけない事!! それはもし戦い中に真拳類やふざけた行為、またはハジケた活動以外の事で真面目で常識な活動をした場合、その者はハジケリストのブラックリストに載せられ強制的にハジケリストの力を失って、理性もあり常識な性格になり代わって真面目な人間になると言うハジケリストにとって最悪な結末となる!!」

「むしろそっちの方が良いじゃねえかアアアアアア!!」

最悪どころが最高の結末だと山崎は怒鳴ってツツコミだす。

とまあ、なんやかんやでハジケルティメットとはどう言うものかをちゃんと知った山崎であった。

「行くぞ零斗、コレが俺の鼻毛真拳だ!!」

とポーボボは鼻から鼻毛を鞭のように出す。

その鼻毛に零斗は内心に驚く。

(アレが噂の鼻毛真拳の武器、鼻毛!!鼻の奥にある毛を武器としてさまざまな攻撃を可能にするだけじゃなく、ハジケパワーで鼻毛に全然関係のない行為を無理矢理鼻毛類の技と化す真拳流派!!)

そうとなれば、自分もマイティ真拳を疲労すべきだと考える零斗。刀を抜いて、マイティ真拳の構えをする。

「何アレ!? 何で鼻から鼻毛が!? てか、無駄に長エエエエエ!!!」

かがみも思わずツツコム。

鞭のように長い鼻毛が存在するなんてあり得ない事である。

一方のこなたはポーボボの鼻毛に眼を光らせて見とれる。

「行くぜ、鼻毛真拳奥義 『鼻毛激烈拳』!!!」

と鼻毛が無数に振り続けて零斗に容赦ない攻撃を繰り返す。

しかもその一撃一撃が半端じゃなく高く、とても鼻毛とは思えない。だが零斗は無数の鼻毛をバラバラにスライスするように剣で切り刻む。

「まだまだ!! 鼻毛真拳奥義 『サイクロンストーム』!!!」

さらに鼻毛が扇風機のように超高速回転をし、そこから発生する強烈な竜巻が零斗を襲い掛かるが……

「マイティ真拳奥義 『爆熱のグランドシールド』!!!」

零斗は剣を地面に突き刺し、何とそのまま強引に持ち上げる事で爆

「ぐう、何て男だ！！ まさか天の助をこうもあっさり倒すとは！！！」

「トドメさしたのあんたでしょうが！！ 謝れ、今すぐ天の助に謝罪しろ下衆アフロ！！」

なんとも身勝手なボーボボにかがみは思わず怒鳴る。
しかし彼の眼に反省の色はまったくくない。
常識人であるかがみから見れば、かなり悪意はある。

「ボーボボ！！」

と突如、ボーボボの名を叫びながらこの場に現れるのは、大泣きして幼稚園児の衣装を身に付けている首領パッチがとてつもない速さで駆けつける。

『何かまた変なのが来たアアアアアアアアアアアア』

遠く離れても、山崎とかがみの突っ込みはシンクロした。
そしてそれを見たボーボボは…

「首領パッチイイイイイイイ！！！」

勢い良くボーボボが駆けつけてくる。

相当、首領パッチに会えたのが嬉しいようだ。

だが、首領パッチの再会の喜びは別の意味があった。
それは…

「何主人公の俺より速く登場してんじゃボケエエエ！！！」

「ぎゃああああああああああああ！！！」

「首領パッチくうううううううん!!」

と鼻毛で首領パッチを吹き飛ばし、星と化させたポーボボ。かがみは思わず叫びだす。

「よし、ようやく馬鹿を始末したぞ！ それと零斗」

とポーボボは首領パッチを倒した事に大満足を感じる。それと同時に零斗に向かつて…

「良くも俺の命より大事な仲間を吹き飛ばしやがったな!! 絶対に許さん!!」

「ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ!!??」

「いや、あんたが吹き飛ばしたんだろうがああああああああ!!」

ありえない発言をするポーボボに文字が間違えるほどに叫びだすかがみ。

そして遠くから離れて大きく怒鳴ってツッコミだす山崎。

「何アイツ!? さっきから仲間を盾に使ったり吹き飛ばしたりって、やってること最悪じゃねえかああ!!」

山崎は顔中に血管を浮かべて叫びだす。

いくらなんでもポーボボのやっている事は外道以外なんでもない。

「まさか自分がやった仲間に対する暴行を敵のせいには押し付けるなんて…やはり最強の真拳使いは伊達じゃないわ」

「おiiiiiiiiiiiiiiii!! そんなの正統派にされる訳ねえだろ!! つうか最悪だよあのアフロ、歴代ジャンプ主人公の中でも最悪だろうがああ!!」

感心する猿飛に対し、山崎は怒りMAKである。

数多くの爆笑の中の爆笑主人公として破天荒な活躍をしたボーボボだからこそ出来る活動と言っても良い。

「おいおい、ずいぶんと面白エ事をやってるじゃねえか?」

『?!?』

と、突如ボーボボと零斗の前に現れたのは1人の男。

攘夷浪士の中でも最も過激で危険、『鬼兵隊』のリーダー高杉晋助の従兄弟、高杉晋一。

彼はボーボボに興味深そうに近づく。

「なあ、ボーボボさんよオ…せつかくだからここは協力しねエか?」

「何?」

「いや、何かよオ…真剣勝負をジャマする気はねえんだけど、ここは派手な喧嘩をしたほうが面白いだろうし。たとえば…」

晋一はボーボボの耳の近くで喋りだす。

すると、ボーボボはなるほどつと言つ様な表情で『乗ったあー!ー!ー!!』と晋一と手を組む事になった、

「別に俺はかまわない。だけど、ボーボボ側に付くんだつたらお前も倒す!!」

零斗はボーボボもろとも倒すことを宣言する。

だが晋一はそれを聞いて…

「倒すねえ……餓鬼がずいぶんと舐めた事言っじゃねえか？」

と不気味な笑いを浮かべて、とてつもない闘志と言うより殺気を放つ。

コレには零斗はもちろん、ボーボボ、かがみ、こなたもビクツと驚く。

(この男、只者じゃない……だが同時に俺達ハジケリストに匹敵する強さを感じる)

「よっしゃ、ボーボボと銀魂のコラボパワーで俺達の究極奥義を炸裂してやるぜ!」

とボーボボも晋一の殺気に匹敵する大きな闘志を放つ。

晋一の乱入によるハジケルティメット、果たしてその結末は!!

「あれ、私あんまり喋っていないんだけど？」

とつぶやくこなた。

銀八
「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!」

銀八
「へえい、んじゃ銀八先生コーナーを始めたいと思いまあす。今回のアシスタントもゲストの方でこの方……」

星
「今は連載中断しているが必ず復活する『恋姫†BASARA学園物語』からのゲストで政宗殿の恋人の星だ」

銀八
「何嘘ついでるの？ 殺されるよ、華琳に殺されるよ!!」
とさつそくとんでもない嘘を言う星。
コレには銀八も青ざめてツッコム。

星
「ははは、まあ良いではないか。せっかくの銀八先生コーナーに出られたのだからコレぐらいは良からう」

とニコリと笑って言いだす星。

銀八は星は絶対に怖い者知らずと確信する。

銀八

「……はあ、まあいつか。じゃあ最初はペンネーム『ウツソ・エヴィン』さんの質問」

星

「『ウツソ

「いままでコラボ全参加ですからね……その関係じゃないでしょうか？質問行きます」

？銀さん……今回の前書きですが……あなたも人のこと言えませんがね……ピンコさんにヤロウトしたんですから……そのところどうですか？（ウツソ）

？銀さんのアナログスティックはトンカチですか？（こなた）

？ついでにドライバーが生えたことがあるヴィータはあそこからトンカチは生えてこないんですか（こなた）『……ほほう、これは面白い質問だな』

銀八

「お前的にはな！　んで答えは、？は銀さんの場合は近藤の無理矢理な押し付けが原因とされますので新八と違って攻められません。？はコレは明らかにセクハラですこなたさん」

星

「？の質問は……コレはどう言う意味だ？」

銀八

「知らなくて良いです!!」

と青ざめて叫びだす銀八。

そしてヴィータはと言つと…

ヴィータ

「塵と共に消えろオオオオオ!!」

ドカアアアア!!

こなた

「アアーーーーーレーーーーー!!」

『グラーファイゼン』に豪快に叩かれて吹き飛ばされるこなた。
これは銀八は自業自得と思い、星は思わず笑い出す。

星

「……うむ、と言つ訳で『ウツソ・エヴィン』殿…これからも面白い質問を頼むぞ」

銀八

「俺的には控えてほしんだけどな?んで次イ、ペンネーム『ソードー鉄道員』さん『銀さん、フェイト、スバル、なのはに質問。』

Q:前回の質問で、幻想入りしてしまったら、霊夢たちと弾幕ごっこできますか?

あるいは自分たちにもしも「程度の能力」はどんな感じにしますか?

黒神さんに質問。

Q：最近、悩み事がありますか？……って蒼星石が言っていました
デイエチとシャマルに質問。

Q：霧雨魔理沙について一言ありますか？』…じゃあ、質問答えて
ください」

銀時

「とりあえず、ストレートヘアーに慣れる程度の能力だな」

銀八

「気持ちわかるけど、それ能力じゃなく願いだろうがアアアア！！」
とさっそくポケだす銀時に銀八はツッコミ、星は笑いを堪える。

フェイト

「えっとう…神速並みに速く動けるようになる程度の能力かな？」

なのは

「体術も優れる程度の能力かもしれない」

スバル

「私の場合は…力ある剣が触れるようになる程度の能力が良いかな」
と3人は素直に答える。
スバルにいたっては願望に近い。

黒神

「そうですねえ、やっぱり最近小説を書く速度が遅くなっていく事ですね」

デイイチ

「とにかく、別の意味で凄い人だと思います」

黒神とデイイチは素直に答えだす。

シヤマルの答えは…

シヤマル

「とにかくその人に『シヤマパイ』を食べさせたいかな」

銀時・フェイト

『『それ、抹殺宣言と一緒にだろうがあ（でしょうがあ（！！』』』

ベチヤ×2

シヤマル

「おぎゃあああああああああああああああああああああ！

「！」

怒り出した銀時とフェイトは、シヤマルに『シヤマパイ』をぶっかける。

余りのまずさにシヤマルは断末魔の悲鳴を上げて倒れる。

銀八、星は「南無…」と言って両手を合わせる。

銀八

「と言う訳で『ソドー鉄道員』さん、シヤマルが馬鹿やる前に銀時

とフェイトが止めました」

星

「うむ、では次の質問ですなあ。ペンネーム『次村陣八』殿の質問、
『久しぶりに質問』

1、キャラが元に戻る目処は立ってますか？（フェイト、なのはに）

2、エリオはキャラの変貌に気づいてるのですか？なんか全然眼中
にないような・・・

3、なのは、最近質問コーナーにしか出て無い様な気がするんだけど、
いきてま・・・うわ！何をする！？やめ（チリになった）

『』

フェイト

「いやあああああああああああああああ！！！」（泣
き）

なのは

「御免…無理かもしれない」

絶望に答える2人。

エリオ

「え、キャラが！？／＼／＼でも、僕にはか」

銀八

「ストオーツプ！！　ここまでにしようエリオ君、もしキャラが聞

いてたら大変な事になるからねえ!!」

と青ざめて必死にエリオを止めようとする銀八。

星

「……………ここは、深く関わらないほうが賢明な判断でございますな」

銀八

「まったくだ」

青ざめて3の質問は関わらないほうが良いと言いだす星に動揺する銀八。

星

「と言う訳で『志村陣八』殿、無茶な質問は控えたほうが良いぞ？」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『黒龍』さん『1・今回は等身大銀さん人形と抱き枕をセットでフェイトとティアナに贈ります。』

今回は二人にとってはハッピーな事があったので、更にハッピーになってもらおうと思いました。

p・s他のラバーズに二人がプレゼントを貰った事と銀さんにラッキースケベ受けたことはメールで伝えたので頑張ってください(黒笑)

2・銀さんラバーズに質問。

原作で新八はラブチョコリスのせいで廃人、またはイツちゃった人になってしまいました。が、もし、銀さんとリアルタイムで恋愛ができるゲームが出たらあなたたちも廃人に近い状態になりますか？

つつか銀さんはフェイトとくっつく可能性が高いから、ぶっちゃけそれで心を癒した方が良いでしょうよ（黒笑）

3. はやてとヴィータに質問。なんでも桂は噂では胸が大きな女性が好き（嘘）だと聞きましたが、どうしますか（黒笑）

『……黒龍、マジで黒神並に腹黒え！！』

と思わず叫びだす銀八。

星

「質問の答えは……」

と嬉しそうに銀さん人形を抱くフェイトとティアナが目の前にいた。これは答える必要ないと確信する星。

なのは、アルフ、シグナム、リインフォース、チンク、セイン、セツテ、ヴィンディ、デード、猿飛

『『どんちくしょおおおおおおお！！』』

スバル

「ティアア、フェイトさあん、ずるいよ〜！」

と羨ましそうに叫びだすスバル達。

ちなみに？の答えは…

銀時ラバーズ

『『ヤバイ、マジでそうなりそう！！』』

と答えだすのであった。

星

「いやあ、噂以上にこの銀時殿は罪な男ですなあ　では3つ目の答えは…」

はやて

「うつしやあああ…！」

ヴィータ

「やべえ！！　マジでやべえんだけど!？」

と喜ぶはやてに青ざめるヴィータ。

勿論これは嘘の情報だと言う事を彼女達は数週間後に気づくのである。

銀八

「と言う訳で『黒龍』さん、嘘の情報を流すのも控えめに！！　んで次はペンネーム『ケン』さん『なのはへ

そんなに怒っているという事はしましまパンツ収集をやっていると認めている貴方はいつその事、魔導師を辞めて、全次元世界にあるしましまパンツコレクターになったらどうですか？（黒笑）

黒神さんへ

12/17に発売されるBLAZBLUE　CONTINUUM
SHIFT　EXTENDを購入しますか？自分は購入する予定です。

ジェイソンキャラへ

もう今の君はジェイソンだから龍の召喚師と魔導師を辞めて二代目ジェイソンとして生きてみたらどうですか？（黒笑）

だって・・・純粋な所が全く無いですし（黒笑）

そんなんだからエリオは嫌うのだよ・・・ククク（黒笑）『・・・お
いイイイイイ！！ 何か最近腹黒い奴増えてねえ！？』

黒神にドS汚染されたのかと疑い青ざめて叫び銀八。

星は興味深く見つめる。

そして答えは...

なのは

「なのおおおおおおおお！！（怒）」

とケンに向かって『デスライト・スタージャツチメント』を放つた
のはであった。

黒神

「うーむ、欲しいのは欲しいですがプレイステーション系じゃなく
僕は任天堂派なので買う余裕は残念ながら無いんです」

とがっくりと答える黒神。

ジェイソンキャロ

「誰がジェイソンじゃあああああああああああああああああ
！！」

銀八

「お前だろオオオオ！！」

と怒鳴って叫びだすジェイソンに銀八は青ざめてツツコム。

星

「と言う訳で『ケン』殿、またの質問を楽しみに待っておりますぞ。次はペンネーム『アビス』殿の質問だ」

質問1 リリカル組に質問、ゲストで出ている高杉晋一のことをどう思っていますか？ベルカの大軍を刀一本で倒す彼の实力は半端ないとおもいませんか？

質問2 リリカル組に質問、十月三日に放送された銀魂に出ていた新八を見てどうおもった？……うーむ興味深い！是非いつか手合わせして欲しいですなあ」

銀八

「俺は何か晋介似だから苦手でマジで御免だ。んでリリカル組の答えは」

リリカル組（スバル・シグナムを除く）『マジで信じられません！！』

スバル

「凄い、刀一本でって……やっぱり侍は凄いやー！！」

シグナム

「おお、是非戦ってみたいー！！」

と答えだすリリカル組。

ちなみに2つ目の質問はと言うと……

リリカル組（スバル・ティアナ・シグナム・エリオを除く）

『侍の恥です（だ）』

スバル

「あ……あはははは（苦笑）」

ティアナ

「信じられないわ、私だったら軽蔑するわよあんなの……！」

シグナム

「もはや侍のかけらもない！」

エリオ

「同じ男として恥ずかしく感じたよ……僕はこんな男のようにには絶対にならない」

とそれぞれ質問を答えだすリリカル組。

しかし新八はむつつりスケベでも、やるときはやる男である………多分。

星

「私も流石にアレはないと思いますなあ」

銀八

「ああ、だからぱつつぁんには絶てえギャルゲーをやらしちやいけねえ。堕ちるところまで堕ちちまうからなあ……というわけで『ケン』さん、ここではちゃんとぱつつぁんはロリコンアイドルオタクの呪縛から開放させて侍としての魂を取り戻させるから見守っていなさい」

星

「最後はペンネーム『鳴神 ソラ』殿の質問だ。『フォックス』質

問だ『もし戦えと言われたら以下の誰と戦う？』

1・マリオ

2・ソロが変身する仮面ライダーゼロイド

3・ソニック『

スネーク「質問だ『うちのメンバーで一番弄られ役だと思っるのは？』

」

クツパ「黒神に質問なのだ！『自分の小説で弄りやすいキャラは？』

」

次回を待ってます！』1の答えは代表として私が答えますぞ…そうですね、最も速いと思われるソニック殿と手合わせしたい」

銀八

「次は俺だな…おそらくルイージかもしれないねえ。最後の質問は黒神、どうぞ！」

黒神

「自分の小説で…？ やっぱクロノでしょう。クロノはうざったいでかい態度に空気が読めなくて正義気取ってる屑野郎だから刀で浣腸して切れ痔にしちゃって無様にお漏らしするシーンをミッドチルダ中にばら撒こうと思えばいつでも出来るし」

銀八

「いつもとましてクロノに対する態度がメツチャ冷たいんだけど！？」

と作者とは思えない暴言に銀八も流石に青ざめる。

星

「うむ、さすが黒神殿と言つべきか…『鳴神 ソラ』殿、そなたの小説のゲストの活躍を楽しみに待たれよ。いやあ、楽しませてもらったぞ『銀八先生コーナー』は また是非ともアシスタントに呼ばれるのを楽しみに待っておりますぞ」

銀八

「マジでか!？」

と大満足する星に驚く銀八。

これまで数多くのアシスタントが大変な目にあつておかしな展開について行けない事が多かったが、星はむしろ大評価だった。どんな神経をしているのか疑う銀八だが、同時にとにかく無事に終わったことに安心するのであった。

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてくださいます。

お願いします

第三百三十六訓：自分にとっては真剣な事であっても他人から見れば同でも言い無

こなた

「いやあ、さすがボーボボの戦い 見てて面白いねえ」

かがみ

「面白くないわよ！！あんなのただの外道以外なんでもないわよ！」

こなた

「後、次回でボーボボがとてつもない奥義を放つそうだよ」

かがみ

「え、マジで!?!」

ウッソ

「と言つ訳で次回『やって良いことと悪い事がある』 テイクオフ！」

第三百二十七訓：やって良いことと悪い事がある（前書き）

スバル

「うわあ、黒神さんの小説『銀魂王―デュエルモンスターズSD』面白いよあ」

黒神

「でしょう？何か銀魂と遊戯王の放送する曜日が一緒だからせっかくだし書いたって訳」

銀時

「それも良いけどこっちもちゃんと進めろやあ！..」

黒神

「はいはい、では『リリカル銀魂Strikers』始まります！

第三百三十七訓：やって良いことと悪い事がある

究極のハジケバトル、ハジケルテイメット。

それはハジケリストの誇りをかけた究極対決。

零斗とボーボボの新旧最強ハジケリスト同士の戦いに、真一がスケツトとして現れた。

そんな様子を山崎と猿飛は驚きだす。

「な…何かあの高杉晋介似の男が乱入してきたけど…：…なんだろう、とてつもない事が起こりそうで仕方が無いのはなんで？」

「ええ、間違いなく只者じゃないわね？」

山崎も猿飛も晋一の登場でさらに悪化するんじゃないかと思いつむ。とりあえずは遠くから見守るしかなかった。

「真一、とりあえず協力関係するならこんな風にあわせて欲しい事があるが良いか？」

とボーボボは真一の耳に近づき、真一にだけ聞こえる程度の声で作戦内容を伝える。

ボーボボの言う内容をこまかく聞き出す真一。そしてとてつもない笑顔で笑いだし…

「良いぜ…派手な祭りになりそうだしよオ…」

真一は即座にボーボボの作に乗った。

ボーボボは凄く嬉しそうに笑いだす。

「おっしやー！！ 最強の主人公と最強の主人公、2人で力を合わせりゃ恐れる敵はいねえ！！」

「おうよー！！」

互いに手をつかみ合って勇気を分け与える。

零斗はヤバイ予感しかしないと思い、強く警戒する。

それはかがみも一緒であった。

「何か……凄くいやな予感しかしないのは何でだろう？」

「さあ、大抵漫画じゃ嫌な予感が当たる確率が高いように設定されているからじゃない」

「不吉な事を言わないでよー！！」

そんな設定は嫌だと青ざめてツツコムかがみ。

しかし彼女の思いとは逆にいやな予感は的中する。

「行くぞ、晋ー！！」

「おうよー！！」

ポーボボのハジケオーラと晋介の闘志がシンクロするように混ざり合い、とてつもない威圧感が零斗を襲う。

「こ…これは！！」

「鼻毛真拳ゲスト協力し合い奥義！！」

すると、ポーボボのハジケオーラが空間を包み込みだす。

その光景はまさに宇宙であり、いきなり大宇宙に飛ばされた事に驚きだす零斗達。

「『一週間は苦勞する七色の災難なレインボー曜日』！！」

これがボーボボが晋一と共に放った究極奥義。

その強さは、全宇宙を感じさせる最強のハジケリストでしか放てない最強の技である。

「『一週間は苦勞する七色の災難なレインボー曜日』は月・火・水・木・金・土・日曜日の7種類の大宇宙の災難を相手に与える精神波動奥義！！」

「そして、その曜日にあわせて相手に強力な一撃を与える！！一週間の災難がためえを襲うぜ！！」

「マジ！？」

そんな壮大な奥義を隠し持ってたボーボボに驚く零斗。

しかも晋一もいるため、その奥義の威力はパワーアップしている。

「では…まずは、月曜日の災難！！」

すると突如月から大群の杵を持った兎が舞い降りると、すぐさま零斗だけじゃなく、何故かがみもこなたにも総攻撃をする。

『ぎゃああああああああああああ！！』

「ぎゃああああああ！！ 月から兎が振ってきたアアアアア！！」

ポコポコにされて悲鳴を上げる零斗達と思わず青ざめて叫びだす山崎。

これぞまさにボーボボの力である。

「さらに、月から思いつきリムーンビーム！！」

ポーボボが鼻毛を突きに突き刺すと、月の光がレーザー光線となって大群兎ごと零斗に直撃する。

『あんぎゃあああああああああああ！！』
『兎がアアアアアアアアアアア！！』

兎ごと3人に攻撃するポーボボにありえないとばかり涙を流す山崎。これはまさに地獄の光景その者だった。

だがこれはあくまで一種の攻撃パターンであり、まだまだ6種類の攻撃が残っている。

「ちよつとおおおお！？ 何で私達にまで攻撃する訳エエ！？」
「いやあ、よくよく考えれば俺達チームメンバーをつぶす為に呼ばれたもんだから、とりあえずついでにと」
「外道アフロオオオ、今ここでしばあーっく！！」

とかがみは限界が来て怒りだし、ポーボボに襲い掛かる。
ポーボボはそれにかまわず晋一に振り向き、

「続いて、火曜日の災難！！ 晋一！！」
「おうよー！！」

と晋一は何処からか大量のダイナマイトを取りだす。
しかもそれを一気に…

「せいやあー！！」

思いっきり一斉に投げてしまっつ。
そして

れてしまった。
そんな中…

『『ボロボボオ！！』』』

ととてつもない怒鳴り声をあげて凄まじい勢いで走ってきてるのは馬鹿二匹。

葱を持った首領パッチと、大根を持った天の助である。

「何か復活して帰ってきたアアアアア！！」

山崎は2人の執念に驚きだした。

しかも2人は相当なまでに怒っている。

「テメエー、よくも俺達を吹き飛ばしてくれたなあ！！ ゲスト達の変わりにてめえをぶっ殺してやるウウウー！！」

「俺達が今まで受けてきた痛みを、俺の『魔剣ダイコンブレード』と首領パッチの『首領パッチソード』でその身を切り刻んでやるああああー！！」

今までボロボボに散々と痛い目に合わされた2人。

今ここで全ての憎しみを込めて、ボロボボを倒そうとする。
だが、

『『まだ生き残ってたかアアアアア！！』』』

ドカアー！！

『『ぎゃあああああー！！』』』

もはや災難ではなくポーボボ達の悪質な行為しか見えなかった山崎は叫ぶ。

「そして、コレが土曜日の災難!!」

晋一が木刀を地面に突き立てると、巨大なミミズが突如現れて零斗達に体当たりして吹き飛ばす。

『あぎゃあああああああああああ!!』
『今度はミミズウウウウウ!!?』

どうして巨大ミミズが出てきたのか訳も分からなくなった山崎。そしてミミズは地面の奥深くもぐりこむ。ここでいよいよ最後の日曜日の災難。

ポーボボと晋一は両手を天に昇せるように上げる。すると空から大きな太陽が現れて、それが零斗達に墮ちる。

『ぎゃあああああああああああ!!』
『何ですとオオオオオオ!!??』

もはや何が起こっていることすらも訳分からなくなった山崎。そして太陽らしき極大な火球は容赦なく3人を焼き尽くし、あつと言うまに黒こげにした。

『これぞ、日曜日の災難!!』

そしてフィナーレとなって、空間の光景は下の廃墟のビルになった。コレにより、零斗、こなた、かがみの3人は黒こげとなって気絶し、倒れた。

勝利を確信したボーボボと晋一は…

『『イエーイ！！ 勝った勝ったアアアア！！』』

大はしゃぎして笑いあい、勝利した事に喜び合う。

「最悪だ、こいつ等メツチャ最悪何だけど！！」

「まあ、ともあれコレで一気にあの3人はリタイア決…て？」

と山崎は青ざめてボーボボのやり方について行けなくなる。

猿飛は零斗達はもう立ち上がれないと思い、ボーボボ達の完全勝利だと思いつく。

しかし、有り得ない光景が見えた。

何故なら、先ほどの総攻撃が嘘のようにと零斗が立ち上がる。

「何！？ 『一週間は苦勞する七色の災難なレインボー曜日』を受けてもまた立てられただ！？」

流石のボーボボも驚きだす。

『一週間は苦勞する七色の災難なレインボー曜日』は鼻毛真拳のフィニッシュ用の奥義の一種。

それでも立ち上がるのが零斗。

「流石に無傷ってわけには行かないな…かなり痛い目にあっただぜ」

ダメージはかなり受けているようだ。

しかし零斗もまたボーボボと同じハジケリストの1人。

そこらの人物とは違いかなりタフである。

「くう、さすが新時代のハジケリスト!!」

「俺達の連携を受けても倒れなかったなんて思いもよらなかったぜ……」

ボーボボと晋一は零斗の生命力の高さを侮った事に強い反省心を抱く。

一方の猿飛は信じられないような表情をする。

「まさか、あの猛攻撃を受けても倒れなかったなんて……」

とありえないと思いつく。

しかしありえるのだ：何せ彼はハジケリスト。常識な人間をもはるかに超えた超人の一種である。

零斗はボーボボの本気を見て嬉しく感じた。

「流石だぜボーボボ！ そして高杉晋一!!」

再び剣を構えだし、零斗はハジケオーラーを放つ。

「だったら、俺も取って置きの切り札を披露してやるぜ!!」

とハジケオーラーが零斗の刀身に包み込むようにと力が増幅される。

「気をつける晋一!! 奴もマイティ真剣の奥義を炸裂するぞ!!」

「ああ、油断はしねえよ!!」

お互いに零斗に警戒し、いつでも奥義に対抗できるように構えだす。そして零斗のマイティ真拳が今披露されようとする。

「行くぞ、マイティ真拳ハジケ奥……」

ガコオーン!!

「ぎい!?!」

突如、後ろから誰かに下半身の股を蹴られた零斗は大量の汗を流し、そのまま気絶して倒れる。

そんな零斗の背後にいたのは……とてつもない殺気を放っているかがみであった。

散々と酷い目に合わされたあげく、無意識に体の奥底から怒りの憎悪があふれ出ている。

そんなかみを見たポーボボと晋一は青ざめてしまい、怯えている。一方のこなたは巻き込まれない為に気絶したふりをしていた。

「あ〜ん〜た〜らあ〜〜!」

『『……ごめえ〜ん、やりすぎちゃった』』

ブチィ!!

「やりすぎじゃあああああああああああああああああ！！」
『にぎやあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああ！
！！！』』

とかがみが暴走してボーボボと晋一に飛びかかる。

2人の断末魔が響き渡り、一体何をされてボコボコにされているの
かも言うだけでも辛い程である。

絵にかけないエグイ攻撃も繰り替えるかがみ。

そうとうにストレスがたまっていたのであろうか大爆発するように
馬鹿2人にぶつけるのであった。

一方の山崎と猿飛はだんまりとなつてしまった。

一体何が起こつているのかも分からず、ただ戦闘向けじゃないかが
みが怒りだして戦闘のプロであるボーボボと晋一を一方的に攻めて、
2人の断末魔が響き渡っている。

何をすればあそこまでなるのかも分からず…2人は互いに見詰め合
つて頷き…

『『もおく知らなあ〜いつと！』』

とさわやかな笑顔で言いだし、この場を去った。

一々考えるのもめんどくさくなつたからだ。

一方、今までの鬱憤を大爆発するように全てを出し切って、ポーボと晋一をフルボコにしたかがみは…頭の中がぼかんとまって真っ白になり、気絶して倒れた。
しばらくは起き上がれない為、ここで脱落者が3人に増えた。

(よし、このまま気絶する不利をすればシャマパイを食べずにすむ！
我ながら良い判断だ！！)

ここで頭脳を働かせるこなた。
意外なずる賢さだが、生き残る方法としては最優とも言える。

北郷零斗 こなた かがみ リタイア

現在の生き残り

『リリカル銀魂』 坂田銀時 フェイト・テストロツサ スバル・
ナカジマ ティアナ・S・ランスター シグナム アルフ
『オタクガンダム』 ウツソ・エヴィン ネプティーヌ

『キングドラゴン』 伊達政宗 華琳 春蘭 星

『狂乱』 桂小太郎 エリザベス 八神はやて ヴィータ 山崎退

『クイーン』 全員リタイア

『ファイター』 徳川家康 八神庵 秘村剣心 相楽左之助 明神
弥彦

銀八

「教えて」

生徒全員

「銀八先生!!!」

銀八

「へえい、んじゃ今回も『銀八先生コーナー』始まるぞオ、今回のアシスタントはこの人」

ギルガメッシュ

「エターナルの小説『とあるリリカル銀魂 / STAY NIGHT
ストラトス』のゲストであり、人類最古の英雄王：ギルガメッシュ
がアシスタントをする。ワザワザこんな茶番に出てやったのだから
我に感謝をす…」

銀八

「よし、んじゃもう一度シャマパイ食ってみるか？」

ギルガメツシュ

「…我が間違ってた」

と青ざめて謝罪するギルガメツシュ。

相当なまでにシャマパイが不味かったようだ。

銀八

「んじゃ行くか。まずはペンネーム『龍の骨』さんの質問だ。零斗

「じゃあ質問いくぞ！フェイトに質問だ！『B S A A 学園』のエリオのイカロス真拳をどう思うんだ？」

ユーノ

「じゃあ次はなのはに質問、B S A A 学園の僕のサイコパワーをどう思うかな？」

『……ずばりどうぞ』

フェイト

「げ…原作のエリオじゃありえないよ…」

ギルガメツシュ

「いや、二槍使いと言う時点で十分原作離れしていると我は思っが？」

と2人は呆れて言いだす。

なのは

「……にはは…何とも言えないの」

と苦笑して答えるしかないのはであった。

銀八

「と言う訳で『龍の骨』さん、廊下に立つてください」

ギルガメツシュ

「次はペンネーム『charley』の質問だな…『成実

』俺に送ってくれるシヤマパイは、蛆多めでお願いしたいっす。

あとアドバイスなんすけど、焼き料理ってガマの油塗って焼くと結構独特の風味が出ておいしいし、揚げたケラやムカデなんか添えて一緒に食ったりしたら歯ごたえがあつていいっすよ。

ちなみにこの食べ方は昔食べた『赤棟蛇の蛆入りタレ付け蒲焼』で実践して最高に美味かつたから、同じ蛆料理のシヤマパイなら絶対美味しくなるっすよ』…て何だコレはぁー！ー！ー！？」

とシヤマパイを求めるだけじゃなくまさかのシヤマパイ悪化提案にギルガメツシュは思わず青ざめる。

ギルガメツシュ

「あんな人間が食べる物じゃない物をどうして平気で求める！？しかも美味に感じたってどんな舌をしているんだこの男は！？」

銀八

「まあそんなもんだ、こいつは。ちなみにシヤマルがそれを提案して、喜んで成実にシヤマパイ100個送ったそうです」

ギルガメツシュ

「あの女は料理で人を殺めるつもりかぁ！！」

ありえないと言っただけにギルガメツシュは青ざめて叫ぶ。

アレは間違いなくサーヴァントでも瞬殺できる宝具級である。
自分だって死に掛けてしまったからだ。

銀八

「と言う訳で『charley』さん、成実に改造版のシャマパイ
を100個送りました」

ギルガメツシュ

「改造ではなく悪化の間違いだ!!」

ギルガメツシュはアレはないと断じて思う。
二度と食べたくないと思うばかりに。

銀八

「んで次イ、ペンネーム『烈火竜』さん『質問です。』

? ヴィヴィオは魔導士と侍、どっちに憧れますか?

? ヴィヴィオはスカリエツティから金的以外の技を教わりました
か?

? 蜂蜜まみれのフェイトを見たフェイトファンの反応は? (試し
にギンガに見せて見てください) 『…ヴィヴィオ2つお答えしなさい』

ヴィヴィオ

「ヴィヴィオ、パパとスバルお姉ちゃんのような侍になりたい あ
とう……気の強い女性を大人しくさせる最も効率が良いのはお尻の
穴に棒で浣腸する事と、いやらしい男の見分け方に……」

ギルガメツシュ

あああああああああああ！！」

ギルの渾身の一撃を受けて断末魔の悲鳴を上げるギンガ。死んではないがしばらくは落ち着いて気絶するであろう。

銀八

「と言う訳で『烈火竜』さん、ギンガの暴走を止めました……。んで次イ、ペンネーム『白米』さん」

白米「では、質問します。今回はこの三人」

グリム「夢幻界一の機兵整備士、グリム・エアスターだよ」（グリムリン）

ダイヤモンド「夢幻界一の鍛冶師、ダイヤモンド・アームストロングよ」（ドワーフ）

白米「そして私、白米です」

1.

グリム「ナンバーズに頼みがある。

私に改造させてくれ！今なら全身からドリルが出たり、ロケットパンチができたり、目からビームが発射できたり、トランスフォームで車になれたり、合体して巨大ロボになれたりするよん」（涎ダラダラ）

アルバート「やめんかあああああ！！！！」（拳骨で気絶させる）

2.

「ダイヤモンド、そっちの小説の人達全員に一言。武器の手入れはちゃんとしてる？武器は貴方達の身体の一部であり、最高のパートナーだから大切にしなさいよ？デバイスでもただの木刀でも刀でも銃でも、使いつづけている武器に感謝しながら大切にしなさいよ？」

3.

白米「では最後に坂田銀時とスバルと愉快的その他諸々さん達に質問。」

もし、ミッドチルダにフングスが大量発生したらどうします？ちなみにフングスとはキノコの化け物で、姿はハウルの動く城とタタリ神とお腐れ様とキノコがポタラ合体した見たいな外見をしています。口からは猛毒の胞子を吐き、殺した相手をゾンビにしまいます。10体いればミッドチルダを30分でラクーンシティにしてしまいます。」

詳しくは東方双界伝にて……」

『……』

と呆れて声も出なくなった銀八。
ちなみにナンバーズの答えは……」

ナンバーズ

『いやあああああああああああああああああああああ
あ（っす）……』』

涙を流してそう言いだす。

ギルガメツシュ

「王であるこの俺が、宝具の手入れをしてない訳がなからう……武器とは己の相棒であると同時に常に美しくあるべきにある。武器への愛情とはそう言うものだ」

銀八

「はい、英雄王の一言でした。ちなみに話によれば、全員武器の手入れはしている様です」

ギルガメツシュ

「最後の質問だが……」

銀時

「んなもん、フングスって野郎をぶった切って送り込んできた馬鹿をしばくわ!!」

スバル

「どんな相手だろうと、自分の大切なものに害なす者を斬滅するだけだよ」

愉快なその他諸々さん

『『力を合わせて倒す!!』『』』

と銀時とスバル、そして愉快なその他諸々は答えだす。

銀八

「と言う訳で『白米』さん、廊下にたつてなさい」

ギルガメツシュ

「次はペンネーム『武田軍兵士 清坂 剣麻』の質問だ。」

木原数多「ほんじゃあ今回は俺から六課と協力者の面々・・・それとくたばってる一方通行に質問するぜ？

テメエらはコイツを食べるか？

まあもつとも味の保証はねえがな！！」

*マツド鍋：琥珀（月姫もしくはメルブラ）、ジエイル・スカリエツテイ（別世界）、マユリ（bleach）、木原数多、木原マサキが料理という名目の実験により造られた鍋料理で、色は真紫で、全部、汁ごと食べなかつた場合鍋が爆発し、中身を東京ドーム五分が入る位の広範囲にぶちまけられる。

打ち止め「ミサカから質問が有るのだーっとミサカはミサカは聞いてみたり。何をどうすればおっぱい大きくなるのってミサカはミサカは真剣な真顔で聞いてみたり！！」

三つめに六課と銀玉陣営の面々に質問。次の内、コレは耐えられると思えるのはどれですか？

1・体験、チェンジゲッター！！（真ゲッター1〜3に手動合体する）

2・梁山泊の面々による修行（有料地獄巡り）+武田漢祭り

3・腐留苦去主+混ぜ御飯

4・真ゲのゲッターチーム+シャッフル同盟+オールライダーとの模擬戦

5・オールライダー、全スーパー戦隊による必殺技メドレー」…

…」

銀八・ギルガメツシュ・六課と協力者・一方通行

『『食えるかああああああああああああああああ！！！！！！』』

と怒鳴って叫びだす銀八達。

食べたら死ぬからだ。

銀八

「2つ目は…あれだ、胸の小ささを気にしている奴ほど胸は大きくならないもんだぜ？3つ目の質問の答えは、全員全て無理と言いつつ出しました」

ギルガメツシュ

「と言う訳で『武田軍兵士 清坂 剣麻』、貴様の質問は無理に他人に無理を押し付ける質問が多い、少しは加減した質問をするが良い！！！！」

銀八

「んで次イ、ペンネーム『無目藻』さん『質問、というか提案です。なのはさんの存在感が微妙なので黒神さんの権限で登場人物から一度消してみては？

…ん？ドアの向こうに誰かがいるみたいですね。開けてみますか？』……」

と銀八とギルガメツシュは青ざめてしまい黙り込む。

互いになのはのほうを振り向くと、そこにはなのはの笑顔があった。しかし背後から白き明王の化身らしき存在が見えるのは気のせいか、2人は見ぬふりをした。

ギルガメッシュ

「今回は、我とセイバーがついに結ばれて結婚をす…」

セイバー

エクスカリバー
「約束された勝利の剣！！！！」

ドカーン！！

ギルガメッシュ

「うぎゃああああああああああああああああああ！！」

銀八

「何で俺までエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ！？」

セイバーの怒りが込められて放たれた黄金の極光砲に、飲み込まれるギルガメッシュと巻き込まれた銀八だった。

第三百二十七訓・やって良いことと悪い事がある（後書き）

ウッソ

「……」

黒神

「……」

今回のかがみの暴走に青ざめている黒神とウッソ。
沈黙の静けさがしばらく続き、ウッソがある一言を言いだす。

ウッソ

「良かったあ、僕あの場所にいなくて……」

黒神

「……うん、ゴメンネ」

こなた

「次回、『見た目が同じだからって血の繋がった兄弟関係ではない』
テイクオフだよ」

第三百二十七訓：見た目が同じだからって血の繋がった兄弟関係ではない（前書き）

黒神

「黒龍さん、ついにお待たせしました!!」

はやて

「ついに貴方が要求したゲストがここに登場や!!」

ヴィータ

「え、だれだそいつ!? てか何か張り切りすぎだろ?」

黒神・はやて

『『では『リリカル銀魂 S t r i k e r s』 始まります!!』』

ヴィータ

「お願いだから聞いて!!」

第三百三十七訓：見た目が同じだからって血の繋がった兄弟関係ではない

前回のあらすじ

自分より先に現れた首領パッチに怒り出したボーボボと天の助。

そんな彼等の前に現れたのは新時代のハジケリストでありマイティ真拳の継承者である零斗である。

彼はボーボボを倒して自分こそが最強のハジケリストである証を手に入れるためにボーボボに勝負を挑んできた。

その実力はボーボボを五分五分であり、戦闘力ははっきり言って人格外。

常識をはるかに超えたその強さに、突如援護として現れた晋一と共に、ついに鼻毛真拳の究極奥義が炸裂した。

「鼻毛真拳ゲスト協力し合い奥義！！」一週間は大苦労する七色の災難なレインボー曜日！！」

この奥義が炸裂し、零斗を追い込む。

ついでにとしてチームメンバーであるかがみとこなたも巻き込まれてもうやりたい放題でボロボロにされる。

そして零斗が復活してマイティ真拳の奥義が炸裂する瞬間、

「行くぞ、マイティ真拳ハジケ奥…」

ガコオンー!!

「ぎい!?!」

と、背後からキ タマを蹴られて気絶して倒れる零斗。

しかも余りのおふざけにとつとつ怒りが頂点に立ったかがみは…

「あ〜ん〜た〜らあ〜〜!?!」

「やりすぎじゃあああああああああああああああああ!?!」

『にぎゃあああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ!』

『!?!?!?!』

と、ボーボボと晋一はかがみの逆鱗に触れ、あえなくボコボコにされて再起不能になる。

こうして、『キングドラゴン』からは零斗、『オタクガンダム』からはかがみとこなたが再起不能となって残りメンバーが少なくなってきた。

そしてまた、今回も誰かが再起不能となるであろう。

「ストライクマジカル、魔剣士少女スバルツキーニだニヤ」

と突如可愛らしくくるっと回っているのは、スバルであった。ただ、そんな彼女の姿はいつもと違っていた。

背中に『ティルヴィングエア』を背負っていて、ツインテールにして、猫耳ならぬ黒豹耳とその尻尾を付けており、服は薄手のカットシャツと青縞模様のローレグだけである。

彼女は今、『ストライクウィッチーズ』に出てくるルツキーニと同じ格好をしている。

「私、今とってもすーすーしゆるニヤンだけど、だから私のおそこを見てみるニヤ？／＼／」

とスバルツキーニは薄手のカッターシャツの左右を両手でスカートのようにめくるような体制に入る。

後一步のところ^{ソレツトジョン}でめくる所、突如彼女の姿は消えた。

実はコレは実態映像である。

「となこんな感じで、『空戦魔剣士少女 リリカルスバルツキーニ』を完成させたんやけど…いかがかいな」

とはやては左腕に装着している決闘盤^{デュエルディスク}似の特殊装置にセットしてた

カード『ルツキーニコスプレのスバル』を取り外す。

「いや何だよコレ!?!」

そんな感じにヴィータが呆れてツツコム。

いくらなんでもコレはやりすぎだと言い出す。

「何でそんなどうでもいいもんを作るんだよ、しかも何でまたスバルがコスプレ!? セクハラか、新手のセクハラか!?!」

「何言ってるんや、ワザワザCharleyさんが許可してくれたんやで!! セヤからいつか変態化した家康が師匠気取りの三成に売れば高値で買い取ってくれるはずや!?!」

「おいしいおいしい!! 売るの、もしかしてそれアイツ等に売めるのか!? そんな事したら今度こそ間違いなくティアナとギンガに殺されるぞオオオ!!」

はやてはコレを大量生産して、家康と三成などオタク共に高値で売り出す予定に入っていた。

コレにはヴィータもいくらなんでもありえないと青ざめる。

「せやけど、コレだけじゃなんかものたりらへんし…もっと斬新感がないと…」

「だったらコレならどうだ?」

突如、桂が2枚のカードを渡します。

そのカードはスバルがあるコスプレをしている姿が描かれている。

「てツラあ、お前何やってるんだ!?!」

「ツラじゃない桂だ…はやてが上司としてスバル殿にさらなる魅力を加えたいと言われてな…エリザベスと共に協力し合っているのさ」

「いやいや、明らかにはやてがスバルにセクハラしているよねコレ！？ むしろ止めるよー！」

とヴィータは桂に怒鳴って叫びだす。

桂はそんなヴィータのツツコミをスルーしてはやてに2枚のカードを渡す。

はやてはワクワクしながら特殊装置にカードをセットする。

そして現れたゾビットビジョンは……

「へ…変な眼で見ないでよ、この馬鹿！！」

と顔を真っ赤にして叫びだすのはスバルである。

そんなスバルの姿はいつもの隊士衣装もバリアジャケットも違う。

それはなにやら魔法使いの様な貴族の制服似である。

左手に『ティルヴィングエア』を握っていて、服は薄手のカッターシャツと短いミニスカートに、黒マントをかけている。

そう、スバルの姿は『ゼロの使い魔』に出てくるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールの制服姿である。

「なんじゃこりゃあああああああ！？」

それを見たヴィータは青ざめてツツコム。

また別のキャラの衣装を着せられているスバルをみて呆れていたからだ。

「何って、スバル殿のルイズコスプレ姿カードだが？」

「コスプレって言わないでよ、馬鹿ツラ!!」
「馬鹿ツラじゃない桂だ」

とツンツンとしたスバルに言い返す桂。

「てかおい待て、何かスバルの態度へんじゃねえか？ 強気な性格なんじゃねえか？」

「スバルではない、スバルイズだ」

「何だよスバルイズって！？ これ明らかにCharlieさんと同じく明らかに無理矢理名前合成しているぞ!!」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはツンデレな性格でな、だからスバルイズもツンデレ設定なんだ」

と桂は説明する。

「ツンデレ！？ もしや!!」

とはやてがスバルイズの背後に回って彼女のスカートを素早くめくってパンツを侵入してお尻を直接触って揉みだす。

「きゃあ!?!?!」

とスバルイズは可愛げな悲鳴を上げてはやてから離れる。

そして怒ってはいないが恥ずかしそうな表情ではやてを見つめる。

「ひ…人前でいやらしく触らないですよ…!! そっそう言うのは2人っきりの時にしてよね?!?!」

「ツンデレ萌エエエエ!!」

と鼻血をたらたら流して親指を立てるはやて。

「てうおおおいい！！　ゾビットビジョンだからって何もあそこ
までする事ないだろうが！」

「まあ落ち着かれよヴィータ殿」

青ざめてツツコむヴィータを止めようとする桂。

そしてはやては鼻血をティッシュで止めて『スバルイズ』のカード
を取り出すとゾビットビジョンのスバルイズは消える。

もう一枚のカードをセットし、そこにまた1人のスバルが現れる。

当然そのスバルの衣装も違っていた。

「き…君が僕のご主人様なのかな？／＼／」

と恥ずかしそうに言い出すスバル。

何せ、彼女の今の姿は……蒼いグラビア水着にオレンジ色の機動装
甲を身に付けている。

そして左腕の機甲に何故か『ティルヴィングエア』の鞘が埋まっ
ている。

彼女は今、『IS』のシャルロット・デュノアのISコスプレをし
ている。

「てうおーい！！　今度はISのコスプレ！？　しかもISスーツ
が何でグラビア水着風だよ！？」

「はやてはこう言うのを好ましいと思ってな…だから俺なりにはや
て好みに合わせたのさ」

「合わせるなよ！？　つつか合わせたら余計にヤベエだろうが！！」

青ざめてツツコムヴィータ。

と冷静にヴィータを落ち着かせる桂。
しかし桂の表情は、何故か鼻血がたれていた。

「うつせえよ！！ 何かっこつけて言いだしながら鼻血たらしてんだよ！！ 何かさっきのスバルなんか全然性格ちげえよ！！」

「スバルじゃない、スバルロット・デュノアだ」

「さっきのスバルイズより無理あるだろそれえええ！！」

と怒鳴ってツツコミまくるヴィータ。

それは完全にティアナと山崎と双壁となるツツコミである。

スバルの名前とシャルロットの名前を合成しただけのスバルロット・デュノアにも無理があるとヴィータは思う。

『どうですか、桂さん』

とエリザベスは期待満々に桂に評価を聞きだす。

実はカードのイラストは全てエリザベスが描いたもの。

こう見えてもエリザベスは起用で絵が上手い。

「ああ、見事な出来栄えだったぞエリザベス」

「て、エリザベスウウウウウ！！ お前なのか、あの2枚のスバルのカードを描いたのお前だったのか！？」

『えっへん！！』

と桂に褒められて嬉しがるエリザベス。

彼もまたカードを真剣に作っていた。

「何はともあれ、コレで機動六課の今後の赤字問題は解決や」

「解決どころが別の問題が発生するぞ！」

アアンン！！

『ぎゃあああああ！！』』

と、突如漆黒の閃光が空から桂達のいる場所に着地する。ヴィータはただ啞然とするばかりに無言になる。

沈黙の様な静けな表情に、ゆっくりと後ろを振り向くが…

その光景を見た途端に慌しくなる。

「嘘おおおおお！？ 本当に裁きが来ちゃったよオオオオ！ やべえよ、これ絶対やべえよ！！」

と三馬鹿トリオに原因があるとは言え、自分が変な願いを言い出したせいでこうなった事になるなんて思えなかったヴィータ。

しかしこの突如の奇襲はティアナやギンガによる者ではない。

それは次元を超えた桂とはあるつながりがある男の落下による出来事であった。

「ふっふっふ…ようやくこの時が来たようだ」

と落下地点の中心部に1人の男が笑いだす。

その男は銀色のロングヘアに漆黒のロングコートを身に付けて肩パットをつけている。

そしてとてつもない闘志がビシビシと伝わってくるその人物を、ヴィータは警戒する。

しかし男の姿を、気を取り戻して起き上がった桂が見た瞬間…彼は驚きだしてその男に近づきだす。

「…あ…あああ、貴方はもしや!！」

「ふ…ようやく会えたな」

桂はその男を知っていて、男も桂を知っている。
何故なら桂はその男の…

「我が弟よ」

「……………お…弟オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!？」

その男の口から出た言葉にありえないと驚きだすヴィータ。
今、桂の事を弟と呼んだからだ。

「兄上、まさかこの小説でそなたと再会しようとは…弟として嬉しく思うぞ!！」

「私もだ…互いに別々の小説で活躍している身だが、こうして兄弟再会を果たせる事は…黒神には感謝しなければならないな」

とその男、桂の兄(!?)は黒神に感謝する。
弟との再会を求めている、何やら他のチームメンバーには興味なさそうだ。

「もしや、兄上殿も黒神殿に誘われて…」

「いや、黒龍が是非とも私にこの小説をゲストとして出して欲しい

しかし彼等が兄弟関係であるのには理由があった。

「それは私が言おう……あれは、この小説の前編の最終シリーズ『
狂乱編』が終わったすぐにある」

私はプレシアに頼まれて、気まぐれに新しいシャワーシャンプーを
買いに来た時だ。

その日は何故かとても寒くて、雪が降って積もるほどに振っていた。

「おい、なんだよこの無駄な設定話！？ 全然強大理由になってい
ねえんだけど!？」

ヴィータがありえないとばかりにツツコム。

この寒い中、私は流石にこの世界の冬の厳しさを甘く見すぎたと反
省する。

しかし同時に、この寒さに耐え続けられるこそ世界に生きていける
と実感する。

「良いんだよもう！！ そんなどうでも言い事は！！」

グイータが知りたいのは桂とセフィロスの兄弟関係であって、そんな物語風な話ではない。

そして買い物を終えて、プレシアの元に戻ろうとすると、私は店においてあるテレビに写ってる放送に眼を向けた。
その番組は、どうやらこの国にとっても最悪なニュース内容でもあったらしい。

《本日午前11：43に の で の大学生、高^{たかい}嫌疑^{みやうごう}味嫌朗が店に対して文句を言いだす商売妨害行及び店員と店長を鉄パイクで危険な状況まで殴り続けて重傷を負わせたと暴力行為で逮捕されました。逮捕された嫌疑者は自分の素直に言い、そんな自分の行動が他の脚に迷惑していると注意された事で逆切れして店員等を殺すつもりでやったと容疑を認めましたが、自分は素直な気持ちでやった結果だから自分は悪くないと言う反省はしていないようです》

と私はニュースの内容を見ていた。

その時の私はこの世界でも腐った人間共は山のように存在すると思っただ。

「こんな下衆な人間がこの世にいたのであれば、世界の腐食化はいつまでたっても止まらないな」

「どうしても良い事をばっかり言う奴がそれを言う資格はねえよ!!」
とヴィータはいい加減に進んで欲しいと願って怒鳴って叫びだす。

私は世界の腐食化した人間の行いを見て呆れ、そのまま戻ろうとした。

だが、そこに眼が移ったのは……

「きゃあー、泥棒！」

と女の悲鳴が聞こえてその方向を振り向くと……グラスンをかけた金髪の若造が女性が持つてそうなバックを強く握って走りだしていた。その男は金目が目当てで強奪した。

そのまま私に向かって『どけえ!!』と叫び体当たりしようとするが……

「きゃあ!!」

どさあ!!

突如、積もった雪に滑って転びだした。

私はそのまま無視して男の頭を強く踏みだし、男は完全に気絶して捕まった。

「つまり勝手に自殺した相手に、そのまま踏み出したって訳か!？」

いちいちそこは話さないで良いだろ？」

ヴィータはどうでもいいと怒鳴って叫ぶ。

そして私はそのままプレシアに帰ろうとすると、ふと『銀魂』を呼んでるある少年の一言に聞こえ出した。

「『銀魂』の桂って、何か案外セフィロスの弟かも知れねえなあ……」

「そこオオオオオオオ！？」

「何だよお前、じゃあ何だ！？ その一言でツラを自分の弟と思っただわけか！？」

「ああ……それで『リリカル銀魂 Strikers』を見て桂を私の弟とはつきりと分かった」

「ありえねえよ！！そんなどうでも良い事で一々弟扱いするんじゃねえよ……てか兄気取りだけあってマジで無駄に長いなあおい！！」

桂に負けないクールボケのセフィロスに怒鳴ってツッコミだすヴィータ。

しかしコレがセフィロスと言う男である。

「まあ何はともあれ、義理とは言え俺は兄上の弟である立場になつた訳だ」

「それ訴えるツラあ！！ そんな理由で兄弟関係達成するなんてありえねえよ！！」

「ツラじゃない桂だ… にはともあれ、兄上が来たからには心強いことだ」

と桂はセフィロスが自分達の助太刀に来たと安心する。
しかし実際は違った。

「ふっふっふ、弟よ… 本来ならば確かに兄として助けるのが義務、だが…」

セフィロスは長刀を構えて桂に向ける。

桂はその行動に驚きを表さず、むしろ冷静に察した。

「私はこのお遊びを機に、試したくなつたのだ… 弟であるお前が、どれだけの強さを持っているかを」

「ちい… やっぱり桂を狙つてたわけか！！」

とヴィータはセフィロスに警戒して『グラーフ・アイゼン』を強く握る。

しかしヴィータは最初にセフィロスと出会ってからいやでも理解した。

彼の實力は間違いなく自分をもはるかに超える存在であり、もしかすれば銀時級かも知れないと。

しかし桂はそんなヴィータに左手を向けて止めようとする。

「ツラあ!？」

「ツラじゃない桂だ…すまぬがヴィータ殿…ここは俺に任せてくれ。俺が1人だけで戦いたい理由はただ兄上の期待を答えたいだけではない」

「当たり前だろ、アイツはお前の実の兄じゃねえんだから?」

とヴィータは呆れて言うが、桂は本当の目的を言いだす。

「黒神殿が呼んだゲストキャラの中でも最強候補の一角、セフィロス…兄上相手ならスバキ殿から託された希望の力『セフィロス』を試せるやもしれぬ」

と桂はセフィロスほどの手誰なら、『セフィロス』の力を試す模擬戦に慣れると確信する。

『セフィロス』は桂の切り札でありスバルの『ティルヴィングエア』と『ペンドラゴブレイド』、フェイトの『ライキリ』、ノーヴェの『カンシヨバクヤ』に並ぶ七^{しちせいしんけん}星神刀の1つ。

余りの強さに滅多に使わないが、それと同時に使いこなせなければ『鬼兵隊』との最終決戦の時に役に立てないからである。だからこそ、桂は『セフィロス』の力を試そうとする。

「しかし俺も侍の端くれ…『セフィロス』を使う前にまずは己自身の力を兄上に試してみるのみ」

と桂は鞘から刀を抜いてゆっくりとセフィロスに向かう。ヴィータはとにかく今は桂を信じる。

「ツラ、負けんじやねえぞ…お前が負ければチームリーダーが失って私達は失格だからな」

「…ふ、ツラじゃない桂だ」

銀八

「うぎゃあああああああああああああああ！！」

と突如、爆弾がコロだして大爆発して銀八は吹き飛ばされて星と化した。

爆煙が収まった後、そこには何故か制服姿の桂がいた。

桂

「はい、と言う訳で今回は『銀八先生コーナー』は中断と言う形になり、この俺桂小太郎の質問コーナーを始めたいと思います。今回アシスタントしてくれるゲストは我が兄上！！」

セフィロス

「黒龍の『リリカル銀魂ライダー』異世界鎮魂歌』からゲストに来たセフィロスだ…私が時期にお前達の質問を答えてみよう」

桂

「弟としてありがたい！ではさっそく質問を始めるぞ！！」

兄、セフィロスのアシスタントに喜びだす桂。

そして質問を答えようとする。

桂

「まずは、ペンネーム『ボツスン』さんからの質問だ『芽亜、私、TOLOVERのダークネスのキャラの黒咲芽亜がします。スバルさん、これを読んでください』」

スバル「大丈夫？」

芽亜「いいから、いいから」

スバル「何々、あちらのギンガさん、フェイトさんは銀さん一筋です。諦めたらどうですがとこっちのスバルさんが言っていました。どう思いますか？って何この質問!？」

キャロ「芽亜さん!！」

芽亜「次の質問はこのガンダムUCのユニコーンガンダムの武器のビーム・マグナムに似た武器、カオス・マグナムはどう思いますか？このカオス・マグナムのエネルギーは黒神さんのシャマパイと黒龍さんの物体Xと支配者さんの地獄汁と全作品のかなり不味い料理を混ぜた物を使っています。この武器は一発撃つと星が破壊されます。人に向けて撃つと形を残さずに溶けて死にます。この武器を持つて戦争がある所に行くと言くと直ぐにこの武器を持っていただけで戦争が直ぐに終わります」

スバル「何その凶悪な武器!?(汗)」

芽亜「このカオス・マグナムをあちらのユーノさんと桂さんと黒神さんに送ります」

キャロ「何であちらのユーノさんと桂さんと黒神さんに?(汗)」

芽亜「理由は桂さんとユーノさんは作者さんが好きなキャラで黒神さんはさんは二人だけあげると…多分…強引に奪うのになって思ってたからそれで」

ニンプ「そんな理由で…(汗)」

芽亜「この武器はあくまで自分の身を守る為に使ってくださいね。あくまで」

バナージ「大丈夫なのか…？（汗）」

『…』

ギンガ

「いやあああああああああああああああああ！！」

血涙を流して絶望して気絶したギンガは気絶して倒れる。

黒神

「まさに最終兵器！？」

カオス・マグナムの恐ろしさに青ざめる黒神。

勿論桂はともかく、最近変な方向に向かいそうなユーノに持たせるのも危険である為、黒神は破壊して鉄の塊としてどこかの工場で溶かした。

セフィロス

「ふふふ…ギンガの愚かな絶望を見て愉快的気分だ…というわけで『ボッスン』次回も楽しみに待っているぞ」

桂

「次はペンネーム『支配者』さん『質問です。』

支配者「お前達！！準備は出来ているな！！」

全「はっ！！」

支配者さんの前にはとんでもない数の改良型最強無敵ヘドロボ軍団

2・新八に質問：弥彦が自分なりの流派を作ってエリオと良い戦いをしていたが、新八も弥彦みたいに自分なりの流派を持ちたいと思っただ？

『…では少年、答えてもらおうか』

弥彦

「答えるも何も、もう絶望の固まりじゃねえか!！」

と青ざめて答える弥彦。

もし下手してたらあの時、自分もシャマパイを食わされるはめになっただかもしれない。

そう考えるだけで恐怖を感じる。

セフィロス

「ここではまだ、あの女をいやらしく見る少年は来ていないようだが…ならば私が予想して答えよう。あの少年の剣自体だけでなく、知らない私念がつまって脆い…剣士として欠点なところだろう」

桂

「確かに言われてみればそうだな…と言う訳で『月光閃火』さん、次の質問も期待しているぞ！次はペンネーム『ヒヨウガ』さん、ここで質問です。」

暴走するギンガを見てフェイトはどう思いましたか？

次に強くなったエリオにフェイトはどう思いますか？

最後にかぐらの過酷な修行にフェイトはどう思いましたか？『全てフェイト殿に答えてもらおうとしよう…フェイト殿!』

フェイト

「ええ？…えつとう、アレは流石の私も引くかな？」

最初の質問を苦笑して答えるフェイト。

もしギンガが聞けば、間違いなく彼女は死ぬであろう。

フェイト

「残り2つに関しては…確かにエリオの成長は嬉しいけど…神楽、後で頭を冷やしてやるうかしら？」（ゴゴゴゴ！）

と神楽にかんしてとてつもない怒りを放つフェイト。

自分の教え子の鍛え方をケチ付けられたあげくに無茶な事をさせすぎたからである。

セフィロス

「うむ、中々の憎悪だ…アレが絶望に染めればどれだけ価値があるのやら」

桂

「と言う訳で『ヒョウガ』さん、次の質問も期待して待っているぞ！ では次、ペンネーム『あああ』さん『主人公なのに最近まったく出番が無い銀さんに質問です」

自分が最後に活躍したのはいつか覚えてますか？』…ふふふ、ついに俺がこの小説の主人公に…」

銀時

「なつてたまるかアアア！！」

と怒鳴って叫びながら現れたのは銀時。

最近の出番のなさにイラついていた。

銀時

「もう何なんだよいったい!? 俺が一番気にしている事を変に言わないでくれる!? これマジでお願いだから!!! 最後つて確か修羅スバルと戦ったときだよなおい!!!」

セフィロス

「ふふふ…良い絶望だ…このまま次回も引き続いて出番が後になる絶望が続くかもしれぬぞ?」

銀時

「いいやああああああああああああああああああ!!!」

と銀時は涙を流しながらそのまま去っていく。

セフィロス、貴方も以外に黒い。

桂

「と言う訳で『あああ』さん、次回も楽しみに待っているぞ! 次はペンネーム『Minosawa』さん『Minosawa』

「それじゃあ質問に入ります。

ザフィーラに質問、女性と普通のメス犬と犬耳&犬尻尾の美少女、どっちが好み?」

アキラ

「次はアルフに質問、銀さんに『俺だけの可愛い犬になってくれ』つて言われたら、ベッドinしますか?つてこの質問はギリギリたね。」

ミノル

「最後は俺だな…哀れなジェイソンキャラに質問、本当にエリオ君の事が好きなんですか？ベッドinしないんですか？」

『「

ザフィーラ

「…犬尻尾の美少女だが？／／／」

と顔を真っ赤に答えるザフィーラ。

素直に答えれば何とか巻き込まれないと確信しているからだ。

アルフ

「うつしやー！！ベッドin狙うぜ！！／／／」

と顔を真っ赤にして嬉しがるアルフ。

この質問はまさに彼女にとって幸福に違いない。

キャラ

「隙あればベッドin狙いです！！」

とはつきりと答えるキャラ。

神楽と月詠に負けたくない女の信念があふれ出ている。

桂

「はい、と言う訳で『Minosawa』さん、次の質問も楽しみにしているぞ！」

セフィロス

「最後はペンネーム『真王』からの質問だ『ネプテューヌ』…」

と申し訳なさそうに言いだすエリオ。
だが滝に投げ込まれたのでおそらくは森のどこか遠くで修行をしてたようだ。

桂

「と言う訳で『真王』さん、これからも小説頑張ってください…以上持って今回の質問コーナー終了!！」

セフィロス

「うむ、中々絶望に染まった質問の答えに私は大満足だよ…いつかまた参加したいぐらいだ」

桂

「わざわざアシスタントしてくれて感謝します、兄上! 次回は本編前に『銀魂王デュエルモンスターズSD』公開記念として『白神』さんの質問を大きく答えるでしょう」

セフィロス

「ああ、それはいい」

と言う訳で次回は本編前に特別編として、白神さんの質問を答えます。

次回もお楽しみ。

誤字があれば遠慮なく感想で書いて教えてください。

お願いします

第三百二十七訓：見た目が同じだからって血の繋がった兄弟関係ではない（後書き）

黒神

「ついに始まった桂とセフィロス！ 血のつながっていない兄弟同士
の対決を制するのは果たして！！」

ヴィータ

「何か、次回もまともじゃねえ気がするよっな…」

エリザベス

「次回、『兄弟の戦いは特別な事情が必ずある』テイクオフ！！」

超教えて！！銀八先生スペシャル2

銀八

「超教えて」

生徒全員

『『銀八先生スペシャルう〜！！』』

銀八

「はい、と言う訳で今回は『超教えて銀八先生スペシャル』の第二弾を初めまあす。今回のアシスタントは超特別ゲストとしてこの3人にさせてもらいまあす」

と銀八が後ろを振り向くと、そこには3人の男達がいた。

1人は特殊な棘棘とした髪型で優男であり、制服を身に付けている。もう1人は赤い制服を着ていて、かなり明るそうな性格をしている。最後の1人は一番背が高く、青いライダースーツを身に付けていてクールな性格をしている。

そうこの3人こそが今最近活躍している黒神のもう1つの小説メンバー。

遊戯

「『銀魂王・デュエルモンスターズSD』のゲストメンバーの武藤遊戯です」

十代

「俺は遊城十代、皆よろしくな」

遊星

「不動遊星、2人と同じ小説から登場している」

と遊戯、十代、遊星の遊戯王歴代主人公トリオが挨拶をする。
なぜ別の小説の人物がこの『攘夷戦争鎮魂歌』にやってきたのか、
それは今回の質問にある。

銀八

「と言う訳で今回は1つだけですが、余りにも長いのでコレ1つで
終わりたいと思います。遊戯、十代、遊星、準備はいいか？」

遊星

「ああ、もちろん良いぜ」

遊戯

「この小説でアシスタントするのは初めてだけど、がんばってみる
よ」

十代

「がっちりと楽しませてもらうぜ」

と3人ははつきりとヤル気満々である。

銀八はそれを見て安心し、ふっと笑って質問をする。

銀八

「ではペンネーム『白神』さんの今回の質問『前にした質問ですが銀魂メンバー（まだ出てきていない人を含めて）とリリカルメンバーに質問です。」

遊戯王をやるとしたらどんなデッキをつかいますか？

切り札も教えてください。

もしちゃんとした答えじゃなかった時は黒神さんに頼んでシャマルパイを顔面に当ててくださいと頼みます。『……ずばり答えます。それは『銀魂王デュエルモンスターズSD』のネタばれになってしまふ恐れがあります」

と申し訳なさそうに謝罪する銀八。

たしかにそんな事をすれば面白さが薄れてしまふ事がある。だからこそ銀八は答えづらいのである。

遊星

「確かに、知りたがっているのは白神さんだけとは限らない。先走って序盤からネタばれしたら面白さが半減してしまふ事もある」

遊星もそれには賛成し、十代も遊戯もそれには白神に申し訳ないと思いつく。

銀八

「銀魂メンバーは『銀魂王デュエルモンスターズSD』で出てくるのでネタばれ防止の為、お答えする事はできません。が、リリカルメンバーは別としてですので今回はリリカルメンバーの使用デッキ内容を教えます！」

十代

「そりゃ良いや!」

遊戯

「確かに、このリリカルメンバーならネタバレしてもおかしくない!」

銀八

「そんじゃ行くぜえ、こいつがアイツ等が使用するデッキ内容の答えだ!」

?1 スバル・ナカジマ

使用デッキ 『カオス・ソルジャー』を中心とした戦士デッキ

デッキ名 戦士の神速出撃

神速剣技をイメージとした神速召喚を得意とし、上級モンスターを低級モンスターのようにすぐに召喚する。

最速召喚のスペシャリスト。

また強力なモンスターが山のように存在する。

切り札 『カオス・ソルジャー』

? 2 フェイト・テストロッサ

使用デッキ 雷族を中心とした破壊デッキ

デッキ名 ライトニングパニッシャー

雷族のカード破壊効果を利用して相手の戦術を破壊する。
しかも攻撃力が中々高いので、かなり友好的に攻められる。

切り札 『電池メン - 業務用』

? 3 高町なのは

使用デッキ 魔力カウンターを中心とした魔法使い族デッキ

デッキ名 魔力大量補給

魔力カウンターをメインに、数多くのトリック戦術で相手を翻弄する。

そして最上級モンスターで一気にトドメを刺す。

切り札 『神聖魔導王 エンディミオン』

? 4 ティアナ

使用デッキ 『キャノン・ソルジャー』を中心としたバーンデッキ
デッキ名 弾丸の戦士

『キャノン・ソルジャー』を中心としており、数多くのバーンカードを使用する。

隙があれば、攻撃もする遠距離攻め攻撃を得意とする。

切り札 『キャノン・ソルジャー』

?5 八神はやて

使用デッキ 闇属性モンスターを中心としたダークデッキ

デッキ名 夜天の闇

闇属性を中心とした超大型モンスター大量入りデッキ。
墓地にモンスターが増える度に、戦力が発揮する。

切り札 『究極宝玉神 レインボー・ダーク・ドラゴン』

?6 エリオ・モンディアル

使用デッキ 『ドラグニティナイト』シリーズオンリーのデッキ

デッキ名 天竜の騎士達

シンクロ召喚を中心とした特殊召喚を連続に仕掛けてくる。
しかもモンスターを装備カード扱いとして装備するモンスターや多
く、さらには風属性オンリーの為、風属性の効果のサポートカード
もある。

切り札 『ドラグニティアームズ・レヴァティン』

?7 キャロ・ル・ルシエ

使用デッキ 『ロード・オブ・ドラゴン』を中心とした魔法使い・
ドラゴン族の共存デッキ。

デッキ名 竜魔導士の誇り

『ロード・オブ・ドラゴン』を中心とした竜魔導士を強くイメージ
したドラゴン速効召喚戦術。
主力は魔法使い、切り札はドラゴンと言う風に見れば分かるであ
らう。

切り札 『竜魔人 キング・ドラグーン』

?8 アルフ

使用デッキ 獣戦士族を中心としたデッキ

デッキ名 人狼の誇り

狼をイメージとした獣戦士族デッキ。
獣族も多く含まれて、パワーも中々ある。
さまざまな戦術を披露する。

切り札 『天狼王 ブルー・セイリオス』

?9 シグナム

使用デッキ 炎属性・戦士族を中心とした超攻撃型デッキ

デッキ名 烈火の騎士団

炎属性と戦士族の共存。

戦士の速効召喚と炎属性のバーン効果で相手を攻める。

切り札 『クリムゾン・ブレイダー』

?10 ヴイータ

使用デッキ 『ガーゼット』を中心としたパワーデッキ

デッキ名 パワード・オブ・ギガンド

攻撃力が高めのモンスターを大量に入れたデッキ。

パワーのあるモンスターをリリースして『偉大魔獣 ガーゼット』の力を最大限に發揮する。

切り札 『偉大魔獣 ガーゼット』

? 1 1 シヤマル

使用デッキ 相手のライフ回復を利用したバーンデッキ

デッキ名 毒薬の苦しみ

『シモツチによる副作用』で相手に大ダメージを狙う。
純粋な回復デッキよりもかなり凶悪なコンボを狙ってくる。

切り札 『シモツチによる副作用』

? 1 2 ザファイラ

使用デッキ 鉄壁の守備力を中心とした防御デッキ。

デッキ名 守護する壁

岩石族を中心とした超大型防御デッキ。
すきあらば、『右手に盾を左手に剣を』の効果で一気に攻守入れ替えて一斉攻撃。

切り札 『守護神エクゾード』

?13 リインフォース

使用デッキ ユニオンモンスターを中心としている

デッキ名 ユニオン・パラダイス

『WXYZ』シリーズを中心としたデッキを使用する。
機械族多めなのでサポートカードも多い。

切り札 『WXYZ』ドラゴン・カタパルトキャノン』

?14 リイン

使用デッキ 魔神系のカードを中心としている。

デッキ名 魔神合体

『ゲート・ガーディアン』を中心とした超大型デッキ。

『始皇帝の陵墓』や『スター・ブラスト』などライフを削ってまで
召喚してくる事もある。

すきあらば、隠し切り札として『ユーフォロイド』との『パワーボ
ンド』のコンボで『ユーフォロイド・ファイター』での一撃必殺
コンボを狙う。

切り札 『ゲート・ガーディアン』

?16 ギンガ・ナカジマ

使用デッキ シンクロ召喚を中心としたデッキ

デッキ名 ジャンク・パラダイス

『ジャンク』系を中心としたシンクロ召喚デッキ。
速効シンクロ召喚で相手を翻弄する。

切り札 『ジャンク・ウォリアー』

?17 プレシア・テスタロッサ

使用デッキ 闇属性・魔法使い族モンスターを中心としたデッキ

闇属性・サポートカード多めでしかも速効で上級モンスターを召喚
する手段が多い。

中でも『黒の魔法神官』が最強であり、闇属性が中心の為闇属性サ
ポート魔法カードが多い。

切り札 『黒の魔法神官』

?18 グリフィス・ロウラン

使用デッキ 手札破壊カードを入れたハンデスデッキ

デッキ名 戦術破壊の指揮

大量の手札破壊を多めに入れている。
それで相手の戦術を封じて、一気に総攻撃をかける。

切り札 『デビルマゼラ』

?19 ヴァイス・グランゼニツク

使用デッキ 直接攻撃ができる効果を持ったカードを中心としたダイレクトアタックデッキ

デッキ名 奇襲の一撃

とにかくダイレクトアタックが得意とする。
属性はバラバラのため、『エレメンタル・アブソバー』と『DNA移植手術』で完全ロックを狙っている。

切り札 『地縛神 Wiraqochaウイラコチャ Rascá』

?20 シャリオ・フィニーノ

使用デッキ マシンナーズシリーズカードを中心とした機械デッキ。

デッキ名 機兵集団

機械族だけじゃなく地属性も構築している為、地属性サポートカードが多い。

切り札の『マシンナーズ・フォース』で『リミッター解除』による一撃必殺でトドメを刺す事が多い。

切り札 『マシンナーズ・フォース』

?21 アルト・クラエッタ

使用デッキ 『ロイド』系を中心とした機械族デッキ

デッキ名 乗り物で大暴れ

『ロイド』系のカードを数多く入れた戦術で相手を攻める。

融合戦術が多く含まれていて、中でも『ゲート・ガーディアン』と『ユーフォロイド』を『パワー・ボンド』で融合させて召喚した『ユーフォロイド・ファイター』が最強である。

切り札 『ユーフォロイド・ファイター』

?22 マリエル・アテンザ

デッキ名 『機械王』系を中心とした機械族デッキ

デッキ名 王者の機動

『機械王』系のカードを数多く入れた戦術で相手を攻める。
『血の代償』や『ガジェット系』カードで多くのカードを召喚し、
そして『団結の力』でパワーアップするのも狙う。

切り札 『パーフェクト機械王』

?23 ルキノ・リリエ

使用デッキ 上級モンスター速効召喚の超大型パワーデッキ

デッキ名 大型召喚操縦

上級モンスターが多めのデッキ。
ワザと墓地に遅らせて大量蘇生。
そして『創世神』の召喚で一気に勝利をもぎ取れ。

切り札 『創世神』

?24 ユーノ・スクライア

使用デッキ チェーンカードを中心としたデッキ

デッキ名 ストライク・オブ・チェーン

カードの連携で相手を翻弄する。

チェーンを繰り返す事で爆発的な効力を発揮する。

切り札 『ライトニングパニッシャー』

?25 クロノ・ハラオウン

使用デッキ 氷のイメージをした水属性・魔法使い族

デッキ名 マジック・ブリザード

水属性・魔法使い族を中心としたデッキ。

魔法使い族用のカードと水属性様のカードを中心と使いこなす。

ただ、むっつりスケベで嫌らしい目をする事もあるのか切り札系が女性カードばかりである。

ちなみに氷には関係ない『エリア』系のカードも入っており、新八に引けをとらない女好きないやらしい一面を持っている。

さらに言うところ、魔法を使えない者を見下す。

その上、自分のやっている事は正しく部外者の功績を認めない屑の偽善者でもある。

場の空気を読む事も出来ない為、男友達はまったくと言って良いほどいない。

なお、噂では5年前にエイミィに告白したが、すでに別の男と付き合っている為フラレたらしい。

むっつりスケベに覚醒したのはその為であった。

切り札 『氷の女王』

? 26 カリム・グラシア

使用デッキ 手札公開を中心とし、相手の戦術を妨害するデッキ

デッキ名 予知の戦術

『真実の眼』で相手の戦術を妨害し、『シモッチバーン』とのコンビで相手にダメージを与える。

切り札 『真実の眼』

? 27 シャツハ・ヌエラ

使用デッキ 装備カードを中心とした戦士デッキ

デッキ名 武装騎士集団

装備カードの連携で強化しまくって相手を圧倒する。
わざと墓地に遅らせる事で『ギルフォード・ザ・レジェンド』を使いこなす手もある。

切り札 『ギルフォード・ザ・レジェンド』

? 28 ヴェロツサ・アコース

使用デッキ 獣族を中心としたデッキ

デッキ名

アンデイルミット・ピースト
無限の獣達

パワー・貫通・召喚・バーンなどさまざまなカード連携があり、ス
タンドード系にデッキ構築されている。
切り札の『マスター・オブ・OG』は獣族最強と言っても良いぐら
いの攻撃力を誇る。

切り札 『マスター・オブ・OG』

? 29 ジェイル・スカリエツィ

使用デッキ 『コザツキー』を中心とした悪魔族デッキを使用

デッキ名 欲望の研究

上級モンスターは1枚も入っていないが、『コザツキー』と『G・
コザツキー』の連携はかなり協力。
1発逆転として『強制転移』や『ギア&ギフト』の効果でわざと相
手に『G・コザツキー』を渡して大ダメージを狙う。

切り札 『G・コザッキー』

?30 ウーノ

使用デッキ レベル1のモンスターを中心としたデッキ。

デッキ名 『1』の称号

とにかくレベル1のモンスターを中心としている。
特に終盤になれば『カオス・ネクロマンサー』と『光学迷彩アー
マー』でのダイレクトアタックコンボを狙う。

切り札 『カオス・ネクロマンサー』

?31 ドウエ

使用デッキ 『忍者』と名の付くカードを中心として入れたデッキ。

デッキ名 暗殺者の任務

『速効の黒い忍者』や『忍者マスター SASUKE』などレベル
4でも強力なカードが多め。
攻撃力は低くても特殊戦法で相手を苦しめる。

切り札 『NONANバーズ 機甲忍者クリムゾン・シャドー』

? 3 2 トーレ

使用デッキ 風属性を中心とした鳥獣族デッキ

デッキ名 疾風の爆撃

風属性オンリーのデッキ。

数多くのサポートカードが多めで、バランスが取れている。

切り札 『始祖神鳥シムルグ』

? 3 3 クアットロ

使用デッキ 『サクリファイス』を中心としたトリックデッキ

デッキ名 幻想の生贄

幻想系タイプのモンスターを多めに入れて、攻撃力と守備力が少ないがかなり特殊な効果を持ったカードによる協力コンボを持つ。

『高等儀式術』や『マンジユゴット』などサクリファイスをサポートするカードが多めである。

切り札 『サクリファイス』

? 3 4 チンク

使用デッキ 炎族と機械族を中心としたバーンデッキ

デッキ名 爆弾機動

機械族のパワーと炎族のバーン効果の2つの力が混ざり合っている。属性が炎属性オンリーなため、当然の如く炎属性サポートカードも多め。

切り札 『重爆撃禽 ボム・フェネクス』

? 3 5 セイン

貫通モンスターを中心としたデッキ

デッキ名 アブソリユードATK

貫通カードを中心としたダメージ通し戦術を得意とする。しかも攻撃力はかなり高めで、かなり強力な効果を持っている。ただ、貫通効果だけじゃなく天使族のサポートカードも多くある。中でも『古代の機械巨人』系はセインの主力カードともなるう。

切り札 『古代の機械巨人』

?36 セツテ

デッキ名 『ワイルドマン』と『サイクロンブーメラン』を中心とした装備カード戦術

デッキ名 飛去来器戦術

『エアーマン』と『E・エマーシエンシーコール』などで『ワイルドマン』を、『名工 虎鉄』などで『サイクロンブーメラン』をデッキからサポートする。

また、『鎖付きブーメラン』や『ワイルドマン』の融合素材である『エッジマン』と『ネクロダークマン』も大眼に入れている。

切り札 『サイクロンブーメラン』

?37 オットー

使用デッキ 光属性を中心としたデッキ

デッキ名 光の閃光

光属性を中心としている特殊戦術を得意とする。

中でも『大天使ゼラード』でかなり厄介な効果を持つ。

切り札 『大天使ゼラード』

?38 ノーヴェ

使用デッキ 『モンクファイター』と『マスターモンク』を中心とした岩石デッキ

デッキ名 岩窟武術

格闘をイメージとした岩石デッキ。

『モンクファイター』と『マスターモンク』でのメイン攻撃だけじゃなく、鉄平的な守備力を誇る岩石族を多く持つ。

切り札 『マスターモンク』

?39 デイエチ

使用デッキ 『波動キャノン』を中心としたバーンデッキ

デッキ名 一撃必殺キャノン

永続魔法を数多く入れている。

その為、絶対的な守備力とカードを破壊効果から護るカードも多い。
『波動キャノン』で一撃必殺狙い。

切り札 『波動キャノン』

?40 ウィンディ

使用デッキ 守備力高めの戦士族デッキを中心としたデッキ

デッキ名 鉄壁の盾

守備力の高いモンスターを中心に並べた後、一撃必殺にと『右手に盾を左手に剣を』、『反転世界』、『ウェポンチェンジ』で一気に攻める。

特に、『千年の盾』の守備力こそが彼女の切り札であり、守備表示のままでも攻撃できる『絶対防御將軍』も見所あり。

切り札 『千年の盾』

? 4 1 デイード

使用デッキ 2回攻撃効果を持ったカードを中心としている。

デッキ名 ツインアタッカー

2回攻撃効果を持ったモンスターによる攻撃回数は半端ない。レベル4以下のモンスターの攻撃力は低いので、装備カードによる強化が畏カードによる守りで防ぐ。

切り札 『タイラント・ドラゴン』

? 4 2 ルーテシア・アルピーノ

使用デッキ 昆虫族を中心としたデッキ。

デッキ名 女王の君臨

昆虫族を多めに入れたデッキ。

『インセクト女王』を中心としており、さらに鉄壁の護り専用のカードを多く入れている。

切り札 『インセクト女王』

? 4 3 アギト

使用デッキ 『ヴォルガニック』シリーズの炎属性デッキ

デッキ名 爆炎の弾丸

驚異的なモンスター破壊とバーン効果を中心とした攻撃系コンボを仕掛ける。

また墓地に炎族が揃ったときには鉄壁の守りとして『ファイヤー・ウォール』で防ぐ。

切り札 『ヴォルガニック・デビル』

? 4 4 ガリユー

使用デッキ 『アルティメット・インセクト』を中心とした昆虫デッキ

デッキ名 究極成長

『アルティメット・インセクト』の進化で攻撃力を下げる戦術をする。

その為、『王虎ワンフー』との相性は抜群に良い。
攻撃力を下げる特殊戦術で相手の攻撃戦術を弱らせて一気に止めを刺す。

切り札 『アルティメット・インセクト L V 7』

? 4 5 ヴィヴィオ

使用デッキ 『聖女ジャンヌ』を中心とした光デッキ

デッキ名 聖女の光

攻撃・守備共に優れたバランス方デッキ。

光属性サポートカードが多いのはもちろんの事、特に『オネスト』でのコンボは協力である。

切り札 『聖女ジャンヌ』

銀八

「以上、コレがりリカルメンバーが使うデッキです」

遊戯

「へえ、確かにそれぞれ色んな人に合わせたデッキって感じだよ」

遊星

「ああ…ギンガって人は俺と同じジャンク使いか…」

と遊戯も遊星も納得するように頷く。

確かにコレなら分からなくもない…だが…

十代

「つつか…中には無理に合わせたって感じのデッキもあるけどな」

銀八

「しかたねえだろ？ 遊戯王以外のキャラクターが使用するデッキ何ぞ誰だって予想できやしねえし」

遊戯

「それもそうだけど、十代君の言うことも一理ありだよ…大体クロノ君のデッキ紹介なんか悪口しかないし」

銀八

「偽善な連中は薄汚いって黒神の考えなんじゃねえ？」

遊星

「いや、それは不味いだろ！ 間違いなくクレーマが来るかもしれないし！」

と呆れてツツコミだす遊星。
確かにいくらクロノが駄目男とは言え、コレは流石にヤバイ気がする。

銀八

「まあそんな時は書き直せりゃ良いしな…というわけで『白神』さん、銀魂キャラの使用デッキはネタバレになるので公開しません。なお、紹介されていないキャラはデッキが持っておらず遊戯王がまだ知らないと思ってください」

と気楽そうに言いだす銀八。

銀八

「以上持ちまして、『第2回超教えて銀八先生スペシャル』は終了しまあゝす」

十代

「この小説の本編は次回から再開するから楽しみに待ってるよ」

遊戯

「『銀魂王デュエルモンスターズSD』も宜しく」

遊星

「それじゃあ」

銀八・遊戯・十代・遊星

『『これからも宜しくお願いします』』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7803v/>

『リリカル銀魂 StrikerS』～攘夷戦争鎮魂歌～ 後編

2011年12月11日19時46分発行